

---

# The prince is a wizard

成澤 詩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The prince is a wizard

### 【ΖΖコード】

N5103N

### 【作者名】

成澤 詩

### 【あらすじ】

『商人と職人の国』と評される大国エルズバーグに、高名な魔導師に武者修行と名目で長い間行方の知れなかつた第五王子・ロジオンが帰ってきて一年、頑なに人との接触を拒むロジオン王子に従者として付き添うことになったアデラ。

一年の間、全く魔法を見せない王子を王宮魔法使い達が「ボンクラ王子」と馬鹿にされている少年王子はどうして魔法を見せないのか？ どうして人との接触を拒むのか？ 理由を知ったアデラは共に戦う決意を。亡き師匠との対決終了

第一章完結。第二章進行中。

恋愛薄めです。

# 1 忠誠（1）

私はお前  
お前は私

重なる宿命は時を繋げる軌跡

輪廻の輪を繋げよ

王宮の広い敷地内も秋深く、地を隠すよ<sup>う</sup>に落ちた色<sup>いろ</sup>とりどりの落ち葉をアテラが踏むと、カサカサと乾燥した音を立てその形を崩していく。

王宮の奥深い森林の中を進む。

鬱蒼と茂るこの森も秋のこの季節には、はらはらと乾いた葉が枝から落ち、地面を紅い絨毯に染めていた。

この辺まで来ると、感謝祭の準備で騒がしい宫廷の喧騒は聞こえては来ない。

（今日こひを引っ張り出して、王宮に連れて行かないと）

彼女は気難しい表情を崩さず、キビキビした歩調で先を進んでい

た。

眉に皺を寄せ大股で歩く姿は猛々しく、年頃の乙女とはかけ離れた風情ではあるが、顔立ちは大変美しく、日差しを受けて輝く金髪とエメラルド色の大きな瞳は、見る者の視線を釘付けにする。

ただ残念なことに、この国で美女の三大要素の一つである乳白色の肌ではなく、祖母から譲り受けた小麦色の肌が、彼女の美しさを半減している、と憎まれ口を叩く者もいたが、当の本人は別段気にしている様子も無い。

宮廷仕官として働くアデラが向かう先は自分が従者として仕える事になった、第五王子ロジオンの住む離れ屋である。

つい最近、と、言つても一ヶ月前に任命されたのだが、初対面時に「付き人なんかいらない」

と、突き放され門前払いをくらつた。

話し合いの余地もくれない頑なその態度に途方にくれ、王とロジオン王子の実母である第一王妃に相談をした所

「またか」

と溜息をつき、この、王子の育つた特殊な環境を話して下さった。

\*

もともと、王は子沢山で一人の王妃との間に王子六人、王女八人と合わせて十四人の子がいる。

それだけいれば跡目争いで宮廷内はいつも、暗殺と策略が暗躍しているだろうと思えばそうでもなく この国は異民族が多く流れ住んでいて、文化、風習を運んで来る為か職業も多種多様。

そのせいか、跡継ぎの長男と補佐役を買って出た三男が政務に関わる以外、皆、好きに手に職を付けおのの取り組んでいた。

加えて王の温厚でこだわらない性格が、しっかりと子供達に受け継がれているようで、自分がのし上ろうとは考えていないようだ。

第五王子のロジオンはそんな自由に生きている（？）兄弟達の中では異色な存在だ。

産まれて、祝いの為に出席していた高名な魔導師から

この王子は申し子と言つても良いほど魔力が高い

『いずれ、この私を超える魔導師になれる』

と言つ魔導師に

『自分の意見が言える歳になるまで、職業の選択を狭める事はない』

困つたように眉を下げる王と王妃。

是非、自分に預けて欲しいと懇願され、預ける、預けない、と暫く攻防戦が続いたが、とうとう根負けして、生後一年に満たない王子を魔導師に預ける事にした。

……それがいけなかつた、と、第一王妃は深く長い溜息を付く。その後、武者修行という名目で強引に連れて行かれ以後、十三年間音沙汰が掴めなくなつてしまつたのだ。

しかし、それが一年前にひょっこり魔導師が連れて帰つて来のだ。

我等の子だという証を見、大喜びで再会を果たし魔法使いとして成長した王子は、魔導師と共に離れ屋に住んだのだ。

だが昨年、魔導師が亡くなり、一人だと不便だし何かと淋しかろうと、給仕やボディガードを送つたりまた、宮殿に住むように勧めているのだが、「いらない」「行かない」の一点張り。

王や王妃が直談判をしても頭を縦に振らなかつた。

そして今も懲りずに従者を送つたりしているのだが……。

「全て門前払いな訳なのですね？」

アデラの問いに両親である王と王妃は、深く溜息を付いた。

「姉のような方を付き人にすれば、もしかしたら態度が軟化するのではと……」

白羽の矢が立つたのが、後輩の面倒見が良いアデラだったのだ。

\*

ここまで期待されでは少々の事で辞退するわけには行かない。元々責任感が強く、世話好きの彼女 使命に燃えた。

（何よりあの王子……今日こそ何とかせねば！－）

アデラは眉間に寄せた皺を更に深く顔に刻みながら、つらつら考えていたうちに、開けた原っぱに出た。

そこは、ほぼ中央にレンガで建てられた平屋があり、その平凡な平屋にピッタリと付けられている、温室のガラスが、日の光をうけサンサンと輝いていた。

そこがロジオン王子が住む離れだ。

元は以前仕えていた庭師家族の家だったが、離職し家族が出て行つてから十数年間空家になつて廃れていたのを改築したといつ。

アデラは一つ咳払いをして、今一度きりつと表情を引き締め、徐に扉を叩く。

程なくして、ゆっくりと扉が開いた。

出でたのは、自分より拳1つ程背が低い少年。

アデラは一瞬、少年からの悪臭に眩暈がしたがどうにか耐え、その少年と向き合う。

銀の髪だと叫ぶのはボサボサで艶を失い、垢まみれで本来の色を失っているし、着ているシャツも同様で、しかも所々に薬品だと思われる赤や緑の液が染みている。

ズボンも以下同文……。

「また君か……」

伸びきつて顔の半分上を隠す前髪の隙間から、ブルーグレーの色素の薄い瞳を彼女に向か、少年は感情の籠もっていない声でアーテラに話しかけた。

「……今日こそは、一緒に王宮まで来ていただきます、ロジオン王子」

ロジオン王子と呼ばれた少年は、ゆつくりとした口調で話し出す。

「行かなきやならない理由が分からぬ。前……君が言つていた感謝祭の件は、此方に帰つて来てからは……毎年出席してゐるじゃない」

「花火職人としてではなく、王子として出席して頂きたいと、陛下と御生母の第二王妃様、お一人の『希望で』ござります」

「……あれは趣味の一つであつて……亡くなつた師……共々、毎年楽しみに制作していたものだし……それに、大量の火薬を使ってるからね……取り扱いは僕にしかできない」

そう言い、扉を遮る様に立つ王子の、中に入らせない意思がひしひし感じた。

いや、これでも、初つ端よりかは大分ましな対応になつたのだが……。

「今夜は、アラベラ王女様とイレイン王女様が、感謝祭の折に配る菓子の試食をして頂きたいと……。それを聞いたエアロン様が、一緒に自分が創作された料理を披露したいと申されて。……それならばと、身内だけで晚餐会を開くことと相成りました。ロジオン様にも兄弟のよしみでは是非、出席してもらいたいとの『伝言で』ござります」

「……」

ロジオン王子は腕を組み、暫く扉の縁に寄りかかり黙りこんでいたが

「行かない」

と、はつきり首を横に振った。

「何故、それ程頑なに御父母様や御兄弟様の好意を拒否なさるのです？ 長い間離れ離れで、突然に親子、兄弟の中に入るのは大変だとは思いますが、皆、だからこそ気にかけておいでなのです。特に王妃様は貴方様の態度に心を痛めておいでです。 どうか、

ロジオ……」

「だからだ」

「？」

「だから行かない、君も余計なお節介を焼くな 迷惑だ」

怒氣も哀感も無い感情のこもつていらない王子の言い方に、ご家族の動向に本当に关心が無いのだと感じたアデラは、とつとつ自分の立場を忘れ怒りをぶつけた。

「だから行かないとはどう言つていいのです？ はつきり言つてもらいましょう、お節介焼きな私に！ 私に言いたくなれば、ご両親様の前で納得の行く説明をして頂きます……！」

いつものように黙つて扉を閉めようとする王子の左手を掴むと「失礼」と彼の脇腹にアデラの拳が入った。

かはつと吐くような呻き声を出すと、王子は脇腹を押されてうずくまつた。

「……ただの仕官が……こんな事を……して……」

搾り出すように声を出し、薄い色素の瞳をたきりさせ、怒りを露にする王子にアデルは

「今日こそはお連れすると誓つたのです 多少乱暴な手を使って良いと、殿下からの許可も得ております」

そう言いながら、只今ただの『一般仕官』のアデラは隠し持つていた紐で王子の手足を手際よくがんじがらめに縛り、昨夜のうちに隠し用意しといた荷車に彼を担ぎ込むと、王宮に向けて引き始めた。

「……酷いなあ、荷物扱い？」

痛みが治まったようで荷台の上で横たわったまま、いつもの、のろのろとした口調で王子はアデラに話しかけた。

アデラは王子を一瞥し、再び荷車を引きながら、今までの鬱憤を晴らすかのように答えた。

「大変無礼な事をしているついでに、更に無礼な事を申し上げます ロジオン王子、最後に身体を清めたのはいつです？」

「……いつかな……？」

本人も覚えていない程以前らしい。

「……臭いんです……凄く、どうじょうもなく、気を緩めると気絶しそうになる程に」

「そんなに臭いかなあ……」

「私も兵士なので、何度か野営の訓練で身体を清められない事を経験していますが、王子のは汗、体臭、埃と、それ以外の匂いが混ざつておりまして、更に強度を上げております。王宮まで私が担いで行くと、途中で悶死しそうなので対抗策を取らせてもらいました」

「はははっ！ ああ、多分薬品だね」

彼女の言い方が余程可笑しかつたらしい。

からからと笑いだした王子の声を初めて聞いて、驚いたアデラは後ろを振り向くと、詰まるように息を呑んだ。

縛られてそこに居たはずの魔法使いの王子は忽然と消え、解かれた繩が荷車の上にあるだけで当の本人は、アデラに背を向け、自分の我が家に向けて走っていた。

瞬時に我に返り荷車を蹴り上げ、飛びよじにアデラは走った。あつと言葉間に差が縮む。

「逃がすか！？」

地を思いつきり蹴り上げると、獲物を追い詰めた獣のように王子の背中に飛びつき倒した。

これに驚いたのはロジオンの方だった。  
一人勢い余つて何回転かした後に、アデラが上から押さえる形で  
ようやく止まつた。

「驚いたなあ……。何て跳躍力だ」

ロジオンが感心したように呟いた。

「残念でしたな、私はこの跳躍と足の速さで仕官達の間では『女  
豹』と呼ばれているのです」

「大した物だ……、遺伝つぽいな……」

「遺……伝……？」

何ですか、それ？ と尋ねようとしたが、王子に飛びつき密着し  
ている間に、かなりの悪臭を吸い込んでしまつたアデラは、眩暈と  
吐き気が凄い勢いで襲つてきて、そのまま、臭い彼の上で倒れ込んで  
しまい、意識を失つた……。

## 2 忠誠（2）

目を開けると、いつもの自室の木目の大井が見えた。ゆつくつと身体を起こし、辺りを見渡す。

（私……どうして此処に？）

確かロジオン王子を王宮に連れて行くために、荷台に乗せて、逃げられて、捕まえたけど、臭くて……氣を失った……んだ。アデラは着衣の乱れを正し、自分のベットから下りて自室を出た。出てきた所で丁度、同僚のベルと会った。

「アデラ！ もう良いの？」

心配そうに尋ねる同僚に「大丈夫」と、しつかりとした口調で返事を返す。

「吃驚したわよ！ 小汚い男が貴女をおぶさつて来て不審者かと取り押さえたら、例の変わり者の王子なんだもの！」

「ロジオン様が！」 では今、王宮に？」

「ええ。取り押さえられたついでに、そのまま風呂に連れて行かれて……大変だったみたいよ。何度もお湯を取り替えて、石鹼も何個も使つても匂いが取れないって、女中達が嘆いていたって」

「……」

アデラはあの悪臭を思い出し、こめかみを押さえた。

「そろそろ晚餐会が終わる頃じゃないかしら？」

「……もう、そんな時間なの！？」

ベルに礼を述べると、駆け足で宮廷へ向かったアデラにベルは「大変そうだけど頑張つてね」と励ましの言葉を投げた。

ロジオン王子が否定しても、自分は王と第一王妃に彼の従者に任

命されてい。

とにかく、従者として晩餐会の場に行つて控えていないと……。  
そう思いながら晩餐会の会場へ急いだ。

\*

松明のみの暗い廊下を急ぎ氣味で歩く。  
昼間の日差しを受けて鮮やかな装飾を見せている廊下も、今は薄暗く、心なしか肌寒い。

夜の宫廷は何かこの世のものでは無いのが存在しそうで、一人で歩くのは苦手なアデラだが、今はそんな事を考えてビビッている場合では無い。

ようやく晩餐会の会場に着いた時、既にロジオンの他の兄弟達の従者等が廊下に控えていた。

丁度、終わる頃なのか　間に合つた。

安堵し息を整えながら、アデラは一番端に他の従者達と同じく直立不動で待つた。

「違うわよ、貴女」

「えつ？」

隣の従者に声を掛けられ、何の事だか分からず首を傾げた。

「上から順に並んでいるのよ。貴女、新しい従者ね？　どのお方の？」

「第五王子です」

それを口にした途端、他の従者達が一齊にアデラに振り返つてしまじと彼女を見詰めた。

値踏みされてるみたい

アデラは従者達の好奇の視線と表情にムツとしたが、なるべく平静を裝つ。

「だつたら、あそこよ」

一番最初に声を掛けってきた従者が、指を指すと真ん中にいた青年従者が「ijoだよ」と手を上げた。

「そろそろ終わるからね、急いで」

「頑張れよ」

ようような励ましに見送られ、意外に好感有る態度にアデラは顔を紅く染めながら、空けてくれた空間にするりと入る。

不必要に大きい扉がゆっくりと開くと並んでいる従者達が一斉に頭を垂れた。

中から、一番最初に王、次に第一王妃、第二王妃と順番に出てきた。

「アデラ」

不意に、第一王妃に声をかけられ、顔を上げた。

第二王妃は今までアデラが見たことの無いような、微笑みをかけ、「ありがとう」

と、一言延べ、従者と共に会場を後にした。

談笑をしながら、王子や王女達も自分の付き人や従者と共に自室に戻っていく。その様子をアデラは晴れやかな表情で見送った。王妃からのねぎらいの言葉が、何よりの褒美だ。

そう思い、あの、前髪がやたら長いロジオン王子が出てくるのを待つ。

（そう言えば、強制的に風呂に入れられて綺麗になつたのだろうか？）

あの、ボサボサ髪を整髪したのだろうか？

（考えてみたら……私、ロジオン王子の顔、知らない……）

王と第二王妃のどちらに似ているのだろう？

知つてるのは、王妃譲りの髪の色に瞳の色 それだけだ……。

アデラは思いついた。

質の良い衣装を着た、見た事の無い顔の少年がロジオン王子だ、と。

彼の従者でありながら、腹に鉄拳を入れ、縛り上げた拳句、気を失つて王子の身体の上に倒れたのだ。

もう、今更お叱りの事柄が増えても痛くも痒くも無かつた。

彼女は、妙なところで肝が太い乙女であった。

「ロジオン兄様、今夜は旅のお話が聞けて楽しかったわ！ また、お話してくださいね！」

幼い子供特有の高い声が部屋から聞こえ、会場から軽やかな足取りで八番目のイレイン王女が出てきた。

ロジオン王子と同腹なせいが、銀の髪に色白な肌と、特徴が出ている。

余所行き用に作られたドレスを、両手でたくし上げ、跳ねるように自分の前を通り過ぎる王女の可愛らしさを微笑ましく見届け、自分の主が出てくるのを待つた。

もう、出てこないのはロジオン王子一人だ。

（もう、見間違えないな）

人違いをするかも、と覚悟していたが、要らぬ心配になつてホツとする。

最後にのろのろと、疲れた様子で出てきた一人の少年がいた。

「 ? ロジオン王子…… ?

その姿を見て、アデラはぽかんと口を開けた。

銀髪の髪はその本来の色と艶を取り戻し、薄暗い廊下をほんのりと輝かせて神秘的な輝きを放っている。

前髪は、邪魔にならない位に切り揃えられ、ブルーグレーの瞳が

真っ直ぐにアデラを捉えていた。

少年と青年の狭間を行き来しているその顔立ちは危うさを秘めているようだ、何処となく妖艶さが見え隠れする端正さだ。

服も、いつものチュニック型の作業服ではなく、王族らしく仕立ての良い物を着込んでいる。

ただ苦手なのか、フリルや刺繡は最小限の物を選んでおり、特にシャツは首元に巻くスカーフのみだ。だが、返つてそれが彼の持つ美しさを引き立てているように見えた。

いや、それより驚いたのは……。

「……もう、良いの？」

「はい……？」

「身体……、いきなり倒れたのは驚いた。 そんなに臭うとは思つていなかつた……ごめん……」  
ほんのり顔を赤らめて身体を真っ直ぐに向け、ロジオンが節目がちにアデラに謝つてきたのだ。

「 いつ、いえ、そんな……」

意外な態度にアデラも顔を赤らめ慌てる。

今まで感情のこもつていない話し方の王子が、本当に申し訳なさげに、しかも、恥ずかしそうに自分に話しかけるだけで、胸が痺れるように疼いた。

可愛い

王族兄弟の中で特に変わり者と囁かれても、恐れ多くも王子の立場のこの少年にそんな気持ちになつて、しかも

思わず抱きしめたくなつた……なんて……。

『氣を引き締める為に、アテラは一つ咳払いをし、氣持ちを落ち着かせる。

「……人の交流を絶つから、鈍感になるのです。 今度からは、毎日きちんと身体を御流しになって下さい。」

母親のような付き人に、ふーと溜息を付いたロジオンは「なるべく氣を付ける」とだけ言って、富廷の外に向かって歩いて行くのを、アテラは慌てて追いかけた。

「 何処へ？」

「離れに戻る」

「もう今夜は富廷に御泊まり下さい。お部屋も用意してあるはずですよ」

「 駄目だ。」

短いが、はつきりと意見を受け付けない鋭い言葉に、アテラは一瞬、言葉を飲み込んだが、

「……では、馬か馬車を用意させます」

と渋々、承諾する。

「……馬が良い」

王子はいつもの平坦な口調に戻り、アテラに告げた。

### 3 忠誠（3）

「何故、君まで来るの？」

同じく馬に跨り、斜め後ろにぴたりと付いてくるアーテラを燻しかげに見るロジオンに

「貴方の従者ですから」

とアーテラは飄々と答えた。

「……来ると困る」

「何に困るのです？」

「……もしや、女性との……逢引い……

で？」

「そんな、婀娜めいたものじゃない。その方が、僕にとって随分楽だけどね」

即、答え、くるりとアーテラに顔を向けると

「……怖い思いする事になるやも知れないよ。……」

と、声を潜めて言った。

が、その声の含みに楽しげな感じがあるのを、アーテラは聞き逃さなかつた。

「おからかいはお止めください。とにかく、離れまでお送り致します」

そのまま黙つてしまつた主に、付かず離れずアーテラは付いて行つた。

昼間の、つららかな天氣から、想像しなかつた強風が馬の鬚を大きく揺らす。

いつもは後ろに結つてあるアーテラの金髪も、倒れた際にほつれたままで、鬱陶しく顔にかかつた。

（髪止め……持つてくれれば良かつた）

今度は常備しとかないと、と考えていると、いきなり、ロジオンが険しい顔で此方を振り返つた。

「馬から下りて」

言つや、ロジオンはさつと下馬した。

「？？？」

「早く下りるんだ」

戸惑うアデラに、ロジオンは脅すように低い声をかけた。

何が何だか分からぬままに下馬をすると、いきなり肩を？まれ、

2人地面に伏せた形になる。

「……今から、僕が良いと言つまで声を出さないよ……」

緊迫した声に、これから何か、危険が迫つてゐるのを理解したア

デラは首を縦に振つた。

ロジオンは、何か含むように呪文らしきものを唱え始めた。

すると、放置された馬の上に人がボンヤリと見え始める。

「……」

自分と王子の姿が、馬にまたがり、何事も無かつた様に離れ屋に向かつてゐる……。

田の前の出来事に、ただ啞然とするアデラに、更に追い討ちをかけるように飛んできたもの 黒い影。

その黒い影は、標的を確認すると馬の周りをぐるぐると取り囲む。馬の嘶きがし、まるで氣が触れたかのように馬が暴れだし始めた。その黒い影は、馬ごと包みこむように捕らえると信じられない速

れで遙か向こうへ飛び去つてしまつた……。

\*

「もう、良いよ」

ロジオンは、取り合えず危機は去つたと言つ安堵の声で、アデラに話しかける。

「……。」

アテラは、言葉も出せずカタカタと身体を震わせたまま、固まっていた。

(あれば……の方は………)

「君?」「

ロジオンは、緊張と恐怖で固くなっているアテラの肩や腕や背中を柔らかく擦すつた。

人の温もりで徐々に体温が上がり、緊張が解けていくを感じる。

「……ロジオン王子……あの黒い影は………」

動けるようになった身体を、弾けるようにロジオンの胸に預け、顔を覗くように視線を移し叫ぶ。

「あの黒い影にあつた顔は!…」

「……見えたの?……夜目も利くようだね……」

やつぱり遺伝かねと呟き、のろのろと起き上がると、アテルの手を引いて立たせてやる。

「何故……? 貴方の師であるコンラート魔導師が、あんな姿に

? ! いえ!! 確か、コンラート様は「くなられた筈!…」

「だから、怖い思いする事になるかもよ……と、言ったのに……」

憂鬱そうに彼女を見ると、溜息を付いてアテラに言つた。

「一緒においで……。話してあげるよ……」

\*

一月通つて、ようやくアテラは今夜、初めて離れ屋の中に通された。

あの、小汚い格好だった王子の住む部屋の中は、思ひのほか片付

けられていた。

様々な実験器具がキッチンと生理整頓されていて、塵も埃も無い。

（なのに何故、格好は汚い……）

心の中でぼやいた。

暫くして、ロジオンはチュニックとズボンと叫うラフな格好で、お茶の用意を持ってきた。

後は私がやります、と言うのを制して、王子は良い香りのする茶をカップに注ぎアデラに渡す。

ロジオンは長椅子に座り、自分で入れた茶を飲みながら足を気だるそうに伸ばすと、彼女に「何処か、適当に座つて」と促す。

アデラは側に置いてあつた、作業用の丸椅子に腰掛けた。

口に含んだ緑の色の茶は、清々しい味がした。

「えーと……まず、あの黒い影の正体だよね？　君の見たとおりだよ、僕の師匠のコンラート

「……。」

「昨年、不治の病に伏して倒れ、そのまま地に還られた　それも事実。

問題が起つたのは、師匠が死する直前にだ……。師匠は自分の病を治そうと、新薬の開発に取り組んでいた　だが、間に合わなかつた……。その事が確証になった時……止めるのも聞かずに、病に臥しているの人間だとは思えない力で僕を押し倒し、師匠は作業台の上に置かれていた開発途中の薬を、全て飲んでしまった……。あの時、師匠はすでに死の恐怖で頭がいかれていたのだと思う。毒薬も治療薬も、分析途中の液体も有る物全てを狂ったように飲み干した。即効性の毒薬があつたからね。瞬時に事切れたよ……」

それだけ一気に話すと黙り込み、カンカン……と暫くカップを叩

いていた。

アデラにはそれが適当な表現が見付からず、頭の中で整理しているように見受けられた。

カツプを叩く音が止んで、主はようやく再び口を開いた。

「暴走による急死だったから、その場には僕しかいなつかた……それが返つて良かつたんだろ？……被害者が出なかつたから」

「人以外、何か被害が……？」

王子は淡々と話を続けた。

「コンラート師の身体から、あの『黒い影』が出てきて僕に襲い掛かってきた……。 とつさに光聖魔法で……君、『光聖魔法』つて、分かる？」

問われ、アデラは頷きながら答えた。

「仕官の必修講義にありました……触りの部分で、入門のほんのかじり程度ですが。大まかに分類して、『攻撃』『支援』『防御』『封印』がありますが、『光聖』は分類すると魔法の中に入るか微妙な位置で、どちらかといふと悪魔や悪霊払いを職とする僧侶が行う事が多いと。しかしながら、戦いの場で、死霊使いや魔物召喚を行つ者もいるので、魔法を使う者は大抵会得している……と。」

「うん……そう……。それで、その光聖魔法で弾いたけど、暴れて部屋の中どころか離れ屋の周囲は滅茶苦茶になつてね」

そう言えば、コンラート師の死後、この離れ屋に修理屋と家具屋と庭師が入つたと聞いた  
だから、この離れ屋の周囲は木々が根ごと綺麗に伐採されて開けているだとアデラは納得した。  
長い沈黙の後、アデラはそろそろと、でも、思い切つたように口ジオンに尋ねた。

「コンラート師は……悪霊となつたということですか……？」

「……死霊や死人を退散させる光聖魔法が効いてるようだから、そもそも言えなくは無い……が、師匠は構わず飲んだ薬のせいで、

何か別の生き物になつた気がする……身体から抜けて自由になつた魂で、道徳も良心も理想も無く、ただ、死ぬ前の欲望を叶えるが為に、僕を襲う者に……」

「何故、貴方を襲うのです！？」ロジオン王子はコンラート様の弟子で、とても可愛がられていたと聞いております！」

「だからだろう……」

そう言つて、飲み干して、空になつたカップを床に置く王子は酷く疲れているようだそのまま手を床にだらんと垂らし、うつらうつらし始めた。

「だからこそ、自分の全てを吸い取るように成長した、僕のまだ若い身体と力が羨ましい……僕の身体を乗っ取ればまだ生きていくる……師匠のように人生を悟つた方も、死が怖いということだろう……」

まるで、喰されているかのように、喋り続ける彼の床についた手を持ち、アデラは言つ。

「ロジオン王子……お眠りになるのなら寝室へ……」

「君……名前は？」

知らなかつたのか、と、啞然としながら「アデラ」と答える。

「……アデラ……氣をつけて……僕の側に居たせいで……師匠の襲う対象になつた……。だから……言つたのに、付き人はいらないと……宫廷には住まないと……放つておけば変わり者の王子と……それで……誰も……」

深い眠りに付いたのだろう、規則正しい寝息が聞こえてきた。

「この方は

そつと、手の甲に口付けをする。

王と王妃や、兄弟に接しなかつたのも、相談しなかつたのも、余計な心配をかけたくないのと、下手に側に居れば襲われる 恐怖に落とし入れたく無いが故……。

（お優しい方なのだ）

そして、今までずっと一人で戦つてきた強い御方。

何故、今夜、私を今までのように強く追い返さなかつたのかは、  
目覚めてから聞くとしよ。』

襲われる対象にならうとなからうと、私の心は決まつてゐる。

「お側に居ります、ロジオン王子。忠誠を……誓います……」

改めて、片膝を付き、ロジオンの手の甲に再び口付けをした。

## 4 予見

「どうして、まだ君が此処にいるの？」

朝、起きて開口一番に魔法使いの王子がアテラになつた言葉。

「昨夜、あんな事が起きた後で、とても貴方様を残して帰る訳には行かないでしょう？」

勝手に使わせてもらいましたと、アテラは台所から茶とチーズ、カチカチのパン、そして、おそらく昨夜の晩餐会で出た焼き菓子が台所に置いてあつたので、それを、まだ起きでボンヤリしているロジオンの前に出した。

「食材が無さ過ぎです。まだ育ち盛りなのですから、きちんと栄養のある物を召し上がって下さい」

口煩い女仕官に、渋い顔をしながらも黙々と茶を飲むロジオン。

「……師はね一度襲えれば気付くまで暫くは襲つてこないよ……不定間隔だけど。 その辺の能力は何も知らない赤ん坊並みに落ちてるようだ」

それよりアテラ、とカチカチのパンを茶に浸しながら座つて一緒に食事を取るように勧める。

主の言葉に甘え、自分の分の茶を入れ王女が作ったという焼き菓子をかじる。

「アテラは従者になつたのは、僕が初めて？」

ゆつくつとした、感情の籠らない口調でアテラに話しかける。

どうやら、今まで意図的にこんな口調で彼女に話しかけていた訳ではなく元々、いつ言つ喋り方らしい。

「はい」

「君の周りで、従者になつた人は？」

「おつせん」

「…………だからか…………でも…………な、仕官の間で話題には上がるだらう。  
しなあ？」

ぶつぶつと、平坦な口調で独り言のように呟くその王子の表情には、困惑の色が見られた。

何か……私はまことに事を仕出かしましたか……？」

『三』エンとした表情をして、いつもの様子を窺つてしるアテカ

「主人を部屋まで送り届けて、そのまま帰つて来なかつた。それで、戻つてきたのは次の日の朝か昼か……。周囲は送るついで、夜伽の相手もしてきたのだろうと、口さがなく言つだらうよ」と、分かりましたか？ と、首をちょこんと傾げる仕草を取り、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

1

アテラの口に菓子を運ぶ手が止まつた。

卷之三

11

思い切り長い沈黙の後、ようやく今の状況を理解したのか、みる  
みる小麦色の肌が夕日のように赤くなつた。

「ひやああああああああああああ！」

ガタンと激しい音がし、椅子から立ち上がって頭を両の手で押さえ、叫ぶアデラはかなり動搖しているようで、菓子を手に持つている事さえ忘れているようだ。

「そっ、そっ、そっ、そんなん！！ 私、何も ビットビットして  
！ よよよよよよとぎ……なんて……！」

「従者が異性だとね、よくあるんだよ？ 一晩一緒に居て何もなか  
つたなんて……周りは誰も思わないね」

王子の言葉にアーテラは力が抜けたようで、へなへなと、しゃがみ  
込んでしまった。

顔から湯気が出ているのでは？と、思つほど顔はますます燃え上  
がり、目が潤んでいる所を見ると、半泣き状態のようだ。

「……」

頬の赤味を冷ます様に手の平をあて、しゃがみ込んでいるアーテラ  
の前に、のろのろとやつて来て同じくしゃがみ込むロジオンに

「……申し……訳……ありません」

と蚊の鳴くみづな声で、アーテラはロジオンに謝った。

「ん？」

「私の浅はかな行動で……王子の評判を更に落として……しまいま  
した……！」

「……更にね……」

ロジオンは、自分の評価がどれ程のものだったのか？ 聞きたい  
気がしたが、自分を追い込む気がしたのでえて聞くのは止めにし  
た。

じーっと、顔を伏せて嘆いているアーテルを黙つて見つめる。

可愛いな と思う

初めて自分を訪ねて来た時、綺麗な人だとは思つたけど、男性的  
なイメージの方が強くてそれ以上の感情は湧かなかつた。

彼女と親密になつた昨日（殴られた上に、臭いと怒られ、仕舞い  
には氣絶して、仕方ないからおんぶして王宮まで送つて、化物にな  
つた師匠に目を付けられて）

それで、ほんの少し彼女の人生を知つて

もつと話してみたい

と思ったのだ。

「うして伽の事で顔を赤らめ、半泣き状態で何も知らない純朴な様子を見ると、とても自分より年上には見えない。

（まあ、僕が耳年増なだけだけど）

自分も年頃の男だし、異性の身体に興味が無いわけじゃなかつたけど、いつも師匠か魔法の勉強優先の生活だった。

恥ずかしさで顔を覆つている手の甲が、彼女の真っ直ぐ流れる金髪から透けるように見え隠れしてまるで宝箱の宝石を、勿体なさげに自分に見せてくるようだ。

……衝動的に抱きしめたくなる……。

ロジオンは、ゆっくり彼女の右手を掴む。まだ菓子を指に摘んでいて、既に彼女の一部のようつに引っ付いていた。

余りの動搖に、指が硬直して離れないようだ。

それをぱくりとアデラの指ごと口に含んだ。

「……」

今度はロジオンの行動に呆気に取られまた更に熱が上がり、アデラはボンヤリしてきてるようだ。

そんなアデラに

「あのね、貴族や王族なんて……そんなこと通常的でね……だから、僕のことは気にする事はない。ただ、君に恋人がいると、喧嘩の元になる……」

と、困ったような顔をアデラに向け、平氣?と尋ねる。

「 いえ、私には、そんな男性はまだ……」

アテラは慌てて首を振る。

「 ……いの？ 意外だなあ ……」

「 どうして？ ロジオンは不思議そうに尋ね、アテラの顔を覗く。

「 どうしてつと言われましても……言葉に詰まります」

火照った顔を懸命に冷ますアテラは必要以上に顔を近づけ見つめる主の、端整で涼やかな顔立ちに動悸を抑えつつ答えた。

記憶が甦る

仕官仲間に「お前、隙が無いよな」とぼやかれ、間髪入れずに『女は少々ボンヤリしてた方が良い』など、しみじみ言い出した馬鹿たれがいた。（兵士の私がぼやつとしてたら、死ぬだろ？が）

何ぼざいでいるんだと心の中で叱咤した事を思い出した。ようするに異性にとつては付け入る隙が無く、可愛げの無い女なのだ

つらつら思い出しているうちに、ロジオンはのろのろと起き上がり、テーブルに背に手を付く。

「 だつたら良いか……。そう言う噂が立つた方が、動きやすい」さらりと他人事の用に言つ。

「 昨夜のこと、君は師のなれの果てに狙われる一人になったのはまず間違いが無いからね……。『夜伽』と称して、夜は此方に来て貰つた方が良い。」

「 しつ、しかし……第一、何故貴方様が私が標的にされただと見解を出したのか分かりません……」

『よとぎ』の三文字に、どうしても抵抗を感じるのか、『ごねる』うに意見を言うアテラ。

「 君の幻影」と、連れ去ったのを見たでしょ？ ……そう言つて

を避ける為にも人の接觸は、特に夜は必要以上しなかつたんだけど……やはり僕の側に居るものは、全て奪い取るつもりだなあってしみじみ思つたよ。」

「……せめて陛下には眞実を話された方が……」

王子は「駄目」と厳しい口調で告げる。

「あの人のことだ、やはりあの時に頑として預ける事を拒否してればと……悩むだろう?」

確かにあの、人の良い好々爺の王は悩み、後悔の涙を流すだろう。「……それに、どんな経緯でも僕は師から魔法を習つた事は感謝してる……出来るだけ、安らかな道を逝けるようにしてやりたい……」ゆつくつと自分の言葉を噛み締めるように話しながら、ロジオンは真っ直ぐとアデラの緑の瞳を見つめる。

(「この方は、この意思は決して曲げないだろ?」)

萎えていたら、この一年の間にとつゝに父である殿下に相談しているだらうし、味方を得ていただろう。

アデラは一つ大きな深呼吸をし、同じように真っ直ぐにロジオンのブルーグレーの瞳を見つめ返す。

「分かりました。私も覚悟を決めます……ただ……」

「ただ?」

「一つ……お尋ねしたいことが……」

アデラは悩ましげな表情をロジオンに見せた。

「……何?」

「昨夜、お送りしますと私も強引に付いて参りましたが、今までの貴方様なら私をもつと強く追い返されました。でも、昨夜は直ぐに受け入れましたよね? それは何故なのです?」

投げ出された疑問にロジオンは「ああ」と頬をさすり

「あの時、もの凄く疲れていてね……もう君とやり合つ氣力が無かつたんだ。」

何のこととは無いと飄々と応えた。

「……そうですか。」

自分が期待した答えでは無く、アデラはがっかりした。  
あの化け物になつたコンラート師を打破すべく、従者としてパートナーとして自分が最適だと判断されたのかと思つたのだが、……。

違う、そんな事は建前で本当はもつと、婀娜めいた応えを期待していたのだと……そちらの方が本心だと、ロジオンの答えを聞いて縮んだ心が証明していた。

（まだ少年の王子に、何を期待してるんだ！　私は　…）  
恥ずかしさに気付き顔を赤らめ、アデラはふるい払つかのように首を振つた。  
汚い時と小奇麗な今と差がありすぎたことに衝撃を受け、心が揺さぶられただけかも知れない。

ゆつくりとした平坦で感情の籠もらない話し方の王子が、本当に申し訳なさそうに自分に謝つたことに、胸が疼いただけかも知れない。知れないだけで、この方を異性として見ていくかどうか、自分でも全く分かりかねない……。

そんなアデラの心の動揺を悟るかのようにロジオンは、にやりと意地の悪い笑みを浮かべた。

「それとも噂で、陰口叩かれるの續なら事実にする？」　夜伽の件

「なつ！　何をおつしゃいます！…」

せつからく冷めたアデラの顔が、また再沸騰した。

「何か、がつかりしてゐようだつたから」

「がつかりなんかしてません！…」

立ち上がりむきになつて否定するアデラが可笑しくて、ロジオンは腹を抱え込み肩を震わせ笑いだした。

「面白いよねつ、君！　思つてゐること素直に顔に出て」

「うう……普段はもつと冷静に対処しております。」

「ああ？　…本当に？　へえ……？」

自分を小馬鹿にしている態度の年下の主に、ますます顔を赤らめる。

### ほんとに調子が狂う

構わず笑い続ける主人を、アデラは「……」とができない恨みがましさで睨みつけた。

ヒイヒイと、目頭に溜まつた涙を指で拭いながらロジオンは、自分の年上の従者に

「よろしく、アデラ。」

と、話しかけ、羞恥で赤く染まつている小麦色の頬に口付けをし、更に

「夜伽の件はいつでも受けるから……遠慮なく」

彼女の耳元で、余計な一言を付け加えた。

もちろんアデラは「結構です！」と怒りと羞恥で全身真っ赤にし答えた。

昨夜は、もちろん疲れていたけど……。

彼女を追い返そとと思えばできただことだった。それをあえてしないで巻き込んだのは悪かつたな……と、思う。

自分のは微々たる能力だが、この女仕官が今の状況を打破する何かを持っていると予見したのだ。

（まあ、僕の予見はあてにならないことが多いが）

正直な気持ち、この年上の従者をもつ少し側に置いといて、人としてのなりを見たいと思った。

……独占欲に駆られたのだ。

自分以外の生命を守らなくてはならなくなつたのに、大変だと落ち込むどころか気持ちが弾むように軽くなつたよな感覚。

恋愛事に縁の無い人生を送つてきた、この魔法使いであり王子でもあるロジオン。

これが恋をする、と言つ事なのか？ と、今までに味わつたことの無い自分の感情にアーテラとは違つて素直に受け入れ、楽しむことにした彼は、まだ顔を赤く染め、自分にきつ眼差しを送つていて従者を見、目を細めるのであつた。

## 5 卑下と白パン（一）（前書き）

この話書いてる時、丁度ハイジの再放送見てたの思い出しました…。  
つまそうだった記憶が…。

## 5 卑下と白パン（1）

王宮に一曰戻つたアテラをことを知つてゐる周囲の曰は、やはり何處か、からかいと驚きと 時々、刺す様な嫉妬と、憐れみの視線の集中砲火であつた。

『自室で仮眠を取つておいでよ。……それから日が沈む前にまた離れ屋に来て』

コンラート師は夜に動き出すのでこの一年、ロジオンも昼夜、夜逆転の生活を送つていたといふ。

（だから昼夜に訪問すると機嫌が悪かつたわけだ）

アテラは一人納得する。

さつとシャワーを浴びて別棟の仕官用宿舎の自室に戻つて、渡り廊下を歩いてゐると仕官仲間に声をかけられ、あつといふ間に囲まれた。

「噂になつてゐるわよ～アテラ！」

「 で？ どうなの？ あの『悪臭王子』と関係しちやつたの？」

「変わり者王子」から「悪臭王子」に異名が変わつていた……。

その方が動きやすい

主人の意見に逆らうわけにもいかないし、此処で事実無根だと騒いでも、どこかこの状況を楽しんでいる仲間達には信じてもらえないにも無い。

「…………さつ、さあ……」

取り合えずはぐらかして場から逃よつとするが、がつちり捕まれて応えを聞くまで離さない勢いだ。

「一晩一人つきりでいて、何もないなんて無しよお～。」

「どうしても、何かあつたと言わせたいらしい……。」

「やうやうー、女性と一人つきりで、臭くても男で王子よー。そこで、手不出さずにいたなんてあり得ないわよオ。無こと『女に興味無い』なんて貴族や王族にとつては不名誉な評価がつくし、手不出さない方が失礼になるもんよ。」

「当然、自分の名誉の為にも……ねえ?」

勝手に話を進めている……。

（なるほど……こうやって話が飛び火していくんだな）  
噂好きは女の性だと言つが……。同性とは言え、苦笑いするしかない。

「すまないけどまた、夕方に出掛けないとならないから」

「王子の所に行くのね?！」

キヤーーー！ と、黄色い声を出す仕官仲間から剥がれるよつて自室へ飛び込む。

（……これは、何も無かつたと説得する方が難しい……）

冷や汗を拭いながら、溜息を付くと肌着を取り替え寝台に横になつた。

仮眠を取つておけと言われても いきなり昼夜逆転の生活を強いられても急に寝れる訳が無い。

昨日からの出来事を、つらつら思い出しながら目をつむる。  
臭い王子を捕獲して、氣絶して（後で聞いたら、シャツに染み込んだ薬品の作用との事だ）驚くほど端整だった主の顔、そして可愛らしい面も小憎たらしい面もあると言つ事。

『夜伽の件はいつでも受け付けるから』

思い出し、また顔を熱くする。

まだ少年の彼の顔立ちには、その時期特有の不安定さがあるとアデラは思う。時に、子供のようで、時には、大人のようで……。

あの言葉を告げた時の顔はもう一人前の大人の顔だった。

その時の挨拶代わりのキスも、耳元への囁きも、女性の心を掴んで離さない類のだ。

（あ～もう！ ますます眠れなくなつたじゃないか！～）

ばかばかばかばか～！ と羊を数える代わりにばかを数えるアデラだった……。

\*

「 寝過ごした割りには、色々持つて来たんだね……」

ロジオンは相変わらずの口調で遅刻したアデラに話しかけながら、バスケットの中の食べ物を物色する。

「 ……申し訳ありません……」

仕官となつてからの初めての遅刻に、アデラは素直に反省の意を示す。

いつに間にか寝ていたアデラをベルが夕飯の時刻だと起こしに来てくれて、寝台から跳ね起きた。

制服に着替えながら窓の外を見ると、もう日が沈みかけ東の空には星が瞬いていた。

（まずい！～）

焦る気持ちを抑えながら、制服のボタンをかけ終わると部屋から飛び出ると 夕飯の良い匂いが廊下いっぱいに立ち込めていた。朝に焼き菓子を少し口に入れただけで何も食べていない事に気付き、途端に腹が鳴る……。

王子もろくな物を食べていないことは、朝に台所を漁つてみて分かつていた。

だつたら、遅れたついでだ……と、食堂を管理している者に

事情を話して仕官用の食事と食材を分けてもらつたのだ。

「……暫くは、君に食べ物を持つてきてもらつか……」

王子が食すると言つ事で、氣を利かせたのか滅多に食べられない白パンが入つていて、ロジオンはそれを真つ先にかぶり付きながら、葡萄酒の栓を開ける。

台所に食材を置いてきて、戻ってきたアデラに言つた。

「今度から遅れないで。もし城の中や此方に向かつている途中で襲われたら、どんなに僕が急いでも間に合わない」

ゆつくりながら厳しい口調で、小麦色の肌のこの女従者を諫める。

「はい、心に留めておきます」

凛とした態度で頭を下げるアデラに、ロジオンは食事を取るようになると葡萄酒をグラスに注いで差し出す。

仕官にあてがわれる葡萄酒は質が悪い。そのままに飲めるものは、大変少なく貴重で、殆どは貴族に寄与されてしまうのだ。

残念だが葡萄酒までは、手が回らなかつたのだろう。

備え付けの蜂蜜を葡萄酒に入れながら、神妙な趣で主を見つめ、問う。

「……王子、今夜は現れるのでしょうか?」

長い放浪生活でそんな葡萄酒にも慣れている王子は、文句も言わずそれに口を付けながら

「分からぬ……、気配を感じたら君にすぐ教えるよ」

と、チラリとアデラを見、いつもの、のんびりとした口調で答えた。

アデラに今日の朝のよつな、どこか穏やかな雰囲気は無い。

これから来るかも知れない恐怖に対抗すべく、心身共に引き締めている。

彼女の場合は昨夜が初体験な故に緊張もひとしおなよつで、開戦前の兵士のように瞳に闘志の光を宿していた。

「……アデラ、君、何処の生まれ？」

場を和ませようとしているのか、ロジオンが徐に話を切り出す。

「私ですか？　もちろん、このヒルズバーグ国ですが、……」

「……先祖代々ずっと？」

「あつ……いえ、祖母の代に此処に……」

アデラは少し、言葉を濁らせた。

闘志の光が鈍つた。

自由貿易を奨励しているこのヒルズバーグは、『商人と職人の国』と評価される程、多くの国から商売や事業を行う為に人が入つてくる。

そして、商売を促進する為に人種など関係なく才能があれば取り立て、職人を募り育てていく。

故に、職業や文化、風習、その他に言葉や宗教も入り混じり、多種多様の多国籍国家である。

「……お祖母様は、何処から來たかは知つてる？」

「……中東の方からとしか……既に亡くなりましたからよくは分かりませんが……もう、無い国だとしか聞いておりませぬ」

そう言つアデラの食事をする手が止まつてゐる。

「……尋問じゃないよ。　ただ、君のその身体能力の事をきちんと知りたいだけだ。　それに、君のお祖母様には先々代もこの国も大変お世話になつてゐる。感謝すればこそで、中傷する気はない」

「その事は……陛下から？」

「……晩餐会で聞いた」

「……あんな場で……」

アデラは深く溜息をつき、手で顔を覆う。

「さすがにそうつとだよ……自分の従者の履歴を知るのは主人として当然じゃない？」

「王子はそれを聞いてどう思われたのです？」

「……良いと思ったから……従者として受け入れた

　　じゃあ、い

や？」

小首を傾げて、自分に尋ねる主人の表情は、どこか楽しげである。

「朝、私にお話下さった理由と全く違います！」

「そうだけ？」と悪びれた様子も無く、ロジオンは完全に気分

を害しているアテラに気を使つことしないで話を続けた。

「……アサシンだったお祖母様からは、何も教わらなかつた……？」

「訳じや無いよね……？」

## 6 卑下と白パン（2）

わざと声を潜め、低めのしかし、どこかはぐらかす事を許さない脅しのような口調に、アテラは硬直し頭を伏せた。

ロジオンは、顎に手を付け、緊張しているアテラに話を続けた。

「海洋資源も鉱山資源も豊富なこの国は経済力がある……商業や文化それに伴つて技術や芸術は発達して、他の国より、高い教育水準だ……が、その分軍事力は並以下だった……。当然、隣国はこの国を自分の國の物にしようと目論む……。困った当時の王は奇策を立てた……。中東から流れてきた暗殺集団を見つけ出し、市民権と引き換えに國の専属とした。国が亡くなり、放浪生活しながら暗殺の請負をしていた者達だ……。市民権と言つ永住を提示した事、自分達の最も得意な事が王の名の下にこなせる事に飛び付かない訳は無い……。当時、女性部隊の長をしていた君のお祖母様は、それを受け入れた……。遅れながらも軍事に力を入れて蓄えている間、アサシン達は他国の情報を収集し、王に報告……危険な国だと決定すれば、エルズバーグ國の仕業だと思われない様工作をして、他の国に手を向けさせる……あるいは首謀者の息の根を止める……」

「……」

「……わが國の、機密中の機密だね……」

今、この空間に自分とこの女従者しか居ないのを知つてか、その機密を声を潜める事も無く話すロジオンに「もう少し、声を低めに」と、叱る従者のアテラ。

そんな彼女に、特に氣にする様子も無く、ロジオンは平坦な口調でゆっくり話す。

「……奇策とは言つても、どこの国でもやつてるんだよ……ただ、君のお祖母様と、お祖母様の仲間は余程優秀だったのさ……」

「……確かに私は、祖母に色々と手ほどきは受けていますが、祖母のように優秀では無いと確信しています。祖母のようにこなせ

と言われても……私には無理な事です……」

アデラの緑の瞳が風に揺れる草葉のように波打たつた。

「君……自分を卑下し過ぎるんじゃないかな……？」

そうロジオンは言うものの、自分のすぐ側に皆に認められ、王に感謝される程の実力を持つ者が居て、その者に手ほどきを受け……越えるどころか、足元にも及ばないと知らしめられたら、やはり自分もそう思つだらうな　　実際に僕も……と、考えながらアデラを見つめる。

コンラート＝オーケルベリ

四大元素　地・水・火・風のうちの一つ、『水』の称号を持つ魔導師。

それぞれの精霊の王に戦いを挑み、認められた者にしか与えられない荣誉称号ある名号。

この名号を与えられると、それぞれの精霊王の助けが得られると同時に、同じ属性の精霊に無条件で力を借りられる。

一人の精霊王につき、一人の人間にしか与えられる事ができず魔法使いから、それから昇格した魔導師達の憧れの名号

その一つを持つ亡くなつた自分の師匠……。

師匠に、旅先で、そんな師匠を超える者になる　　と言われ続け育つた自分。

そんな環境に驕ることもなく、ここまできたのは自分が師匠を超える等と考えられないが故だ。

超える

と言つことはどういつづれこと？

『魔力』？　『技術』？　『称号』を沢山持つ人になるということが、魔法を扱う者達を従わせる権限者『魔承師』になれるって

」と？

抽象的な褒め言葉に、混乱して何時ぞや師匠に尋ねたことがある。

今は、魔法に精進しなさい

静かに低く、そして何処か物悲しく答えた師匠……。  
どうして師匠はそんな悲しい顔をするの？

僕は何か変なことを言った？

どうして、みんなは僕が師匠を超えるなんて言つの？  
そんなの分からぬいじゃない。

あんな凄い人を

僕が師匠を超えるなんて考えられない……。

ぱつりと呟く。

「王子……？」

「偉大な師を持つとどうしても卑屈になるね……。今だに分からぬ  
いことが多いよ……何を根拠に僕が『師匠を超える者』と同じ魔法を  
扱う者たちにもてはやされたのか……。僕には師匠みたいな魔法を  
繰り出せないし……魔力だつて師匠の方が強い……それなのに……  
だよ。……師匠は……僕ぐらいの歳にはもう、魔法の中で得意な分  
野を築いていた……僕は何が得意なのか……。そつぱりだ」

長めの前髪がブルーグレーの瞳を隠す。

真正面ではあるが、アテラの方からは主の表情は見ることができ  
なかつた。

王子が、高名な魔法使い『水のコンクート』を超える者となる  
その話は聞いていた。

帰つて来た時点では、王宮に仕える数多くの魔法使いや魔導師達

は、その評価を仲間達の間で大分前から聞き及んでいたので、コンラート師と同様に上げ膳据え膳に扱っていたらしい。

魔法を扱う者達の間には、男女間や身分の差別など無い。

あるのは魔力の差、魔法を扱う力の巨大さ 故に、王子の身分など関係無い。

前評判の良かつたロジオン王子が攻撃魔法のほとんどを知らず、防御魔法を駆使することに念頭を置いていた、と言つコンラートの言葉の確証を得るほど魔法を披露することを国に帰つてから無かつたことで、王子の魔法使いとしての実力は

『眉唾ものだ』

と、実しやかに囁かれているのをアデラは知つていた。  
魔法の世界から抜ければ、まかりなりにも王子の立場なので噂に乗せる位で終わるが、魔法使いや魔導師達の中では、あからさまに王子を凡暗ぼんくらと叱咤する者もいるくらいだ。

そんな、自分の評価も王子の耳に届いているだらうに……。  
王宮の魔法使いや魔導師達と、一緒にいる姿を見たことが無いのはそのせいか?と、アデラは思い胸が痛くなつた。

「……まあ、君のお祖母様の事は話でしか知らないし……お祖母様のようにやれとは言わない……君は君が出来る事を、僕にして下さい。出来ることを自信が無いからと出来ないと嘯つのは無しでね」

自分を卑下する者の癖をズバリと言い、ロジオンは自分の食べたいた白パンをちぎり、むくれた顔をしているアデラの口に入れた。

「……

何か、慰められている子供のようだ 白パンを口の前に出され

て「口開けて」と言う仕草で口をパクパクされて……多分

『……君の気持ちも分からぬ訳じゃないから……』

あんなことを話したのも、能力のことで悩んでいるのは何も私だけ

では無い、と、言いたかったのだろうか。年下に慰められたのはビート、私は酷い顔をしていったのだろうか。

主より年上なのに、そつとは全く思つてないなと分かる様子の態度に腹立だしい反面、今まで面倒見のよい姉という評価でやつてきた自分がそんな扱いをくすぐつたいたながら、嬉しく感じる事が恥ずかしくて、むくれた顔で誤魔化す。

断れずに口に含んだ白パンは、ほんのり甘かつた。

## 7 策？（1）

結局、その夜はコンラートは現れなかつた。

馬上で何度も欠伸を噛み殺しながら、宿舎へと戻つたアデラはズルズルと足を引きずるようにして自室へ戻つた。

同僚達は朝の訓練で、誰一人宿舎に残つておらず黄色い声に囲まれずに済んで、ホツとした。

取り合えず、一寝入りしてから身体を清める事にしよう。

それから、王立図書館の閲覧禁止の書をそつと持ち出して 出来るだらつか？

『魔法に関する古代文書があつた筈なんだ……もの凄くぼろぼろだから……すぐに分かる。それを持ってきて……。ぼろ過ぎて閲覧禁止になつたやつだからそんな怖いものじやないから平気』

とにかくにも……寝よう。

\*

ノックの音に田が覚める。

日時計はまだ暁……また、噂好きの同僚だらうと留守を使つことにした。

「アデラ、居るんだろ？」

男の声に、まだよく覚醒しない頭でのつそりと寝台から身体を起こすと、門を外す。

「ロジオン王……！？」

エイルマー？

むすりとした顔を此方に向ける同僚の男性仕官のエイルマーが、顔と同じくらい身体付きを扉を塞ぐようにアデラに向いていた。

偉丈夫の彼に目の前に立ち塞がられるようにされ圧迫感を感じながらも、同僚の気安さで夜着のままで構わず対応する。

「悪臭王子じゃなくて悪かったな」

ふざけた言い方であるが、明らかに機嫌が悪そうだ。

「私の主だ。私の前で他の同僚のように悪態をつかんでくれ」

エイルマーの出現ですっかり目が覚めたアデラは、いつもの張りのある澄んだ声で厳しく諫める。

「何が主だか……従者ではなく愛人じゃないか」

（それを聞きに来たのか……）

「……エイルマー、悪いが疲れているんだ……。休ませてくれ」

偉丈夫のエイルマーを外に追い出し、扉を閉めようとする彼に止められた。

「お前、それで良いのか？ 愛人なんか、そんなの仕官の仕事じゃないだろ？！ しかも、剣や身体の鍛錬にも出てこないで……！ 「この生活に慣れたら、仕官として鍛錬もきちんと行つつもりだ（とにかく眠いんだ……！）

エイルマーの顔を見つめ睨んだ。こいつは悪い奴ではないのだが、どうも空氣を読む事が出来ない。

女は少々ぼんやりしてるのが可愛いとか、女兵士の前で平氣でほざくし。

これだけ険悪な態度を出しても分かつておらず、仕官としての心構えを淡々と説いてるし。

「　　聞いているのか？」

エイルマーの問いに、アデラはやけ気味に「ああ」と応える。

本当は全く聞いていないのだが、聞く振りしてさつと帰つて貢おうと口論んでいた　が、

「そりゃー！　俺の気持ちを受け入れてくれる決意をしてくれたか

！　　

と、いきなり抱きつかれた。

えつ？

あせつてエイルマーから身体を引き離そつと身を捩るが、「恥ずかしがるなよ」とますます強く抱きしめる。

「てつ手加減を知らないのか？！お前はー！痛いだろがー！」本気で痛がるアデラにお構いなしのエイルマーはそのまま扉を閉めると、アデラをベットへ押し倒した。

何が何だか分からぬまま、だが、貞操の危機だと本能で感じたアデラは枕元に隠してある短剣で鞘を外さぬまま、エイルマーの後頭部を殴打する。

呻き声を出し後頭部を押された彼の隙を見てするりと離れると、投げといた仕官服を拾い自室から飛び出し、ベルの部屋へ逃げた。

驚いたのはベルの方だ。

乱れた夜着で血相を抱えて逃げ込むアデラ頭を押さえながら追いかけるエイルマー。

焦りながらも素早く状況を察したベルは、エイルマーが部屋に入るぎりぎりで思いつきり扉を閉め、門をかける。

「なつ、何？今度はアデラなの？？あの勘違い男？」

叩き続け、しなる扉を押さえながらアデラに聞くベル。エイルマーは仕官の中では有名な勘違い野郎で、好かれていると勝手に思い妄想を広げ、標的の女性を追い掛け回すという、コンラートとは別な意味での化け物野郎だった。

兵士としての実力があるだけに、空気の読めなさと女性に関する勘違いが、彼の出世を妨げてると評判であった。一人で必死に扉を押さえていると、この騒ぎに誰か王宮憲兵に通報してくれたのだろう。

「何だ？！貴様等ー！」

「女子寮で騒ぐなー！」

「取り合えず、話は向こうで聞くから！」  
扉の向こうの喧騒が聞こえる。

「アデラー…… 何故だ……」

エイルマーの悲痛な叫びが廊下に木霊していた……。

アデラとベルは、力尽きたようにその場に座り込んでしまった。  
脱力感が襲い、一人扉に背もたれボンヤリする。

「……何人目だっけ？ あいつ……」

長い沈黙の後、先に口を開いたのはベルだった。

「……知らないよ……。おかげで目が覚めたけど……」

アデルはそう答えると、肌蹴た夜着を整えながら立ち上がった。

「ごめん、ベル。 迷惑かけちゃって」

「私に迷惑かけたのは、エイルマーだし」

ベルは肩を竦め、笑ってアデラを見た。

「……あつ……」

自分を見つめるベルを見て、思い出したように彼女に問いかけた。

「……ベル、確か貴女の恋人つて……」

\*

「これが、王子所望の古文書だと思う」

ベルの恋人の司書であるボリスが、労わる様にアデラに渡した一冊の本は酷い有様だった。

羊皮紙が所々虫食いと色あせており、しかも、紐が腐食して今にも解けそうである。

「本を修復するか、新しく写し直すかまだ、修史官と相談中なんだ。内容を訳できる人もいないから、これがどれ程の価値のある書物なのか分からないので、放りっぱなしだったから…… ロジオン王子は

訳できるのかい？」

「さあ……？ 私はただ、持つてくるよつに言われただけだから……」

歯切れの悪い返事を返すアーテラは、今にも崩れそうな書物を至極大事に手に持ちながら、ボリスとベル礼を述べて図書館の裏口からそつと出た。

勿論、この事は秘密にしてもらつて……。

（持つべき友は、多い方が良い ついでに口が堅い方が尚更良い）

一人領きながら、夕日を背に走るアーテラだった。

「うん、これ……」

アーテラから受けとつた書物を見て、はつきり「酷いな」と露骨に顔をしかめて言った。

「前に見た時より酷い……ほつぼり投げてた……感じ？」

「ほつぼり投げていたと言つより、どうするか相談中でそのままだつたそうです……」

「相談中？ そのまま？ だつた？ ……そうです？ ……持つてくれるのに協力者がいたの？」

「うつ……！」

怪訝そうに眉を顰めるロジオンに、アーテラはグッと喉を詰まらせる。

「……」

「……」

「……申し訳ありません」

たつぱり沈黙の後、恐る恐る主に事の次第を告げた。

「……そつと持つてきて……つて言つのはね、内緒で持つてきてと

言つ意味だつたんだけど……？

「はい……たまたま知り合いが司書にいたのですから……つい……」

「…

（私が一番口が軽いのかも……）

王子にもベルにも彼女の恋人のボリスにも、心中でたっぷり謝りながら呟くアデラだった。

ロジオンは肩が揺れるくらいに大きさに溜息を付くと、作業台に本を置いてそつとページを開きながら、いつもの平坦な口調で尋ねた。

「その司書、僕が訳せるか？」と聞いてこなかつた？

「そう言えば……聞いてましたね……」

「何で、答えたの？」

「ただ、持つて来るよう言われただけだと……」

「……後で詰め寄られそう……」

珍しく嫌悪の様子が分かる口調だった。

「……訳せるから、持つて来いと言つたのですよね？」

ロジオンは黙つて頷くとそのまま、本にのめり込んでしまった。時々、本棚にしまつてある本を開いては読んで、たまにペンを持つて自分のノートに[写し取つたり。

日はとつぱり暮れ、遠くで鳥が鳴いている。

今夜は現れるのだろうか？

ちらりと主であるロジオンを見る。

彼は一心不乱に書物を読み解いていて、こちらの視線には気付いていない。

そう言えばとアデラは思い出したように奥の台所に入り、持つてきた夕飯を皿に盛り付けそつと、ロジオンの脇に置いた。

「お食事です

「……」

アデラに声を掛けられたことも、側に食事が置かれた事にも気付かないようだ。

いや、気付いていても返事をする余裕が無いのかも知れない。その集中力に必死な気配が読みとれるようで、アデラは一抹の不安がよぎる。

(今夜辺り……来るのか……?)

夜の住人ではないアデラは闇から逃れるように、そっと窓から外を眺めた。

外は漆黒の闇……。

遠くにかすかな王宮の灯火が瞬くだけ。

## 8 策？（2）

カタン……と、椅子を引く音がして、ハツとアーテラは顔を上げる。うつかりうたた寝してしまった。

こちらを見つめながら近寄るロジオンの表情は、芳しくなかつた。アーテラは主に長椅子を譲つて、温めなおしたスープをカップに注ぎ彼に渡す。

「……使えないね……あれ……」

ロジオンは独り言のようにポツリと呟く。

「羊皮紙の腐食が激しそぎ……シミで見えないは虫食いで千切れているは……何か使えそうな呪文があればと思ったけど……」

そう言つと、サイドテーブルに置かれた皿からパンを抜き取ると、スープに浸しながら口に詰め出した。

「……今夜辺り、現れそうなのですか？」

「……来るかな……予感はするんだけど……」

僕の予見は余り当てにならないからと、付け足す。

「もし来たら……？」

ロジオンは忙しくスープを飲み干すと、次に骨付き肉にかぶりつきながらアーテラが注いでくれたお茶を受け取り話を続ける。

「取り合えずその場で捕らえるか、何処か誘導するかなんだけど……」

「それを一年ずっとお試しになつたわけですね」

ロジオンは両手でムシャムシャと肉をかじりながら、肩を窄める。アーテラの言いたいことが分かる故の仕草だ。

「上手くいかなかつたのは、承知の通り……上手くいかなくて当たり前なんだ……。僕の魔法は全て師匠から教えてもらつたもの……」

「いくら師匠の思考が赤子並みに落ちていても、潜在意識の中に覚えているのだろう……全て弾かれるか、消されるか……だもの」

「それで古代魔法……」

「……古代魔法書なんてものは、その時代に生きてきた魔法使いの日記みたいなものでさ……自分が開発した魔法を記したりするもんなんだ……。大抵、弟子がいればその人に渡される……いなければ自分の命が尽きる前に処分するか、こんな風にどこかに紛れて発見されるか……」

そう言ってロジオンは肉の骨で作業台の上にある書を指し示す。  
「……知りませんでした……。皆が皆、同じ呪文で同じ魔法を唱えているのかと……」

アデラは感服したようにロジオンを見つめ、大きく息を吐く。

「土台は一緒だよ……それは古代から変わらないんだ……。問題は土台を留つて、それからどう自分の魔法を作り上げていくか……それができるか否かが魔法使いとして生きて、いすれ『魔導師』になれるかどうかの分かれ道になる……」

「ロジオン様は……？」

アデラの問いにロジオンは答えず、指に付いたソース懸命に舐め取る事に集中していた。

アデラは無言で台所からフインガー・ボールを持ってきて、ロジオンの前に差し出す。

「こんなのはいらないのに……」

言つと、アデラに睨まれ渋々手を洗つ。

そうそう、さつきの話と、上着のチューニックで手を拭うロジオンをしかめ顔で見るアデラに話しかける。

「……僕は取り合えず、一人立ち出来る位だ……まだ、自分で魔法なんか創れないよ。魔法日記は持つてるけど……普通に日誌代わりに使つてるだけ……だから、過去の産物に頼るつかなつと思つたわけ……」

腹を満たした彼は、『ロロンと長椅子にだらしなく寝転がる。

徒労に終わつた翻訳で田が疲れたらしく、田をしばきながら時々、田頭を指で押さえている。

「他に、例えば、コンラート様が懇意になさつていた同業者に、

「コンラート様の知らない術の指南をして頂くわけにはいかないのですか？」

「アデラの意見はもつともだと思つ……でも、できなー……」

瞬間、彼は悲痛な表情を浮かべたが、変わったかどうか分からぬ程の一瞬で、すぐにいつもの緊迫感の無い顔に戻った。

アデラはそれを見逃さなかつた。

「何か不都合な事がおありになるのですか？」

「……頭を痛める事が増える。」

「何故です？ それが一番の近道ではないですか？」

例えば『水』を吸収する『地』の称号を持つ方に協力を仰ぐとか

「……今はできない……知らないの？ アデラは王宮仕官でしょ？」

「師匠が亡くなつた時、緘口令を敷いたじやない」

「あつ！ ……すいません、今まで魔法に縁が無い生活を送つていたので……」

思わず口を塞ぐアデラに向けてロジオンは困つたように笑う。

魔法の世界だけではなく、一般的にも高名なコンラートが亡くなつたことは特に魔法を扱う同業者達に混乱を招く……。

しかも、戦いではなく病氣で発狂した上に誤飲で亡くなつたことは、亡き本人の恥を晒すだけではない。

『水』の称号が宙に浮いた状態にあると言つこと。

称号の跡目争いで、巻き込まれるのは

ロジオン王子

「僕はおひか、このエルズバークの国全体が巻き込まれる恐れがあるからね……。魔導術統率協会に水の王からに直接連絡があつて……王宮内の秘密にするようになつて……僕と父上に伝達が来た。」

「魔導術統率協会から……」

魔導術統率協会

魔法を扱う者達が世界中に増え、魔導師や魔法使いを語り犯罪や人を惑わす行いが激増した為、魔法の発案創生

者マルティンが個人の財産を投げ打つて作った組織である。

マルティンの考えに同意し賛同した者達や、その子孫達が魔法を扱う者達に規律や戒律又、援助を行つてきた。

魔導師と呼ばれる魔法使いを中心に、強力な魔法を使う魔導師が多く在籍しており、普段は世界各国に散らばっているが協会の指示が出ると動く。

各国に仕えているが、魔法を扱う者達は自分の大本の主は協会という観念を持つており各国の指導者達も協会に政治的介入はできない。

魔法が世界中に浸透している今、何処の国も魔法を扱う者達の存在は必須だ。

協会側からは国が魔法を扱う者達をどう使おうと、物言いは来ない。

が、魔法に関すること、魔法を扱う者に何か重大な事柄が起きた、協会側から何かしらの形で介入があるので。

しかし、それでさえ稀だ。

同じ世界に存在しながら、別の世界の組織のよう

人々はそう囁く。

そのせいか、アデラには協会の存在も、その内容に現実味が無くピン、とこなかつた。

しかし、この後のロジオンの台詞に急に現実味を帯びて、沸々と怒りが湧いてきた。

「だからと言って王宮内に勤めている者に口止めしたとは言え、風の噂で国中に伝わっているでしょう?」

「だから魔導術統率協会も水の王も…噂を流すおしゃべりな『風』の属性を持つ魔物や精霊にも緘口令を敷いたんだ……だから、王宮

の外や他国にいる高名な魔導師達には頼めない

「……それは、王子一人で何とかしろといふことでしょうか？」

「……つてこと」

「何とかできなかつたら……？」

「ただ……魔導術統率協会から派遣された同業者達が師匠を何とかしにくる……」

それまで僕の手で師匠を安らかに眠らせたいと思つただけじねと、溜息を付ぐ。

そうしてアデラの視線をそらす様にじつと、天井を見つめ再び口を開いた。

「僕が師匠を光聖魔法で退けた後に……水の王が現れたんだ……魔導術統率協会から、僕に滅す又は封印を決行するよう指示があつたんだ……。僕は……自分の師匠だから……弟子の僕が何とかするのは当たり前だと思つたから……」

「……承諾なさつたのですね」

「……でも、今の情況見れば分かると思うけど……なかなかね……。緘口令を引いてるから……懇意だつた他の元素の称号を持つ魔導師達に助言を請えないし……」

「話したら、他の魔法を扱う者たちにあつといふ間に広がり……コンラート様以外の悩み事が増える……てことですか……」

深く溜息を付いた。何が何でも王子一人の力でやらなければならぬい情況なんだ。

待つて？

「王子、王宮に仕える魔法使い達にはお力を貸して頂けないのですか？」

「……無理だ」

今度はロジオンが深く溜息を付ぐ。

「僕は、同業者には嫌われているらしい……却下されました……と、肩を竦めた。

あの噂は本当だつたのか……。

期待が大きかつただけに、本人を見たときの王宮に仕える魔法使い達には落胆は大きかつただろうが、露骨に馬鹿にし、非難する者が居ると言うのだから、恐らく高みの見物と洒落込んでるつもりなのだろう。

「別に人が居れば居るほど良い、って言つ訳じやないからね……師匠相手じや……鳥合の衆になる可能性のほうが高いもの」

だから、それは気にしない、僕は元々期待はしていないし、と即、答え

「取り合えず、さしあたつて今夜、襲撃に来たらどうしようつて事、考えよう」と、話を逸らす。

寂しくは無かつたのか　?

「この一年間、一人で難問と向き合つことに。

まだ成年の儀を迎えない少年の王子に一人に任せるとは

（魔導術統率協会は一体何を考えているのだ！　王宮に仕える魔法使い達も！！）

怒りと共に、王子への慕情が募る。

長椅子の前にしゃがみそつと、ロジオンの手を両手で包むようになれる。

「……アデラ？」

「王子……私は貴方様に忠誠を誓つております。何なりと言つてください。私は、何があつと王子の味方です」

強いアデラの口調とは別に、彼女の瞳は揺れていた。

ジックとロジオンはそんなアデラの潤む緑の瞳を眺めた。

「何時……忠誠を誓つたの？」

「初めてコソラート様に襲われた夜です」

ふーん、と、表情も変えず首を傾け、そして、

「……何なりと言つて言い訳？　じゃ、夜伽……」

「王子！！」

顔を真っ赤にして、離れるアーテラに「冗談だよ、と笑うロジオンにまたからかわれたとムツとしたアーテラだつたが、

「ありがとう……。君に言わると元気が出るよ……」

二口りと落ち着いた微笑は少なくとも自分の言葉が、ロジオンにはなかなかの栄養剤だつたらしい」との証明でアーテラは内心ほつとした。

ある案を話してみるとした。

「それで……いかがでしょう？　ロジオン様の術が効かぬと云つのなら、私の祖母から教えてもらつた術を試してみてはと

「術つて……？！」

だらしなく長椅子に寝転がっていた主が飛び起きた。

まだ短い付き合いだが、こんなに反応の早い彼を見るのは初めてで、かえってアーテラの方がしどろもどろになる。

「あつ、あの……！　どちらかと言えば、お守りに近い感じなのですが

すが

「良いよ、教えて」

間髪入れずロジオンは答える。

「……はつ、はい……では」

アーテラはそう言つと、食事を入れてたバスケットの中から青い色のインクと筆、正方形に切りそろえられた羊皮紙を取り出した。

「……？」

その小道具を見てロジオンは不思議そうに小首を傾げた……。

深夜の林の中、遠くで梟の鳴き声が微かに届く。

此処に佇んでから、そんなに時間など過ぎていないうが、あまり暗闇が好きでないアデラには途方もない長い時間に思える。

此処にいるように主の魔法使いに言われ、怯えた表情を見せたアデラを見て

「平気、君を酷い目に遭わせないから……」

一人でコンラートの襲撃を待つのが怖いのと思つたのか、ロジオンは珍しく優しい口調で諭す。

「……え……そうではなく……」

落ち着かなく手をキョロキョロさせ、周囲を見渡しているアデラを見て、ピン！……ときたらしき。

「暗闇……苦手……？」

すばりロジオンに近づかれ、言葉に詰まりながら頷く。

「……それなのによく仕宦になつて、一昨日僕の帰りを送る気になつたね……」

呆れたように自分の女従者のアデラに問う。

「何かに意識が集中している時は平気なんです……ただ、手持ちふたさでこうやって一人で待てと言われると……」

そう言つと、泣きそうな笑つてゐるような複雑な顔を主に向ける。

「……ふうん……」

眉を寄せてアデラを見つめたが、仕方ない、代わつても良いけど君は術をかけられないでしょ？ といつもの、感情の籠もらない口調で言い放つ。

「覚悟を決めてよ  
と、諫められて黙つて頷く。

自分で自分を抱きしめるように佇み、カントラを主を見送る彼女を見て、ロジオンは困つたように笑つた。

あの、別の生き物になつた師匠より暗闇が怖いか……

（本当に面白いお姉さんだ……）

\*  
コンラートを待つのはきつと、そんなに長い時間ではないだろう。祖母から聞いた術の説明を聞いて、忙しく準備を始め、ほとんど駆け足でこの場所まで来たのだから……。

「アテラ　！！」

自分の呼ぶ声が木霊し、主が手にしていたカンテラが左右に揺れている。

刹那、アテラはそのカンテラに向けて全速力で走り出した。  
「来てる　！」

黒い影のコンラートの速さは化け物と呼ぶに相応しい。  
前のように大分前にロジオンが感づいても、きりぎりだった。  
ロジオンの場所までほんの数メートルのはずだが、後ろから闇より濃い闇が迫ってきて、背中に走る電流のよつた悪寒に、あつと言う間に距離を縮めているのが分かる。

早く、早く！

ロジオンの焦る声が耳につんざく。

「　！　！」

自分の後ろ毛が、逆立つのが分かった。

つかまる

ロジオンが居るその陣まで間に合わない  
手が届かないのを承知に思わず、主のロジオンに向け手を伸ばす。  
髪の毛を捕まれた そんな感触を感じた瞬間

「？」

自分の身体が光った。

いや、まだ、光り続けている。

それと同時、自分の走る速度が急速に上がった気がする。

「アテラー、飛べ！」

ロジオンが両手を自分に向け、広げているのが分かつた。  
アテラは力強く地を蹴り上げる。

「うわ？！」

自分でも思いもしない程の跳躍にアテラは、声を上げた。  
そしてまさしく、飛び込むようにロジオンの腕の中に。  
ロジオンは倒れながらも、彼女をしっかりと受け止め、強く抱き  
しめた。

二人、言葉を掛け合う暇も無く、抱きあいながら闇からの来訪者  
を向かい入れた。

そう、陣の中に

\*

闇より暗い漆黒の衣のような身体に、陶磁器のよつに生氣の無い  
顔色。

しかし、表情は虫を追つ幼児のよつに楽しげで……。

『身体から抜けて自由になつた魂で道徳も良心も理想も無く』

アデラはロジオンの言葉を思い出す。

老いと病で、身動きの取りにくくなつた身体から抜け、その身軽さを満喫するかのように。

風のように自分の弟子に襲い掛かるとしたその時。

「伏せて！！」

ロジオンはアデラの上に覆い被さる様に屈む。

輪を作る様にぶら下げる、羊皮紙から青い光線が放たれた。怖々アデラは顔を上げると、息を呑んだ。

『この羊皮紙に青い田を描くんです。』

アデラは不思議そうに覗くロジオンの前で、筆に青いインクを付け、羊皮紙に一つ田を描く。

『《邪眼》……と言つそうです。元々、悪しき者を呼び寄せるまじないだつたそうですが……、今は悪しき者で悪しき者を追い払うお守りみたいな物だ……と、祖母が話していました』

『ふーん』

アデラが見本で描いた紙を手に取り、食い入るように見つめる。

『……確かにまじないみたいな感じがする……信仰心に左右される類のものかな……？　お祖母様は亡くなるまで亡国の宗教を信仰していました？』

アデラはちょっとと考え、そうですね、よく、太陽に向かつて祈りを奉げていましたから、と答えた。

『……使えないですかね……』

残念そうにアデラは主である魔法使いの王子に尋ねた。

『……いや……亡国の……使えるね……』

ロジオンは含みのある笑いを浮かべ、アテラを見つめる。

『信仰を……魔法に組み替える……』

やつ言つと、薬品棚から小瓶を一つ取り出し、蓋を開ける。

『……ひらの青い塗料を使おつ……』

『……これは……？』

アテラは小瓶を手に取り、覗き込んだ。

ランプの光に、反射して微かにキラキラと光つてこむように見える。

『どう使おうか、考えていたものだ……これなら有効に使えそうだ

よ……』

女従者に対する予見、……

（久しぶりに当たりそうだ）

策をアテラに説明しながら、そつ、思つたロジオンだった。

青い目を描いた羊皮紙をなるだけびつちつと、輪になるよつて囲み、なるだけ中央に誘つた。  
コンラーは見事はまり、あらかじめ呪文を詠唱をし、待機していた所に発動。

青い目から一斉に青い光線がコンラーを捕らえた。  
まるで蛇のよつに黒いコンラーの身体に巻きついていく。

コンラーは甲高い声を上げて、次々と巻きついていく青い光線から、激しく身体をくねらせ、逃れようといつてこる。

「……ロジオン様、捕らえる事ができそつですね！」  
嬉しそうに顔を綻ばせながら、ロジオンに話しかける。  
「……いや、これは無理だね……」

「えつ……？」

ゆつくつとした口調で、じつと「ンバー」を見ながらロジオンは呟く。

「これは、ね、捕らえる為の魔法じゃあ無いから……」  
「！？」

驚いてロジオンと同じ方向に顔を向ける。

瞬間、火花が飛び散るような激しい炸裂音が響いた。  
アデラは一瞬身体を強張らせ、顔を背ける。  
光線が弾けるように千切れたのだ。

ひいいいいいやああああああああ

泣き声のような、呻き声のような声を一聲、上げたかと思つと「ンバー」は、すぐ側に倒るロジオンとアデラに見向きもしないで、疾風のように何処かへ去つていった。

\*

「……アデラ……？ 平氣？」

光線が消えカンテラのつたない灯りしかない森の中、呆然とロジオンにしがみ付いているアデラの背中を擦る。

「捕らえる為の……仕掛けではなかつたのですか……？」

「ようやく口を訊いたかと思えば、不満事であつた。

彼はチョコンと首を傾け、アデラの顔を覗くように答えた。

「捕らえるんじや意味が無いんだ……それにこれは付け焼刃みたいな術だからね……」

「それじゃあ、一体何の為にこんな……？」

「……いつも不思議だつたんだ……。あの、師匠は何処からやつてくるんだろうつて……」

見て、と、ロジオンは指をさす。

「あつ」

コンラートを縛りつけた青い光線が、元の液体に戻り光を放ちながら点々と地面にこぼれ、化け物の道筋をつけていた。

「昼間……日が昇っているうちは出てこないのは分かつてる……その間に師匠の隠れ場を見つけたい」

「それで……？」

「それから考えるよ……師匠がどうこう質の物に変化しているのかはつきり見極めないと」

「……では、何か別な策なり、術なりを見つけておいた方が良いのですね？」

「お祖母様の人脈をあてにしたい……アデラに頼んで良いかな？」

頷くアデラ。

「とにかく、朝から行動だ……一日離れ屋に戻つて仮眠を取ろう

「そう言えれば……。捕まるかと思った途端に急に駆ける自分の足が速くなつて 何かしたんですか？」

「ちょっととした支援をね……」

謎かけるロジオンの顔をまともに見ると、もの凄い近い距離にあるのを知り、アデラは慌てて彼から離れた。

自分は今の今まで主であるロジオンの胸の中にいた事によつやく気付き、顔を赤らめる。

「申し訳ありません……」

しゃがみながら、後ずさり主に頭を垂らす。

ロジオンは、ゆっくりと立ち上がりると服に付いた土を払いながらアデラを見る。

口角が上がつてゐるのが、カンテラの憐い灯りでも分かる。

そして

「……君の胸……硬いね……筋肉？」

と問いかけた。

「 防具服です！！」

「冗談だよ……」

くすくす笑いながら、取り合えず紙を取っちゃおつと書のロジオ  
ンを沸騰した顔で睨みつけるアーテラは

（また、遊ばれてた……）

と、火照った顔を両の手で冷ましながら撤去作業に取り掛かった。

（眩しい……）

アテラは口を瞑つても瞼を通して入ってくる、刺すような口の光にゅうくつと口を開けた。

夜中、離れ屋に戻った一人は口が昇るまで仮眠を取る事にしたのだが、寝室のベットをどちらが使うか言い合つになつた。

私は長椅子で寝ますと言つて、ロジオン王子は君が使えと聞かない。

押し問答の末、ロジオンが

『じゃあ、一緒に寝台使う?』

と、悪戯な笑みを浮かべた時、終了となつた。

結局、お言葉に甘え使わせてもらひう事にした……。

主の少年は何だ、と、平坦な口調ながら残念そうに言つて、棚から毛布を取り出し隣の部屋にさつわと引つ込んでしまつた。

私がうん、と、頷けば一緒に寝るつもりだつたのだろうか?

二人どひにか、ゆうにその倍の人数は横になれそつな寝台を見て、アデラは頬を染める。

何処までが本気で何処までが冗談なのか……主の口調や表情からは読みにくい。

本気だつたら本気だつたらで困るくせに。

少年である主に惹かれているのは確實だ……でも、それ以上ビリしようとか何か行動を起こす気にならないのも本心……。

あちらは年下でしかも王子。

こんな事、考えるのもおこがましい

アテラはブーツと上着を

脱ぐと髪留めを外し、剣を枕の横に添えておく。  
そしてベッドに滑りこんだのだが……。

(日が昇つてどの位たつたのだ?)

明け方に起きるつもりが結構日が昇つているのに焦りを感じ、ブーツを履いて手ぐしで髪を梳かしながらロジオンが寝ている、隣の居間兼作業室へ顔を出す。

しかし、そこに置いてある長椅子には既に主のロジオンの姿は無く、整然と整頓された部屋を日の光が照らしていた。

(まづい)

まさか一人、コソヒートの形跡を追いに行つたのだろうか?  
慌てて外に出ようとするアデラを、後ろからロジオンが声をかけた。

振り向くと、主が生乾きの髪を布でがじがじと拭いながら、温室から出てきた所だった。

「あつ……、いらつしゃたのですね」

アデラは安堵の息を吐き、主につづりやしく挨拶をする。

ロジオンはのんびりと長椅子に腰掛けると

「温室の奥を右に曲がれば温泉があるから……僕の後で良ければどうぞ」

と勧めた。

「えつ?! 温泉が湧いているのですか?」

その事実にアデラは驚いた。

確かに南の方の鉱山資源の豊富な地域では、温泉が湧くと聞いていたが、この辺で温泉が出たなど聞いた事が無いからだ。

「うん……。一年前、師匠が別の生き物になつた際に、この離れ屋中に暴れたと話したよね……? その時、師匠が深い穴を開けてね……掘り当てた……。」

意図的ではないだろう偶然なのだろうがと、付け足し、

「まあ、東の国の資料と公共浴場を基に、自分なりに工夫して造つ

てみました……」

と、ちよつと恥ずかしげに咳払いを一つした。

\*

風呂に入るとアーテラは、その造りに歎声を上げた。  
広さは一人から二人に入る程の広さの湯船。

大理石の洗い場もきちんと造られている。

腰を掛けられるほど台に籠を乗せると服を脱ぎ、その中に入れ、

湯船に浸かる。

『ぬるかつたら、向かつて右の栓を抜いて』

試しに抜いてみると、湯気を立ててお湯が流れてきた。おそるおそる触ると、確かにそのままでは使えない程に熱い。

「向かつて左が水か……」

一人心地に喋る。

『出る時には湯船の下の栓を抜いてきて。』

なる程、この栓を抜くと湯船の湯が排出されるんだな。

（あのお方は、こんな物までご自分でお造りになるのか）

まだ、少年の自分の主の知識の広さと、手の器用さに感心してしまつ。

自分でお茶も入れてしまつし、部屋の生理整頓もきちんとやる。自分の事は自分でこなしてしまつし、身の回りの物はこうして造つてしまわれる。

コンラートの事があつて、従者や小間使にはいらないと言つもの、確かに必要ないだつと感じる。  
(それなのに……)

何故、自分自身の清潔さに無頓着なのだつ?

湯船に浸かり、その気持ち良さに浸りながら、ゆるゆると考える。

ふと、近い距離で外からロジオンの声と、もう一人、聞き覚えのある男の声が耳に届いた。

珍しくロジオンが困っている聲音が聞こえる。

「何があつたのか？」

アデラは聞き耳を立てた

「すまない、急に都合が悪くなつて……今日は本当に駄目なんだ」「しかしロジオン様、今日花火師達と花火の打ち上げの設置場所を決めて、打ち上げの手順等の確認をせにやあ予備の花火の確認ができませんぞ。ぎりぎりですぞ。」

ああ、この声は庭師棟梁のサム爺だ。

初老の男で日焼けした逞しい肉体はとても老いゆく身体とは思えぬ程だが、よく自分の事を爺、と呼ぶのでそう呼ばれるようになつた。

「設置場所は例年と一緒にだと聞いているし……花火の数も昨年と同じだろ？……後は、僕の造つた花火がそこに付け足すだけだし……」

「大きさは？」

「昨年と同じ……」

「安全性は？ 昨年はコンラート様がお造りになつて、貴方様が手伝つた。今年は貴方様一人だ……試験用の花火で確かめねえとこちらとて命を預けられねえ」

（そう言えば、王宮内で上げる開幕の花火……花火師と王宮庭師が協力して上げるんだつけ）

「……僕の腕が信用に足らないのは仕方ないが……今日はこれから出掛けないといけない。……試験用の花火も造つてある。五日後の本番までに間に合つようにするよ」

本当に困つているロジオンを見てサム爺は、溜息を付きハンチング帽をかぶり直した。

「……いくらコンラート様が毎年楽しみに制作していたからと言つ

てもな……王子の身分の貴方様が引き継ぐ必要無いじゃありませんか？花火は花火師にまかせて、王子は王子の役割を果たした方が良いつてもんですぞ。中途半端に手え出すと周りが迷惑こうむります。趣味でお気楽にやられたら現職の花火師達に失礼ですぞ」

（言い過ぎだサム爺！）

飛び出して言つてやりたかつたが、風呂に入つている状態じゃあままならず、アテラは歯を食いしばる。

「……うちの兄弟達にも痛い言葉だな……。頼むよ……今年だけは我が儘を聞いてくれ……来年は花火師に任せるから……」

ロジオンの力の無い弱々しい聲音が聞こえた。

暫く沈黙が続いた後、しうがねえとサム爺が言つた後、王子に諦めた口調で話す。

「試験用の花火が上手く行かなかつたら、本番用の花火はもう、手直しする時間がねえ……。そん時は貴方様の花火は中止にしますそれで良いですか？明日だ。明日の夜に試験用花火の打ち上げを延期しますぞ。これがギリギリですからな」

「……仕方ないでしようね……」

ロジオンも異存はないようだ。

それでは……と、その場を去るサム爺。

暫くして、ゆっくりとその場を去る足音がした……。

「お湯……ありがとうございました」  
すっかり身体を清めて風呂から出たアーテラを見て、ロジオン  
はよつこらと長椅子から起き上がる。  
「じゃあ……行こうか……」

「……はい」

フード付きの尻ほど隠れる短めのマンテルを羽織ると、アーテラを促  
し外へ出た。

昨夜の陣を張った場所へと向かう。

のんびりとした動作が多いこの主。

しかし、昨夜と良い今日と良い、普通の少年のそれと変わらない  
しつかりとした歩調が続く。

いや、普通より早足だらう。

普段、背筋を伸ばしきびきびと歩くアーテラにとつては、この歩調  
の方がうつかり主の足を踏まなくて良いのだが。

陣の場所から、青く光る液体を辿つて歩いていく。  
「時間がたてばたつほどに輝きが消えていくからね……早いとこ居  
場所を突き止めないと……」

口調は相変わらず緩慢だが、焦りの音が聞き取れる。  
そうだらう。

コンラートの居場所は近いのか、それとも遙かに遠いのか見当が  
つかないのだから。

居場所までコンラートをぐるぐるこまきつけたこの青い液体の量  
が持つたかどうかも分からぬ。  
これは賭けだつた

ロジオンの予想だと、魂のみで形を作つて動き回る「コンクート」には、肉体のように魂を入れておく形代が無い。

その場合、昼間の輝きは耐え切れないのだという。

だとしたら

昼間はどこか暗い場所に潜んでいるか

最悪、誰かの肉体を形代に使つてゐるか だと言つ。

「……師匠は僕の身体を欲しがつて、その欲望のままにいるから、誰かの肉体に乗り移つている可能性は少ないけどね……」

「では……どこかに寝所があると」

ロジオンは頷く。

「居場所を見つけて……できるなら観察して、師匠を見極めたい……安らかに眠らせる事が出来るのか否かを……。まだ、僕は力不足だから……後者だらうけど……」

最後の方は聞き取るのが困難な程、小さい声だつた。

少年の主の背中をアデラは見つめながら付いていく。  
成長過程の身体は、上背などを見ると筋肉が薄いようで頼りなげに見える。

まだ、十五なのだよな……。

王子と言う身分の重圧

高名な魔導師の弟子という職種の重圧

そして、化け物化した師匠の魔導師をどうにかしたいが、力不足の自分に対する憤り。

自分にも祖母からアサシンとしての能力を見込まれ、教えられ、結局祖母の期待に応えられなかつた経験がある……。

『……アデラ、貴女には が足りない。』

頃垂れる祖母

蚊の飛ぶ音より弱々しいその声は、失望で頃垂れる祖母の姿に衝

撃を受けていい中、少女で経験不足のアーテラに囁く声ではなかつた。今、こゝにして従者としてロジオンの後ろに付いていいのは、何かの巡り合わせなのだろうか？

あの時の少女だった自分。

自分に対する憤り

空しゃ

悲しみでじうじて良いか分からず、唇から血が滲むほど歯み締め、地面に這いつくばつて泣いた。

王子は……？

私と同じような思いをしていい……？

「……！」

ロジオンは驚いて身を強張らせた。

後ろから自分を抱きしめる柔らかくて温かい良い匂いがする女の体躯……。

「……アーテラ……？」

顔だけ後ろに傾ける。

自分が若干背が低いが、大して差が無いのですぐ側にアーテラの頬が自分の唇を掠め、慌てて顔を背ける。

アーテラは気付いているのかいないのか、いつも恥ずかしがつてすぐに離れるのに、まるで子を抱きしめる母のように自分を抱き、髪を撫でた。

「……誘う場所には適した森だけ……アーテラ……今はその気になつてゐる場合ぢやないし……君から誘つてくれるのは有り難いけどね……」

「冗談ではぐらかそうとしたが、アーテラは自分から離れず更にきつと抱きしめた。

「花火……私にも手伝わせて下さい」

と、耳元で囁いた。

「……ああ、聞いてたね……」

アデラの態度に納得したのか、ロジオンはいつものようにのんびりと言つた。

「いやらしいね……盗み聞きなんて……」

と言いながらも特に嫌惡の声でもなく、淡々と喋る。

「……聞こえたのです。サム爺は声が大きいですからね」

「……内緒話には向かない人だよね……」

もう、離してとアデラの腕をつかんで押し戻す。

「すみません……やりすぎでした」

しゅんと肩を落とすアデラにロジオンは

「……こんな時じやあなかつたら……押し倒すところだよ……僕は大人じやあないからね……」

と悪戯っぽく笑いかけ、アデラの手を握つて言つた。  
「暫く手を握つて歩いて良いかな?」

「……はい。」

とアデラは恥ずかしげに頷くと主の堅く、しつかりとした感触の手を握り返した。

\*

青く光る液体が、紆余曲折に続いているその後を辿る二人。

雑木林や森の中をあの速さでぶつからず、上手に飛び回つているらしく、折れている枝や幹などは見付からないし荒れている雑草や背の低い木々も無い。

「この液体が無かつたら、分からなかつた」と、ロジオンはアデラに話した。

富庭の敷地内だが、限りなく広いので、富庭からかなり離れたこの場所まで来ると時々鹿や狐に出くわすくらいで、人と言えば王子

であり魔法使いである

ロジオンとその従者であるアーテラだけだった。

横一列に一人並んで手をつないで歩く。

後ろに歩かれると繋ぎにくく、ロジオンが物言いをつけた為だ。別に此処まで来れば、この様子を見て在らぬ噂も立つことも無からうと、アーテラも言うがままに隣に並び、手を繋ぐ。

「僕は、一年前に師匠と共にこのエルズバーグに来るまで……自分がこの国の王子だなんて……知らなかつたんだ」

「えつ？！」

「この呪由には、驚かずにはいられなかつた。

「『コンラート様に、自分の出生の事、聞かされなかつたのですか？「あの人ね……そう言ひ俗世間に繋がる様な事……あまり話さない人だつたんだ』

「だからと言つて……『自分で聞いた事は無かつたのです？』

「あるよ、何度か……『僕のお父さんとお母さんはどうしたの？』つて感じで……そしたら……」「

「そしたら？」

ロジオンは、人差し指を空に向けて言つた。

「『あの、空の向こう』って師匠が……。何度か聞いてもそう言つて答えてさ……あの頃まだ僕は幼かつたから『ああ、この世にいないんだ』って思つて……師匠も話すのが辛いのか？ と一人納得して聞くのを止めたんだ。……この国は平和だけど……外に出たら国と国の中では戦は絶えずあるし……国に入つても平和に見えて内紛や、領主内の紛争、飢饉、病……安心した暮らしが出来る国は僅かだ……。親を亡くして、寄り添つて生きている子供達を沢山見てきた……。僕もその内の一人なんだと思っていたんだ……運よく、師匠に才を見出されて、弟子にしてくれたんだって……」

「……」

「一人であちらこちら……貴族のパトロンになつたり、国の食客になつたり……師匠は一つの処に留まるのが苦手な人でね……ま

あ、性格もあるけど……手も早かつたからね……

「手が早い？」

「お・ん・な」

ロジオンはアーテラの顔を覗きながら、目を細めて、人差し指を自分の口にあてる。

「えー——————？」

「」の告白にも更に驚く。

「……いつも、凜とした風情でえ……落ち着いた眼差しと口調でえ……高名な魔導師でえ……。でも……女性関係は俗まみれ……ねえ……」

少々放心気味のアーテラを、引っ張るように青い液体を巡るロジオンは苦笑いをしながら、話を続ける。

「師匠の言葉を借りれば、『女性は神秘の宝庫、探求し続けても分からぬ事が増えてくる』だつて……。今、思えば女性と縁を切る為の言い訳だよねえ……」

「 本当ですよ！！ 全く！！」

放心から覚めたアーテラは、生前のコンラートに過大評価があつたと憤慨しているようだ。

「……で、その師匠が、『もう放浪生活は終わりにしよう』と入った国が、この、エルズバーグだつたんだ。……入つて驚いた……何か……街の中、吃驚箱……」

その表現に間違いはないな、とアーテラは笑つた。

異国の商品が惜しげもなく並び、異民族の衣装を色んな肌の国民が好きな風に着込んで、異国訛りの言葉が街を飛び交う『商人と職人』の国。

街を造る建物も市や地域によってその風情が変わる。

概観もあるので、その辺はまとめる様に指導があつたのだろうが、観光に来た者達には、1つ市を股いだら……別世界で肝を潰した……なんて話もよく聞く。

「王宮に通されて……」この王の下に仕えるのか……何て考えて謁見したら、突然『ロジオン、この方達がお前の両親だ』なんて師匠が言うんだもの……」

「……さぞ、驚かれたでしょうね……」

「驚いたも何も……」

その時の事を思い出したのか、ロジオンは大きく肩を揺らし溜息を付く。

「父上と母上は、師匠が王宮を訪ねて、謁見した時点で僕が何者なのか分かつたらしいけど……」

アテラはそうだろうと頷く。

ロジオンは銀髪にブルーグレイの瞳、そしてその端整な顔立ちは、第一王妃のそれとよく似てる。

王妃の若かり日　そのままだつたのだろう。

「師匠が王の子の証だという、産まれた時に贈られる、植物や虫が入った琥珀のブローチを見せてさ……そんなの持つていたのか……」

師匠？　……つて眩暈がしたよ

「……そうでしょうね……」

その様子を想像してアテラは苦笑する。

「よく思い出したら、師匠が指さしていた方角はエルズバーグの方向なんだよね……。ああ……もつと追求すれば良かつたなんて、つらつら思つていたら……両親には泣きつかれるし、あれやこれやと王子らしい格好をと着飾らされるし、いきなり兄妹ができる、ずっと一緒に過ごして来た様に振舞うし、帝王学だの貴族の作法だの毎

田田まぐるしくて

「……」

「……じぢらは、今だに自分が王子と言う事に実感が持てないのに……。王子らしく振舞えとか……王子としての仕事をこなせとか僕は王子である前に魔法使いとして育つたんだ……今更どうすれば良いんだ！」

激しい口調になつた自分にロジオンはハツとして口を塞ぎ、すまない、と、アデラに謝る。

二つの間にか、つないでいた手が離れていた……。

相変わらず、先を急いで歩く早い足捌きの後ろをアデラは付いていく。

「田まぐるに毎日を過ぎしていたら……師匠の異変に気付くのが遅くなってしまった……」

「……不治の病だと聞いています……。早く気付いても、同じだったのでは……と……」

「……師匠は常に気付いていたのだろう……だから、この国に留まつて、異国から流れてくる沢山の薬品を研究して、治す薬を……僕が早く気付けば、手伝えた……間に合つたかも知れない」

長い沈黙が一人を包む。

地を踏みしめる音と、時々響く鳥の鳴き声が耳に入るだけの静けさ……。

そんな寂しい情景の中、ロジオンの押し殺したような声だけが淡々とアデラの耳に届く。

「例え……間に合わなくても……自分の身体からこぼれる様に消える命の灯火を、一人で耐えて行かなくてはならない恐ろしさを……軽くできたかも知れない……。僕が僕の事だけに精一杯だった為に、ずっと側にいてくれた師匠を狂わせた……」

泣いているのだろうか……？

先程よりずっと、歩き方が早い。

まるで、追いつくな、僕の顔を見るな、と言つてゐるかのようだ……。

…。

（ロジオン様、私の足が俊足な事をお忘れですか？）

アテラは微笑んで、そつ然くと、再び主の手を掴み握る。

「触らないでよ……」

手を放おうとするロジオンの手の甲を、アテラは握り締める。

「 だったら、私は間に合つたのですね……」

「 ? ……」

ロジオンは立ち止まり、充血した瞳をしばたきながら、不思議そうに自分の従者を見つめた。

「 貴方が師の事で後悔し、悩み、悲しみ、この世の者ではなくなつた師を一人で何とかしないとならない恐ろしさで、壊れる前に…

…」

ロジオンの瞳が大きく開き、湖畔のざわ波のよつと大きく揺れた。  
「私は、ロジオン様のお役に立てますよね？」 つづん、役立たせてください。一人より一人の方が、きっと、道が開けます……ね  
つ……」

返事の代わりに、主の抱擁がアテラを包む。

「 ……王子と呼ばないで……」

「 はい、ロジオン様で良いですか？」

「 『様』も貴族みたいで……嫌だな……」

「 ロジオン様は貴族ではなく、王族ですよ」

「 意地悪だな……」

ちょっと拗ねた風に喋るロジオンに、思わず吹き出す。

今まで自分がやつてきた事が、全て非難されてるよつで嫌気が差していたのだろう

「そのまま良いですよ……魔法使いのロジオン様で。無理矢理こなすと捻じ曲がりますもの。ゆつくり、溶けるように馴染んで行けば……。御両親様にも、御兄妹様にも、王宮に仕える者達のにも……自分の出生にも……。私がいつもお側にお仕え致します。……コンラート様のようには行かないかも知れませんが、私は私なりに誠心誠意を持って貴方様にお仕え致しますから……」

「……そう言つこと言つと……アデラのこと、絶対に手放せなくなるよ……？ 知らないよ……？」

相変わらずのんびりだが拗ねたような風で喋り、抱擁するこの主がアデラは愛おしくて、癖のある銀の髪を優しく撫でた。

## 11 一人 (2) (後書き)

家庭の事情でしばらく更新をお休みします。  
9/18~19に再開を予定しています。

「……？」この先は、王家の領地と違うのかい？」

ロジオンが燻しかげにアーテラに尋ねた。

「いえ、王家の領地ですが……それが何か？」

「見て」

ロジオンが指差した先。

コンラートを巻きつけた光る青の液体が、弧を描くように半回転している。

「……どういふことですか？」

「此処から向こう側には、強力な結界が張られていることがあります」

しかも、この半回転した液体を見て注意深く探らないと、僕でも気付かない程の巧妙な結界。

じいっと、結界の先の領地を見詰めるロジオンを見てアーテラは「以前はこの先に、王領伯のお屋敷があつたんですよね……。お世継ぎに恵まれなく、伯が没後、王家に返還された土地なんですよ、事も無げに言ひ。

「……まだ、当時の屋敷は残つてゐるの？」

「はい、そのはずです」

「そこに誰か住んでることつて、有り得る？ よね？ 誰か管理してゐるわけじゃないんでしょ？」

「普通は、扉や窓は厳重に鎖を掛けますから……普通は無理でしょ

「う

「普通はね……」

そう、ロジオンは言ひと意を決したかのよつて、ゆっくり結界の向こうに片足を入れた。

何か弾ける様な音が、結界に踏み入れたロジオンの方から聞こえ、アデラは仰天する。

「ロジオン様！？」

「…………あ…………うう…………」

ロジオンは自分の足に纏わり付くように走る、雷のよくな痛みに耐えながら何か呪文を唱えていた。

「L? Ht e? (去れ)」

呼応するように響くロジオンの声にアデラは、固まつた。

大気に反響させ、幅広い地域に魔法効果を行き渡らせる『音波魔法』

身体の芯に響く声の筋にアデラは歯軋りをし、堪える。

突然、緊張の糸が切れたかのように止まり、詠唱が終わつたのだと彼女はほつと安堵した。

「気持ち悪かった？」

ロジオンが苦笑いを浮かべアデラに尋ねた。

「……申し訳ございません。初めて聞いたものですから」

「これ（音波魔法）が苦手な人は結構いるよ。硝子を引っかく音に似てるんだよね」

もう、大丈夫と彼はずかずかと結界が解けた先を進む。

少なくとも

ほんくらじやない。 魔法に関しては。

アデラはロジオンの後姿を追いながら、そつ呟いた。

\*  
「ロジオン様。 ロンラート様は追わないのですか？」  
「追うよ」

「しかし……」

「進んでいく先は、方向から言って今は無き王領伯のお屋敷。コンラートが付けた青い光は、ぐるっと迂回して違う方角に付けていた。

「……誰かその屋敷に住んでるんじゃないかな？」

「聞いたことはありませんが……王家の所有になってる屋敷ですから、許可無くても使えそうな王家筋の方が利用しているかも知れませんね」

「だけど、それが何か気になるのか？ 疑問詞が浮かんでいるアデラに、ロジオンは

「あれだけ強力な結界を張つていたことを考えれば、僕と同等か、それ以上に師匠の襲撃を受けていた者がいる可能性が高い。勿論、ただの用心かも知れないけど。師匠を跳ね返す結界を張れるんだ誰なのか知りたと思わない？」

悪戯な瞳を見せる。

ブルーグレーの瞳を輝かせて同意を求めるアデラは何も言えない。

それに

上手くその者に出会え、交渉次第では助力を得られるかも知れない。

感謝祭も近い。早いところ何とかしないとならない。

のんびりとした風情のロジオンだが、やはり気が急いでるのだろう。

う。

「……へえ……」

手入れの行き届いていない、雑木林を抜けると急に視界が開けた。そこには、短く刈つた芝に深まる秋の光景に彩りを乗せる草花達と、白い石を切り揃えて、配列させ、積み上げて完成させた背の低い小さな古城。

やはり使われているようで、窓や扉には鎖が掛かっていなかつた。

「御伽噺に出てきそう」

ロジオンは、楽しそうにアデラに同意を求めた。

「ええ、本当に。女性が好む形容ですね」

「いるのは女性かな？ 美人だと良いな、アデラみたいな」

「 口、ロジオン様、そ、そんな私は！ びつ美人と言う風貌ではありません！」

突然口説くような、台詞をあつけらかんと言われアデラは顔を赤らめ必死に否定した。

「この人は、魔法使いの職に就かなかつたら何になつていたのだろう？」

何となく他の職が分かる気がしたアデラだった。

「こんにちは」

事も無げに、扉のカリヨンを鳴らし中の住人が出でくるのを待つ。暫く待つてみたが、何の応答も無い。

「いなみたいですね……」

アデラが何回か鳴らしてみるが、一向に出る気配が無い。

「使用者くらい出でても良いのに……無断で利用していく出で来れないのでしょうか？」

じいっと城を見ていたロジオンは、首をちょこんと傾け目を伏せていたがアデラに戻ろう、と促し元の道を引き返す。

小走りで主人の後を付いて行つたアデラは、近付き

「富庭に戻つたらこの今の城の住人に付いて尋ねてみます」と話した。

「…………うん…………でも、僕が直接聞いたほうが良いかな…………」

「…………？ 何故ですか？」

尋ねるも、そう告げた本人もどうやら釈然としない様子だ。

「…………何かこう…………僕の…………知り合ひみたいな感じが…………」

「そうなんですか？」

「それがよく分からない……」

うへんと唸りながらよそに神経が集中しているせいか、途中、石につまづくロジオンを見てアデラはやっぱり益暗かも、と思つた。

\*

湖の周りは、吸い込まれるように木々や草花達が集まる。当然、木々や草花になる実や、蜜を頬りに鳥や虫達が寄つてくる。

止めどなく湧き出る泉は、冷たく透き通つていて、水の中に生息している水草達が流れに乗つて絶え間なく揺れていた。

飲料に使える水は、透度があり過ぎて微生物が住めない それを主食にする魚は住めない。

その透明度は、長い時間歩いてきた一人の喉の渴きを潤すよう、誘つていて見える。

しかし、ロジオンは首を横に振り、アデラが背負つて来た皮袋から瓶に入ってきた水を飲むようにアデラに告げる。

代わる代わる瓶の中の水を飲む一人。

「……まさか、この池の中に居るのではないですね……？」

そう言つてアデラは池を覗き込む。

しかし、見えるのは水草のみだった。

「居ない事を祈るよ……さすがにこの季節に水浴びは避けたいもの

……

おとぼけて言つが、顔は至極真剣だ。

近い

この湖の周囲に居る……。

懐かしくも恐ろしいこの気配……。

青く光る液体は既に底をついて、池の手前で終わっていた。

此處まで来れば、気配で探れる、と、ロジオンは神経を研ぎ澄ませて周囲を散策する。アーテラはその後ろを黙つて、付いていく。

暫く歩くと、湧き水の出所にたどり着く。

「池の中から湧いている訳じゃないんだ……」

「人心地に眩き、身体を起こすと田の前の岩山に田を向ける。

草木が岩から生え出でていて、一見こんもりした小さな山をつくりていた。

水はこの岩山の底から湧いているようだ、かがんでよく確認してみればやはり幾つもある小さな切れ目から水が流れ出でている。

無言で歩くロジオンの顔が段々と険しくなつていくのにアーテラは不安を感じ始めていた。

何かある  
何か問題が発生している

「ロジオン様……？」

「これほど澄み切つた池なのに……精靈の応答が無い……。念頭すべきだつた……」

ロジオンの無念に満ちた呻きに答えるように水面が揺れた。

「コンラート師がこの池の精靈を襲つたと……？」

「取り代わつた……と言つべきかな」

探るよつてゆつくりと歩み始めたロジオンの後をアーテラは付いていく。

「『水』の精靈王に戦いを挑み、認められた師匠だもの……。知能は落ちても力はそのまま。関』しやすい上に普通の水の属性の精靈じゃあ……敵う訳が無い……」

「……では、コンラート師は！」

「……うん、実質、この池の精靈……。すぐことは無いけど、この池の姿もゆつくりと変わつていいくだろ？……。支配する精靈に見合つた形に……」

命の保護を求めるように池の周辺に寄せ集まる草木が今は暗い物に見えた。

\*

「いががしますか？」

「聞いてみたいな……水の精靈王に……」

さらりと言うロジオンにアデラはあんぐりと口を開けて見つめた。

「そんなに驚くこと？」

と笑いながら相変わらずの平坦な口調で首を傾ける。

「そ、そんな簡単に会つてくれるものなんですか？」

「んー。師匠が存命の時には、ちょくちょく会つてたけど……あの禁令から何度も呼んだんだけど姿を表してくれてないよ……。力不足なんだよね、ようするに……『あんたにや十年早い』なんて暗に言われてるようなものだよ」

ロジオンは力が抜けそうな溜め息をすると肩を落としながら自分の荷物を下ろす。

「でもさ……。そう言うわけにも行かないでしょ……ちょっと僕、切れぎみだし……是が非でも聞かないと……」

ロジオンの唇がきつく閉じられ、じっと池を見つめる。

より一層の焦りの色が見て取れ、アデラはただ黙つて頷くしかなかつた。

当たり前だ。

コンラート師は弟子のロジオン様の身体に執着して乗つ取つうとしていた その赤子並みに落ちた思考で。

だから、他の人間に乗つ取つうなんて思わないだろうと そう考えていたのに……。

精靈を乗つ取るなんて……。

「では……」

ロジオンは徐に両手を軽く前にかがけ詠唱を始めた。

凄まじい『氣』 びりびりと身体に響くのにアデラは驚いて自分で自分の身体を抱き締めた。

ロジオンを見ると彼の足元が明るく光だし円を描き徐々に広がつていいく。

下から柔らかく風が靡いているのだろうか ロジオンの長めの前髪と丈の短いマントが上に向かつてはためいていた。

「ロジオン様……」

反響する場所ではないのに、響く声。

光と風に包まれているような中にいる自分の主がそのものが召喚されてきた者に思える。、別の世界の住人の様に神々しい……。

綺麗だ 。

アデラの率直な感想だ。

アデラ自身魔法は使えないが定期的に行われる実演訓練で王宮に仕えている魔法使いや魔導師達と共に参加する。

魔法使いや魔導師達も二手に別れ攻撃・防御・支援を行うので実際に見たことはあるが、召喚系はこの日で見たのは初めてだった。

ただ、呆然と魅入つてアデラの後ろから肩を叩くものが居て、ギョッと振り向く。

そこには怜俐な眼差しをアデラに向ける背の高い男がいた 。

12 魔導術統率協会からの派遣者（1）（後書き）

今日から9／22まで毎日更新予定です！

「 何者！」

アデラは反射的に飛び距離を取り相手を見つめる。剣の柄を掴み、臨戦態勢に入った。

「 涼い跳躍ですね。まるで猫のようだ、驚きました」

そう男は言うが、口調といい、表情といい、驚いているように見えない。

この男……只者じゃない。

瞬時に悟った。

生前のコンラートに似ている雰囲気はあるが、油断できない何かを持つている。

じりじりと迫る男の間合いを取る為、剣を抜き、横に反れる。

「 ああ、その剣の構え方、中東から東の方ですね。でも、短いか細い剣向きの持ち方ですよ 緊張が極度になると一番馴れた形を人は取りたがりますからね……気持ちは分かりますが」

「もう一度聞く。何者だ？」

男の瞳が細くなる。

僅かに口角が上がった所を見るとアデラに向かって微笑んだらしかった。

男はアデラの問いかが聞こえなかつたよひに、詠唱を続けているロジオンの方に視線を向けた。

そしてロジオンのいつもの口調に似た、ゆつたりとした平坦な口調で

「駄目だな……あれでは水の王は招かれん」

と呟いた。

男は黒いマントを翻し、ロジオンに近付こうと歩き始めた。先程と打つて代わり、マントの留め金の部分がカチヤカチヤと音をたてる。

「止まれ！ これ以上主に近付くな」

アデラは横から抜いた剣を男の喉元に突きつける。かなり背の高い男だ。

アデラもエルズバーグの女性の平均より高めの方だが、その彼女が顎を上げるほどだ。

男と目が合つ。

瞬間、珍しい紅玉色の瞳がアデラの視線を釘付けにし、目が離せなくなってしまった。

「…………？」

意思とは関係なく手から剣が離れ、落葉した枯葉の上へと落ちる。青年は僅かに口角を上げアデラに笑つて見せ、彼女の腰に手を回した。

（動けない！）

自分の意思など無関係に青年の腕の中に包まれ、自ら寄り添つた。

（なつ…………！ 私に何を！）

青年の瞳から目をそらせないことにアデラは恐怖を覚えた。

「魔法を使う相手の目を真っ直ぐに見てはいけませんよ。教えてもらわなかつたのですか？」

自分の頬を撫でる男の手に背筋がぞわりとする。

整った顔立ちの青年のこの男の手のしぐさが、見かけの年齢に見合っていないように思えて余計に恐ろしい。

なのに、身体も視線も男から離れることを拒絶している

「僕の従者をからかうの、止めてくれないかな？」

\*

ロジオンの声に青年は振り向き、自分より背の低いまだ少年の彼を見つめた。

「おや？ 水の王を呼び出すのは止めたのですか？」

「これでは呼び出せないと……貴方が言ったのが聞こえましたから……無駄な魔力は使いません……貴方のことだから、もう事前に水の王から話は聞いてるでしょう？」

「聞きたい？」

男の意地悪な聲音にロジオンはいつもの調子を崩すことなく、彼の腕の中で硬直しているアーデラの目の前で紋様を描くように指を動かす。

「はあっ！」

身体に更迭の糸を巻き付けられていたような感覚が抜け、アーデラは息を吐いた。

そして魔法を扱う者達への注意事項を忘れて、それにまんまと掛かってしまったことに、憤りと怒りしさを同時に味わった。

『敵の魔法使い及び魔導師と田を合わせてはいけない』

魔力の強い者になると身体だけではなく、心まで縛られ、生

きる人形となる

(「ハーフヒーローなんだ）

まるで海の底に沈められたよつた冷たい感覚にアーテラは呆然とした。

ふいに背中を擦る温かい感触に気が付き、それが自分の主の手だと分かり彼を見た。

「大丈夫？ 彼の意識支配は強烈だから……」

長めの前髪から心配そうに自分を見つめるロジオンの瞳は、冴えたブルーグレイの色でもこの背の高い、血を思わせる色の瞳よりも温かだ。

「申し訳ありません。油断しておきました」

「緘口令を引いてる今、同業者が来るとは思わないしね……」

そうだ緘口令

はつとアーテラは背の高い男を見上げる。

王宮内でしかコンラートの死は知られていない。

王宮内にいる魔導師や魔法使いには見かけない顔だ。

なのに、何故王宮の直轄地に魔法を使える者が

？

そんな疑問がアーテラの顔に出でていたのだろう。

ロジオンが坦々と、それでいて、さもやる気なさそうに男を紹介した。

「魔導術統率協会から派遣された魔導師・ドレイク……さん。魔承師の補佐をしている人……」

\*

「」の場所から離れることの無いように結界を張りましょう」

魔導術統率協会派遣されてきた者は

魔導師で魔承師補佐の地位にいるドレイク。

そして本部直属の魔導師で『士』の称号を持つルーカス。

魔法使いのHマの三人であった。

話しぶりからして、この三人はロジオンとは昔からの知り合いで、魔法使いであるHマなどは

「きやー！ ロジオン！ おつきくなつたわー！」

と女性特有の黄色い声を出し、その大きく実った胸をロジオンの顔に押し付け抱き締めていた。

アテラにはムツとする場面であったが、抱き締められたロジオン本人が、迷惑そうに顔をそらしていたので、機嫌を取り戻し従者らしく彼の後ろに控えた。

「ドレイクさん、私の属性を使って結界を張つときますか？」

ルーカスと言う魔導師が池を指しながらドレイクに尋ねる。

「『土』を使って結界を張ると、周囲の生態系に影響が出る可能性がある……。『聖光』を使いましょう。 Hマ」

ドレイクの呼び掛けにエマは「はい」と歯切れ良く返事を返し指示された位置に着く。

「結界印は表音でいきます。 良いですね、ロジオン」

「それが師匠には一番破りにくいでしょうね……」

そうロジオンを同意する。

ドレイクが詠唱を始めた。

先程ロジオンが両手を前に出し平を合わせるような形とは少し違う形で。

右手を下に上を左手に合わせて。

中からロジオンとは比較にならない強い光が光線のように周囲を照らす。

眩しさにアーテラは目を細めた。

「あれが……聖光結界の土台だよ……」

ロジオンは慣れているのか、平然とその様子を眺めていた。

「あれが……」

息を飲む。

「その土台にルーカスが結界紋様を描く」

ドレイクの手の平から放たれた光が、池の中に入り全体が光出す。刹那、ルーカスがドレイクと違う語音で唱えていた詠唱のせいか

なのか、池を輝かせていた光が輪に形作られていく。

輪の中に文字らしき紋様が規則正しく並べられていく。

「下級や普通の冥府の者なら土台だけで十分なんだけど……相手は師匠だからね……何人かの魔法で重ねた方が複雑化するし……解きにくくなる」

ロジオンの説明が終わる丁度、エマの詠唱が止まる。

同時に、何かの意味を表す巨大な文字が水面に浮かんだと思つたら、先に刻まれた紋様に溶けていった。

全てが済んだ後の池は、さざ波さえも起こらず、以前と変わらない見事な透明度を保つたままそこにあつた。

丁度良い区切りが見つからなくて短いです。

凄い……。

王宮にいる魔導師や魔法使い達と比較しようがない。

この結界の魔法だけを見るにも、エマと言つ魔法使いさえ魔導師と名乗つても、おかしくはない腕前ではないか？

事の成り行きをただ呆然と見て居るしかなかつたアデラだが、はたと主であるロジオンのことが気になり、そつと彼の顔を見る。

ロジオンはこの結界を張ることに参加出来なかつた。

『僕の魔法は全て師匠から教わつたもの』  
ロジオンから聞かれていた話を思い起こせば、無理らしからぬこと。

ここで参加してしまえば、ロジオンが施行した魔法から結界が崩れてしまつ可能性が高い。

魔法に縁が無いアデラにも、そのへりには理解できた。

ロジオンは最初に出会つた頃のよつて表情が全く無く、ただずつと池の様子を見続けていた。

「ロジオン」

ドレイクが近付きすれ違ひ様にロジオンの肩を叩く。

「君には失望しましたよ……。一年にも経とつと言つて、一時的に封じ込める出来ない上に、ここに来てよつやく居場所を掴めるだけだなんてね」

すいません ロジオンの口に含んだ謝罪の言葉がアーテラの胸に  
痛く響く。

謝罪の言葉にドレイクは振り返り薄笑いを浮かべ、ロジオンに告げた。

「途中、小さな城があつたでしょ？ 私達は今、そこを寝倉としてエルズバーグ国王陛下からお借りしています。貴方もしばらくはそこで暮らしなさい」

\*

「ロジオン、行くわよ。聞きたい」と沢山あるんでしょう？」  
と、ヒマが微動だにしなかつたロジオンの腕を掴み引っ張っていく。  
「僕等も聞きたいことがあるんだ えつと……君には？」

ルーカスと呼ばれていた男がアーテラの方を振り向く。

「アーテラと申します。ロジオン様の従者を任されております  
恭しく頭を垂らす。

あーと、ルーカスは今さら気付いたように糸のよつに細い目を広げて頷いた。

「そうだった。一国の王子だつたんだよな、ロジオンは。付き人がいて当たり前だった。忘れてたよ」

どう返答して良いやら アーテラは苦笑いをする。

その時

「彼女も化け物化した師匠に狙われている……部外者じや無いから

……」

と、ロジオンが答えた。

「そつか……。側に仕えた故に飛んだとばっちりだな

「そんなことは」

じぱつちりだなんて思つていない。

アデラは首を横に振りルーカスの台詞を撤回してもいなかったが  
「彼女も来て頂きなさい」

と、言うドレイクの有無言わせない言葉にかき消されてしまい、ア  
デラは何も言えず彼等の後に付いていった。

\*

「何年ぶりですかね、ロジオン？　いつかいつて君と顔を合わすのは

……」

「一年ぶりです……エルズバーグに着く前だつたから  
マントを脱いで椅子に座るロジオンは、心持ち緊張しているよう  
にアデラは見えた。

のんびりな口調は相変わらずだが、表情は引き続き無いままで室  
内に入つたせいもあるだろうが、顔色も悪く見える。  
いつもだらしなく座る主が、背筋を伸ばしてしゃんとしている姿  
もアデラは初めて見た。

「男の子は、これから一番変わる時期ね。ロジオンは王妃様に似  
てるから将来は美男子に決定！　楽しみ〜」

「……お前、それは王が酷い顔と言つてるようなもんだぞ……」

お茶を注ぎながらはしゃいでいるエマが漏らした台詞に焦るルー  
カス。

エマとルーカスは何気に、この雰囲気を和ませようと氣を使つて  
いるのだろう。

それほどロジオンは張り詰めた。

扉の側で控えていたアデラは、そんな様子の主の横顔を眉を下げ  
て見守つていた。

従者の自分にも茶を煎れ持つてきてくれたエマに礼を言いながら受けとる。

「 やんなりちゃうなー、ドレイク  
ほそりと言つたエマの言葉が気になつた。

喉を潤し、一息付いたドレイクは背もたれに身体を預け足を組んでロジオンを見つめた。

(……似てきてる、あの方に)

光に当たると、白く輝く穏やかな波の色に似た銀色の髪。長めの前髪に見え隠れしているブルーグレイの瞳の濃淡具合。

鼻の形

口の縛まり方 疑い始めるど、こと細かい顔の要素や仕草まで気になり、似ていない部分を探そぐとする自分がいる。

そんな自分に溜息が出来る。

(それはいざれ考え方)

今は魔承師様のお心のままに そう決めたではないか。

ドレイクは成長した田の前の少年魔法使いに話しかけた。

「 今回、張つた結界はまあ、感謝祭後まで保つでしょう。それから滅する方向でいくつもりです」

ロジオンの瞼が閉じた。

うすうす彼の決断を分かつていたかのよつな、ロジオンの反応であつた。

「 でないと、取り込まれた精靈が自由になれません。分かりま

すね？ ロジオン」

「何時から……師匠はある池の精霊に？」

「三ヶ月ほど前だそうです。水の王が何をしても応えなくなつた頃だそうで正確だと思いますね」

「僕の召喚に応えてくれたことはないから……分からなかつた……」  
「当たり前でしょ？ 君の創る召喚陣は全てコンラートが創り君に教えたもの。精霊は得てして疑り深い。君の魔力で発動されてもコンラートの息がかかつた召喚魔法じゃ、疑心暗鬼して現れるわけがない」

ロジオンの瞳がうつすらと開き、じつと冷めた紅茶をとうえいた。

「IJの事が意味するのは……？ ロジオン」

「相手に知恵が付いてきている……」

「やつ、IJの世のじれにも属さない物に生まれ変わつたコンラートは、本当の意味で赤子同然だつた。本能のままに君の身体だけを欲した。すぐに滅するか封するか出来たら話は早かつた。でも、君は一人でやると承諾をしてしまいました。その時点で間違いを犯してしまつたんですよ」

ロジオンの隣に座つていたルーカスが、

「ロジオン、我々は君一人では無理だと最初から分かっていた。待つていたんだ、君から手を貸して欲しいと言つてくるまで」

そう初めて優しく口を挟む。

「すみません……緘口令が頭に引っ掛かつていて……王宮内で事を済ませないととずつとそう考えていました……」

「そうだとしても、王宮に仕える魔導師や魔法使いから助力を貰えたはずですよ？ 王宮筆頭魔導師のハインに話は通してありますからね」

何故、助けを求めなかつた？　ドレイクの厳しい口調の詰問が続く。

自分一人でやれると云つロジオンの自惚れだと思っている呆れと怒りの混じつた声音であるのは、誰の耳にも明らかであつた。

「却下されました……」

ロジオンの以外な言葉にドレイク・ルーカス・エマ三人とも顔を見合わせる。

その視線は一斉にアデラに向かられる。

驚いたアデラではあつたが

「そう伺つております」

と努めて平静に答えた。

ドレイクは再びロジオンに向き直す。

「それはいつの話です？」

「半年程前です……『私達が動くと陛下が知ることになります。それはお嫌でしょう？』と……それはその通りだつたから……」

「……」

暫し、沈黙が続いた。

その間、魔導術統率協会の派遣者達は眉を潜め見つめ合い  
ロジオンは無表情のままに冷めた紅茶を見つめ  
アデラはそんなロジオンの横顔を見つめていた

『何にせよ、コンラートが君をまだ執拗に追いかけ回してるのは事実だ。おびき寄せる『餌』として君にはここにいてもらいますよ、ロジオン』

ドレイクの言い放つた言葉。

その後、ドレイクを含むルーカス、エマの魔導術統率協会からの派遣者三人は固まつてひそひそ話。

\*

（感じ悪……）

アデラは仕官服の上着を脱ぎ、備え付けの前掛けを着、厨房のテーブルで発酵した生地を切り分けていた。

暫くここに滞在することが否応なしに決定したが、最小人數で行動することが前提なので自分のことは自分でやる。

料理はアデラ自ら申し出た。

この小城の中で一番役に立っていないと言つるのは自他共に認めていたからだ。

野戦演習で早く簡単に出来る料理だつて教わつていて作れる。切り分けした生地を手のひらを使い弧を描きながら伸ばしていく。一人二～三枚で良いだろう。

（だけど）

次々に作りながらアデラは考えに耽る。

あのドレイクと言つ魔導師 何故、ロジオン様にあんな言い方をするのだろう？

どうしても悪意があるとしか思えない。

確かにドレイクの言い方だと、ロジオン様の固くなな態度が招いた結果だと取れる

だが、その後、王宮に仕えている魔導師や魔法使い達に助力を願い出て断られているのだから。

そつと溜め息を付く。

部屋に閉じ籠つてしまつたロジオンが気に掛かつた。  
与えられた部屋に付き添い、力無く長椅子に座り込むロジオンはアデラと決して顔を合わすことをしなかつた。

『暫く一人にしておいて……』

絞り出したような声で一言やつ告げると、俯いたままブーツを脱が出した。

湯を持つべきでしょうか？

元気をお出しけださい

助力を得ることが出来てよひざいました。

声を掛ける言葉は頭に沢山浮かぶが、どれもこれも今の彼には適当ではないように思えて、アデラは主であるロジオンに頭を垂らし、その場を去つた。

扉を閉める時、肘掛けに両腕を掛け屈した内腕に顔を埋める主の姿が見えた……。

(放つといて良かつたのだらうか?)

だが、余計な慰めの言葉や、無理に元気づけようとするのは逆効果ではないかと思った。

(でも、まだ成人前の少年王子だし……)

大人の男相手のような気遣いより、抱き締めてあげた方が良かつたのか。

「何作つてゐるの~?」

ひょいとHマに後ろから覗かれてアーテラは縮み上がつた。  
(また気付かなかつた……)

自分の周囲の気配を感じとる能力が落ちていることに田の当たりにし、再度へこむ。

それに気にすることなくHマは、アーテラが伸ばした生地をまじまじと見つめている。

「これ、もしかしてチャパティ?」

「あつ、はい」

途端工マの目が輝いた。

「私チャパティ大好きなの! 作れるんだ~す~」  
「以外と簡単なんですよ。フライパンで焼く分パンより早く作れる

し

「へえ~知らなかつたあ……。さすが女の子ね~」

( ん? )

今、会話として不適合な言い回しがあった気がし、アーテラはジッヒマを見つめた。

卵形の小さな顔、薔薇色の頬。

眉毛も睫毛も綺麗に揃い、小さな鼻に見あつた小さなふつくりとしたサクランボのような唇。

たっぷりと空気を含み、フワフワ、クルクルの赤毛は艶々と手入れ良く背中に流れている。

腰にかけては盛り上がるスカートの形で上向きで形良さそうな尻のラインが浮き彫りにされ、惚れ惚れする。

それに 何と言つても、華奢な腰に見合はないそのボリュームある胸。

同性のアテラさえ思わず魅入ってしまう大きさだが、垂れずに保つているところが素晴らしい。

声だつて無理に出しているような黄色い声じやない。

多少、意識して可愛い振りしているのは感じているが……。

「ねえ、私にも教えて。お菓子作りは得意なんだけど、他は苦手なのよ」

「はい。じゃあ多めに作りましょう」

(気のせいね)

アテラは快く承諾して、チャバティの種から作り始める。

「全粒粉に適量の塩を入れ、水を少しずつ足しながら捏ねます。それだけでも良いんですが人によつてはオイルも入れるようです」

「一人捏ねていきながら、橢円形にまとめていく。

「これで二十分程時間をおいて発酵させるんです」

「これだけ?」

「はい。発酵したら適量に切り分け、伸ばして熱したフライパンで両面を焼くだけです」

アテラは説明しながら先に伸ばした生地をフライパンで焼いて見

せた。

瞬く間に芳ばしい香りが厨房に広がる。

「こんなに簡単なんだ～！ クッキーなんてもつと手間が掛かるの」「

やらせて、とエマは楽しそうにチャパティを焼き出した。  
菓子作りの経験があるだけに一々三枚焼いたらコシを掴んだらしく、次々と焼いていく。

アデラは横でハムを切り始めた。

「ねえ、アデラ……」「  
はい？」「  
貴女、ぶっちゃけロジオンの女？」「  
うわっ！…」「

唐突すぎて、ハムを辞書並みの厚切りにしてしまった。

「つやつ！ 私は本当にただの従者！ 従者なんですね～ろ、ロロロロジオン様とはそれ以上でもそれ以下でも無いんです！ 誤解が生じているんですが、それは事情があつて」「

「包丁！ ほうちょー！」

手に持つ包丁をエマの前で振り回すアデラにギョシとしたエマは、フライパンを盾にして彼女に落ち着くように促した。

沸騰して顔が真っ赤なアデラを見てエマは大きな声を上げて笑い出す。

「やだ、『ごめん！ そーんなに恥ずかしがるとは思わなかつたわ～。アデラつて純情なのねえ』」「……」

湯が沸いたヤカンの顔のまま無言で再びハムを切り出すアデラの背中をエマはポンポンと叩いた。

\*

夕食に集まつたのはアーテラ、ルーカス、エマの三人のみであつた。「ドレイクは魔承師様に経過報告するから室内で頂くそうだ」と、ルーカス。

ロジオンに至つては、門を掛けただけではなく魔法を掛け開けられないようにしてあつたとエマがブータレで戻つてきた。

「後で持つていきます」

アーテラがエマに告げて、食事となつた。

「ロジオンつて、あの師匠を見てきてるから小さい頃からおませちやんですか。出来てるかと思ったのよ。ごめんね~」

「コンラート師は、そんなにたらし いえ、ご婦人にご興味が?」

「あ~、たらしで良い、たらしで。魔法を扱う人間つてさ、人付き合い苦手だし研究欲に、引きこもり、その割りには向上心有りでたま~に出世欲に向いちゃうのがお決まりなんだけど、その中じゃあコンラート師は変わつてたわ。色欲バリバリの魔導師つて、そういうなかつたから」

「……はあ」

「いつか子供連れてくるんじゃない? なんて噂してたら、まだ一歳程の赤ん坊抱いて本部に来たから、当時大騒ぎだつたわよ~」

「……それがロジオン様」

頷くエマ。

「大騒ぎしていたのはお前だけだつたぞ」

「そう? 魔承師様もビックリしてたわよ?」

ルーカスの言葉にエマはけんもほろろに返す。

「では、ロジオン様はもしかしたら暫く魔導術統率協会でお過ごしに?」

「そう。まだ、おしめも取れていながら一人じや育てきれないって」

アテラのこめかみは大いに痛んだ。

「あの……その辺りは陛下と王妃様に多少話は伺つておりますが、コンラート師が連れてきた赤子については深く追求しなかつたわけでしょうか？」

「世俗に疎いのが多いからなあ……。『赤ん坊！ 珍しい！』なんて珍獸見るみたいに一時期寄つて集つてたけど」

「あんたも世俗に疎い一人だよ！ 勿論、追求した人もいたわよ。特に魔承師とドレイク。コンラート師とちつとも似てない赤子

だし、そこまで常識を外れているとは思わないけど拐つてきた子だつたら大変だつて」

「……常識を凌駕していたんだよな……」

ルーカスが大きく溜め息を付く。

『自分の子なのか』『誰の子なのか』『何処の国の子なのか』  
問い合わせたけどコンラート師は

『自分の子なのか』『地上の子はみんなの子です』  
『誰の子なのか』『私の子でもあり地上に住む全ての者の子である』

『何処の国の子なのか』『あつち』

半年ほど、特にドレイクと押し問答があつたが  
エルズバーグから問い合わせの書簡が届き、ロジオンがその国の王子だと分かつた。

血相抱える魔承師とドレイク。

問い合わせ、事の真相を確認しようとしたら。

「本部からドロン つてわけ」

話を聞き終わったアデラは、脱力しきつてテーブルに肘をついて顔を臥した。

「『一応は、預ける』と許可はしたが、黙つて連れて国を出ると言つ行為は如何なものか?』『魔法に関して関与はしないのは国と協会の古からの条約だが、国は才能があるからと人扱いをして良いなどと言うことは認めていない』とか かなり責められてたもんな……魔承師様もお可哀想だつた……」

当時の出来事を思い出し嘆み締めながら、しみじみとルーカスは語る。

「それから魔承師は私達やドレイクにコンラート追尾の命を出してね。兎に角ロジオンをエルズバーグに返すよう説得させたわけ。」

「だけどさ、言つこと聞くわけがないのよ、あのたらし」

「イタチゴッコだもんな……見付かる前にドロン。見付かつたらのらつくりで拒否。無理矢理連れて帰そうなんてしたら、ロジオンを使うし……」

「……えつ?」

アデラは顔を上げ、二人を見つめた。

ルーカスとエマの視線が絡む。

ルーカスはその細い瞳と同じように細い眉を下げ、エマは「言つといた方が良いんじゃないかな。私達だって、腑に落ちない所があるじゃない? ロジオンがどこまで知つてるか分からぬけど。それもあってドレイクはロジオンに対してあんな冷たいのよ」

と、淡々と言つた。

ううん、と悩むルーカスにアデラは確信についた台詞を告げた。

「……もしかしたら逃げるのにロジオン様を利用したのではないのですか？」

「ロジオン様、お食事をお持ちしました  
扉を叩きながら扉の向こう側にいる主に呼び掛けるが、何の返答  
もない。

扉に手を掛けてみるが当然開かない。

ふう……アテラは軽い溜め息をつく。

「起きていらっしゃいますか？ お話があるのです」  
少しばかりの間が空きロジオンから返答があった。

「……明日にしてくれない？」

「今夜、お話ししなければならなうことなんです」

「そこで話してくれ……」

部屋に入れる気はないようだ。

最初の頃に戻ったようだ まあ、それよりはましかな。アテラ  
は思つ。

「私、明日からお休みを頂きたいのです」

ガタン

激しい音が室内で響いたかと思ひきや

「アテラ！」

「 ぶつ！」

バネが付いているのかと云ひ程の勢いで扉が開き、手に持つてい  
るお盆の上の食事が「ぼれる」と恐れ、先に脇に避難させたアテ  
ラだったが

残念なことに彼女の鼻が被害にあった。

激しくぶつかった鼻を押さえ、涙田のアーテラにロジオンは詰め寄る。

「どういひと？ 誠心誠意仕えるつて言つたよね？ 今回の事で僕の側にいるのが嫌になったの？」

「ふあい……いひました」

鼻痛い この衝撃で鼻血が出なかつたのは奇跡だわ、とアーテラは思いながら返事をする。

「今日、言つてもう覆すんだ。そつなら、簡単に忠誠とかしないでくれない？」

何か怒つてゐる？

やう思つぼうロジオンの瞳は、いつもの十倍は光りつゝ上がつていふように見える。

アーテラは鼻を押さえながら首をかしげた。

「しかし、お休みが頂けないとロジオン様に頼まれました亡國の呪術とか祈りとか、話を聞きにいけないので。皆、引退して城から出てるものですから」

今度はロジオンが首を傾げる番だつた。

「……えつ？ 暫くお休みつて辞めるつて意味じゃないの……？」

「いこえ、言葉のまんまです」

答えるアーテラ。

「僕……『暫くお暇』とか『暫くお休み』とかつて……半永久的に持続させたい無期限のお休みで、よつは辞めることつて教わつた

……けど……？」

「高い階級を頂いた士官ではなく一般兵の仕官なので、そんな奥ゆかしい作法は無縁ですよ」

「……………」

がくりと力が抜けたのか、ロジオンは壁に背を当て前髪を後ろに流す。

「王宮で細かいしきたりがあるて……面倒アラニたてそんた  
言ひ回しするから……」

ほそほそと放つた言い話は、  
分 そんな混じりがあつた。

自分を笑顔で見つめる三三の花嫁たち。指揮が三三の前を通りすロジオンだつた。

\*

「これ作ったの、アテラ？」

ハムやチーズ、野菜を巻いたチヤバティに食らいつくロジオンに「はい」と頷き茶を渡すアデラは、食べ物に口を入れるロジオンにひと安心していた。

「アガシが凄く美味しい……」

老林の考究

二〇

「ソース……勿体無い。アデラが作ってくれた物だもの」と、いつも二二二二二されたらきっと誰も何も言えないアデラは

さすがに皿に溢れたソースを舐めようとしたのは諫めたが。

茶を飲みながらロジオンはアテラに告げた。

「良いよ、行かなくて」

と。

「何故ですか？　コンラート師が知らない新しい魔法が作れるかも  
しれないのですよ？」

気安い相手しかいないせいか、素足を投げじろじろと長椅子に寛ぐ  
主にアテラはさも驚いた振りをして尋ねた。

わざとらしい態度に田を細め彼女を睨む。

派遣者が、それも魔導術統率協会の中で腕よりの者達がやつてきて  
て自分は茅の外となつてしまつたこと。  
自分の魔法が役に立たないことに、投げやりになつていてること  
を見抜いている。

「……僕は『餌』ですから……どうせ」

ドレイクの台詞を思い出したのか、また表情を失い宙を見つめる。

「それぐらいしか役に立たない……」

急にアテラの顔が目の前に近付きロジオンは、そのブルーグレー  
の瞳を思いつきり開いた。

「しつかりして下さい！　コンラート師を自分の手で安らかに逝か  
せて上げると決めたのはロジオン様ですよ！　それは今まで魔法を  
教えて貰つて、支えてくれたご恩でもあるのでしょう？　それを魔  
導術統率協会からきた派遣者達にとられるのを、みすみす指を加え  
て見ているつもりですか！」

「……だけど……僕の魔法では……」

「だから！　私もお手伝いします。私など、この中では一番役立た  
ずなんですよ？　それでも、何としても……ロジオン様のコンラ  
ート師に対する思いを叶えて差し上げたいのです」

「出来ないよ……僕は、期待されるほどの使い手じゃあ無い……」

「出来ることを出来ないことは無いですか」

「……」

以前アーテラに会ったことを言ひ返され、ロジオンはまことに視線をそらした。

「それ……私は信じております。ロジオン様は必ずやり遂げると」

長い沈黙

長い見つめ合い

お互いにまっすぐ

お互いの瞳を見つめた

「アーテラ……」

「はい……」

「今……唇同士が触れそうに近いって知ってる?」

一気に顔を赤くし、凄い勢いで離れたアーテラは  
「もつもつもつ申し訳ありません!」

と、腰で見事な直角を作り、主に頭を下げた。

「良じけど……。魔法を使う者の目をしげしげと見ぢやいけない  
よ……視線は口元とか首にずりして、相手がどれほど強い魔力を持  
つてゐるか分からぬんだから」

「すいません」

「邪な魔法の使い手だったら……好きに悪戯されちやうよ~」

「うう……」

返す言葉もない。

「……まつ、それだけ信用されてるってことかな……?」

そうして短い息を吐くと、上半身を起こし長椅子に座り直す。その表情は先程とは打って変わつて明るかった。

「ドレイクの魔力にケチョンケチョンにされてへこんだみたいだ……あの一言も効いたしね……」

「ロジオン様……」

「でも、アテラの言葉の方がよっぽど力がある。……効いたよ。そもそも……魔法は自分の実力を試す為のものじゃない。……万人の為のだ。僕は師匠を自分の魔法で救いたかったんだよね」

「はい！」

ようやく一人、顔を合わせ微笑み合つた。

「頼める? アテラのお祖母様の……亡国。急かして悪いんだけど、今から行つて欲しい。出来るだけ早く資料集めて戻つてきて貰いたい」

そう言つてからあつ、と氣付いてロジオンはアテラに尋ねた。  
「夜……一人で戻れるかい? 僕が送つていければ良いんだけど……ドレイクが許さないと思うから……過去に色々やつたからね」「どんな悪戯をしたのです?」

ロジオンは肩を竦めた。

「悪戯で済む問題じゃなかつたみたいで……それは後で話すよ

大体の内容は、エマヒルーカスが教えてくれたので分かっている。が。

『ロジオンがコソラート師からどう糺余曲折して話を受け取つていいか、話を聞いていないんだ』

これはこれで別な問題で、長い話し合いになりそつだし、後でゆっくり話を聞こう アテラはそう思った。

（陛下や王妃様も交えて話をねまなこだらう……）

「分かりました。では、ドレイク殿に挨拶をして早速参ります」

「あつ……待つた

思い立つたのか、部屋から出ようと扉に手をかけたアーテラをロジオンは引き留めた。

「ついでに持ってきて欲しい物がある

「何でしうつ？」

「師匠と僕の魔法日記……」

16 魔導術統率協会からの派遣者（5）（後書き）

次の更新は一日空けて9/24です。

この人苦手だ……。

目の前で手持ちぶたさなのかペラペラと本を捲る男 ドレイクの返事を待つ。

自分が、化け物と化したコンラーの標的となつていて立場。それを考えれば、いくら結界を作り動きを制限したからと言つても、目の届くところにいてくれた方が守りが容易いのは理解できる。『感謝祭に家族と過ごせそうもないでの、今のうちに帰省したい』と彼に告げた。

（実家に戻るのは嘘じやないし）

自分の要望を受け入れるべきか考え込んでいた。意味もなく本を捲つてはパラパラと流す。

その様子は受け入れられない要望で不機嫌に見れるが、眉一つ動かさない無表情さではアーテラには見当がつかなかつた。

何気に本を捲る彼の指を見つめる。

長く形良い指先だ。

だが首の太さや繋がる肩に上着から見える鎖骨のライン見るにひ弱な体格ではないと見て取れた。黒で統一された服に沿つように黒髪が肩に流れている。顔の造形も非の打ち所がない。

何より

その珍しき赤い瞳

つつ向き、黒い睫毛に見え隠れするその瞳は、闇に生る赤い果樹のようだ。

こんな男が王宮に仕えたら、さぞかし女達が色めき立つだらう。

(どうにも自分は苦手だが)

平坦な口調にあまり変化の無い冷たい表情。主である以前のロジオンのそれとよく似かよつてゐるが……。意識支配された時に頬に触れた手。生理的に受け付け無かつた。何か奇妙な違和感があつた。

(状況が普通じゃなかつたからそう感じたのか?)

ロジオン様の方が絶対可愛い!

本人が前にいたら茹で蛸に変わつてしまつ思いだ。

パタン

本を閉じる音にアデラはドレイクの顔に視線を向けた 視線は瞳をずらして。

「良いでしよう。ただし、明日の日が隠れるまでにこちうに戻るよううに」

「ありがとうございます」

ドレイクに礼を述べ頭を下げるアデラだが、内心は困つた。

頼まれた魔法日記は帰りに取りに行くとして、ここからまず王宮に向かうにしても徒步だと結構時間がかかる。

取り合えず夜中に王宮の自分の寄宿舎に戻り、朝早く城を出るつもりでいた。

王宮から自分の実家までもなかなかの距離で徒歩だと一刻ほどかかる。

それから伝を辿り祖母の縁の者を訪ねて……。

一 田じや 無理！

自然、冷や汗が出る。

取り合えず、まだ親交のある人達を時間ギリギリまで訪ねて……アデラが一人脳内で日程を練つている時、ドレイクから声をかけられた。

見ると、あの黒いマントを羽織り金具を止めている。

「お送りしますよ」

以外な申し出にアデラは面食らつた。

「 いえ！ そこまでして貰わなくても私は平氣ですので。どうぞ構わずに」

「 いくら王家直轄領域だとしても夜は危険です。狼や熊が出るやも知れません。特に熊は冬眠前に満腹になると昼夜構わずに餌を求めていますから」

「回避の術すべは持ち合わせておりますから。ご心配には及びません」

アデラはエルズバーグでは既に成人である。

仕官として働き、社会人として働いても結構長い。

当然、社会に関わり対人関係を円滑に進めるべく『大人のかかわり合い』も身に付いている。

ここは紳士的な行動のドレイクの申し出を受けるべきなのだが、彼に苦手意識を持つてしまつたアデラは（気まずいから！ 絶対気まずい雰囲気が流れる！）と言つ本音がつい漏出してしまつ。

「早く実家に戻りたいのでしょう? だから送りますよ、と申しているんですね」

「……送ると言つのは実家に……ですか?」  
訝しげに尋ねるアーテラにドレイクは

「そうです」

と、涼しげに答えた。

\*

『無理ですよ! 王家直轄領は夜間と遠園地には結界を張るんです。もし破つたら王家直属の魔導師や魔法使い達が兵を率いてやってきます』

ドレイクはそう諭すアーテラの肩を抱いて

『結界にも人によつて癖があります。抜け道は分かりますよ、ご心配無く』

彼は忽々とそう答えると、アーテラの左手を握る。

『二人で 跳ぶ には貴女の気も必要です。 負 の気の左手をお借りしますよ』

(跳ぶ つて、空間移動のことなのか!)

足が地につく度に移り変わる景色が目まぐるしく、軽い錯乱が起つる。

足が付く地には魔法陣が光り、中に描かれた矢印が時計のように向かう方角を瞬時に示す。

空間移動 又は方陣移動と言われる高度な魔法だ。

高い魔力が無いと施行できないこの移動方法。

事前に自分が陣を作り、こぞとこう時にそこへ移動できるようにしておく。

自分が移動する為にあらかじめそこへ出向き、陣を作らなくてはならないデメリットがある。

だが、高名な魔導師あたりになると他人が作った陣に介入できる力を持つ者がいる

(さすがに魔承師の補佐を務めるだけある と言つわけか)

この方陣移動も慣れてくると面白い。

足が地に着いた瞬間に方向を示した方陣が現れ、離れたと同時に闇の草地と同化する。

アデラはこの苦手な魔導師に貴婦人並みの扱いで抱き寄せられ、身体が密着している状態でいることも忘れ、次々に出てくる方陣の振り子のような矢印に魅入つていた。

「面白いですか？」

「はい！ 地に着いた瞬間に矢印が行く方向に向いて 」

顔を上げてアデラは、すぐ側にドレイクの顔があることに驚いて彼の瞳を見つめてしまう。

横に主であるロジオンがいるかと錯覚してしまい、つい、いつものように応対してしまった。

しかも、禁為の魔法を扱う者の瞳を見つめて。

『好きに悪戯されちゃうよ？』

ロジオンの言葉を思いだし、咄嗟にドレイクから顔を逸らし、彼の身体を押し出そうとしたが、身体を戾された。

屈強な兵士並みの力だ。

華奢な体躯では無いが、鍛えているように見えない彼のどこにそんな力があるのか。

「魔法の施行中に戯れは止めてください。今、私から離れると何処に飛ばされるか分かりませんよ?」

「す、すまない……」

良かつた 自分の意思で喋れる。

アデラはひやりとした。

「ご心配無く。やたらと意識支配などしませんよ。あの時は大変失礼をしました」

淡々としているが謝っているらしい。

「貴女が大変珍しい姿を持つので、近くで見たくなつたのですよ」

「珍しい? 私が?」

ドレイクの歩む足が止まつた。

彼がアデラから離れる。

回りを見渡すとそこは実家の歩きなれた路地であった。

街灯に群れる虫。

細い路地に迫るように建てられた住宅。

そこから空を仰げば、隣接された家同士から張られた洗濯物を干す為の紐……。

二・三歩足を出すぐ、地に着く度にもう光る方陣は現れることはなかつた。

「魔法と言つるのは便利なものだな……」

感嘆の息を漏らす。

「魔法と言うものは万人の為のものですから。この移動も、そもそもが移動が辛い老人の為や遠方で暮らす離れた家族に会う為、人で

は運べない物資を送るためのものでしてね

成程な とアーテラ。

ドレイクを見てアーテラは先程の彼の台詞を思いだし、改めて聞き直した。

「私の姿が珍しいとおっしゃつたが……この褐色の肌のことですか？」

「褐色の肌に金の髪が大変珍しい とおっしゃつたのです。染めてはいらっしゃらない

でしょ？」

「白毛ですが……。そんなに珍しいものですか？ エルズバーグは多民族国家ですから、私のような毛等は少なからずいるものかと……」

「人の成りといふものは、体内に組み込まれている法則の情報で決まるのです」

「法則……薬師がよく言つ化け学といふものですか？」

「似てますが違います。私どもは遺伝子と呼んでいます」

### 遺伝子

以前に私の走りで驚いて主が咳いていた。

「そう言えど、ロジオン様が何やら一人心地におっしゃつていたのを聞いたことがあります」

「ロジオン……あの子も貴女と同じ、他の者達と成りが違いますから 彼の場合は第一王妃の一族が持つ『白変種』を受け継いでいる

耳にしたことがあります。第一王妃様の『実家は一族でそのようなお姿が多い』と聞いておりますが、ご凋落され種族存続のために、現陛下に申し出て嫁いできたと伺っております。確か白種族、青銀

種族とも言われていると……。しかし、ロジオン様もロジオン様のご兄弟も母君である王妃様も皆、他国ではそんなに珍しい姿なのですか?」

「国から出たことがない貴女には分からぬことでしょうが、そういうません。貴女も含めて。ロジオンは髪や瞳に青みがかかり更に輪をかけて珍しい。しかも」

ドレイクの手がアテラの金糸のよつた髪をやんわりと一掴みする。

「皆、人を虜にする美しい姿だ」

「お褒めを頂戴して光榮だが、私はエルズバークでは残念ながら美女定義には外れている」

ドレイクの手をやんわりと退けアテラは礼を述べた。

「つれないな」

ドレイクは肩を竦めた。

「では、明日の夕刻に」

立ち去りつとするアテラにドレイクは

「稀な何かを持つ者は、稀な宿命を背負う　　と云われがります」

と、徐に話す。

「えつ?」

怪訝に眉を寄せるアテラにドレイクは、僅かに口角を上げた。

「貴女もロジオンも、そして私も　稀な姿を持つ故に、その宿命を引き寄せるかも知れません」

「……」

「　あくまでも云われですけどね」

そう告げ、ドレイクの姿は闇に溶けていった。

17 魔導術統率協会からの派遣者（6）（後書き）

次回は9／27を予定します。

朝、喉の乾きに田代めたロジオンは田を擦りながら、のそのそと厨房に向かつていた。

厨房に近付くほどに臭つ、焦げ臭さに一抹の不安を覚える。

「いや～ん、失敗しちゃったよ～ん！」

「」の無駄に語尾を伸ばして喋る黄色い姫……。

「Hマ……何焦がしたの……？」

厨房に入つてみれば、やはりそこには無駄にフリルの付いたエプロンを身に纏うエマの姿があり、黒い物体がこびりついてるフライパンを上手に振り回し落とそうとしていた。

「あ～、おはよ～。ロジオン、よく眠れた？」

「おはよ～。で、それ、何？」

「田玉焼き～。焦がしちゃった」

「」ぱ～い！ と舌を出して朝から絶好調にキャピキャピしてい るエマを朝から見ると、無駄に疲れる ロジオンは心の中でやう咳くと「貸して」とフライパンを受けとると、フライパン返しで焦げを削ぎ落とす。

「堅焼きにしたかったの～。わたし、半熟苦手だしね」

上田使いで首を傾げながらロジオンを見つめ、言い訳をするエマにロジオンは背筋の寒い思いをした。

（慣れないなあ……）

以前のエマをよく知っているだけあって、どうも態度が硬化して

しまう。

それでもなるべく平静を保とつとロジオンは努力していた。

「フライパンをよく熱して……油を少し熱して引く。最初の片面を長めに焼いて……しつかりしてたら返しを使って卵をひっくり返して……」

「ほりひ」と、Hマに見本を見せる。

「へえ、ロジオン相変わらず器用ね。王子として生活してもご飯は自作なの?」

「……何言ってんの。生活全般の家事やらなすぎるんだよ……師匠もエマも含めて他の魔法使い達は」

溜め息を付きながら、焼けた玉玉焼きを皿に乗せる。

「だつて面倒。食べたら皿洗いもめんどく」

「腰振る暇あつたらハムでも切つてて……そのくらい出来るよね?」  
色仕掛けなのかただの癖なのか、無駄に腰を振り続けるエマに淡々と告げると、ロジオンは次々に卵をフライパンに割り入れた。

\*

アデラの実家、ビアス家は縦長に並ぶ住宅街の中にある。中流家庭そのものの家庭。

だが、今は亡き祖母には勿体無いくらい裕福な生活に思えたらしいいつも太陽に向かつて感謝の意を示していた。

いつでも祈りが捧げられるよう屋上を作り、一日の大半をそこで過ごしていた。

祖母が屋上に持ち込み、植えた色取り取りの草花をアデラは祖母の顔と重ねて見ていた。

国の恩義に応えるため、次世代のアサシンを育てようと躍起になつていた祖母。

今は祖母のかつての仲間達が育てたアサシン達が影で暗躍している……。

「お姉ちゃん、ここにいたのね。何してるの？」

屋上に続く階段を登ってきたのは、妹のラーレだった。

「あら、ラーレもお休みだつたの？」

「感謝祭近いでしょ？ 休暇と言う名の巡回よ」

職業が自由に選べるエルズバーグでも世襲制は存在する。

アサシンの家系はアサシン アデラがアサシンを降りた現在は妹・ラーレが受け継いでいた。

肩まである素直な黒髪を揺らし、ラーレはアデラが腕に下げている籠の中を覗く。

「ハーブ摘んでるんだ」

「お祖母様からのハーブは香りが高くて評判が良いからね。手土産に持つていくの」

「母さんから聞いた。第五王子に頼まれてるんだってね」

手伝うよ と、ラーレもハーブを摘んでは籠に入れる。

「でも、よく懷いたね。悪臭王子」

「懷いたって……犬や猫みたいな言い方を……」

「だつて、今までずううううと付き人拒否してたじゃない。もう噂だよ？ どう手なずけたのかつて」

「ああ……」

アデラの肩は溜め息で揺れる。

ラーレは普段はアサシンとしての顔を隠し、王女達のその他大勢の侍女をしている。

どうロジオン王子を懷柔したのか あの噂が王宮中飛び交っているのだろう。

「恋愛音痴のお姉ちゃんに限って、誘惑して懐柔させたなんて私は信じてないけど」

卷之三

そのまま信じてい

無理無理

「……………」

卷之三十一

「い／＼」

いくらお姉ちゃんでも、三子の身分の人はその辺の力士さんたち  
手するみたいに拳を振らないよねえ」

卷之三

その微妙な変化に気付いたラーレは固まり、姉を見る。

「ああか……アヤシ(?)」

嘘が下手な姉。  
妹よ、さすがだ

その目は眞実を物語る。

すいません、やりました

「しかし、陛下から『多少乱暴な手を使って良い』と許可を頂いていたのだし……」

しかも『外伝』だよ?」

（やっぱ、この人に女らしい誘惑は無理だわ……）

「ラーレは、相変わらず不器用な姉に安堵とこれから『彼氏いない曆更新』するのではないかと言つ一抹の心配を抱き、溜息をつく。「……噂の件と、『』のことはお父さんとお母さんには黙つとくよ……」

「うん……そうしてくれたら嬉しい……」

「姉ちゃんたちーー、朝飯だつてやーー。」

ぎょっとして一人後ろを振り向いた。

大きな声を出し、階段から「ヨキリ」と顔を見せた十代そこそこの少年はトニー・ビアス家の長男でありアーテラとラーレの弟である。

「もう少しハーブ摘んじゃうから。先に食べてて」

「早く来てよ。父さん、久しぶりに家族揃って飯が食えるってスゲエ楽しみにしてんだからさ」

「分かつた分かつた」

分かつてんのかなー、とぶつぶつ言ひながら階段を下りていくトニーを一人眺め、完全に気配が無くなつたのが分かるとアーテラは「トニー」にも内緒だからね。あの子、お喋りだから……」

と。

ラーレは頷きながら

「うん。口止め料は『シエルダム』の最新バツクで手を打つから」と、アーテラの今月の給金が全部無くなる条件を出した。

同じ職場で働くものじゃない アーテラは半泣きで承諾する」となつた。

\*

朝食はドレイクも共に席に着いた。

勿論ロジオンも。

一人向き合つ形で席に付く。

「これはエマが作ったのですか？」

切り分けした田玉焼きをフォークに刺しながら、ドレイクは誰にとなく尋ねる。

「ロジオンよ～」

エマの答えに口に食べ物を運ぶドレイクの手が止まる。

無言でフォークを置くドレイクにロジオンは

「何も入れて無いよ。田玉焼きじゃあ入れようが無いでしょ？」

と、微笑む。

「昔、一服盛られたことを思い出しましたよ。まだ十にもならなかつた君が

『初めて一人で作ったオムレツなの』

と、まあ、清純に瞳を輝かせて食べててくれと……。一口だけで即効で寝るつて、一体どれだけの量を入れたんでしょうね？ 睡眠薬を、君は

「見かけと体積が相当違つと聞いていたもんだから……超大型動物用睡眠薬を……どの位だったかな？ でも下剤や痺れ薬よりましだつたでしょ……？」

「常人だったら、そのまま目が覚めなかつたんじゃないですかね」

「ほら……それはドレイクだから、そこは安心」

「……」

ドレイクの口角が上がる。

本人的には微笑んでるらしかつたが、エマとルーカス的には怖か

つた。

(田、笑つてないよ!)

猛禽類のような厳しい視線の標的なに構わずロジオンは、普通に食事を挿き込む。

ドレイクは氣にもしないロジオンの態度に慣れてるのか、黙つたまま作り置きのチャパティを食べ始めた。

「ね～、ドレイク。今日はビーフあるの～？」

食休みの茶を飲みながらヒマはドレイクに尋ねる。  
取り合はず感謝祭まで池の中に入り込めておける結界は張つた。  
次は完全に『コンラート』を封するか滅するか。

「コンラートは滅する方向と決定している。その一番有効な方法を考えねばならないな」

代わりにルーカスが答えた。

「取り込んだ水の精を傷付けずに『コンラート』だけを滅しなければなりません。それ相応の準備が必要ですね」

「やっぱ『聖光』?」

ヒマの口調でドレイクは、よつやく瞳を細める。

「切り離すために『餌』がいるのですよ」

「『餌』でーす」

相変わらず呑氣な口調でロジオンは手を上げた。

「本氣で困にするんですか?」

ドレイクの隣に座っていたルーカスが身を乗り出し問う。

「そりや。失敗したらロジオンがコンラートになつたりやつじやない。嫌よ。工口親父系ロジオンなんて~」

「工口親父……」

新たな異名が生まれそつだと、違つといひで内心ビク付いたロジオンだった。

「やれやれ……」

ドレイクは立ち上がると、呆れたように三人に向けて言い放つた。

「何の為に私が出向いたと思つてるのでしきうね？ 魔承師補佐の私が。貴方達で出来るんなら私がわざわざ出向く必要はありませんよ」

そうして

「ロジオン、一緒に来なさい」

と促すと、ロジオンを連れて、黙りこくれる工マとルーカスを置いて部屋を出でていった。

「……むかつぐ」

唸る工マに

「声、戻つてゐるぞ」

と、ルーカス。

「あらつ、いつけない」

と、工マは黄色い声で舌を出す。

「工マが腹立つのは分かるが、ドレイクの実力は確かだしな……長い時で培ってきた技も経験も、元からの魔力もさ」

「……魔力なら」

「うん？」

「ロジオンの方が高いわよ」

ぱつりと言つたHマの台詞にルーカスも「うん」と頷いた。

「だからさ、魔承師様も色々と考慮して我々も派遣したんだりう~？」

「それもドレイクは嫌なんだろうな~。やんなりや~」

ブツクサ言いながらHマは窓の外を眺める。

マントを羽織り、既に外を歩いているドレイクとロジオンがいた。

次回は9／29です。

「ドレイク、今夜、用で城を抜けたいんだけど……」

キビキビと歩くドレイクの後を付いていきながらロジオンは頬んでみる。

「花火の試し打ちでしょ？」「

「知ってるんだ……」

「駄目ですよ。当に理由も陛下を通して、伝達されているでしょうか

ら心配いりません」

「……」

「夜は闇の力が増大します。万が一、コンラートが結界を破つて襲つてきたら、庭師や花火師の者達に被害が及ぶのを君は良しとするのですか？」

「……いや」

ロジオンは首を横に振った。

「試作花火はここからでも見えましょ？。コンラートの弔いも込めているなら、池の下にいる彼と共にここで観賞なさい」「はい……」

「これでも彼なりに気をきかせているのだろう。

師匠のコンラートと話している彼が好きではなかった。

恐喝と嫌みが混じった話し方。

殆どロジオンは外されて、コンラートとドレイク一人で話している姿を見ているだけで、話している内容は知らなかつた。

一つだけ、彼が目の前に現れることは、この地を離れる事と理解していた。

(まあ、女性絡みもそうだけど)

最後に会った二年前

ドレイクは師に

『ようやく戻る気になつたのですか。とにかく自分勝手ですね、貴方は』

そう言った。

ドレイクは知っていたんだ。

師の病気も

この国に帰る理由も。

引っ掛けっていた、ずっと。

師匠……。

聞きたくても聞けなかつたこと、沢山ある。

この人は知つてゐる。

彼に尋ねても良いでしょうか？

「ロジオン」

ドレイクに呼ばれ、示した方向に目を向ける。

「私が張つた結界を『壊した』のは君ですね？」

「ああ、ドレイクが張つたんだ。どうりで師匠が弾かれたわけだ」  
「全く、無理に解いたから、あちこちに残つてゐるじゃないですか」  
右手を振り払うように小刻みに動かす。

「張り直しできる？ 手伝うよ」

「結構です。君が張る結界だとコンラートが侵入してしまつ  
「じゃあ……違う結界、教えてよ」

ドレイクが無言でロジオンに顔を向ける。

彼のあまり見られない驚いた表情に、ロジオンは苦笑する。

「そんなに驚くこと?」

「大いに驚きますね。君が私に教えを乞うなんて。ただ……」

「ただ?」

「教えを乞う態度じやありません」

「きちんとした態度なら教えてくれるの?」

「どうしましょうかね」

にやりとドレイクの口の片端が上がった。

「だと思った」

ロジオンだとて彼の性格を全く知らなくは無い。

それに

「一人の師と仰ぐ人から基礎から教えて貰い、もう一人立ち出来る  
君がまた、他の者から教えて貰うには『代償』が必要です  
とドレイク。

『代償』

魔法を扱う者同士が、魔法の技を乞う際に発生する取引。  
土台と言うべき基礎は共通であるが、そこから先は自分が『師』  
と崇める人物が築いた魔法を教わる。

所謂 繙承制。

大抵は四大元素を代表にあらゆる魔法が施行出来るようになるま  
で、師の元で修行を積んでいくが、魔法を使う者だとて人 得意・  
不得意が生じる。

自分の師が苦手で自分に身に付かなかつた場合や、他の者達の魔法を見て会得したい。

だが、教えを乞いに行くにも師の恩義もあるし、相手にも魔法を造り出したプライドがある。

おいそれと簡単に伝授させるわけにはいかない。

そこで、教える代わりに『代償』を相手から貰うのだ。

最初に伝授する側がそれ相応だと思つ『代償』を相手に掲示する。伝授して欲しい側がそれを聞いて、受け入れるかどうかを意思表示する。

魔法の技術を広く進め、世に貢献する取引なのだから『昇華』と呼ぶべきだと唱えるものもいる。

が

それが通貨であつたり、品物であつたりする時もあるが、他の、例えば労働であつたり魔法技術の交換であつたり、形あるものだけに限らない。

世俗に興味がないのが多い為か、道徳觀や道理から離れた者もいる。

逆に欲にまみれた者もしかり。

恩師の命や

教えを乞いに来た者の身体や魂を要求する者もいる。

遙か昔に一国を築いた魔導師が、新しい魔法に惹かれ他所から来た魔導師に教えを乞いたら、国を引き換へにされたと言つ記述も残る。

教えを乞う側が身体・精神に痛みを伴つ場合が多いことから今だ

『代償』と言われていた。

とは言え、そこまで酷い取引は滅多に無い。

教えを乞ひ側もそれに対し拒否も可能であるし、代わりを掲示できるからだ。

大体のやり取りを交わし、お互い納得済みで『代償』が決まる。

(……と書つんだけどね……)

『ドレイク（このひと）は何を掲示するか』。

でも、自分で魔法を創り出すのにヒントが欲しい。  
師匠を滅する方向じゃない魔法。

（ドレイクの知識と経験は底知れない）  
と師匠が話してくれたその魔法 知りたい。

『ドレイク。『代償』の掲示を』

\*

「そうですね……」

ドレイクは顎に手をやり、ロジオンを見つめた。

何か思い付いたのか、僅かに口角を上げ顎に付けていた手を下ろす。

「土下座して私の靴下を舐める は？」

何それ

ロジオンは無言で首を横に振った。

「ハンマーがいる池に放尿」

「……取り込まれてる水の精に失礼です……」

自分の師匠のなれの果ては、どうでも良いらしくロジオン。

「感謝祭に城のバルコニーで腹躍り」

「僕的には良いんだけど、あれは腹に贅肉付いてないとウケないから、やり損」

「ビヤ樽、腰に付けてエルズバーグ一周」

「ど根性は柄に合わない」

「……教えを乞う側なのに我が儘ですねえ」

ドレイクが呆れたように深い溜息をついた。

「羞恥プレイばっかじyan……」

「今までの鬱憤が溜まっているのでね」

と、ドレイクはロジオンに影のある笑いを見せる。

今までのこと、かなり根を持つてる

(……この人やつぱり暗い……)

自分がドレイクにやらかしたことは忘れ、ルーカスに頼めば良かつたとロジオンは思った。

「あ……、じゃあ、こんなのはどう?」

「何です？」

何か良い『代償』を思い付いたらしいロジオンが、ドレイクに掲示する。

「王宮に仕えている美女百人に囲まれた、ハーレムな生活」

「……過去に『コンラート』が掲示した『代償』が、男性全てに当てはまる願望だと思わないように」

「ええ！ そうなの？ 僕は……結構嬉しいけど……。でも百人は相手にできないな……うーん。頑張ってせいぜい五十人……うーん」

「……」

あの師匠にこの弟子あり

ドレイクは深く長い溜息を付く。

「ドレイクは、女人に興味が無い訳？」

「常人の女性には関心が無いだけです」

「……じゃあ……やつぱり……」

「何です？」

ロジオンの自分を奇妙なものを見る眼差しが、ドレイクは気になつた。

「コンラートから、何か変なことを吹き込まれている雰囲気はしていたが……。

「人の女性の好みにケチは付けたくないけど……。爬虫類の雌を好んでも……僕は用意ができないんだけど……」

寒い風がドレイクの身体を吹き抜けたような気がした。

「……ロジオン」

「ん？」

「この件が済んだら、じっくり腰を据えて話し合いつ必要があるよう  
です」

\*

「ドレイク。もう真面目に『代償』を掲示してくれないかな？」

「最初の方は大分真面目でしたが……」

（……真面目だったんだ……あれ……）

「冗談かと思つて返してたよ……ロジオンはブツブツ呟く。

「そうですね。本音を言わせてもらえば、コンラートの魔法日記を  
所望したい」

「魔法日記……か」

魔法日記 魔法を駆使する者達の命と言われる位、魔法を使う  
者には同等に扱われる。

アキレス腱だ。

故に、自分以外分からぬ場所か、見られても平気なように  
自分しか分からぬ暗号で書かれる。

過去の先人達の魔法日記が手に入った場合、これ幸いと皆、必死  
に解読し、自分の魔法とするのだ。

それ程、自分の『魔法を創る行為』は難しい。

「良じよ。魔法日記……」

あまりにあつさつと承諾したロジオンに、ドレイクの赤い瞳が見開く。

「見越しで、今日アーテラに持つてきてくれるより頼んであるから……來たら渡す」

「形見だと言える魔法日記に、随分と執着の無い……」

「日記に記された魔法は……全部覚えたから」

「何だつて？」

せらりと言つたロジオンの言葉に、ドレイクは信じられないと言つ風に言葉を返した。

「コソワードの今までの魔法の記録を全て？ 攻撃も？ 他の属性の魔法も全て？ ゆうに五十年分はあるものですよ？」

「うん。出来るかどうかも試してみたし……。僕にとつては覚えやすいんだ……師匠の魔法」

生きて十六年田に入ろうとする少年が、約五十年分の師の創り上げた魔法を全て理解し、施行出来ると言つのか。

そら恐ろしい

「ただ……」

「？」

ロジオンが片眉を上げて困ったよつたその眉尻を搔く。

「攻撃魔法……かなり威力弱くて……。強い威力のやつも、ちゃんと施行してゐるのに……何でなんだか……」

「仕方ないでしうね」

「？ 何が仕方ないの？」

せらりと答えたドレイクに、ロジオンは少々ムッとする。

「コソワードがそう教えたからです」

「……師匠が……？」

「……どういふこと？」　　訝しげな視線を投げつけるロジオングから、  
ドレイクは顔」と違う方向に向き、じつとそちらを見ながら言った。  
「……丁度、良い演習材が向いのからやつてきましょ。試してど  
こが悪いのか確認してみたら宜しこじょう」  
ドレイクの視線の後を追つと、そこには中規模隊伍の人の数がこち  
らに向かってきていた。

「……えつ……！」

先頭で一際立派な馬に乗るのは

「　父上……！」

## 19 代償（後書き）

次回は明日9／30です。

今回のドレイクの代償ネタ、なかなか思いつかなくて蒼井りゅう先生とふじやましのぶ先生にご協力いただきました  
突然の相談にかかわらず、色々と使えそうなネタ提供をありがとうございました。

訪れたのは、ロジオンの父親であるエルズバーグ国王陛下だけではなかつた。

馬車から母親である第一王妃。

それに妹であるアラベラ王女様とイレイン王女様それぞれ各護衛に侍女。

それから

「王宮付き魔導師と魔法使い……？」

後ろからある者は馬やロバで。またある者は徒步で。

そして方陣移動で。

それは王家の付き人より多い人数である。

馬から下りた父・国王陛下は短く揃えた白髪の多い顎鬚を撫でながら、第二王妃と共にロジオンに近付く。

「あ～良い。ロジオン、ドレイク、面を上げい

右手を胸に当て、頭を下げる略式のお辞儀をしていく一人に陛下はそう告げた。

顔を上げると、見晴らしの良い木陰に侍女達が組立式の椅子とテーブルを組み立て、茶の用意をしていた。

「……あの、一体何をしに……？」

ロジオンは後ろでこちらをじっと見つめている、王宮魔導師や魔法使いの痛い視線を感じつつ、父に尋ねた。

「まあ、ロジオン。その話は後だ。儂はお前に言つてやりたいことがあつてやつて來たのだ」

「はい……」

察しは付いていたので姿勢を正した。

「ドレイクから話は聞いた。一年も何故黙つておった？ 知れば儂が心労でも起こすかと思ったか？ 其ほど歳は取つてはおらんわ」

「……申し訳ありません。迷惑はかけたくは無かつたのです……」

静かな口調ではあつたが、激昂しているのは投げ掛ける言葉の波状で分かつた。

「もつと大事になるところであつたのは分かつてあるのか？」

「はい……ドレイクにも嗜められました。真摯に受け止めます……」

父の怒りが伝わったのか、ニコニコと母の第一王妃にまとわりついていたアラベラ王女様とイレイン王女様が、母のドレスを握りしめ眉を下げた。

頭を垂らしていたロジオンの肩に父の手が置かれ、驚いて顔を上げるとすぐ側に父の顔があつた。

今でも泣きそうになるのを必死に堪えて、深い皺を刻んだ顔がクシャクシャになつていた。

だから、言いたくなかったんだ……。

父の顔を直視できなく、ロジオンはうつ向いてしまう。

（自分のことで、もう悲しんで欲しくなかつたのに）

師匠には感謝している。

だけど、黙つて国を出たことを聞いた時、この父と母は小さかつた自分が急に消えて、どれだけ悲しんだのだろうと想つと、少し師匠を恨んだ。

特に母は我が子を奪われた思いがあり、恨んでいると聞いていた。自分が亡き師匠の化け物に苦しめられていると知つたら、二人はがんとして受け入れるべきでは無かつたと後悔し、更に師匠を恨むかもしない。

後悔も恨みも広げて欲しく無い。。

だからこそ自分がやらなくてはならない。

(やう思つたのこ……)

「ロジオン……儂はそんなに頼りないか?」  
父が問う。

ロジオンはいえ、と、首を横に振った。

「父上は……この国の王です……。その立場のお方が、息子の」と  
で……私用に権力を使いになつてはと……」  
「お前は物分かりが良すぎよつ……」

「しかし……」

「儂はお前に国王としてでなく、父として頼つて欲しいだけだ」

胸が痛んだ。

自分の態度が一番この人を悲しませたことに。

後悔に下を向いたままのロジオンを、父は抱き寄せる。

「……ごめんなさい」

小さな子供がそつと謝るよつて、ロジオンは父の肩に額を付けて  
そつと呴いた。

父が頷いたのが分かつた。

「ロジオン……」

母の柔らかな手が触れる。

父が離れ、代わりに母が近付く。

自然と額と額をくつ付けた。

「いつの間に、わたくしより大きくなつて……。一年前に再開できた時にはわたくしより少し低めでした」

「そうでしたか……？」

「一年前、本物の王子だと証を見せる前に、その青い瞳から涙を溢じ

『わたくしの子です！』

と自分で飛び込み、顔中至るところにキスをして来た母。

一目見て、すぐに自分の子だと分かる力が不思議だつた。

母と言つものは皆、そつなかも知れない 愛情を讃えた瞳で自分を見つめる母をみるとそう思つ。

「たまにま、陛下やわたくしの所へいらっしゃい。せつかく帰つてきたのですよ……」

「……この件が済んだら……わつと……」

ロジオンは父と母にキスをし、約束を交わした。

\*

「陛下、宜しいでしようか？」

ずっと父である国王陛下の後ろに付き添つていた男が、良い区切りだと声をかけてきた。

インテリらしく、上品な綿使用のワンピースのよつな服を着、端を刺繡で鮮やかにしたローブを纏つている。

男はフードを外し、整髪剤で後ろへ流した金髪を整えると、国王陛下にまつすぐと身体を向け物申した。

「我々、陛下に仕える魔法を扱う者達の嘆願を、魔導術統率協会の

魔承師補佐と言つ栄えある地位にいらっしゃるドレイク殿に是非受け入れて欲しいとお頼みしたく、お願ひをしに来たのが本来の目的にござります」

「せつかちな男だの、お前は。家族のわだかまりを無くすと言つ感動の場面に水を差しめる」

「それ故、お待ちしておりました。後はござゆる事と王宮に戻られてからお願い申し上げます」

最高権力者である国王陛下にございな態度で返す男に、陛下はやれやれと顎鬚を撫でながら、静観していたドレイクに向かつて話した。

「ドレイク、主にこいやつらが話があるそうじゃ」

と陛下は後ろに控えているローブの男と、更に後ろにいる魔導師や魔法使い達を指差す。

「昨晩の話なら受けのつもりはありません。ハイン」

ドレイクに名指しで言われたハイン ローブの男は、それでも食い下がる。

「しかし！ 魔法で戦う場合、前衛・後衛で一人一組が常でございましょう？ ドレイク殿は一人で攻めも守りも行い、コンラートとやりあつつもりですか？」

「他に一人派遣されてきている。要らぬ心配です」

「相手はコンラートですよ？ しかも化け物になり、水の精まで取り込んでいる。生前より強敵である可能性が高い。私は貴方を心配して言つているのですよ！」

「心配？」

ドレイクの声が、冷たい意思を含んだよつて低くなつた。

機嫌を損ねたのは間違いない。

「申し訳ない。失礼なことを……」

「私は、人の言葉を正確に聞き取れない方とは組めません。背中を預けたら『覚えていません』『聞き間違えたようです』と言つて攻撃されそうですから」

恐らく、僕の助力の件だろう

ロジオンは、八つ当たりとばかりにこちらを睨む王宮筆頭魔導師であるハインを見た。

後からドレイクに問われても、何だかんだとそれらしい言い訳を述べることは分かつていた。

（だけど……ドレイクの後衛やりたかったら、もう少し、誤魔化しやすい言い訳考えれば良かつたのに……）

魔導術統率協会直属の魔導師や魔法使いに選ばれると喜びとは、魔法を扱う者にとって憧れであり夢である。

魔承師に認められ、推薦された者だけがなれる。

それ故、憧れを抱いているもの達は、こうやって魔導術統率協会から派遣されてきた者に推薦してもらひつ為に懸命になるのだ。

「不愉快な言動はお詫びいたします。コンラートの件は、いざれは私を先頭に王宮内の魔法を扱う者達で事を取めるつもりでございましたから……事前に伝達をしていておいてくれたのだったら……」

まさかこんな急に来るとは思わなかつた

言葉の端端に見える焦りを取り繕うにも、話せば話すほど彼の魂胆が見えてきてロジオンは不快だつた。

事前に知つていたら、善人の仮面を上手に被り自分に助力を貸していただろう。

（そつちの方がまだ良かつたのに……どのみち鳥合の衆になつてい

ただろうけど……）

言い訳されている当の本人のドレイクは、自分の魔法の使い手としての実力を疑問視された発言以外の台詞は気にも止めていない様子だ。

「ドレイク殿！ 決して足手まといにはまりません。見事にフォローアップします！」

食い下がるハインに後ろで待機していた魔導師や魔法使い達が、いても堪らずドレイクに歩みより、共に嘆願を始めた。

「お願い致します、ドレイク殿！ ハイン様の実力は確かです！」

「ハイン様なら、きっとお役に立てましょう！」

「ハイン様の魔法は、我々がこの目で見て確信しております！」

「どうかドレイク様と戦うと言つハイン様の夢をお叶え下さい！」

黙つて意見を聞いていたドレイクに国王陛下が告げた。

「朝議会の席でこやつらが乗り込んできてな。ハインを囲んで儂に騒ぎ立てて困つておる」

「それはお困りでしたね」

「それでだ。儂の提案がある。ドレイク、そちはこの提案を受けねばならぬぞ。でなければエルズバーグを守る魔導師や魔法使いが半分はいなくなる」

「内容次第ですな」

どうも話を、と涼しい顔でドレイクは続きを促す。

「ドレイク、一度ハインと一戦交えてみたら良いではないか。されば互いの実力が分かろうつー。」

国王陛下の言葉を聞いてからドレイクは、周囲の、既に設置された椅子やテーブルに目除け。

茶や菓子の支度に勤しむ侍女達や、より広い広場を作りうと柴苅

りに励む護衛達を見て尋ねた。

「王宮魔法管轄の魔導師や魔法使い達が嘆願に来たのは分かりました。して、周囲の茶会の用意の意図は？」

「つむ。感謝祭の準備も臣下達が滞りなく進めておる故、中休みでこの一戦に付き合つことにした」

名譽に思われよ 脇で控えていた護衛が、澄ました顔でドレイクに告げる。

「見事な平和ぼけでござりしゃる」

と、ドレイクはわざとらしい笑いを見せた。

「今、ここに攻められたら陛下の命は無いですな」

そう付け加えたドレイクに国王陛下は、顎鬚を撫でながら

「心配はいらぬ。時期国王のディリオンは王宮に残してある。儂に何かがあつても、もう立派にやつていけよ」  
「じつは、わざとらしく笑いをしながら答えた。

(呑氣だ……呑氣すぎる)

ロジオンは頭を抱えた。

先程の感動の抱擁など、彼方に飛ばすほどに父王に緊張感がないし、母である王妃も切り替え早くさつさと口除けの下に設置された椅子に座つて、侍女が入れた茶を飲んでいた。

長く平和が続いた臨場感漂う場面だ。

「ロジオン兄様」

アラベラ王女様とイレイン王女様がロジオンの腕を掴むと、第一

王妃の元へ引っ張つていいく。

「ロジオン兄様も一緒に魔法対決を観賞しましょ」  
「初めてタルトタタンを焼いたのよ。是非ご試食して」  
「キャイキャイと、嬉しそうにロジオンを引っ張つていいくが  
「待ちなさい」

とドレイクが引き留めた。

そうして国王陛下に

「良いでしょ。その申し出、お受け致します」

と告げた。

「おお！ 魔導術統率協会の実力者の魔法が見れるのだな！ ハイ  
ン、負けるでないぞ！」  
と、国王陛下。

ハイ

「お受け下せるかー 身に余る光栄。しかし負けませぬぞー ドレ  
イク殿！」  
とドレイクを煽る。

だが、ドレイクは全く表情を変えることなく揚々と二人に告  
げた。

「ハイと一戦を交えるのは、私ではなくロジオンです

と。

20 親と子と（後書き）

次回は10／4頃を予定しています。

えつ？

その場にいる全員が、呆気に取られた様子でドレイクを見た。勿論、名指しされたロジオン本人も。

「ちち早くハインがドレイクにもの申し出す。

「お待ちください！ 何故ロジオン王子と一戦を交えねばならないのでしょうか？」

ドレイクはその問いに、普段の彼にはあり得ないほどのこつこつと笑い

「実はですね、皆様がこちらにたどり着く前に、ロジオン王子が私の後衛をやることが決ましたのですよ」

と、勝手に決めたことをシャアシャアアと言い放った。皆の注目が一斉に注がれ、「いや、違う」と叫みつと首を横に振るロジオン。

「 私に違う魔法を教えてくれと書いたのか、そつ書いたのですか？」

習つより慣れろ

ドレイクは実践講習派らしい。

（えええええ……だからと、王宮筆頭とやりあつのはまづことよ…）

…

「 ちょっと… ドレイク… 」

異議を唱えよつとドレイクに声を掛けよつとしたら、先に早くド

レイクにポンと肩を叩かれた。

「講習用人材です」

「ほそりと囁かれた。

「いや、ドレイク。僕の立場上まずいから！ 一応僕は王子だし、王家から見たらハインは従臣なんだ。それを考えたらハインが僕に怪我をさせないよう本気は出さないし、怪我させなくともやりあうだけで騒ぎ立てる一族や臣下もいるんだ」

「貴方は王子でありたいのでしょうか？」

「……」

ドレイクの言葉にロジオンは口を結ぶ。

「王子でいたいのならコンラートの件は降りなさい。一切手出しあいません。貴方が魔法の使い手として生きていきたいから、師を自らの手で何とかしたいと私に教えを乞いたのではないですか？」

ドレイクの言い方は坦々として感情の一切がない。

その分、中途半端な自分を責めているような気がしてロジオンは拳を握る。

もう、答えはだしてある。

生まれてから決まっていた自分の生き方。

だけど、この生き方しか無いと身体が、魂が訴えている。

ロジオンは父と向き合つ。

今までとは違う顔立ち 決意した息子の表情に父王は頷いた。

「……父上、今日のことは不間に」

「うむ。一族や臣下は儂が押さえよう

そうしてハインに向きなおす。

「ハイン、王子ではなく、魔法使いの僕として戦つてください」

「元から、そのつもりでしたよ」

ロジオンの言葉にハインは口の片端を上げた。

ひどく意地の悪い表情だつたが、ロジオンは気にする」とはなかつた。

「魔法の被害が周囲に及ばぬよう私と、共に派遣されてきた魔導術統率協会の一人が結界を張りましょう。皆様は結界の外でご覧ください」

とドレイクが言いながら国王陛下とロジオンの妹一人を促した。

そこにハインが

「ドレイク殿、私の部下達にも張らせますから、貴方のお氣遣いは無用です」

と、遠巻きに見ていた王宮魔導師や魔法使い達を指差し告げた。

「結構です」

とドレイクは薄く口を開けて笑みを作った。

「『貴方の親衛隊』ですから、私は信用していません」

そう言つドレイクにハインは、悔しそうに眉間に皺を寄せた。

\*

呼ばれたエマとルーカスが結界の準備をしているその外で、ロジオンとハインを皆、遠巻きで見ていた。

「ドレイク様」

ロジオンの代わりに茶と菓子を頂き、優雅に野分きを楽しんでいたドレイクに声をかけてきた二人組がいた。

一人はハインと同じく刺繡が施されたローブを着込んだ初老の女性。

もう一人は十いくかいかないかの幼い少女であった。

「こちらはフード付きの赤いマントを被つていた。

初老の女はフードを外し、片側に結わいたその白髪の多い髪を晒し、頭を垂らす。

付き添っていた幼い少女も同様の行動を取った。

「お初にお目にかかります。わたくしはサマンサと申す、このエルズバーグの王宮で魔法管轄処に席を置いております治療専門の魔導師にござります。今回、この事態に杞憂しハイン様に同行いたしました」

ドレイクも飲みかけの王家御用達の香り高い紅茶を置き、立ち上がるところの初老の治療系魔導師に頭を垂らす。

「もう、王宮に務めて長いのですか？」

「かれこれ十年になります。治療系を専門に扱う者がなかなか入つてこないので、わたくしが頑張るしかないのが現状で……」

そう言いながら、横で控えていた幼い少女の、柔らかくうねるサンディブロンドの髪が覆う頭を撫でる。

「この子はリシェルと言います。最近よりやく熱心に学びますとする子が出てきまして、弟子にしましたの」

リシェルと言つ少女は師に頭を撫でられ、嬉しそに頬を林檎色に染めた。

「私は魔導術統率協会の派遣者なので、込み入つたことは出来ませんが……あまり良い内情では無いようですね」

と、奥でハインに声援を送る王宮の魔導師や魔法使い達に視線をやる。

「ドレイク様は、ハイン様を見てどう思われましよう？」

ドレイクに問うサマンサの声音は憂いが籠つていた。

「まだお若いし、なかなかの色男ですからね、彼は」

「それに、お話もとても上手なのです。いつの間にか黒を白にしてしまつほどに」

「 ほう？ あれで？」

ドレイクの嘲りが入った口調に、サマンサは思わず苦笑する。

「あれはドレイク様の気迫に押されてしまったようですね。すすがですわ」

そうして、サマンサは準備が終わるまで心を落ち着かせているのか、胡座をかき瞳を閉じて口ジオンを見た。

「…………わたしはロジオン王子に期待をかけております。あの方が、今の魔法管轄所を変えてくれることに…………」

しかし　　とサマンサはドレイクに向き直す。

「王子にはまだ荷が重すぎると思つてあります。　勿論、この一

戦も……」

非難めいた口調でドレイクに告げる。

「魔法を扱う者達の間には、貧富や身分の差はありません。…………あるのは扱う魔法の優劣に魔力の差。幾ら王子が未知数の力を持つと言われても、ハイン様を相手にするのは無謀では無いでしょか？」

「だから治療系魔導師の貴女がこひらに出向いたのでしょうか？　ハインの派閥にわざわざついてきてまで」

「…………ええ」

「ハインはこの世界の人間にしては珍しく私利私欲が強い方ですよ。我が道を行く者が多い我々の中では稀です。だからこそ、説得力のある会話術がある彼に従つてしまつ魔導師や魔法使いがいるのでしょうか。だが　　全く周囲を気にしない者達には、口出しをしてくる彼が鬱陶しい。結果、魔法管轄所の二分化　　なわけですね？」

「…………魔法を扱える王家の、しかも直系である王子が魔法管轄に入つてくだされば…………失礼な話かもしれませんが、身分を全面に出し纏められるのではないかと…………ハイン様の唯我独尊の体制は他の管轄にも悪影響が出ているのです…………」

サマンサは、ちらりと国王陛下に視線をやる。

「陛下も存じてこますが、静観して様子を見ている状態です。でき

れば、ドレイク様が鬪つて、自惚れたあの方に「」を見直す機会を作つて頂きたかつた……」

「ドレイク～！ 結界印完了よ～！」

エマとルーカスが、防壁を作るための印を張り終えて戻つてきた。

「 では、始めましょつか」

まるで、今までの話を聞いていなかつたようなドレイクの振る舞いにサマンサは

「ドレイク様！お考え直しを…」

と詰め寄つた。

不思議そうに顔を見合はしたエマとルーカスにドレイクは、印の外で待機するよつ告げた。

そしてサマンサの方に顔を向けると

「貴女も直ぐに治癒できるよつ、待機しておいてください」と云えた。

「 ……はい」

「サマンサ」

諦めの念んだ返事にドレイクはひつひつと笑つた。

「怪我をするのは、ロジオン王子とは限りませんよ……？」

\*

地から光の線が音もなく沸き上がる。その線が一本から一本に交差をし、それがまた交差をし繋がり網目上に上へ横へ円上に広がつていいく。

ドレイクの防壁詠唱

基礎土台は『アエラの城壁』

古の神の一人であるアエラ神は、戦いを好まない平和神の一人。

地の中に眠る精力と術者の魔力を融合させ、壁を作り魔法攻撃から身を守る。

『地』の称号を持つルーカスが土台を施行した。得意な元素を持つ者が施行した方が容易いし、また、強い魔法になる。

今回の防壁魔法は、国王陛下並びに力の無い王族関係がいるため、対物防壁を兼ねた詠唱となつた。

「綺麗！ お母様、綺麗ね！」

小さな王女様二人には特に評判の良い魔法防壁だ。光の壁が繋がり、完了するとゆっくりと元の風景に戻つた。

魔法を施行する前と変わらないように見えるが、魔法や対物攻撃が加わると、防壁が役目を成す。

「防壁施行時間は半刻！ それまでに決着を付けるよつ！」

ドレイクの声が澄みきつた空に響く。

魔法影響で見えない壁に反響しているのだ。

その防壁の向こう側でエマが  
「ロジオーン、頑張つて！」  
と、黄色い声を出し応援をする。

壁の向こうなのでロジオンの耳にはくぐもつて聞こえた。  
壁の内側にいるのは

ロジオン

ハイン

そしてドレイクの三人のみ。

後は安全を考え、皆壁の外である。

「怪我で続行不可能、又はどちらかが負けを認めた場合、そして私がこれ以上闘うのに了承得ない場合にて終了する お互い、それ

で異議はありませんね？」

「ありません」

「同じく」

ドレイクの意見に一人同意する。

「では、始め！」

一気に緊迫した静寂が周囲を包んだ。

皆、固唾を飲んで見守る中、その雰囲気が好きではない者がいた。

Hマである。

自分が戦いの中に身を投じていいときは良い。

だが、傍観者の立場に変わると、この生死に関わるかもしぬないと言つ雰囲気を孕んだ緊迫さが苦手だった。

しかも傍観しなければならない戦いは、小さい頃から知つてロジオーンだ。

（やば！ やばっ！ ヤバ！ ヤバイよ～！）

あのすかした魔導師にケチヨンケチヨンにやられたロジオーンでは無いことは分かつてゐるが、ロジオーンの魔法の弱点を知つてゐるHマの脳裏には、拭いきれない不安が広がる。

（あ～！ 私が今ロジオーンに出来ることって……～）

応援しかないよ～！

「ロジオーン！ 負けないで～！」

精一杯声を張り上げる。

「勝つたら～、え～と、え～と、私の胸でい～っぱい！パフパフし

てあげるからーーー！」

「こりなーよー、変態か僕はーーー！」

「酷い……ロジオン……精一杯考えた励ましたのに……」「

即、思いつきつぱ否の返答に、ヒマは土に突つ伏してへこんだ……

…。

それに憤慨したのは、何故かハインであった。

（あの美しい方の御褒美を、あんな言い方で拒絶とはーーー。）

ドレイクに呼ばれてやつてきた、魔導術統率協会からの派遣者工マ殿。

咲き始めの薔薇のような頬。

小さな顔に大きな瞳は、地中から掘り出された宝石のよいつ。

情熱を讃えた赤毛は軽やかに肩や背を跳ねる。

見事にくびれた腰

そして

母性の象徴の胸はなんと形良く揺れるか！

（美だー！これこそ美ー！王宮に仕えるビの女より美しいーーー。）

よつするにーーー目惚れしたらしい。

男盛りの自分より成人前のガキに、あんな羨ましい！）褒美付きの声援を受けて。

しかも、声援を受けたロジオンは嫌な顔をして思いつきり拒

絶する。

( 許さん! 許さんぞ! )

ハインは野望の炎だけではなく  
恋の炎も付けてしまったらしい

びつとハインの人差し指がロジオンに向けられる。

「ロジオン!」

「いきなり呼び捨て?」

ロジオンの台詞にお構いなしにハインは宣言をした。

「美しい女性の精一杯の応援に何と酷い言葉を投げつけるか! これから君が受ける魔法はエマ殿の怒りと悲しみが籠つたものとなるぞ!」

「 はつ?」

「おい、エマ。お前の余計な応援が相手に火を付けたぞ……

ルーカスの言葉にエマは

「うわあ! 美しさは罪なのね……ヤバッ!」

とつとつと呟いた。

21 勝負（1）（後書き）

次回は10／6の予定です。

## 22 勝負（2）

ハインの点にかざした両手からパチパチと静電気が起る。  
(雷？ 放電？)

ロジオンの見極めより早く音が大きく激しくなる。  
それは引き続き音を激しくし、癇癩を起こした光のよじて時に周囲に威嚇をしながら大きくなつていく。

とうとうハインの頭より大きくなつた。

周囲の感嘆の声が届く。

「これだけじゃ芸がない」

とハインは引き続き詠唱しだすと、その雷電の玉は拳くらいの大きさになつて分かれ四方に散らばつていく。

「ハイン様の得意な魔法だ。初っぱなから飛ばしてやなあ

「これくらいやらないとほんくら王子にはわかんねーんじゃね？」

「や～ねえ。今は『悪臭』でしょ？」

早くも勝利を確信したのか、共に来た魔導師や魔法使い達はいき気になつてロジオンを罵倒し始めた。

魔法を扱う者達の間では、魔力や魔法の技の強さが絶対。

ロジオンが王家の人物だらうと関係がない。

魔導師や魔法使いの世界にも、彼らなりの常識や理念があるのだ。

とは言え

「やんなつちやうな～。何？ あの馬鹿集団。口しか動かしてない  
じやん」

Hマの辛辣な口調がハインの親衛隊とも言える集団にも届いた。

「何！ 我々を愚弄すると言つことは、ハイン様を愚弄すると

「言つことだぞ！」

「そりやー、ハイン様は魔導術統率協会に入るのに相応しきお方！貴女なんてどーせ、その牛のように大きい胸で魔承師を誘惑して得た地位なんじやない？」

「ああ？ さけんな」

エマが声を落として凄んだときだった。

がこん

「 ぴつ！」

奇妙な音が女の頭上からし、エマを罵倒した女が奇声を発して、紐が切れた人形のように倒れた。

他の親衛隊が慌てて女を介抱する。

皆、怯えた様子でスゴスゴとエマから距離を取つた。

「超絶結界を張れるエマ様を舐めるんじゃないよ」

そう言つとエマは、フンと鼻息を荒くしながらフンワリと波打つ赤毛を搔き上げた。

\*

バチバチと空気が激しく裂ける音を立て、ハインが作り上げた幾つもの雷電の玉は、ロジオンに曲折しながら空を滑り向かっていく。

「お母様！ お兄様が火傷しちやうー。」

「陛下！ あれば火傷どころでは……。」

妹王女達と王妃が真つ青になつて立ち上がる。

「あれ位、何ともない！」

国王陛下とドレイクの声が重なった。

「遅い」

ロジオンは自分のマントの裾を摑むと、雷電の玉に向かって翻した。

マントに当たる瞬間、放電のつどざく音と、激しい光が放出される。

対魔法防御の念が織り込まれてこむマント。  
魔法を扱う者には必需品である。

それだけで威力の弱い魔法は弾き返すことが出来るが、それ以上の魔法に対抗する場合、自分の魔力を注ぐこともある。

ロジオンの場合、後者を選択した。

一瞬、驚いた表情を出したハインだったが、すぐに不敵な笑みを浮かべた。

「まだまだ雷電の玉はウコウコしてるぞ？ 全てをマントで払つつもりか？」

（しかも、標的はロジオンと誘導施行してある）

逃げても逃げても追いかけてくるぞ。

コンラートに予言されたくらいで、ちやほやされて魔導術統率協会のメンバーにちやほやされて、しかも ちらりと防壁の外のエマを見る。

（超絶美女と仲が良いなんて…）

羨ましい！ 羨ましすぎる！

ハインは魔法を扱う者の中では、一般人と同じ欲求を持つた珍し

い若者であったのが王宮魔法管轄所を狂わせた要因である。

彼がその辺の魔導師と同じく世俗に無関心でマイペースな人間だったら、一分化せず、各自分の研究に勤しむ日常があつたのだ。

「……面倒」

ロジオンがぽつりと呟くその口調は、単調で酷く冷めたものだった。

ブルーグレーの瞳が長い前の毛の間から輝いた気がし、ハインは思わず腰が引く。

「Takaisin（戻れ）」

ロジオンが一言、そう述べた刹那  
放電の玉が跡形もなく消えた。

「……えつ？」

呆気に取られたのは、ハインだけではない。  
ドレイク、エマ、ルーカス以外の周囲にいた者全でが、目を見開き動きが止まつた。

「すゞーい！ ロジオン兄様！」

妹王女一人の歓声に皆、ようやく我に帰つた。

信じられない ザわざわと囁く声に怒りで震えたのはハインであつた。

「何をした！ 何をしたんだ！ ドレイク殿！ 貴方の仕業ですね！」

対等な勝負に手を貸すとは…！」

ドレイクはそんなハインの怒りに

「何もしておりません」

と淡々と答えた。

「一瞬で雷電の玉全てを消すなどと、あのほんへうに出来るわけがない！」

「消したんじゃない。『戻した』んだ、無」とロジオン。

「『戻した』……だと？」

「『消す』とこちらが施行した魔法とぶつかって、火花が飛びそうだからね……。ハインの魔法に化学方式が盛り込まれていて良かつたよ……自然超訳や古文字式よりずっと得意なんだ」

更に唾然としたハインは、ブルブルと震える口でロジオンに尋ねた。

「ど、どうやって私の魔法を解読したんだ……？」

「マントではらつた時……僕の魔力から君の魔法の施行式が伝達された。それからある程度……解読した……皆、やってる」とじょ？」

首を傾げハインに同意を得ようとロジオンは、横からドレイクが口を挟む。

「ロジオン、マントで魔法を受けて魔力伝達をするやり方は、常通ではやりません」

「そうなの？」

「それは危険な方法ですから。経験を積んだ者が混戦して時間が無い時位でしょうね、使つのは。コンラート位の実力なら容易いでしうが」

「確かに、師匠見て覚えた方法だ……」

余裕綽々で語るロジオンにハインは馬鹿にされたようになります

頭に血が上った。

「血腫か？ 血腫しているのか！ くそつ！」

（ほんぐりの癖に！ 今まで録に魔法を見せなかつたくせに！）

ハインが詠唱を唱えながら両手を地に付けた。

「！」

ロジオンとドレイクが魔法施行の気配を感じ、飛んで後ろへ下がる。

地中から土の刃がロジオンに向けて攻撃が始まった。

円錐に突き上る土は、僅かに根付く草花を一瞬に突き刺す身体を突き刺す程の強度があるのが分かつた。隙間無く突き上る円錐は前後左右に生まれ逃げ道を絶つ。

（お前は、ほんぐりのままの評価で丁度良いんだよ！）

ハインのしたり顔が禍々しく歪む。悪鬼に取り付かれていたように暗く歪んだ笑顔であった。

「……だから、遅いんだ」

再びロジオンの冷めた咳きが出る。

今度は無言だった。

ロジオンの口が動かない 魔法施行が間に合わな故だと思ったハインだったが

「！！」

ロジオンのマントが靡いた途端、風圧が一気に上がった。

ロジオンの足元から風圧と共に土が削られ、逆にハインに迫つて

くる。

ハインが魔法で造り上げた円錐は底から崩れ、土塊となつて風に飛ばされ逆にハインを攻撃した。

「……」

防御の魔法詠唱も間に合わない。

強度の上がつた円錐の土塊が、共にハインの身体を痛め付ける。風圧で飛ばされハインは一瞬宙に浮き、地面に倒れ込んでしまつた。

\*

この力の差は何？

ハインに付いてきた魔導師や魔法使い達は、愕然と魔法防壁の向こうにいる一人を見ていた。

こんなにハインは弱かつた？

こんなに王子は強かつた？

「圧倒的じゃないか……」

「何で……あんなに強いのに、今まで魔法を出さなかつたんだ……？」

「馬鹿ね～、あんた達」

エマが呆れたように告げた。

「魔法の存在理由は何？ 入門中の入門よ？」

万人の為のもの

「自分の矜持や誇示、遊びで魔法を出すのは違うだろ？」「？」

ヒルーカスが諭す。

「魔法は、その理論や方程式、組み立て、それに絡む式陣が理解できても一定以上の魔力がなければ発動・施行は出来ない。エルズバーグの王宮（王宮）では多くの魔導師や魔法使いを召し抱えているが、世界中から見たら魔法が出来る者はそう多くないんだ。恐らく、世界人口の五分の一居るか居ないかだと思った」

「皆、魔法が出来るわけじゃないから、出来る人は万人の生活の為に使うわけよ。それが一番の魔法定義で考えの基礎。思い出してよね~」

とエマが腕組をして、ふんぞり返りながらハインの親衛隊に告げた。

\*

「嘘だ……嘘だ……」

へたり込み焦点の定まらないまま、ぶつぶつと呟いているハインは、上等な絹のローブから品良くまとめた髪の毛まで土塗れであった。

ゆつくりと近付いてくる影に、ひつ、と低い声を出してハインは後ずさりする。

自分を見下ろす影 ロジオンだった。

左手をハインの前にかざす。口の動きから詠唱をしている。

左手を使うのは攻撃魔法の基本。

（この距離じゃ殺られる！）

力が抜けて動けない、今からじゃあ防御魔法も間に合わない。

ロジオンのかざす左手から、生暖かい風がハインの顔に当たる。

(もう駄目だ……)

ハインはぎゅっと田を瞑つた。

ぽんつ

と、田の前で空氣の弾けた音がした。

あ～あ、と眉尻を下げる自分の左手を見つめるロジオンにドレイクは尋ねた。

「何の攻撃魔法を施行したんですか？」

「灼熱……のはず」

「蚊なら倒せる威力ですね」

「……攻撃魔法だと、みんなこんな感じなんだ……どうなの？」

「戦では、ただの一度も攻撃魔法を施行した経験はないのですか？」

「無いよ……師匠、教えてくれなかつたし」

淡々と語り合つ一人には、ハインは映つていない。

「お、お前ら二人！ 二人して！ 私を茶番に落とし入れたな！」

「茶番？」

ドレイクの怜俐な赤い瞳が、ハインを貫く。

視線の脅威に慄きながらも、ハインは必死に虚勢を張りドレイクに楯突いた。

「そうだ！ 大方、陛下か王子に頼まれて一芝居打つたんだろ？ 魔承師の犬は誰にでも尻尾を振るんだな！」

「……犬とはね。そんな小物と一緒にしないで頂きたい」  
じつと、ハインを見下ろしていたドレイクが、徐に笑みを浮かべ  
た 口角だけ上げて。

（だから怖いって、それ！）

遠巻きで見ていたエマとルーカスが心の中で叫んだ。

「茶番に付き合つてあげたのはこちらの方ですよ、ハイン。まあ、  
こちらも講習人材が丁度欲しかったところですね。 残念なのは  
は君が思つたより役に立たなかつたことですかね。これなら『  
犬』の方がまだましでした」

「……」

ドレイクの台詞と氣迫に負け、ハインは「降参します」と呟つやべ  
口に出した。

## 22 勝負（2）（後書き）

次回は10/7です。

## 23 ハンマーを守る者

頃垂れながらサマンサからの治癒を受けているハインを、ロジオンは黙つて見ていた。

侍女が「こちらでお茶を」と父王の元へ促そうとしたが断つて。

親衛隊の空気はバラバラである。

今までの尊敬はどこかへ吹き飛び、侮蔑の視線でハインを見る者達。今だ信じられない表情の者。次の責任者を狙う様子の者。瞳を輝かせロジオンに尊敬の眼差しを送る者。

「ハイン」

ロジオンは彼と同じ田線の位置にしゃがむ。

ハインは田を合わせることもなくぶつきら棒に「何のようです？」とロジオンに言つた。

そして

「おめでとうござります。私をやぶつたからには王子、あなたが王宮筆頭魔法使いですよ。私はさっさと辞めますよ」と投げやりに言い放つた。

「辞めて……君はどうするつもり？」

「さあな。エルズバーグ内を転々とするか……それとも国外を出るか……はっ！ 私がどこにいこうとも貴方には関係がない

「君……生まれはエルズバーグ？」

「そうですよ。生まれも育ちもエルズバーグだ。もつと西の街ですけど。この国は大きいですからね」

「……この国を出て、修行したことは？」

「ありませんよ。必要ないじゃありませんか。これだけ大きい国に住んでいれば」

「……それが、今回の敗因だ……」

「 はっ？」

ハインが負けを認めて、初めてロジオンと顔を合わせた。顔、とロジオンはリシェルから清潔な布を貰いハインに渡した。ハインの顔は土埃だらけだったからだ。涙と鼻水も流れていったせいもあるが。

「 ……負けたの、初めて？」

「 師匠以外の奴にはね……」

「 この国で負けて良かつたね……」

「 嫌みか？」

「 本心だよ。ハインの魔法は……この国でしか通用しないからね」

ロジオンの言葉にハインは眉を潜めた。

ロジオンは構わず話を続ける。

「 演習だって……エルズバーグ内でやつて……他の国とは演習はないでしょ？ 演習はあくまでも演習　　実戦とは違う……実戦は生と死のやり取りだ」

「 ……」

「 僕とハインの違いは『実戦での経験の差』だ」

「 王子……貴方……実戦の経験が……」

「 あるよ。結構な数だね」

サマンサとリシェルも驚いて眼を開いてロジオンを見た。

苦笑いしながらロジオンは、人差し指を立て自分の口に当てる。「父上や母上、それに兄弟達にはまだ内緒にしておいて……。衝撃を受けるだらうから」

「 王子、ではコンラート様と共に戦に？」

「 サマンサが尋ねた。

「 うん……。大抵師匠を招く国は、危機に瀕している、戦を始めよ

うとしている国が多いからね……。師匠は……戦いに出ても……僕を守れる自信があつたのだな?」

ロジオンは当時を思い出したのか、言葉を噛み締めるよ／＼、いつもよりも更にゆっくりと語つた。

「魔法と槍と弓矢に剣。石砲や、それなりの国では大砲や火薬の投入。混戦になるともう、敵や味方が入り交じってね……。滅茶苦茶だ、自分の耳と目を頼りに敵か味方を知り、支援や防御に聖光。その上に師匠の後衛。次から次へと繰り出される物理攻撃に魔法攻撃……怖がっている場合じやない。負けてしまう、消えなくとも良い命が消えてしまつ……早く魔法を施行しなければ……一度でも戦を経験して、生き延びれた魔法使いや魔導師達は、その重要性を身に染みて分かっている。だから詠唱を口に出さなくとも頭の中でイメージして、施行できるようにするわけ」

「しつ、しかしそれでは、問いかけの必要な召喚系や精密にかけねばならない封印が……」

「そこはそれ……臨機応変でね」

微笑むロジオンの瞳の色は陰り、まるで深い海の底を見てきたようだつた。

\*

「……やっぱり、コンラート様の後衛をなさつていたのはロジオン王子だつたんですね……」

ロジオンが着替えを強制させられ侍女に無理矢理小城に連れていかれたのを見送つてから、リシェルがぼそりと言つた。

「リシェルは他国から来たのですものね……」

サマンサの台詞にリシェルは、軽く頷く。

水のコンラートの後に守り手あり

マントの襟は鼻まで隠し、フードは髪を隠し、見えるは色素の薄い瞳のみ。

男か女か、はたまた子供か大人か。敵も味方も、その見事に的確に繰り出す魔法支援と防御の数々に

流石にローラードの後ろを守るものよ

と、感嘆し、又は恐れた。

「あつと……顔を知られては王子の立場として問題になるから、ローラード様が顔を隠すよつ王子に話していたのかもしませんね……。ロジオン王子は何故顔を隠さなければならないのか、知らなかつたのでしょうけど……」

治療を終えたサマンサが、まるで過去のロジオンを見るよつて遠い目をした。

「……」

ハインはもう、やさぐれた仕草はすることなく、今までとはまるで別な顔付きで空を仰ぎ、遙かに広がる彼方をいつまでも見つめていた。

## 23 パンサーを歩く者（後輩を）

次回は10/12です。

(やれやれ、馬が残つて助かつた)

両脇と背に荷物を積んだ馬を引き、小城へと先を進めるのはアデラだった。

アデラの実家を含め、四件程回れたが、その都度土産を持たされアデラはまさに「方陣魔法が出来たら良かつたのに」と言ひ荷物まみれの状態で王宮に戻ってきた。

馬を借りようと厩の番人の所へ行つたら、陛下と第一王妃、下の王女二人に付き人達に魔法管轄所の者達が馬を借りてロジオンのいる場所へ向かつたと聞いた。

『早馬はねえが、良いか?』

文句はない。アデラは首を縦に振つた。

(しかし……一体、何の用で?)

首を傾げながらアデラは、ロジオンが普段住み着いている平屋に辿り着いた。

「さて」

アデラは服の裏の胸ポケットに、大事にしまつていたものを出す。

琥珀のブローチ ロジオンがエルズバーグ第五王子だと言ひ証の品。

琥珀の中には、各王子王女ごとに象徴となる物が埋まつてゐる。ロジオンの場合は第二王妃が産んだ初めての子でもある為、王妃の故郷で原産の薔薇杉の葉である。実が薔薇のような形な為そう呼

ばれている樹である。

天然でそうそう希望の物が入っている琥珀はなかなか無いので、その場合人の手が加えられる。

ブローチの土台には

『ロジオン＝イエレ＝エクロース＝エルズバーグ  
雪原の月の十一日目に生誕』

と刻まれている。

このブローチに自分の魔力を注ぎ、鍵としていた。

勿論、魔法日記の隠し場所もこのブローチ鍵が使われている。

アデラはブローチを愛しく両手で握りしめ  
(ロジオン様、お部屋の扉を開けますよ)  
と、念を送った。

こんなので彼に伝わるのだろうか?  
しかし、伝わらないと開けることが出来ない。

今、ブローチは鍵としての役割だけでなく、媒体としても担つて  
いるのだ。

暫くしても何の反応も無いのでアデラは少々心配になつた。  
(私の念が弱いのか?)

祖母に習つて太陽に祈るポーズをしてみる。  
(ええい! 伝われ! つったわれ、つったわれ! 伝わらな  
いと扉を蹴破るぞお!)

『……態度と頭の中の台詞が合つてないんだけど……』

「 うわっ! ……ロジオン様?」

立ち上がりキヨロキヨロと辺りを見渡してみるが、声が聞こえる

のにロジオンの姿が見えない。

クスクスと笑う彼の声が頭に響く。

『直接、君の頭に語りかけてるからね。そこにはいないよ、僕』  
「でも、私のやつていたこと分かつていてる』様子でしたが……」

『うん、見えるから』

「見える？ どこから？」

『姿見の鏡から』

「昨晩の……？」

アデラはドレイクに外出許可を貰いに行く前の、ロジオンとのやり取りを思い出した。

平屋の家と魔法日記の鍵は、ロジオンを媒体にしないと開かないと言つ。

ではどうするか？ アデラにロジオンの意識を憑依させ気を送る。

『意識憑依』または『身体憑依』と言つ。

意識支配とまた違い、あちらは支配された人は次第に自己を失い、思考や感情が喪失するが身体憑依は、一時的に相手の身体に術者の精神が入る状態を言う。

それには術者が憑依しやすいよう媒体の品を相手に持たせ、相手の行動が見えて憑依できるよう映す品も必要になる。

それは映像として見えるものだつたら、水面だらうと硝子だらうとグラスだらうと何でも良いのだが、今回はロジオンに『えられた部屋に大きな姿見の鏡があつたのでそれを利用した。

二人で鏡の前に立ち、一回転させられた後、鏡の向こうのロジオンを見るように言われた。

良いよ、と言われるまで じつと鏡に写し出された主を見つめる。

後ろから聞こえる詠唱と、鏡に見える主の口の動きにぱあっと耳と目が離せなかつた……。

『アデラ……扉にブローチをかざして』

「は、はい」

浸つている場合ではなかつた。

アデラは深呼吸をし心を落ち着かせ、ブローチを扉にかざす。

『ちよつと……気持ち悪い思いするけど、我慢してね』

そう、アデラの頭の中でロジオンの台詞が響いた瞬間 後ろから何かが触れ、自分の身体を包もうとしてしてくれる。

自分の皮膚の下から溶け込んで入つてくる水飴のような感覚。

(『気つ、気持ち悪つ！』)

『気持ち悪いよねえ。もつ、大丈夫だと思つけど……』

「……あつ……。はい、平氣です」

いつもより身体が重たい感じはするが、ぬめりが身体を包みなが  
ら入つてくる嫌な感じは消えた。

『もう、解錠したから入れる……扉、開けてくれる?』

ノブに手を掛け、扉を開けると室内へと入る。

開けるとすぐに居間の間取りの主のすむ平屋は、昨日の朝に出た

時と変わらずに明るい日差しが出迎えてくれた。

『……何か、何日も留守にしていた氣分……』

「また戻れましょつ」

ぼやく主にアデラは優しげに言葉を返した。

『……うん』

頷く主の言葉には自信が見られなかつた。

「さあ、魔法日記の場所は？ 取つてさつさと引き上げましょつ！

ロジオン様に沢山お土産を持ち帰りましたよ」

アデラも朝から忙しく動いて疲れていたが、しんみりしている主のロジオンの為にも張り切る素振りを見せた。

くすり

と自分の頭の中で主の笑う声が聞こえる。

『そうだね……。今日は人が多くていつまでも憑依していられない  
し……ちやつちやつとやつてしまおう』

「国王陛下がお訪ねに?」

『うん……試作花火の打ち上げまでいるみたいだ……付き人が外で  
炊き出しあつてるよ』

「ロジオン様をお訪ねに?」

『まあ……色々と。帰つたら話すよ』

分かりました と、アデラは頷き誘導で寝室に移動する。  
寝室にある姿見の前を通りた時、アデラがぎょっとしその前で立  
ち止まつた。

「……！ ロジオン様！」

姿見に写る姿は自分の筈なのに

「ロジオン様が写つてる……！」

驚いて、鏡に近付き自分の顔を撫でる。

自分の手で触れる顔・手も顔も自分の物の感触なのに……写る姿  
はロジオンだ。

『こちらに写る姿はアデラだよ』

あつけらかんとロジオンは言つ。

「……はあ……」

複雑な気持ちのまま寝室の暖炉の横前に向かつた。

『うん……そう、その辺りに薔薇杉の実の落書きがあるでしょ……  
？ そこに身体の中心を合わせて。右手にブローチを持つて……両  
手を真っ直ぐに壁に付けて』

「左手にブローチを持つてはいけないのでしょうか？」

『それだと師匠の魔法日記が取り出せない……右手側にあるんだ……』

……師匠の『

理解できない部分があるが、その質問は保留にしておこう。アデ

ラは思った。

ロジオンの声が頭に反響していく、一日酔いの頭痛のよつだ。

この状態で長く会話していると、しばらく寝込みそうだ。

そう思い、主の言つ通りに薔薇杉の落書きの前に立ち、両手を真つ直ぐに壁に当てた。

『……』

アデラの頭の中に、知らない語源を呴く主の言葉が響く。壁が柔らかくなつた そう思つた時、泥沼に手を突つ込んだようには、ズブズブと壁の中に沈んでいった。

「ひやあ！」

『その先に日記があるから、手を引っ込めないで』驚いて手を抜こうとするアデラに憑依している形のロジオンが押し戻し、どうにか彼女を諭す。

覚悟を決めて壁の中に潜つた手で探つてみれば、爪先に何かが当たり掴んでみた。

感触からして手帳のようだ。

指の平にふれるザラザラ感は刺繡だと分かつた。左手にも同じ位の深さで同じように触れる。

こちらは革製ではなかろうか。ツルツルとした感触があった。

『それ。どちらも引っこ抜いて』

右手にはブローチも握つてゐるために、少々神経を使つたが掴み、無事にどちらも引っこ抜いた。

「これが『魔法日記』……！」

どちらも手のひらに収まる大きさで、思いの外薄い。

「ソーラートの方はさすが、と言つべきか、刺繡の装丁の見日素晴らしいものであるが、この薄さで果たして彼が生きてきた長さを語れるものなのか アデラは首を傾げた。

「……どちらも薄いのですね。もっと大きくて厚い物かと思つてい

ました」

『あちこちに放浪するのに』『そのまま』じゃあ荷物になるからね……形を変えてあるんだ』

『これは原形ではないのですか?』

『後で見せてあげる……ドレイクに渡さなくてはならないしね……』

『……何があつたんです?』

アデラだとて、必修で魔法日記のことは知っていた。

魔法を扱う者達にとつて命と同等の魔法日記。生前體「は絶対に無いし、大抵は弟子に渡される。

それから言えばロジオンが持つのは当たり前だ。

なのに何故、ドレイクに?

事情を知らないアデラが不振るのは、いく当たり前である。

『来たら、その辺の件も話すよ……何せ今日は……もう、次から次へと……』

ロジオンがうんざり とでもこいつのように溜め息を付いたのが聞こえた。

「分かりました。では後程」

『うん。『抜く』から……今度は平氣だと思つよ』

それだけ言つと、もう主の声はアデラに届かなくなり、その瞬間に頭痛もなくなり身体も軽くなつた。

『靈にとつつかれるのつて……こんな風なのがもな……』

ぽつりと独り言を言つとアデラはむしあたつて玄関の扉をどう施錠しようか考えを巡らせた。

## 24 身体憑依（後書き）

次回の更新は10/15です。

戻つてきたら驚いた。

暫くの寝ぐらの小城の庭には人・人・人……。

既に炊き出しが終わり、庭に設置された台には鳩や家鴨に鶏の蒸し・焼きが、茹で豆が挽かれた皿の上に並び、秋の味覚の野菜のスープが湯気を立て食欲を誘う。

王宮で焼いてきたパンにデニッシュ、タルト、パウンドケーキ。連れてきた調理人は、焼き石の中に栗を放り込み焼き栗作りに専念している。

国王陛下に第一王妃、まだ小さな二人の王女達は連れてきた護衛や侍女に囲まれ、談笑しながら食事中。

手が空いている者達も好き好きに料理を取り、酒も口にし盛り上がっている。

異色と言えば王宮の魔法管轄所の魔導師や魔法使い達だが、和気あいあいと皆に混じつて食事をしていた。

(……何があつたのだろう?)

ともかくにも 陛下と王妃に機嫌伺いに出向き、挨拶をする。

その席に、自分の主であるロジオンも同席していた。

気付かなかつたのは、彼が王子らしい格好をされていたからだ。

今回は腰までの短いジャケットに、切り替えある膝までのシャツをウエスト部分で宝飾のベルトで留め、スパツツを履いていた。

ブーツは唐草の型取りをした物を使い、留め金に金のバックルが付いたものである。

髪の毛も散々くしけずられ、艶々と輝いていた。

アーテラにとつて見とれてしまつ姿だが、ロジオンの方は彼女を見ると氣恥ずかしいのか途端に談笑を止め、視線を合わせることもないで、黙々と食事に専念し始めた。

「陛下に第一王妃様、拝顔賜りました」と御礼申し上げます。参上するのが遅れましたこと謹んでお詫び致します。」

アーテラは帶剣を自分の横に置くと、正膝を着き正式な挨拶をする。

「よい。ロジオンから聞いておる。面を上げよ」

「はい、ヒアーテラ。」

「今宵は無礼講じや。アーテラも皆に混じつて飲んで食べて楽しむが良い」

「ありがたきお言葉にござりますが……陛下、私には何が何だか……何故、このよつな宴がここに。しかも、わざわざ陛下や第一王妃様や王女様方まで……」かきひき訪問に出向きました理由が分かりかねません」

「おお。アーテラは留守にしておつたから詳しい経緯は知らんだな」「父上」

突如、ロジオンが口を挟んできた。

「僕から後で話しておきます。彼女に頼んだ品を確認しなければならないので……その時にでも」

父王にやう語すとロジオンは、接待用だと思われる品のある笑顔をアーテラに向むけ

「アーテラ、」<sup>1</sup>苦勞様。しばりく……歸と食事をしてこのと熙」と告げた。

「はい。ではお言葉に甘えて馳走になつてきまーす」

\*

正規の皿代わりに使われるパン皿を貰い、バターたっぷりのデニッシュに肉汁がたっぷりと滴る鴨肉を挟みながら食べる。濃厚なソースと鴨の脂が口の中に一杯に広がる。口の中に残る脂を取り除くように、赤の葡萄酒を飲み喉を潤した。

この宴につかわれた料理素材も飲み物も、感謝祭用の物であろう。ここで、これだけ飲み食いしても本番用は充分事足りるということがどうづ。

台の上に贅沢に並べられた食事と、それを手に取り立食して、喋り、笑い、飲む人々。

沈み行く太陽の地平線を彩る橙の光が、そんな人々の陰影を濃くし今日最後の輝きを成す。

点々と設置されたかがり火に台の上の蠟燭。

王族の占める場所には、一際明るい場面を提供するランプ。

平和なのだな……。

アテラはふと、祖母のかつての仲間達の滅亡した亡国の話を思い出す。

戦に続く戦。

荒れしていく地。

貧困

食糧難

疲れていく人々。

一握りの支配級の者達は贅沢を止めない。

負の遺産を背負わされるのは、何の力も持たない者達。

『救いが欲しくて、皆、一心に見えない神に祈るのよ。心の拠り所が欲しいの。生きていく希望をね……』

このエルズバーグに住む者達は、どれだけ恵まれた生活を送つて

いるのか。命を繋ぐ衣食住の保証をしてくれるだけでも、どれだけ幸せなことなのか 見に染みている者だけが、平和を維持しようと躍起になつた。

『アーテラ、貴方には『覚悟』が足りない……』

祖母が放つた言葉。私が聞こえなかつた部分が、かつての祖母の仲間に会つて、ようやく知り得た。

それを考えると

（ラーレ……あの子も今までは……）

まもなく祖母が亡くなり、空白になつたままのアサシンの座を、

一緒に鍛錬を積んでいたラーレが受け継いだ。

勿論ラーレはまだ若輩。アサシン達を束ねるには経験不足と言つ

ことで、先に入つた年長者が纏めている。

世襲制と言つるのは変わらないので、いざれはラーレが筆頭になるだろつ……。

まだ、重要任務は任せていないと話していた妹の様子は、緊迫感が全く見られなかつた。

（四六時中、緊張していても疲れるだけだけ……）

やる時はやるのかな、あの子、兄弟の中じゃ一番要領が良いし。パン皿の汁でふやけた部分をぼんやりと見つめ、思想に更けるアーテラに

「アッテーラちゃん」

と後ろから抱き付き、胸を揉む者 ハマだ。

「ひやああああー！ ハマさん！ いきなり何をー！」

思わず身を屈め、投げ飛ばそうとしたが、相手は女性でしかも酔っぱらい。思いとどまり、ハマをひつぺがそつとするが小判鮫のように背中から離れなかつた。

それどころか

「アテラちゃんって、以外と胸あるのね。普段ペシャンコなのはどうして~？」

と、ますます胸を揉み出す。

「普段は中に防具服を着込んでいるからです~。」

「え~？ それはまずいでしょ？ 胸が横に流れちゃうよ~」

「ちょっと、ちょっと、ちょっと」

エマの自分の胸を揉む手付きがいやらしい。

（玄人？ 慣れてる？）

大きさを確認するための手の動きじゃない。むずむずする感覚。

「ル、ルーカスさん！」

ルーカスに助けを求めるも、ルーカスも王宮の魔導師や魔法使い達に囲まれている状態で、談笑していくこちらをみていない。

「エマさん……！ 酔い過ぎです！」

「う~。良いなあ~、本乳」

うつとうつした声音で呟くエマには、アテラの声が全く耳に入っこないようだ。

「いらっしゃい」

「はい

エマのしつこい乳揉みの手が離れた。

アテラの乳の代わりに今度は自分の後頭部を押さえられたエマの後ろには、パン皿を持つロジオンがいた。

「い……ったあ！ ロジオン、あんた何年ものパン皿で私の頭ごついたの~！」

「公衆の面前で口ごっこをしていてるからでしょ」

衝撃で酔いが冷めたらしくエマの文句をさうりと流し、ロジオンはアデラに話しかけた。

「荷物は……？」

「はい。小城のロジオン様の利用しておりますお部屋に食事は食べた?」「はあ……あらかた

「そう」

ロジオンはそう言つと、先程エマの後頭部をビリコたパン皿、タルトやパウンドケーキにクッキーを盛る。

「あと……焼き栗と。アデラ、そこの葡萄酒の瓶持つて付いてきてじゃあね、とブータレているエマに手を振り、さつさとアデラをその場から連れていった。

\*

そう言えばドレイクの姿が無かつたことに気付く。

「宴にドレイク殿の姿が見当たりませんでしたね」

先に進む主に尋ねる。

「宴が始まる前までは王宮の治療系魔導師と話し込んでいたけど……始まつた途端、食事持つて小城に戻つたよ。魔導師に経過報告とか……つて。いてもルーカスみたいに寄られるからね……あの人、集られるの好きじゃないし、そもそも人が苦手みたいだし……」「ああ、だからあんなに表情が無いのかしらとアデラは頷く。

「？」

てつくり魔法日記の確認に小城へ戻るのかと思つていたのに、行く方向が違うことにアデラは気付いた。

「？……あの、どこへ？」

「池」

ロジオンはそう答へ、ずんずん先へ進む。

「時間的にそろそろだから、……急いで」

池とは結界を張り、コソラートを一時的に出でないようにしているあの場所だ。

宴の場所から人の笑い声が届く。

日が暮れ始め、滅多に人が来ないこの侘しい場所を、ほんの少しだけ明るくしている気がした。

「……カンテラ、持つてくれれば良かつたかな」

主がアデラの方を見て言つてるのは、暗闇が苦手だと言つ彼女に気をきかせているのだろう。

「平氣です。 と、言つつか平氣になつたみたいですね」

「？」

不思議そうに臉をしばたかせるロジオンにアデラは言つた。

「靈とか、化け物とか、こうやって人の身体に入つてくるんだな、とか何となく分かりましたし、実物は闇より恐ろしいものだと知りましたから」

「……後者の言い分は分かつたけど……前者の意味が分からない」

首を傾げる主にアデラは

「とにかく、何とかなつたと 言つことがあります」

と苦笑いを見せた。

25 嘉(1) (後書き)

いおおおおー。体調激悪…。なるべく早く次ぎ投稿します。

池の前にお供えのよしに、パン皿に載せた菓子に葡萄酒が疑問でアデラは主に尋ねた。

「師匠……甘い物が好物だったんだよ。お酒と一緒によく食べていたんだ」

「イメージが壊れまくりですね……」

そう言うアデラにロジオンは笑う。

「『疲れた頭には糖分』って……よく言つては食べていたんだよ」

さて座ろうか、とロジオンは自分の首に巻かれているスカーフを取ると、草地にそれをひき、アデラに進める。

アデラは驚きながら断つた。

当たり前だ。本来ならば従者が主にしなければならないことなのだから。

「いけません。こんな高級なスカーフで。しかも私は仕える立場ですよ？ ロジオン様がお座り下さい。私地べたは慣れてますから」「どんな女性にも……紳士な態度は忘れるなつて……師匠が言つていたよ。それに僕だって、そんな品良く育つてないよ？」

「時と場合によります」

「……良いから座つてよ。このスカーフ長いから、一緒に座れるだらうし」

さりげなく譲渡案を出したロジオンの意見に、アデラは渋々と「」承した。

「では、失礼します」

と恐る恐るスカーフの上に腰を掛けるアデラを見て、やれやれとロジオンも座る。

その時だ。

ヒュルルル

空中に響く高い音に一人空を見上げた。

「試作花火の打ち上げ……始まつた」

大きな炸裂音の直ぐに空に咲く花のように、花弁を広げては消えていく。

黄と白が主体の花火が次々と打ち上げられ、暫しその様子にアデラは見とれていた。

「多分、次が最後……僕が作った花火……」

一際大きいことを裏づける、打ち上げてからの闇の空間。刹那、大きな炸裂音がなりその火花の彩りを見せた。

「……青い……。ロジオン様、花火が青と黄です！」

打ち上がった花火は青が主体の初めて見る色の花火で、アデラは興奮に思わず主の腕を掴んだ。

「……」

掴んだものの花火が終わつた今、辺りは闇。

墨のように暗い池の周囲の向こうに宴の明かりが見え、辛うじて互いの輪郭が見えた。

ふいに生温かい感触が頬に触れ、それが主の唇ではないかと思い、全身が熱くなる。

「失礼しました！ 駐れ駻れしいことをしてしまいました」  
パツと離れ、怪しまれない程度に距離を取る。

主のいる側から舌打ちの音がしたのは、きっと自分の氣のせいだとアデラは思い込むことにした。

しばらく沈黙の後、暗闇に慣れた目で主を見た。

彼もアデラの視線に気付いたのか顔を向ける。

「あの花火の青……なかなか綺麗に出なくて……どうだつた?」

「綺麗でした。黄色と白以外の花火なんて初めて見ました。サファイア色で、とても……」

「師匠が拘つてたんだ、ずっと……病氣で臥せつても……『はつきりした青を夜空に放ちたい』って」

「そうでしたか……」

ロジオンは思い起<sup>レ</sup>すよ<sup>レ</sup>うに瞼を閉じ、ゆっくりと花火の消えた夜空を見上げた。

「魔法を施行すれば師匠なら青の火花なんて簡単なのに……『人の手で作るからこそ、一瞬の美しさが心にいつまでも残るのだ』って」

「簡単に魔法が繰り出せるコンラート様だからこそ、そうお考えになつたのでしよう……」

「子供みたいだつたよ……瞳輝かせてさ。この組み合わせたら配合がどうのこうの……つて……」

会話が途切れた。

泣いてはいない

だが、泣いているように唇が震えているロジオンの心の内は、皆が思うよりコンラートに対する、一言では言いきれない複雑な思いが混濁しているのだろうとアデラは思った。

ロジオンがコンラートと共に世界を放浪していた十数年、側にいたのはコンラートしかいなかつた。

彼と生活をし、教えを忠実に会得し、親がないと思っていたロジオンにとつて、彼は師匠である前に親でもあつたのだ。

魔導術統率協会 コンラートを追つ側の指令者のドレイク。

コンラートが事実を歪めてロジオンに話していたことは、追つてきたドレイクやエマにルーカスに対する態度から見れば分かることだし、ロジオンに手出しきれない魔導術統率協会は彼を使えば逃げること容易い」と、エマ達は話していた。

『それに関しては、ロジオンが成長した現在、誤解は解けている』とも。

コンラートから聞かされていた話。  
エルズバーグに戻つてきて知つた真実。

ロジオンは、コンラートを恨むことは全く無かつたと言い切れ無いだろう。

でも、彼は間違いなくコンラートを好いている。  
だからこそ、滅する方向ではない方法を模索しているのだ。

尊敬と愛情に反する  
恨み、怒り  
戸惑い と共に。  
「やつぱ……憎めないや……」

そうぽつりと呟つた。

宴の場所が騒がしくなつてきている。

「帰り支度かな……もつ、戻らないと……あつー」めん、アデラ。

今日、起きたこと話すつて言つといて忘れてた」

申し訳なさそうに謝るロジオンに、アデラは首を横に振つた。

「謝ることはありませんよ。今日はもつお疲れでしょう? 明日にして今夜はじゆるりとお身体をお休め下さい」

「いや……だけ。明日は明日で忙しいこと思つから」

「焦らなくても私はロジオン様のお側にずっとこいついるのですから、その時に少しずつで結構です」

宴の場所から漏れる僅かな明かりを頼りに、ロジオンは自分に微笑むアデラをじつと見つめた。

そうして深い息を付く。身体の力が抜けていくよ」

「アデラ」

「はい」

「……だからせ、やつ輩ひ誤解を受けるような発言は……」

「他の者がどう言おうと、関係はありません。私はロジオン様の従者なのですから」

「……僕が誤解するんだよね……」

「はい?」

疑問系の返事をしたアデラに、ロジオンは少し残念そうに「うつ言つた。

「良じよ、もつ……アデラは僕の従者。手放す気はありません」

「この言葉をどう取つたのか 分かるアデラの歯切り良い返事に、

ロジオンは苦笑し彼女の手を握つた。

「いけません。従者と手を繋ぐなんて」

慌てるアデラにロジオンは

「じゃあ、腰なら良いわけ?」

と、可笑しそうに返す。

「うう、なお悪いです」

ロジオンのアテラの手を握る力が籠る。

「宴の場所に着くまで良いから……アテラの手は気持ちが良い……落ち着けるんだ」

「……分かりました」

剣ダムについている自分の手が落ち着けるだなんて以外だが、そういう言うのなら主の言う通りしよう。

ゆっくりなロジオンの歩調に会わせ、二人は温かな淡い橙の明かりに向かって歩き出した。

\*

一つのランプがうつすらと部屋を与し出す。

ドレイクが使っている部屋は、いわゆる書斎であった場所。

以前の所有者が残していった書籍の数々は、彼の暇潰しの書物でしかなく、これからに役立つとは到底思えないものばかりである。国王陛下には城にあるものは自由に使って良いと許可を頂いているせいか、元々の彼の性分なのか、読んだと思われる本は部屋の片隅に積み上げられていた。

彼はと言えば、他の部屋から持ち出してきた壁掛けの姿見の前に立ち、鏡の向こうに向かって話しかねている。

『無理に戦わせる』とも無かつたでしょう……』

『彼が早くに自分の力の不均衡に気付いて欲しいと思つた故のことです。思つたより相手が小物でしたから、果たしてそれに気付くまでに至つたかどうかですが』

『彼の身体が充実するのはまだ先……焦ることはありません』

「それまで待てるのですか？」貴女は……イゾルテ様「鏡の向こうからの声が止まつた。

ドレイクの問いかけは続く。

「貴女はもう何百年も待つた。次世代の魔承師を……。いえ、『あの方』を。これは貴女の為でもある。また過去に繰り返されてきた、コンラートのような者達に取り込まれても宜しいのですか？ その度に私が『あの方』を抹殺し、また転生を待つと言つのでしょうか？」

『コンラートを含む、過去の魔導師達は……全て自分の支配下に魔導術統率協会を置こうとなぞ……考へてはいませんでした。……私と『あの方』の考えに共鳴出来ない者達もありました……当たり前なのです。反対する者が出で当たり前……』

「時の流れだと言つなら、今もそうでしょ？ コンラートが離れた今です。私が彼を導きましょ？ 的確に『あの方』を呼び戻せるようにな！」

『……でも』

「私では不安ですか？」

『……違つ』

そう答えたイゾルテと呼ばれた女性の声は、拙いものであった。

「『あの方』を幾度もこの手で殺めた私が、魔力も身体も成長に満する前にあの方を殺めた私が、またこの世代に手を下すと？」

長い静寂が続き『許して……』とすすり泣く声が鏡の向こうから聞こえ、ドレイクは拳を握つた。

「……貴女が今だ迷つてゐるのがよく分かりました。貴女の心のままにと思つていまつたが……やはり、私が導きましょ。ロジオンを」

『ドレイク！』

「心配なら監視を付けても構いません。……私も、もう待つのは疲れています……。ただ、これだけは分かつて欲しい」

ドレイクは優しく鏡に触れ、向こう側にいる女性に告げる。

「私は長い貴女の憂いを、取り除きたいだけなのです

と……。

花火は昔は色付きでは無かつたと。ただ、異世界風だし特にこだわる必要はないかな?と思い、現代でも結構難しいらしい青色の花火を出してみました。

お知らせ:「ムーンライト」ともう一つ「なるう」で掲載している話の続きを書く為に、しばらく休載します。再開は未定です。18歳以上の方でしたら「ムーン」も読めるので、宜しかつたら読んでみて下さい。

「ムーン」の方では「ローラ」言づネームで掲載しています。

27 魔法痛（前書き）

昨年から連載止まって今頃再開です。遅くなつてごめんなさい。

「ロジオン様、失礼致します」

アデラはロジオンが私室として宛がわれている部屋の扉を叩く。朝食の支度が整っていると言つのに一向に起きてこないからだ。

それはロジオンに限つたことではないが。

ドレイクもルーカスもエマも起きてこない。

ようするに、この小城で起きているのはアデラ一人である。

昨日、色々と大変だつたと言つことは聞いているが

『この時間にロジオンを起こしてください』

とドレイクに言付かれたアデラとしては、言つたドレイク本人も起きてこないことに少々ムツとしていた。

「ロジオン様、入りますよ」

前のように魔法で鍵を掛けているかも知れない。

一声かけて扉の取つ手を回してみれば簡単に開いた。

恐る恐る扉を開け、顔を覗かせてみたら奥の方からロジオンの呻き声がして、アデラに緊張が走った。

「ロジオン様！」

帶剣の鞘を抜き奥の寝室に飛び込む。

ロジオンは、寝台にうつ伏せになつて呻いていた。

「アッ……アデラ……」

しかめた顔をアデラに向ける 蒼白である。

「どうなされたのです！ しつかりなさつて下さい」  
剣を鞘に戻し、慌ててロジオンに近付く。

「魔法……」

「魔法？ 誰かに魔法をかけられたのですか…」

「いや…… そうじやなくて……」

「魔法痛でしょ？」

アーテラの後ろで無表情ながら、どこか呆れた雰囲気を漂わせるドレイクがいた。

\*

「魔法痛と言つのは、魔法を使ったことの経験の無い者や久しぶりに一定量を越えた魔力を使つた者、相手の魔力を取り込んだ者に症状が出るのです。 筋肉痛と似たようなものです。」

「……はあ、つまり、ロジオン様は、久しぶりに相應量の魔力を使つたと？」

「使つてるよ！ …… ただ…… 使つ属性が片寄つてたから……」

アイタタ、と言いながら、起き上がるロジオンの動きは酷くぎこちない。

「それだけじゃありません。マントからハインの魔力をその身に取り込んだでしょ？ 魔法痛だけで済んだことを幸運だと思つんですね」

「……今まで平氣だつたんだよ」

「それだけ魔力を駆使していない、と言つことです」

ロジオンとドレイクの言い合いを横で黙つて聞いていたアーテラだったが、ブーツを穿くのにも苦労している自分の足に、今日から始めると言つ魔法の訓練に不安を覚えた。

「ドレイク殿、この魔法痛なるものは、びついたら治まるもののな

でしょう？

二人の間に割り込み、アデラは尋ねてみる。

「筋肉痛と同じようなものですから、直に治りますよ」

「そうでしたか。では、マッサージとかも有効で？」

「それは

「

「すじく有効！」

ロジオンの明るい返答にアデラは面食らつた。

何せ、今までに聞いたことがない程の弾んだ声だ。

ぱああと、ロジオンの周りだけ明るいように見える。

「筋肉痛と同じようなものだからね！ うん！ さすがアデラ！」

「気がきくなー！ 特に 肩から腕にかけて、もう痛くて痛くて！」

「 揉んでーと、寝台にゴロンとうつ伏せになつたロジオンを見て

「 揉むより、同じ程度の魔力を送つた方が早いでしょう……」

と、がつづりロジオンの肩を掴んだのはドレイクだった。

白塗りの可愛らしい小城に似つかわしくない、悲痛で恐怖に満ちた叫び声が響き渡つた……。

\*

「注ぎすぎ。身体がピリピリする。」

「先程よりかは身体の自由が利くでしょう？」

淡々と言い、さつさと前を歩くドレイクにロジオンは、また一つ文句を言った。

「……何で、この人がいるの？」

ロジオンが指を示した先にはハインがいた。

「はい！ 昨日の王子の戦いぶりと経験したお話を伺い、大変感銘を受けまして！ これからは王子に付いて、色々学んでいきたいと思つたのです！」

昨日の傲慢な態度と打つて変わつた、従順な明るい様子にロジオンは顔をしかめる。

いや、態度なんのかの問題ではない。

「……って、言うか、ドレイク。今……関係の無い人を、この場所に置いたら危険じゃ無かつた？」

「そうなんですがね」

さして興味がなさそうにハインを見ると、彼は  
「事情は存じております！ だからこそ私を『ご利用して頂きたくドレイク様にお願い申し上げたのです！ 魔と化したコンラート師を滅するための魔法を会得するのに、どうぞ私めの身体を使ってください！」

そう、瞳を輝かせながらロジオンに迫つた。

「……誤解を生むような言い方、止めてよ……」

ぎょっとしながら後退りするロジオンにドレイクは  
「犬より使えるようになります、と言い切つたのでね。家事全般をアデラ殿一人でこなすのは大変だと考えて了解したのです」と、付け加えた。

「え？？ 家事？」

と、驚くハインに

「成る程」

と納得して頷くロジオン。

「犬は家事が出来ませんから」

ドレイクは悠然と答えると、またロジオンが驚く台詞を述べた。

「何せ、サマンサさんとその弟子も暫く滞在するのでね」

「ええ！ ちょっと……！ それって、また何で？」

「治療専門ですから。治癒関係の知識は深いお方ですし『お役に立てるかと』と申し出てきたのです。……それに……」

まあ、自分の身は自分で守つてもうつ条件なので構わないで  
しよう

ドレイクはそう言つて、途中まで述べた言葉を飲み込んだ。

\*

朝はランニングと柔軟、それと筋力鍛練。

それだけでロジオンはヘトヘトになり、朝食の後眠り込んでいた。

「ロジオン様、起きて下さい。こんなとこで眠り込んでいたらお風邪を召されます」

朝食後、ハインを指導しながら家事に勤しんでいたアテラは、居間の長椅子で熟睡している主に声をかけた。

声をかけても目覚める様子はなく、うつ伏せのまま熟睡している。自分の腕を枕にしても息苦しいのだろうか、顔を横にして寝入つていた。

微かに聞こえる寝息に反応する髪は、柔らかに頬に掛かって、部屋に入る僅かな日の光を取り込み銀の髪を更に神秘に輝かせていた。（こうしてじっくり見ると、本当に端麗な顔立ちをしてらつしゃる）第一王妃様がお産みになつたお子は、ロジオン様を入れて五人。その中で王妃の美貌をそのままに受け継いだと評判なのは、ロジオン様のすぐ下の王子・ヨリオン様だが。

（ロジオン様だって王妃様とよく似てらつしゃる）

まあ、今までルンペン並みの姿で悪臭まで放つていたものだから、皆、その印象が強いのだろうな。

つらつらと思い、良い機会だと言わんばかりにアデラは主を近くで見つめていた。

扉の開く音がし、食い入るように主を眺めていたアデラは縮み上がった

「ロジオン様！ 起きて下わい！」

身体を揺さぶり、懸命に起こしていの振りをする。

「……何？ 何があったの？」

いつもの、のんびりとした口調と様子でロジオンは起きると、田を擦りながらアデラに尋ねてきた。

「い、いえ。寝るのでしたら御自分のお部屋で……と」  
誤魔化したアデラにロジオンは大して不思議がる様子もなく、入ってきた小さな訪問者に笑顔を向けた。

サマンサの弟子・リシールだった。

小走りに近付いてくる、ニコニコと笑みを浮かべながら緩やかに流れるウェーブの髪を靡かせる姿は、十歳前後の無邪気な少女らしさで溢れ、その可愛らしさにアデラも微笑む。

リシールはロジオンの前で止まると、ペコリとお辞儀をした。

「ロジオン様、ドレイク様とサマンサ様がお呼びです。わたしがご案内を仰せつきました」

「分かった。ありがとう」

「ドレイク様から『魔法日記を持つてくるように』とお言付けがござります」

「……ああ、そうだね……渡さないと……」

事の成り行きを教えて貰っていない、アデラの不思議そうな表情を見たロジオンは

「アデラに言つてなかつたね……。向かいながら話そつか……」  
と、立ち上がつたが「イタタ」と不格好に一步一歩いつも以上にむづく歩く姿を見てアデラは慌てた。

「魔法痛がまだ痛みますか？」

そう尋ねるとロジオンは

「いや……これは筋肉痛」

と、アデラに苦笑いを見せた。

\*

足の筋肉痛を堪え、魔法日記を取りに行き、リシェルの案内で部屋へ向かう。

その間、アデラに昨日起きた事を話した。

「代償……ですか……。魔法を扱う者達は、違う価値観をお持ちなんですね」

ふうんと小首を傾けアデラは感想を述べた。

「魔法使いや魔導師は魔法が財産だからね……特に自分が産み出した魔法には執着が物凄いよ」

「わたしのように魔法が使えない者達が執着する、金や土地やそのような物と同じなのですね」

「そうだね……だから

「違います」

ロジオンの台詞を遮ったのは、リシェルだった。

ずっと淑やかに前を歩き案内していたリシェルが、聞いていたのだろう、立ち止まり後ろに振り向き二人と向き合つた。

ふわりとした印象の少女が眉をつり上げ、上目使いで一人を見上げる。

怒りを露にしているのは、歪んだ口許と刺すような視線で分かつた。

「魔法は金よりも、ずっと太古よりあるものです。法律と言つ人と

人の間をに規律と束縛を定める物が出来るより以前、ずっと私達が律する為に守っていた。だから『魔法』と呼ぶんです。魔法を扱う者達の間の高尚な取引を、汚い金との特価交換と一緒にしないで！」

リシェルの言い分に一人は立ち止まり、啞然と彼女を見つめた。

いや、言い分もそうだが、先程までの幼い少女そのままの愛くるしい様子が一変したことにも一人は驚いていた。

リシェルは一人の様子に構うこと無く、肩を怒らせたままに再び前を歩き部屋へと案内を始め、ロジオンとアテラの二人は気まずいままリシェルの後を付いていった。

サマンサが魔法痛の治療を施し、身体が少々楽になつた所でコンラートの魔法日記を開帳することになった。

「他の気が入つた魔力では、日記が開かない可能性がありますからね」

だったら、朝の時点ではサマンサがいることを教えてくれれば良いのに ロジオンの物言いはスルーされ、治療が終了した。

部屋には、この小城にいる全ての人間が集合していた。

皆の興味の的は、ロジオンが手にしているコンラートの魔法日記。

「『水』の称号を持つだけあって、魔力もあつたし新しい魔法もどんどん創つたもんね」。魔法を施行している時の姿は、イケてたわ

ー

エマがその様子を思いだし、うつとりとしながら腰を振る。

「エマ様は、コンラート様の魔法施行を見たことがお有りなんですか！ いやあ、羨ましい！」

その隣をしつかり陣取つて いるハイン。

「俺も一応『地』の称号を持つ魔導師なんだけど……」

言つにも、皆、丸つと無視であり、影の薄い魔導師であることを一人再確認したルーカスである。

「ハイン殿は、エマさんしか見えていないようですから…… アデラがルーカスに励ますように言った。

兎に角、ハインは朝からエマに「機嫌を取つたり褒め称えたりと忙しいらしい。

その成果か、エマとはすっかり仲が良いらしいが

「家事は手抜き」

と、アデラはその件では少々ご機嫌斜めであった。

結局増えた人数分忙しくなったのだ。

昨夜に陛下のお供に来た宫廷の料理人が気を利かせて、保存がきて簡単に作れる食材を置いていてくれたが、得てして魔法を扱う者達は、魔法以外のことは面倒臭がりやが多いと聞く。

興味対象外のものは人でも何でも目に入らないようで、横にも縦にもしない。

そんなんだから、大抵の個別部屋は散らかり放題で足の踏み場がないと言つ。

勿論、皆が皆、そうではないが。

サマンサは身の回りは神経質なほどに理路整然とされていりしいし、ロジオンにいたつては、自分の身だしなみには気を付けないが、室内は綺麗に掃除され整頓されていた。

（一人一人見れば違うのだと思つけど……）

アデラは溜息をつく。

ドレイクは部屋中、至る場所に本のサークルが出来ており、移動前には何処に居たのか予想が付くような部屋だ。

エマはクローゼットと寝る場所以外は、まさしく足の踏み場がない。クローゼット内と化粧台はきちんと整頓されていた……。

ルーカスに至つては片付けようとすると「その場所から動かさないで。分からなくなる」と注意を受ける始末。

（もう、個々の部屋は各自で掃除をしてもらおう）  
こめかみを押さえながら、思い出していくイライラしているアデラの耳にロジオンの詠唱が入ってきた。

瞳を開け主を見ると、その光景に思わず

「あつ……！」

と声を上げてしまい、隣にいたハインにシーツと人差し指を立てられ、慌てて手で口を塞いだ。

刺繡の装丁の見事なコンラートの日記帳が、ロジオンの掲げられた両手に挟まれた形で宙に浮き、ぼんやりとした光を放ちながらクルクルと回転していた。

手帳ほどの大きさのコンラートの日記が、その大きさと姿を変えていく。

手帳から辞典の大きさになり、それから図鑑並みの大きさに。厚みなどほとんど無かった物が、彼の人生の長さを証明するかのよくな厚さに。

本来の形に戻ったのか、日記は宙に浮いたまま回転を止めた。

「所持者の書き換えを……」

ロジオンに促されドレイクは頷き、彼の隣に立つ。

「背表紙へ」

ロジオンが日記に命じると、日記は意思を持つかのように皿の表紙を開けた。

「あの日記、生きているみたいだ……」

アデラは不思議な光景に、目が見開きっぱなしだった。

「軍事訓練には日記は開きませんからね。魔法を扱い、その道で生きる人は皆、持っています」

ハインが答え、アデラに至極優しく説明を始めた。

恐らく隣のエマに良い印象を「えたいために」。

「日記には魔力を自然に取り込める、特殊な羊皮紙を使います。それを使い書くことで、自然に己の魔力を日記に注ぎ、自分だけの日記にすることが出来ます」

アテラは、わざとらしいほどい優しい声のハインを気味悪く思いながら説明を聞いていた。

「では、今やっている『所持者の書き換え』と言つのは？」

「初めて日記を作った時に、何らかの形で署名をするんです。そのまま名前を書いても良いし、指紋や手形でも何でも良いんですが、大抵は」

ほり、とハインはロジオンヒドレイクを指す。

ドレイクが自分の指にナイフの先を突き立てていた。

「血文字で署名がほとんどですね。特に今回のように譲渡する場合、以前の所持者の名前も消さなければなりません。自分の血で以前の所持者の名も塗りつぶせるので、手つとり早いんです。　血は心の臓を流れ続け、その人の人生と共に流れます。自分の血で塗りつぶすことは、以前の所持者の人生を受けとるとも意味するからなんです」

「　血で乗つ取る、潰す　　とも言つのよね……あんま好きな表現じゃないけど」

ロジオンヒドレイクの様子を見ながら、エマがポソリと呟いた。

「私も好きじゃありませんよ」

ハインが嬉しそうに同意した。

ホントかよ

アテラと同じルーカスも、そんな顔をしてハインを見た。

「やうすると、魔法日記は所持者以外は見ることが出来ない　と言つことになるの。うつかり落としたりして、他の魔法を扱う者

達に見られたら大変でしょ～？」

「見たらどうなるですか？」

「所持者の魔力によつてだけどお、ただじやあ済まないわね～。何せ一枚一枚に魔力を込めてるんだし～」

エマの台詞を聞いてアーテラは仰天した。

「ロジオン様は何故、平氣でコンラート師の日記を？」

「ああ、と、黙つてみていたルーカスが口を開く。

「ロジオンも保持者として署名をしているんだよ、きっと。師弟同士で親密だつたり、師が余命が幾許も無いとね、よくやるんだよ」「そうなんですか……良かつた……」

心底ホッとしている様子のアーテラを見て、エマは意味ありげな笑いを見せた。

「アーテラちゃんつたら～、彼氏を心配する彼女みたい～。妬けるなあ！」

「な、何言つてるんですか！　主人を心配するのは従者として、あ、当たり前で……！」

顔を真つ赤にし、全力で否定するアーテラの声が大きくて再びハイント、今度はルーカスまで「シッ」と指を立てた。

「すいません……」

シュンとアーテラは肩を縮めた。

一方、ロジオンとドレイクの二人は、外野の会話など全く耳に入つていなかつた。

ドレイクは指にナイフの先を突き立て、指先から溢れる血でコンラートの署名を塗り潰していく、そして、背表紙の空白の部分に自分の名を書いていく。

はたと気付き、ロジオンはドレイクに尋ねた。

「僕の名前は……消さないの？」

「消す必要は無いでしょ。常に所持するのは私でも、所持者が複数いた方が都合が良いときもあるのです。くだらない者の手に渡るのはロジオン、貴方だつて意に沿わないでしょ？」

「うん……ドレイク」

「何でしちゃう？」

「……ありがと」

フツ、ドレイクが微かに笑つた声を出した。

刹那、宙に浮いていた魔法日記が風に吹てられ、紙が唸るよう聲音を立て、次々と捲れていく。

そのページ数は驚く程多い。

新しい主人を確認するように捲れていぐ日記を見ながら、ドレイクは

「コンラートは魔力を扱う者としては短い人生でした。短かつた故に数多くの魔法や魔薬、召喚を創れ、その魔力が高かつたのやも知れません……」

そう言つた。

最後の一ページが捲れると、日記は新しい保持者に満足したのか、ゆつくりと自らの光を閉じていき、元の日記の姿に戻つた。

「S o v b e d r e ? g e r e ?」（欺き眠れ）

ドレイクはロジオンから教わった呪文を日記に告げると日記は回転を繰り返し、再び手帳ほどの大きさになつた。

「では、頂いていきますよ」

「どうぞ……約束は守つてよ」

「勿論ですよ。師弟の関係になるのですから」

コンラートの日記を胸元のポケットにしまって込みながら日を細めた。

何かやりそくな顔だよね

そう思つたのはロジオンだけではなく、エマやルーカスや、付き合いで短いアーテラさえも嫌な予感で思わず口元を歪めた。

気付かないで二人の様子を瞳を輝かせて感動している、富廷魔導師一人 サマンサにハイン。  
そしてリシェルであった。

## 29 魔法使いに必要？

日記をドレイクに引き渡した後も、基礎体力作りだとかでランニングに加圧式とか言う筋力づくりに柔軟が繰り返された。

魔法使いに筋力は必要なのか？

アデラは首を傾げた。

宫廷の魔法使いや魔導師達は、普段部屋に閉じ籠っているせいか、顔色は青白くてヒヨロヒヨロが多い。

勿論、漏れず例外はいるが。

仲良く皿洗いをしているハインとHマを見る。

少々強めに言つたら

うわっ、キツッ！

と言ひそうな顔をして、アデラを見つめていたハインだが  
「そうよね～。アデラちゃん一人じゃあ大変よね～。元々は仕官なんだしい。わたしも料理ぐらい手伝うわあと、Hマの一言で

「そうでしたよね！ その通りでした！ 私も簡単な料理ぐらいは覚えた方が良いなと考えていたんです！」

と、元気良く同意した。

（魔法を使える男も、恋をすると普通の男と変わらないか）

水洗いした皿を受け取り水気を拭き取りながら、心の中で溜め息をつく。

二人の世界に入っているのでアデラは

『魔法使いに筋肉は必要か？』

の質問が出来ず、黙々と後片付けをしていた。

(後でロジオン様にお尋ねしてみよう)

\*

「うへへへへ

寝台にうつ伏せで寝転んでいるロジオンは、しきりに唸っていた。早くも新たな筋肉痛が襲ってきたらしい。

アデラの質問に答えようと首を横にしただけでも痛みが走るのか少しづつ、ずらしては顔をしかめては止まっていた。

「筋力……て、言つて、体力つて言つたか……まあ、自分が繰り出す魔法に負けない身体が必要……と言つた方が適当。身体を鍛えると言つのは、精神を鍛えると連動しているし……召喚を行使するには精神力が大事だし……攻撃魔法を施行すれば……威力次第だけど反動が返ってくるしね……まあ、皆さん、その辺りはケースバイケースで……魔導師辺りになれば……身体に負担がないよう上手くやつているわけで……とにかく、今はなまくらになつた身体を戻しなさいと……」

「ドレイク殿に言われたわけですね?」

そう言つこと ロジオンはパタリと首を敷き布に落とした。

「それより……アデラ、寒家に戻つて何か手がかりになるような話あつた?」

瞬く間にアデラの表情が曇り、ロジオンは無駄足だつたことを悟つた。

「……そうか……残念だな……」

「申し訳ありません……」

悔しそうに唇を噛むアデラに、ロジオンは首を横に振つて見せた。「がつかりしないで、その為にドレイクに頼んだんだ……そんなに簡単に自分の魔法を造るヒントが見つかるわけじゃないし」

ドレイクの魔法に掛けるしかないかなあ そう言つロジオンの

言葉に、どこか落胆の影が隠れているのをアデラは見逃さなかつた。

「何か懸念することが起こりましたか？」

「……ドレイクは今生きている魔導師の中では一番魔法を駆使できるし……魔力も高い……彼一人でも師匠を滅する事は簡単なんだよ、そんな魔法も彼はきっと知つてゐるよ……長い時を生きてきたんだもの。なのに、何故……ルーカスやエマまで連れてきて尚……結界の中に封じ込めたままでいるんだろ？……」

「それはロジオン様に、猶予を与えていのでは無いのでしょうか？」

「あ……あの人ってね……魔法に関わっている事件に關して酷く冷徹なんだ。魔法使いや魔導師の評価を下げる事件……じゃなくて……魔法そのものの評価を下げる事件に容赦ない人なの。今回のはまさしく、そうでしょ……？ 水の称号を持つ魔導師が……死しても生に執着して襲つてゐる……彼にとつては許してはいけないことだ？」

「だから、猶予を与えているなんて考えられない」言い切ると、ふと疲れたのか筋肉痛が痛むのか、また顔を枕に伏せた。

「育ち盛りの身体を……」こんなに酷使して……逆に身体を壊したらどうしてくれるんだ？」

アデラに構わず、ブツブツと一人言を言つて、ふてくされているロジオンにアデラは

「何処が一番痛みますか？ 揉んであげましょうか？」  
と、尋ねた。

一瞬、間が空き、ロジオンが勢い良く跳ね起きた。

「ええ！？ ほんと？ 本当に揉んでくれるの？」

キラキラとブルーグレイの瞳を輝かせ、アデラに詰め寄つた。

「……以外とお元気そうなので、大丈夫ですね」

アデラが詰め寄つてきた主に引き気味に言つと

「腰！ それからふくらはぎ！ お願ひします！」

ロジオンは、せつとひつ伏せになると、こつもよづすつと軽く蝶アーテラを促した。

はへつと溜め息を一つ付くと、アーテラはロジオンの腰に手をあて、押し込むようマッサージ始めた。

「痛みますか?」

「つうん、気持ち良い~」

「本来なら」自分でストレッチなど、なさるのが一番良いんですけど?」

「うん、分かってるよ。でも……一度、誰かにやって貰いたかったんだ……。いつも師匠にやつてあげていたから……」

「そうなんですか?」

「僕がやつてあげるでしょ……? そうすると凄く気持ち良さそうにしてるんだ……。『そんなに気持ちが良いもんなんだ』って思つて……ずっとしてもらいたいな~って思つてたんだ……」

「まあ……」

「それで御褒美についてね……次の日にソフトクリームを買つてくれたんだ……」

「お好きなんですか? ソフトクリーム」

「うん。美味しいよね……ああ、食べたい……」

アーテラのپーッと吹き出した笑いに、ロジオンは不思議そうに顔を起こす。

「何か……可笑しなこと言つた? 僕……?」

「い、いえ。ソフトクリームが好物とは、ずいぶん可愛らしいなと」  
口元に手を当て、クスクスと笑つているアーテラにロジオンは方置を釣り上げ、口を尖らせた。

「しょうがないでしょ。師匠が甘いもの食べ過ぎると虫歯になるからって、滅多に食べさせてもらえなかつたし」

「でも、コンラート師は甘い物がお好きだったと昨夜……『一緒に召し上がるなかつたのですか?』」

「少しば……ね」

「ソフトクリームは別格なわけですね？」

「……冷たいものを食べ過ぎるとお腹壊すつて……滅多に食べれなかつたんだよ」

「私の御褒美も、ソフトクリームで結構ですよ」

「……はいはい……何だつてなあ……そんなに可笑しいかなあ……？」

ますます口を尖らし、『ヨーヨーヨーヨー』と話す主に、アデラは歳相応の感情を見た気がし、笑いが止まらなかつた。

硬くなつてゐるロジオンの腰を押しながら、ふと思つたことを口にした。

「ロジオン様、すぐにコンラート様を滅する」とが出来る力をドレイク様が持つていて、それをしないと言つなら、第三者の意見が入つてゐるのかも知れませんよ？」

ロジオンが思いつきり眉間に皺を寄せた。

「……第三者……？」

何か思い当たる節があるのかロジオンは、一点を見つめたまま考えに耽りだし、何か納得したかのように頷いた。

そしてアデラに

「こう言つ勘は鋭いよね……アデラは……」

「？」

のんびりとしたいつもの口調なのに、どこか棘があつて今度はアデラが思いつきり眉間に眉を寄せた。

勘と言つのは経験も必要なことなので、アデラに恋愛事に勘を働かせよ と言つのは無理なことである。

\*

小さな影が、ドレイクの使つている部屋の扉を開く。

その影は慎重に、音を立てずに扉を閉めると、ゆっくりと辺りを見回した。

幾つかの本で作られたサークルと、積み上げられ、塔のようになつた本。それは、一見、乱雑で適当に置かれているように見えるが、その影は、実は緻密な法則性に基づいて並んでいることに気が付いたらしい。

「……人の成りを形成しても、獸の習性は抜けきれない」と見える「中傷とも聞き取れる言葉を吐く声音は、その小さな影と似つかわしくない老成したものであつた。

「――！」

奥から視線を感じ、影はそちらの方向を向き、安堵に肩が揺れた。それは大きな姿見の鏡であつたからだ。

ただ、自分の姿が写し出されているだけ そう思つた。

「自分の姿を見て、惚れ惚れしているまいな？ あの男」

鼻にかかる笑いが口元から漏れる。

あの種族にしては自己愛が強いと陰口を叩かれている奴だ。鏡が置いてあることに何の疑問もわからない。

やはり、あの人を起こすしかないような。

小さな影は、そう思い直すと、来た時と同じように音もなく扉を開け、閉じた。

扉が閉じた後、何も写らなくなつた鏡に、ゆっくりと人の姿が写し出された。

それは、つい先程の侵入者の影の姿 リシェルであつたが ゆらりと鏡面が揺れ、彼女の姿が歪み形容できぬほどになつたかと思うと、再び女の姿が浮かび上がつた。

そこに写し出されたのはリシェルの小さな少女の姿ではなく、青みのある銀髪の美しい乙女の姿であつた。

そのブルーグレイの瞳を真つ直ぐにリシェルがいた場所を暫く見据えていたが、ふつと諦めたように瞳を閉じると右手を軽く振つた。

鏡面にはもう、人は写つておらず、闇の中に異形の物かのようになつた本が写つてゐるだけであつた。

世界各国、その国それぞれの習慣がある。エルズバーグは多国籍国家として名が知れているだけでなく、人口も然り。

『職人と商人の国』と言つ別名があるだけに人口の流れがあり読みにくいか、推定として十万人はエルズバーグで生活をしていると言う。

それだけ大きければ、宫廷で全ての地域を執政ことは不可能で、東西南北に分け、そこから更に細かく分け行政を行つてはいる。そして やはり、と言つて、習慣なども大きく四つに分かれていた。

その分かれた習慣の一つに『風呂』がある。

「エルズバーグは、朝にお風呂に入るのね~」

「エマさんの育つた国は違うんですか?」

「うちはね~夕方から夜が多いわねえ。でもお、一日何回も入る人、結構いるわよ~」

「綺麗好きな方が多いんですね。エマさんを見れば分かります」

「きやーーやだあー！ 恥ずかしいけどお……嬉しいー！」

ポツと顔を赤らめ、恥じらうエマの隣に並び歩くハインは

そのすれていない初々しい彼女の姿に

湯上がりの、ほのかに香る女の匂いに

鼻の下が伸びそうになるのを、顔の全筋肉を使い阻止し、爽やかな好青年を必死に演じていた。

(いい香りだ~ ああ……)

抱き締めたいと悶えて震える手足を押さえ込み、エマの横にいる。

ハインは魔法を扱う者の中では珍しいタイプだ。  
言えば、生前のコンクート師のような……。

英雄色を好むと言つべきかの国の謂れを信じ、そのままに実行にうつして、女性経験値は魔法実践経験値より遙かに上回っていた。

しかし

(この気持ちは何なんだろうか?)

彼女を初めて見た時から続いている、この、胸の奥のくすぐった

る。

彼女とこうして他愛の無い会話をしているだけなのに、魔法の呪文を口ずさむより弾む気持ち。

彼女の行動・言動・仕草の全てを見てみたい。

触れたいのに、触れてしまつたばかりに嫌われはしないか?と

言つ 自信の無い不安。

いつでも彼女を目で追つてみたい。

自分の視界から消えるのが怖くて仕方ない。

閉じ込めて自分のものにしたい。

でも、欲望のままにしたらきっと嫌われる。

今までに経験したことの無い、不安と期待に入り交じった気持ち。  
でも、何故だろう?  
ちつとも不快じやがない。

初めてだ。こんな感情。  
(これが恋)

これが  
恋

生まれて初めて女性を好きになつたハインがあつた。

＊  
「いけません！ お入りになつて下さい！」

逃げよつとするロジオンの襟首をひつ掴まえ、問答無用に引きずり風呂場へ向かうアデラ。

「一日一日位、入らなくとも大丈夫なのに……」  
「昨日、運動して汗をかかれたでしょ！ 本当に汗を流すべきなんです！」

「そんなの……濡らしたタオルで身体拭けば良いじゃない」「それすらもされておりませんよね？」

アデラはキッと、自分が首根っこをひつ掴んでいる主を振り替え様に睨んだが ルーカスだった。

「ひやあああ！ ルーカス殿！？」

慌てて手を離した途端、ロジオンの姿に戻り畠然とするアデラだ。

「えつ？ えつ？ 何？ 一体何が？」

「『成りすまし』って言つ幻術だよ……」

じゃあ！ と、アデラの手が離れたことを良いことに、ロジオンは駆け足で逃げていつたが

「マッサージ！ 今夜はやりませんよー！ 臭すぎで倒れるのは」「めんですからー！」

とアーテラが駆け足で去つていぐ主に大声で呼び掛けたら

「やだ」

と速攻で戻つてきた……。

\*

「手間を取らせないで下さいよ」  
設置式の風呂桶には、湯気が煌々と立ち上ぼり丁度良い湯加減の  
ようだ。

「嫌いじゃないけど……面倒なんだ。ここに来る前までは……毎日  
入らなかつたし」

「国から国への旅と聞いておりますから、それは当たり前でござ  
ましょ? 今は定住されているのですからね。しかも育ち盛りで  
新陳代謝の激しい年代に……」

次々に自分の服を脱がしにかかるアーテラに、流石にロジオンは慌  
てふためいて逃げだした。

壁にへばりつき、キヨトンとした顔でこちらを見てくるアーテラに  
言った。

「自分で脱ぐから……!」

「あ……! す、す、す、すすすすいません!」

上半身が裸の主を見て、ようやく事の重大さに気付いたアーテラは  
同じく、ロジオンから慌てふためいて逃げた。

ひしゃげるほど、思いつきり閉めた扉の向こうでアーテラは

「も、申し訳ありません! 自分の弟と錯覚してしまいました!

弟も風呂に入るのが苦手で、いつも服をひっぺがしていたのです

から！」

と、慌て食つている口調で弁明した。

「……うん、そう……弟ね……ちなみに弟さんは幾つ?」「?十一ですか」

十一のガキと同じ扱い……。

来年で成人なのに……。

胸がシクシクする。

もしかして失恋かしら?

壁に頭をぶつけ、一人落ち込むロジオンであつた。

\*

「手伝つて貰つて助かりました。ありがとうございます」

アデラは朝食後のテーブルを片付けながら、同じく片付けをしているサマンサに礼を言つと

「いいえ、押し掛け同然で滞在しているのですから、このくらい当然ですよ。どうぞ遠慮無くお申し付けください」

サマンサはゆるりとアデラに微笑みながら言葉を返した。

物静かでおつとりな魔導師の老婦人と言う印象のサマンサであつたが、意外にも家事は手際が良いし、特に料理は大した腕前だつた。富廷料理人が置いていつてくれた食材と調理済みの食べ物を上手く組み合わせ、飽きない工夫をしてくれた。

「わたし……手を動かすものが好きなのよ。料理とか手芸とかアデラに向ける笑顔は、本当に嬉しそうでアデラも顔が綻ぶ。

「普段からもやつていらっしゃるんですか?」

「一人でしょ?面倒で富廷の食堂とかで適当に済ませてきたけど。

……今はリシェルがいるから作つてているのよ

重ねた皿を大きな盆の上に乗せ、一人で流しまで持つていく。自分ができる労力は魔法に頼らない 魔法を扱う者達の生活基準である。

「リシェルは何時から一緒に？」

「まだ短いのよ。一年も経っていないわ。あの子、わたしがまだエルズバーグに来る前に親しくしていた方の娘でね……。一人になつて、私を頼つて来たのよ……初めて会つた時は、ガリガリで肌に血色は無いし髪は荒れてボサボサだしで……栄養の整つた食事をされなくては と思って作り始めたのよ」

「そうでしたか……」

「歳月が経つて、国の様子も大分変わつていたようだし、ここに辿り着くまで苦労したのは一目見て分かりました……それなのに、ひねくれた様子も見せずに懸命に私に尽くしてくれて……」

「良い子ですね」

涙を浮かべ頷くサマンサを見て、昨日見たリシェルの変貌の一片を話すのは止そうと思つた。

エルズバーグに来るまでに辛い思いをし、どこか歪んでしまったのかもしけない。

(サマンサ殿と生活していくうちに、きっとリシェルの心の軌道修正がされていくだろう)

この方の側で過ごすなら、きっと大丈夫

アテラは穏やかな物腰の、優しい老魔導師と共に微笑んだ。

「 そう言えば……」

調理場に続く洗い場まで盆を持つていや、一息付くと思に出したのかサマンサが首を傾げた。

「ロジオン様の『ご様子がおかしく』ござるませんでした？」「いへ……常に消沈なさつていたよつにお見えでしたけど……」

何がござりました？ セツアテラに尋ねられて、アテラも首を傾げるばかり。

「私も気にはなつていたのですけど……はつせつとお言つてにならないのです」

「かたやハイン様は気が落ち着かぬご様子でしたし……」

「それは原因は分かつておりますから問題がありません」

鈍いアテラもそれだけは、サマンサの問いにせりつと答えた。

田アト、気にするといひは自分の主であるロジオンの落ち込みつぶりだ。

ドレイクに叱咤された時とは違つ秋波を感じる。

（風呂に入った後なのよねえ……）

思ひ出してハツと気付きアテラの顔が青くなつた。

（わざとではないにしや、お年頃のロジオン様の上半身を見てしまつたから羞恥で……？）

纖細な年頃に何て事をしてしまつたのか――

（これはすぐに再度ロジオン様にきちんとお詫び申し上げねば――）

あたふたとし出したアテラにサマンサは、ますます首を傾げていると、玄関の呼び鈴の音が響いた。

「来客……？」

アテラとサマンサは顔を見合せた。

—昨日の前夜祭のイベント扱いされたロジオンとハインの一騎討ちの後、ロジオンの父である陛下に頼み、この辺り一帯は出入り禁止にしているといったのだ。

そのはずなのに何故

揉め事の予感にアーテラの胸中は大いに焦るやうな気がした。

「うわあ、予感は良く当たる。」

玄関に出向いたアーテラは、その来客の姿を見て頭を抱えた。

「…………やつぱり…………。どうして嫌な予感は当たるのか…………」

恥々しそうに咳いた先にはアーテラの顔を見つめ、神妙な顔付きで立っているハイルマーがいた。

### 31 初恋、失恋、恋敵（2）

「お前……一体、何の用なんだ？」

鬱陶しいのがやつて來た アデラは、そんな様子を隠さずにエイルマーに応対した。

当のエイルマーには、そのような意思は田下伝わっていない。それどころか、小さな瞳を潤ませてアデラに迫り、距離を縮めてきた。

「良いんだ、アデラ……君の気持ちは分かっているよ。何も心配はいらないよ。全てを承知で俺はこうして迎えにきてやつたんだ……」「やつたんだあ？ いや、その前に私の気持ち？ 分かっている？ 何を分かっているんだ？」

妄想が入つていると思われる田線上の台詞に、アデラは頭を抱えた。

「自分の身の上に危険が及んでいるのを知つたから、俺を冷たい態度で遠ざけたんだろう？ ああ！ 俺は何て罪作りな男だったんだ！」

太陽の光を受けて輝く砂漠の砂のような君、このような薄暗い陰気な城に閉じ込める悪い魔法使いから救いに來たんだよ！」

「……色々間違いすぎてどこから突つ込んだら良いやら……」

酔いしれているエイルマーは、かなり質が悪い。

騎士としての腕と素質は筋金入りなのに、女性に対する思い込みの勘違いも筋金入りなのだ。

頭を抱えているアデラの腕を掴み、エイルマーが切り出した。

「危険をかえりみず君のために迎えに來たのだ！ さあ！ もう本心を隠す必要など無い！ 私の胸に飛び込むんだ！ そして共に帰ろー！」

「主を置いて帰るわけがなかろう！ 妄想ではつちやけおつて！」

「帰るなら一人で帰れ！」

アデラは掴まれた手を払いエイルマーに怒鳴つたが、彼は呆ながら大きな溜め息を付き首を横に振る。

「はあ……君はどうしてこうも素直じゃないんだ？ それともロジオン王子に惑わされたままなのか？」

「貴様の頭の中が煩惱だらけなのだ！」

「アデラ……私は君が王子の欲望の純潔が王子に散らされていても構わないのだよ？ 心身共々ボロボロになった君を癒してやれるのは私だけだ……さあ！ アデラ、私の胸に飛び込んでおいで！」

高ぶつた感情そのままに両手を広げ、エイルマーはアデラを誘う。

今度はアデラが溜め息を付きながら首を横に振る番だった。  
(どうしてこう言葉が通じないんだ……)

どうしよう。

追つ払つて早々に宮廷に戻つて欲しいが、こいつは一筋縄では行かないのはよく知つている。

(エイルマーより、がたいの良い奴数人に連れてつて貰えれば良いんだが……)

残念なことに小城には、該当する人物はいない。  
ドレイクが見かけによらなそつだが、こんな面倒なことに協力してくれそうもない。

「この面白そうな人、誰？」

異邦人より酷い相手をどう追い返そうか思案を巡らせているアデラに、後ろから声をかけてきた人物 ロジオンだった。

\*

「ロジオン様 ぶつふ

アデラが無様な声を出したのは仕方ない。

エイルマーがアデラを押し退けた際に、彼の腕が彼女の顔に当たつたのだ。

庇う姿勢を取つたらしいが、顔面強打では庇われた方は迷惑である。特にこの場合には庇われたくない男に庇われているのだし。しかし、庇つた方の男 エイルマーは自信満々・英雄気取りで胸を張り堂々とロジオンに物申していた。

「ロジオン王子！ 立場を利用し相思相愛の男女を切り裂くことは、神をも許されぬ行為ですぞ！」

「アデラは……以前、付き合つてている人はいない……と僕に話していたけど？ って言つたか、君どちら様？」

「しかも！ 主従関係と言う逆らうことの出来ぬ者に、なんと言つ不埒なことを！」

「……だから君誰なの？」

「人として恥を知らぬのですか！」

「だから……君名前は？ どこの所属？」

「今、心を入れ替えればきっと神もお許しになります！ そして私もアデラだって貴方様の行為を許します！」

「だーかーら！ 君誰！」

「聞いているんですか！」

「それはこっちの台詞だよ！」

エイルマーは肩が揺れるほど、大きな溜め息を付いて言つた。

「なんと言つこと……。話し合ひどころか会話も成り立たぬとは

「「それはお前だ！」」

ロジオンとアデラ、二人声が揃つた。

「の騒ぎにエマとハインが顔を出してきて、新しい顔に首を傾けた。

「ロジオン、今この辺りは出入り禁止でしょう。どうして知らな

い顔がいるのぉ？」

腰を振りながら軽やかな足取りでロジオンに近づくエマの姿を見て、後ろで癒されているハインであつたが。

「私は貴女を待っていました！ 貴女こそ私の花！ 生きる理由！ 生涯の伴侶！」

ロジオンヒアデラと口論していた男がそう言いながら、瞳を輝かせエマの手を握りしめたのを見た瞬間、あり得ない早さで間を詰めた。

「おい！ お前！」  
しつかりと握りしめた手の握力はさすがで、ハインの腕力では離すことが出来ない。

エイルマーはハインなどその場にいるのに見えていないよつで、相変わらず瞳を輝かせエマを見つめ、手を握られた当のエマは、目を見開いたまま固まつていた。

「アデラ」

ポカント口を開けたまま事の成り行きを見ていたアデラにエイルマーは顔を向けると、申し訳ない様子で口を開いた。

「アデラ……すまない。私は眞実の人には会つてしまつた……。君の気持ちは嬉しいが、受け取ることは出来ない……。女性達を惹き付けて止めない私を許してくれ」

「はあ？」

アデラとエマ、二人揃つて疑問詞の台詞を吐いたが、疑問詞の内容が違うのは見てとれた。

（「いつあんたと付き合つた？ つーか、私があんたに惚れている設定になつているのは何故だ？」）

アデラ。

（どうして私があんたと付き合つことになつてんのぉ？）

二  
四

脳に「かおり」たなら、是非エイルマリに聞かせたい言葉である。

例え聞こえても、彼の脳に入っていくかどうかだが

「ちがうと一離しなれこむ。」

す固へて纏りてこべ。

たしじやなしの！」

「恥ずかしからぬくでも無い……私には分かっている。お互いか  
會つた瞬間に恋に落ちた」とを  
一

「……あんた、頭の病気？」

忍の病の発病率は、約10%とされています。

た。

「さやつ！ 気持ちワル～！ 筋肉系好みじゃない！」

「おたるの母[おやし]」……何で可憐[かれん]い子猫[ねこ]ちゃんだね[わ]

勘違いもいに加洞に「N」は、  
H級を離すのだ！

どうにかして、エイルマーからエマをひつぺがそつとするハイン

アテニ

その様子を遠中から離脱したロジスンがやや離れて眺めていた

ج

確かにヒマは可愛い。

やの悪が、世の姿を知っているロジオンには恋心も嫉妬心も沸

き上からなし

今思うのは

(Hマの過去を隠し続けるのは……いけないんじゃ……いや……でも)

焦りに躊躇い、この場を收拾しなくてはならない思いである。

「ちょっと……ちょっとみんな落ち着いてよ……」

声をかけ止めに入るが皆興奮状態で、ロジオンの声など耳に入つていなかつた。

「私はあ筋肉だけの頭空っぽな奴が一番嫌いなおーー！」

「その通りだぞ！ 離したまえ！ 力で女性を屈せようなどーー！」

「いい加減にしろ！ 団長に報告するぞーー！」

その時

「手を離せ つて何度も言えば分かるんだよ？ おい」

ドスのきいた低く野太い声が響き、皆、凍りついたように固まつた。

それもそうだらう。

その声はエイルマーの目の前 Hマから聞こえたのだから。

「その薄汚ねえ手を離しやがれ、頭のイカれた筋肉野郎！」

エイルマーに向けられたHマの視線は、眼力が逞しい。

「 ヒツ！」

雰囲気のあまりの変わり様に息を飲み込んだエイルマーは、そのがたいから想像できない高い声を上げ そのまま身体が跳ね上がり、尻餅を付いた。

「エイルマー？」

アテラは何が起きたのか分からず、前屈みで尻餅を付いたエイル

マーを見る。

「エイルマーだ？ エイルマーつづーんか？ この脳内筋肉」  
Hマの低い声音に慄きながらも「そうですが」とアデラは返事した。

「俺の名前と同じかよ！ かあー！ ムカつくううう！」

「 えつ……？」

アデラ、ハイン、エイルマー。

三人、野太い声に固まっていたが、新たな事実に完全に凍りついてしまつた……。

「……自分から言つちやつたよ……」

あーあと、少し離れた場所でロジオンは頭を押された。

### 32 初恋、失恋、恋敵（3）

「エマは東のリーシュの国の出でね……向いの言語で書くと『E i R U M A』なんだ」

ロジオンは三人の前で、羊皮紙にスペルを書いて見せた。  
「それで頭文字の『E』は『エ』……後ろの『MA』は『マ』と呼ぶわけ……。その国独自の名前のスペルだから……まあ、今の本人見ても思い付かないよね……」

EとMAに丸を付けられた羊皮紙を見て呆然とするハインとエイルマーは、すっかり気の抜けた炭酸水のようだつた。

「……それは分かりましたが、ロジオン様……エマ……いや、エイルマーは何故……」

「『エマ』で良いよ……と、『エマ』を呼ばないと……男女問わず恐ろしい目に……」

「……あつたんですね……ロジオン様は……」

真っ青な顔で頷くロジオンは、過去の経験を生かした助言だと、はた目でも分かつた。

共に頷くルーカスも同様であった。

アデラは一つ咳払いをして、話を続けた。

「エマ殿はそのお、いつから……なんでしょう？　どのように女装を？」

「女装じゃないんだ。今、女性化している最中なんだよ」と、ルーカス。

「女性化？」

アデラの再問いかけにルーカスは頷くと、説明を始めた。

「手取り早いのは薬を引用したり、まあ、身体に手を加えたりなんだけど、薬だと定期的に服用しなければいけないし、身体に傷を付けてだと後々に後遺症が残るかもしれない……だから、自分の魔力を使って自身を変化させるんだよ」

「そんなことまで可能なのですか……魔法と言つるのは万能なのですね」

感心しているアデラに

「いや……可能だけじ、実際施行するとしたら……大変だよ」とロジオン。

「うん、そう。身体の造りは勿論、骨格やら皮膚やら筋肉量や脂肪にホルモン等々 変えていかなきゃいけないからね。一日一日で出来るものじゃない。時間を掛けてゆっくり変化をさせないと狂いが生じる」

「では ハマ殿はいつたい何時から……」

「僕がエルズバーグに向かう前に……一度会つた時は……今のハマになつていた……」

「吃驚したろ? その前はまだ男の成りだつたし……」

ルーカスの言葉にロジオンはゆっくりと首を振り

「いや……その時より、数年会つていなくて……その後の方が……。筋肉質の体育会系の姿のまま……文物の服を着て現れた時の……あの……」

「ああ……それな……声が先に女性化したから……それで我慢が出来なくなつた……らしい……」

思い出したのか二人、脂汗を搔きながら紅茶を飲んだ。

「それを聞くと、随分長い時間が掛かるようですね……」

「僕が生まれる前から……やつていたらしからね」

「俺が気付いたのは、もう少し前 魔法を施行する力が弱くなつて『終わりの時』が近付いてきているのかと思つて尋ねてみたらつて訳でね……成人した身体を形成し直すからなあ、少しずつとは言え相当量魔力を消費するもんなんだな、と

「じゃあ……エマは今よりずっと魔力があるわけなんだ？」

ロジオンが驚いたようにルーカスに聞いたが、いつもゆっくりとした口調が少々早くなつただけで、あまり驚いたようには見えない。

「『結界』の魔導師と成りうる人材だつたんだ」

「『結界』……？ 称号でしょうか？」

「ああ、そうだよ」

「称号は四大元素の『火』『水』『土』『風』しかないかと思つてました」

アデラの言葉にルーカスは首を横に振つた。

「それは『元祖』とも言われていてるもので一般的に有名なものでね。実際は地上にある、有りとあらゆるもののが物質に対し、それぞれ得意としている者達がいるんだ」

納得したように頷くアデラにルーカスは話を続ける。

「本当なら今頃は魔導師なはずなんだ。『結界』の称号まで付いている魔導師になつていただろうに、それより『女』になることを優先してしまつたんだよな……」

眉間に眉を寄せ喋るルーカスは怒りと憤りより、憤懣やる方ないような表情に見えた。

話が一区切り付き、ふらりと、エイルマーは立ち上がり、よたよたとした足取りで小城から去つていった。

「お騒がせな人だね……」

ロジオンの言葉にアデラは同意した。

「またすぐに新たな恋に出会い立ち直りましょうから」

「そう言つもの……？」

「あやつは、そう言つ奴なのです」

「ふうん……で、アデラ……君は彼を追わないの？」

「何故ですか？」

「何故つて……付き合つていて……君が心配だから追いかけてきた

んじやないの？ 彼？」

アデラの首が思いつきり横に振られる。

「何をおっしゃいますか！ 私と奴の間に、そのよつた事実はありません！ ただの同僚です！」

「ふうん……。でも……彼はそう見てなかつたようだよ？」

「いつも宮廷城の誰かに勝手に惚れて、脳内で付き合つていると言う設定にされてしまうのです。 これで何回田なか知りませんが……」

「……思わせ振りな事をしたんじやないの？」

「い、いいえ！ 決してそんなことはありません！」

確かにロジオン宅で徹夜をして帰つた日、起こされ何故か説教され  
その時、眠い中、いい加減に相づちを打つていた  
その時、エイルマーに勘違にされたのだろうと詰つじとは間違いないだろ？

まだ私に粘着しているならまだしも、途中で対象人物を変えたから特に主に話す必要はないだろ？ アデラはそう思つていた。

（しかし……適当に相槌を打つたことが、思わせ振りな言動になつてしまつて、このような騒動までに発展しまつたのだよな……）  
そう考えるとアデラは居たたまれなくなり、ロジオンに頭を垂らした。

「申し訳ありません……」

「何故……謝るの？ 向こうが思い込みで乗り込んで来ただけなら……アデラは謝る必要がないでしょ？ それとも……彼が誤解をするような言動をしたの……？」

「」の時、主の様子が違うことにアデラはようやく気が付いた。

周囲の雰囲気を察することに長けていたハインは早々に部屋から退出しており、無頓着なルーカスは暢気に茶のお代わりをしていた。

一年前、初めて顔を合わせた時と同じ、平坦で冷たい口調。固い、何の感情も見れない表情。

「どうなの……？」アデラ

「そ、それは……」

向けられたロジオンの眼差しの冷たさは、どこか軽蔑の光が宿っているようアデラは思わず俯いてしまった。

「……」

ロジオンはじつとアデラを見つめ  
アデラは、ロジオンの視線を避けるように俯く。

よろしくない雰囲気の中、空氣を読まないルーカスは一人茶をする。

「アデラ、何か食べるもの無いかな？」

茶だけ飲んでいて胃が刺激されたのか、ルーカスが徐に尋ねた。はつと顔を上げたアデラにロジオンは

「菓子でも出してあげて……」

そう言つて立ち上がると、先に扉に向かって歩いて行つてしまつた。

「ロジオン様、どちらへ？」

「ドレイクの訓練の続き……もつ時間だから」

しばらく邪魔しないで そう言つと、振り向きもしないで部屋

から出てつてしまつた。

「ロジオン様……」

呆然とするアーテラに

「ついでにこの紅茶、渋くなつてゐるから湯を足してくれると嬉しいんだけど。後、お菓子は栗が良いなあ。出来れば焼き栗じゃなく甘く煮たもの」

と、またもやルーカスは空氣を読まない発言を繰り返した。

### 33 初恋、失恋、恋敵（4）

洗濯物のシーツが風にそよぐ。

エルズバーグは秋から冬にかけ乾燥する。

天気が良い時は、朝早く干せば夕方前にはよく乾いた。アデラは乾いたシーツの前でずっと立ちぬくしていた。仕事は山ほどあるのに頭が働かない。

思い出すのは ロジオンの硬化した態度。平坦な冷めた口調。

ここ数日で一気に親しくなり、比例してロジオンの口調も柔らかくなり、年相応の態度や表情も見させてくれるようになった。

信頼されてきた。

「……そう思つてきたのに」

弱音が吐き出される。

「この人なら私の真実を知つても気にしないでくれるかもつ……」「うん……そうね……」「私の変体が終わるまで待つてくれるかなつて……」「うん……？」「自分が吐いた台詞じゃない。

一体、自分は誰に相槌を打つているんだ？

靡くシーツを避け、ロープに掛けられた洗濯物達の間を潜ると、茂みにしゃがみこんで俯いているエマがいた。

「エマ殿！」

「エマです」と泣いていたのか、エマの瞳と鼻先は真っ赤でヒヤツ

クリを上げていた。

「アデラちゃん……」

すんすんと鼻を啜りながら、ゆっくりとこちらを見上げるHマ。大きな瞳から瞬く間に涙が溢れ、すべらかな頬を伝い落ちる。時々噛み締めたのだろう。唇は赤みを帯びていた。涙でぐちゃぐちゃな顔なのに

（か、可愛い……）

元から女の性を持つ自分より可愛い。（信じられないわ、ああ言われてモ）

「……聞いたんでしょお？ 私のこと。ロジオントルーカスから

「……はい」

「ハインは？ どうしてたあ？」

「ハイン殿は……しばらく放心状態でしたが、場の雰囲気を察してえ？ ハイン殿？ え？ え？」

かああああとHマの頬が赤くなり、流石のアデラも畳然と口が開きっぱなしになってしまった。

「エエエエ、エマ殿？ 落ち着いてくださいね？ あの男、性格に問題ありませんか？ 確かにお洒落ですし、容姿もなかなかですが、でも、でもですね」

「アデラちゃんこそ落ち着いてよ。……良いじゃない。下心があるて優しくてもさ。私に好かれようと一生懸命で、後に付いてくる姿がシロイワヤギみたいなんだもん」

「白いわ山羊？」

「シロイワヤギ。全身白い毛皮で覆われていてね~、断ベキの崖に住み着いてるの~。可愛いんだあ……それに似ているの、彼……」

「……もう少し、メジャーな動物に例えてくださいば想像しやすいのですが……」

人の好みは一概に言えないとは言え、Hマの好みはシロイワヤギを知らないアデラにとつては首を傾げざる得ない。

「ハインなら……今の私でも受け入れてくれ……る……かもって……でも、でも……駄目なのかなあ」

「エマ殿……」

エマの瞳から絶え間なく流れる涙を、アデラは一番側に干してあつた拭い布で拭いてやる。

「アデラちゃん……！」

いつん、とアデラの胸にエマの額がある。

「うっ、うっ、うえ、うえええ！」

絞り出すように泣くエマの背中をアデラは、ひたすら擦つてやる。

「泣いたら良いですよ、氣が済むまで……」

\*

「私、物心ついた頃から自分の身体に違和感を感じたの……。男の子の遊びより、女の子達と女の子の遊びをする方がずっと好きですね……。小さい頃はそれで良かったけど、成長するにしたがつて周囲も“おかしい”と騒ぎだしてきたの……言われても仕方なかつたけどね、女の子達と混じつて髪結つたり紅引いたりしたから……。親にも怒られて……変なことなんだつて思つて、髪切つて必要以上に筋肉付けて……」

「……」

アデラとエマ二人、横並びに座り風に揺れる洗濯物をぼんやりと見つめながら座り込んで、黙つてエマの話を聞いていた。

「強力な結界を張れる魔法使いとして名が知れるようになつて、協会に呼ばれて次の『結界』の称号を持つことになるだうつて告げられても……ちつとも嬉しくなかつた。だつて本當になりたくて、したくて今の姿になつたわけじゃないもの……。そりやあ、魔法なんて魔力がなければ使えない、私はその点で恵まれていた。魔法を使い万人の為に役立てようと言つ気持ちはあるわ。でも、自分のために使つてはいけないの?って思い始めたの……」

「それで性交代を……」

「ロジオン達から聞いた?」

「ルークス殿が残念がつておつました。今いり、当に魔導師になつて『結界』の称号を持てただりつにと

「あいつらしあ。確かに称号を持てることは名誉なことなんだろつて思うけど 決心していなければ私、今頃狂つてゐるか自分で命絶つてたわ」

「今は…… そう思いますか?」

アデラの問いにかけにエマはまつと田を見開き、しばらへ一点を見つめて考えに耽つた。

「フフ……」

そう自嘲するように低く笑う。

「思わないわあ。苦しく悲しいけど死にたいとは思わない。

何か分かっちゃた」

悟つたのか、思つ存分泣いたせいが、エマの顔は先程よりずっと晴れやかだ。

そして立ち上がり、たつぱりフレアの入つたスカートに付いた塵をはたく。

「私が、女として生きたい気持ちを理解してもらえないのが悲しかつたんだわあ

「エマ殿」

「でも、それつてえ、その事をきちんと話していなかつた私も悪いんだよね」

「話すわあ、ちゃんと。ハインだけじゃなくて ルーカスやロジオン、ドレイク……そして魔導師様にも。自分が自分らしく生きたいから女の性を選んだことを。否定されるか認めてもらえるか分からぬけどお」

そうアデラに微笑むエマの姿は、今までと違った意思を持つ一人の女性だった。

「素敵です、エマ殿」

アデラも立ち上がり、エマの手力強く握った。

「アデラちゃんも～仲直りした方が良いんじゃない？」「えっ？ わ、私はロジオン様とは何もないですよ？」

「私、ロジオンとは言つてないけど～？」

したり顔のエマに、アデラはグッと言葉が詰まる。

「あの子、普通の男の子と同じように接した方が良いと思うの～」「い、いや……第二王妃様には姉のように接してくれと言わされて、私はそのように接しているだけ……それで良い関係でいられそうだったのが……私が……エイルマーとのござこざを黙つていたばかりに……すっかり信頼が……」

話が進むに連れ声が弱々しくなり、元気無く肩をがっくりと落としたアデラにエマは「うんうん」と彼女の頭を叩いた。

「ロジオンは勘が鋭いし、コンラートの恋愛沙汰を見て育つてゐらあ、同年代の子達より理解してゐるわよ～」

「いや！ 本当に奴とは何もないのですよ！」

「見りやあ分かるわよ～。あいつ自分の理想を目の前にいた女に見てるだけじゃない」

「……見抜いてらっしゃいますね」

ウフフと、笑うとエマはアデラの耳元で話しだした。

「微妙なお年頃なのよ～、ロジオンはあ。側にいてくれる女人の人自分以外の男との悶着に相談もしてくれない＝自分は頼りにされない・弟扱いなのは、嫌なんじゃない？」

アデラはますます消沈していった。

「男なんてさて、ギュッ！して“ごめんね”すれば、すぐに機嫌が直るわよ～ 元・男の助言～」

今も男入ってるけど～と、キャララキャララ笑うエマに分からな～よう

ニアテラは、そっと溜め息を付いた。

そんな風に割りきれないのよね……。

恋愛に関して不器用な事は、自分自身よく理解している。  
しかも色仕掛けなどもつての他。

アサシンとしての修行の中に『色仕掛けで情報を仕入れる』と言  
うものがあつたが

『……何でそんなに下手なの?』

と周囲に呆れられたほどだ。

(抱き締めて)「めんなさいなんて……」

想像しただけで動悸と眩暈がしてくる。

それに

自分の中では好意を持っているが、果たしてそれが“好き”  
と言つ感情なのか?

分からぬ。

それが、本当に異性としての感情だったら、先には辛いことしか  
起きてこない。

彼は王子で  
私は彼の従者

これ以上の事は無いのだ……。

### 33 初恋、失恋、恋敵（4）（後書き）

シロイワヤギ [http://ja.wikipedia.org  
/wiki/%E3%82%B7%E3%83%83%A4%E3%83%83%A4%E3%82%82](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B7%E3%83%83%A4%E3%83%83%A4%E3%82%82)  
%A4%E3%83%AF%E3%83%83%A4%E3%82%82%AE  
顔がこうだから可愛いではないと思つ..。

### 34 呼ぶ声

鬱蒼とした木々の中、囲むように円形の闇がある。

その場所は田のある時間帯なら、地下から滾々と湧き出でる水を受け止める池であるが、夜を迎えたこの時間になると、性質を変えたように暗く黒く染まる。生い茂る草木の仕業もあるだろうが、異物を取り込んでしまった故もあるだらう。

人の身体と言う箱から自由になつた、我欲に忠実な魂 ハンナート＝オーケルベリを

その深い闇に向かい歩いていく足音。

踏まれた草の音は小さい。

それに比例し、身体も細く小さかつた。

闇と同化した泉の前まで来ると止まり、胸元に手を当て囁いた。

囁きは何かの呪文のようだ。

囁き終わると、胸元に寄せた小さな手をゆっくりと離す。

離した手に吸い付くように胸元から小さな球体が出てきた。ぽんやりと光るその球体は、小さな手のひらに包まれるくらいに更に小さく、中に何かが入つてゐるようだつた。

うつすらと闇を照らす光は、小さな訪問者の顔を照らす。緩やかなウエーブの髪と健康そうに紅に染まる頬。

小さな身体に見合つた顔立ちは幼い少女であつたが、あどけなさが全く無く、薄暗く映し出された周囲の草木と同じように、どこかゾッとする雰囲気がある。

「 情けで私の身体の中でお前を生かしておいたのだ。今こそ役

「お立ち、私と『ハーネー』の為に……」

球体にやうつ命じると、それは自分の意思があるより、ゆうくつと少女の手から離れ池の中央に向かって飛んでいった。

\*

ドレイクの眼が大きく見開く。

「　この『氣』……！」

跳ねるように椅子から立ち、マントを羽織った。自分の心の臓が騒ぎ立てる。血の流れが急げとせつつく。怒りで全身の毛が逆立つ。分かる。

『氣』だけじゃない。

『匂い』『同種族の血脉

『助け』『心』『绝望』『悲しみ』『同族のみに届くメッセージ』

『血』

ドレイクの赤い瞳が滾った。

「おのれ…… 我が同族を贅として封を破る『氣』か……」

叫びと同時にドレイクの身体は泉へと跳ぶ。

\*  
「……ドレイク？」

ドレイクが空間移動を施行したのに瞬時気付いたロジオンとルーカスにエマは、合わせたように部屋から飛び出した。

従者らしく部屋の角に控えていたアーテラも血相を抱えて、飛び出した主に慌てて付いていく。

「ルーカス！ エマ！」

「ロジオン！」

四人は玄関の踊り場で顔を合わせた。

「ドレイクが小城に張り巡らせた結界を破つてまで瞬間移動していつた！ こりゃあ大事だぞ！」

「池の結界しかないわよねえ……破れたの？」

ロジオンが首を横に振る。

「いや……それなら僕にだつて分かる。だけど 泉に異変があるのは確実」

「行くぞ！」

ルーカスの言葉にロジオンとエマが頷く。  
すぐにルーカスとエマが池へと跳んだ。

ロジオンも向かおうとした刹那 手を掴まれた。  
アデラだ。

「ロジオン様、私も行きます！」

「君はここに残つて！ 富廷に非常事態信号を送つて。それからハインとサマンサに小城に防御結界を張り直すように伝えて！  
頼んだよ」

「私は貴方の従者です！」

「言つこと聞かないと首にするよ！」

ロジオンの怒鳴り声を初めて聞いた アデラは、その迫力に言葉が出なくなってしまった。

戦だ。

戦に向かう人の姿勢だ。

そう感じた。

過去にアサシンとして訓練を積んでいた頃、このよつた姿勢の現役者を幾人か見てきた。

本人を取り巻く張りつめた空気 集中し、今、自分の持てる力を最大限まで引き出そうとしている。

「……ドレイクは称号を持つてないけど……間違いなく実力があるて、冷静沈着で強い魔導師なんだ……。魔力を扱う者を統べる『魔承師』より強いんじやないか……って噂される位……。そのドレイクが……自ら張った結界を解除施行しないで……無理矢理破つて泉に向かつた。 それほど急を要する何かが起きたってことなんだよ……？」

「……分かりました。ロジオン様のお言い付け通りに役目を果たします」

ほつとした様子の主は「頼むね」と一言告げ空間移動し、アデラの目の前から消えた。

溜め息が出た。

「役立たずだ……私」

自分がアサシンとしていきていれば、もっと役に立てただろうか？

落ち込んでいる時ではない。

アデラは気を取り直して、ハイインとサマンサの部屋に向かつた。

\*

ハインは流石、魔導師を名乗るだけあってすでに状況は把握していた。

「たった今、魔法で富庭に信号を出しておきましたよ」

「後、小城の結界を張り直して欲しいことがあります」

「分かりました」と、言いたい所なんですが……」

ハインがばつ悪そうに笑う。

「どうしたんです?」

「ドレイク殿が張った結界の形跡があちこちに残っていて、まずそれを消滅させなければならんのですが……私ひとりでは難しいのです」

「よく分かりませんが……サマンサ殿にも手伝って貰えば何とかなるのでは? ロジオン様はそうおっしゃっておりましたが……」

「それなんですが、先程サマンサの部屋の扉を叩いてみたものの、何の応答もないんです」

「え? ?」

サマンサとリシールが使っている部屋の前にアーテラとハイン二人立つ。

「気配はあります。だが、全く返事もしない、扉も施錠されているで」

眉を潜めて話すハイン。

「中で倒れているのでは?」

「分かりません」

首を横に振るハインをよそにアデラは扉を叩いた。  
やはり反応はない。

「魔法の施錠ですか？」

「あ！……てつきつそうだと……」

「どうです？ 魔法？」

ハインを扉の前に引き寄せ、確認させる。

「いえ。普通の施錠でした……」

笑つて誤魔化しているハインをよそに、アデラは至極真面目に言った。

「魔法じゃなかつたら私にも破れます 下がつていで」

「破るつて……扉を壊すつもりですか！？」

「中に入る気配があるのでしきう？ 私もそれは感じます。でも、うんともすんとも言わない 倒れていのりか何かあつたかも知れな

いじやないですか？」

「……う」

下がつて アデラはもう一度ハインに言つと腰を落とし構えた。

「一度や一度で無理だつたら、鉈を持ってきましょ」

「あ、あのアデラ殿……そんなことしなくとも魔法で」

アデラの腹の底から沸き立つ氣合いと声にハインは冷や汗をかきながら、他の案を推してみたが 彼女の耳に全く入ることはなく、次の瞬間、彼女の切れの良い足蹴りが扉をひしゃげ、切れ目を入れた。

「一度では駄目だつたか。鈍つているな」

舌打ちすると再び構えに入るアデラに、ハインはびびつて肩を縮めた。

何せ、物に対しても身体を使い破壊を施行したことが無い彼は、近距離でその様子を見たのは初めてだつたのだ。

振り子原理を使った回し蹴りは、随分と迫力あるもので、しばらく夢に出てきそうだ。

「もう一度」

「ア、アーテラ殿、壱つの通りに鉈、持つてき」

「……開けます。開けますから」

部屋の中から、掠れた声が聞こえた。  
声音からしてサマンサのようだ。

アーテラもハインも、倒れていなかつたことにほつと胸を撫で下ろ  
した。

「何かあつたのですか？ 今、由々しき問題が起きたらしくのです  
「知つてこまゝ……」めんなさい……」

「？」

なぜ謝るのか？

アーテラとハイン、顔を見合わせた。

「私が知つてること……全てお話しします。……だから……」

扉が開く。

ゆづくじと恐る恐る

そこには、サマンサが怯えた様子で一人の前にたたずんでいた。

二人の顔を交互に見つめ、今にも泣きそつた顔で言つた。

「……お願いします！ オ母さんを止めてください。」

### 34 呼ぶ声（後書き）

話が詰まってしまいました。  
ひねり出しますのでしばしお待ち下さい。  
九月には次が掲載出来るよう頑張ります。

「流石のドレイクも、数少なくなつた同族の危機を感じたら冷静でいられなくなるのねえ？」

「……古の言い伝えを真に受け、我が同族をの血を利用するかカーリナ」

「言い伝え？ 嫌だわドレイク、それが言い伝えかどうか貴方自身が一番よく知つていいでしょう？」

泉を背に二人のやり取りの口調は冴え冴えと響き、閉じられた空間でもないのに反響しているように聞こえる。

二人に共通しているのは、至極冷静で落ち着いている態度。だが、ドレイクの声音はいつもよりさらに低く怒りを押さえているようで

もう一人 カーリナと呼ばれた少女は、弾んだ声で芝居を楽しんでいるように見られる。

カーリナの動作も仕草も、幼い少女そのままで若々しく、足取りも羽が生えたように軽いステップを踏む。

「竜の血は古より万能薬と伝えられている。特に『不治の病』『不死老』に『不死』の効力があるとね」

「謂われただけで、実際そのような効果はない 貴様が知らないわけではなかろうに」

「 でも」

妖精ながらに踏む軽やかなステップを止め、カーリナは池の中央で浮いている球体を指した。

「どんなに強力な結界でも、消滅させる」とは出来る  
パチンとカーリナは指を鳴らす。

それに呼応し球体が音も無く割れ、中に入っていた個体が現れた。

小さな黒い竜 幼体のようで背に生える羽は、萌える幼葉のように薄い。

ドレイクの柳眉が吊り上がった。

幼体の竜の首筋には切り傷があり、そこから細い赤い筋が下へ流れているのだ。

「特に同じ種の竜同士の結界なら 無理に力で壊さなくても、ほんの数滴の血で充分なはず。この竜は幼いから、そもそも力で壊することは期待してないからねえ」

止まりなさい！

カーリナの声が響く。

自分を飛び越え幼竜を救おうとしたドレイクの口論みに、カーリナは瞬時に気付き左手 主に攻撃魔法を繰り出す方を幼竜に向けた。

「……」

無表情だが怒りで赤い瞳をたぎらせ、自分を見つめるドレイクにカーリナは悠然と微笑んだ。

「竜は生命力が逞しいわ。五体バラバラにされたってすぐには死ない。あの竜だって、今まで相当血を抜いて利用したけど細々と命を繋いでる ああ、でも、この結界を消滅させる頃には命が尽きそうよ？ どうする？ ドレイク」

勝利を確信しているカーリナの微笑みは、少女らしさの全く無い、背徳の影があるものだつた。

「助けたかつたら、貴方自ら結界を消滅させなくてはねえ？」

「……あの竜はどこで捕らえてきた？」

「知りたいの？ 知るために『代償』が必要じゃなくつて？」

「人の成りをして暮らしていた者を捕らえたのか？」「私の話を聞いて無いのかしら？」

「どうなのか聞いているんだ！」

「うるさいわね！ 知りたければ『代償』をよこしな！」「コンワークの魔法日記だらつ、大方！ 探しに私の部屋に忍びに

来たのは承知だ！」

しばし静寂が起きた。

ぱたり

幼竜の血の最初の一滴が池に落ちた。

「あーら、言い合いでいる暇があつたらさつと決断したら？」「でないと、あの竜が死ぬわよ？」

「……出自など、どうでも良い。幼竜と魔法日記を引き換えだ」「結界を解きなさい。それが先よ」

「『代償』と引き換えと言つなら、それでは同等に価しない」

ギリリ とリシールの口元から歯軋りの音が聞こえた。

「じゃあ、脅迫と鞍替えしようか！」

後悔するが良いーー 池に向かつて伸ばすリシールの左手が握られる。

「キィHHHー！」

幼竜の首が捻られ、痛みで泣き叫んだ。  
絞られるよーー一滴・一滴と血が池に落ちるその時 。

「 どりや！」

池の反対側から勢いを付けルーカスが飛び、幼竜をキャッチすると刹那、姿が消え再び池の反対の陸地に現れた。

「 な……どうして!? 私に気付かずれずにどうやってここまで!?」

じりじりと近付くドレイクから距離を取りながら、カーリナは驚愕した。

「私が気配を消す魔法を施行したからよ。周囲に違和感無く溶け込むように気配を消すまでの実力、そう滅多にいないでしょ、カーリナ」

ルーカスの後ろ 後衛を担当するエマが顔を出した。

「エイルマー……。オカマになつたと言つ話は真だつたか……」「上から下まで染々と見つめるカーリナに

「性転換！ おかまじやねーよ！ エロキチストーカー！」

と怒鳴つた。

エマの台詞にカーリナの顔は、瞬く間に怒りで真っ赤に染まる。「エロキチはあんたでしょ！ そんな胸でかに形成させて、バランス悪くて気持ち悪いんだよ！」

「はあん、負け惜しみ？ だつたら幼女の身体から乗り換えたら？ 前の前みたいにさあ？」 あつ、ごめーん。前の身体は『本物』

だつたけど、お胸は残念だつたわよねえ～

あかんべーをしながら嫌みを言い返すエマに、カーリナは全身を朱に染めて怒つていい。

まさに怒髪天を衝くと表現して良い。

その様子が面白いのか、エマはますますからかい出した。

「大丈夫！ 女は胸じゃないわあ。性格よお。 あ、でも性格も

最悪だつたわね～。それでコンラートにフラれたんだしい。やだあ、カーリナつたら良いとこ全然無いわあ～

「コンラートにフラれてないわよ！ ハイルマ————！」

怒りで髪が逆立つ その表現そのままのカーリナは、すっかり我を忘れていた。

その隙をドレイクは見逃さなかつた。

「 T u l e h a n g o u t p u n a i n e n r o t m  
a a s t a (地腐の赤い溜まり場より来たれ) 『腐植の辯』」

「 ！」

カーリナの足元から一瞬にして伸びてきた蔓のよつなものは水泥で、水音を立てながら腐臭を漂わせカーリナを囲む。

「 つ……」

ジユルジユルと水泥混じりの音を壮大に立てながら、隙間を埋めていく。

「ドレイク！ 驚目だ、彼女の身体まで腐り果ててしまつよ！」

後から追いついてきたロジオンが止めに入ってきた。

同時『腐植の辯』の動きが止まる。

「『魂替え』で、元の魂はまだ生きている！ 魂を元に戻さなくては！」

そう訴えるロジオンをドレイクは冷めた目付きで言ひ返す。

「『魂替え』は、時間をかけて試行する魔法。更にお互いに承した上でないと拒絶が返ってきて、どちらも消滅してしまう。成功して

いるところを見ると互いが了承でしよう。

躊躇つ必要はありません

せん

「相手はまだ小さな子だよ……？ 訳もよく分からずに交換したかも知れない」

「無駄ですね。この女が元の身体に戻ることなど承知するはずがない」

## ジユル

音をたて再び動き出す『腐植の滓』

ロジオンの瞳が一瞬だけ煌めいた。

「Pyritte palamaman kotiin pes?  
pakkatahramakipe? pohja la  
ho(腐底の住処に戻り穢れた禰の温床に励め)  
場の勇士達に戻れ』『

## 『腐植の滓』

世界は幾つにも分かれ、独自に発展した世界を創り上げていると言われている。

分かりやすい例で言うと『水』や『火』などの特性を持つ者達（精靈と呼ばれている）の世界に介入し、そこに住む者や対武器の力を借りる『召喚』である。

この『腐植の滓』も異世界の水溶植物を召喚したもので、自らの根本に脳を携える。

## 所謂怪物

だが脳は持っていても知能は低く  そつとは言え、プライドは高く凶暴である。

コントクトを取りやすい異世界植物であるが、そのプライドの高さゆえに滅多に従わず、気に障ると召喚者にまで攻撃するし、召喚したらしたらでなかなか帰らない。

扱いににくい怪物で、水の性質を得意とする者達も、やつれつつ召喚しないのだ。

その怪物を召喚し、見事に操つて見せたのが　コントラートである。

コントラートの召喚魔法をドレイクが施行したところを見ると、彼が魔法手記を読み進めていることは明らかであった。

そして、ロジオンは　?

タイミングの良い所で切つたら短くなりました…。

詠唱が終ると同時に、悪臭を放っていた水泥の怪物は搔き消されたかのように自分の世界へ戻った。

「ロジオン！」

腹立ちげに怒鳴り付けてきたドレイクにロジオンは「師匠の魔法なら、大体の施行解除は出来る！ 兎に角、一旦彼女を捕らえて！」

と怒なり返す。

咳き込み、草むらに倒れ込むカーリナに

「？？拍？他的声音（彼の放つ音を潰せ）『絶音』」

今度はエマが魔法を施行する。

「エマ！ それだけじゃ彼女の魔法施行は止められんよ！ 頭の中で呪文を唱えられたら……！」

ルーカスが違う魔法施行を促すが、エマは余裕ある笑いを見せる。「腐植の滓の臭いでやられてるわ……ルーカス！」

エマがルーカスを見て叫んだ。

「！」

エマの叫びと同時に、

ルーカスの身体が軽々と宙に吹き飛ぶ。

繁る木々の頂点を越え、凄まじく枝を折りながら落とした。

「……意識支配だ」

ドレイクが忌々しいしく呴いた。

黒い幼竜はその身体に見合わない猛々しい咆哮を響かせ、形を変えていった。

萌葉に似た薄い飛膜の可愛らしい翼は、太い骨格を持つ立派な大きな翼に。

小さな鱗で覆われた身体は、鎧を付けたかのように見ただけで固く丈夫そうな身体に。

怯えた情けを乞う紅玉の瞳は、その意思が全く見えない空の輝きを持つ大きな瞳に。

爪が出ているかいなか分からぬほど小さな鳥のよつた足は、荒々しい長い爪を持つ大きな足に。

成竜とみちがう姿に形を変えた幼竜は、黒竜の氣性を現すように落雷に似た咆哮を轟かす。

ビリビリと身体中が痺れる感覺に耐えながら、ロジオンはドレイクに尋ねた。

「竜は一気に成長するものなの？」

「身体の成長を司る器官を狂わせたのでしきつ……脳のある部分を魔力を注入して急成長させた。これはもう……」

助からない

ドレイクの呴きが表情と裏腹で冷淡なのが、ロジオンには胸が痛むものだった。

腕の中に収まるほど小さな幼竜が、見上げるほどに大きく急成長をした。

これが人なら急激に成長した身体に、内蔵はもちろん、骨や皮膚諸々追いや付くはずがない。

身体の急成長に皮膚は裂け、骨はスカスカになり、急に肥大した内蔵は支障をきたすだろう。最悪、歩き出そうと足を上げた途端、身体は悲鳴を上げ崩れ果てる。

果たして竜はどうなのか？

ロジオン自身、竜の姿を見るのは初めてで、目を見張る大きさに呆然としていた。

嘘付ケ

「……えつ？」

何処からとなく聞こえてきた声に、ロジオンは周囲を見回す。

余計な人物がいる気配は無い。

魂ガ覚エテイルハズ  
研ギ澄マセ

周囲から聞こえる声じゃない。  
ロジオンは自分の頭を押された。

「 なつ……！？」

身体憑依でもない。  
意識支配でもない。

頭の中から問いかけてくる声。

## 過去一

### 遠イ魂ノ記憶

「ああ……！」

頭の中で流れしていく映像には多くの竜。  
自由に空を飛ぶ姿を見る誰かの皿。

竜だけではなく、今や書物の中でしか見ることの無い飛来動物達。

知ってる。

僕は知ってる。

書物の中ではない映像。

どうして知ってる？

「魂の……記憶……？」

「ロジオン！ 避けなさい！」

危険を察するドレイクの声と押された衝撃に、ロジオンは今の危機的状況の現実に我に返った。

「キヤハハハ！」

少女の甲高い笑い声の意味する事 。

ロジオンを庇つたドレイクが、代わりに急成長を遂げた竜に捕らえられ、握りしめられていた 。



力の加減なんて無いのは見て明らかだつた。握られたドレイクの身体の部分が、雑巾のように絞られている。

「ぐううう！」

それでもドレイクは、内側から必死に抵抗しているようだつた。

「ドレイク！」

自分が、ぼんやりしていたからだ。

ロジオンは起き上がり、走り寄りついたがエマに止められた。

「よく見て！」

エマが竜を指差す。

ぼんやりと掛かる黄緑色のシールド。

「『時間差施行』が張られてる。何の魔法の施行だか分からぬようにしてあるんだよ！ カーリナの最も得意なやり方なんだ！」

「覚えていてくれて嬉しいよ、エイルマー！」

「『トラップ』のカーリナだつたね」

カーリナは自分の称号を言われて満悦のようであった。

「形勢逆転ね。ルーカスも倒れたままだし、こちらには人質。ドレイクとの竜を引き換えよ？ コンラートを解放して、彼の魔法日記を渡しなさい」

「私一人じゃ無理つて知つてて言うかなあ？」

「ああ、あんた性転換の為に魔力費やしてんのよねえ……やっぱり、予定通りに行きましょう。新しい竜の血が手に入ったことだし、手元にあつた竜はここで使いきるわ

「カーリナ、あんたドレイクを手に入れたつもり？」

片眉を上げて馬鹿にした様子のエマに向か、カーリナは隠し持つていたネックレスを見せた。

それは小さな紅玉が付いていて、ゆらゆらと揺れる。

「……『竜の王』の印？」

ロジオンが呟く。

「流石コンラーの愛弟子ね、ロジオン。 古代に存在していたと言われている、竜の王の心臓と言われているもの。王が亡くなる時、自分の後継の竜に授けたのよ。 人と竜との抗争の時、争いを生むものとして破壊された。 でも、破片でも、持つものには竜達は無条件で従うわ」

「……それ、本物？」

ロジオンの問いに、カーリナは微笑みを更に深いものとした。

「この子で立証済みよ。 確実に従わせるために『意識支配』も施行してるのでね。 これさえあればドレイクだとて私に従うでしょう？」

ちらり、とカーリナは竜に握りしめられているドレイクを見る。  
「ドレイク……美しく逞しい、まさに竜の尊。 ロジオンよりコンラーの形代に相応しい」

長い時を生き、知力も魔力もある『万物の長』とも称される竜は、古き時代、小さき生き物である人間にとつて、恐れ・敬う存在であった。

しかし、共存していくうちに人間達は気付いてしまったのだ。

大きな体躯に反し大体の竜は大人しく、どんな生き物に対しても傷付けることを良しとしない、優しい性質だと言うことに

『竜の血肉は不老不死・万病を直す特効薬』

と言つ空言を真に受けたと事も要因だが、人間達は今までの鬱憤を晴らすかのように次々と竜を襲つた。

器用に人の姿に化する竜まで

逃げ、また大人しく殺されていく竜達だったが、一種類だけ獰猛な性質を持つ竜がいた。

それが、ドレイクの本来の姿 黒竜。

元々は、穏やかな性質の他の竜達を守る、所謂『騎士』の役目を担う竜だと言われている。

守り戦いながら過ぎていく時の中、穏やかな種類の竜は滅亡を遂げ、『騎士』の役割の黒竜もいつのまにか姿を消した。

ドレイクが竜だと知る者達は、大体が魔力を持つ者達 ある程度力を持つ魔法使いや魔導師達である。

今や希少となってしまった竜族の為にも、皆、騒ぎ立てるような真似はしなかつたし 何より、長いこと魔承師に絶大に信頼されており、魔法を駆使する力は随一だと認めていた。

魔法を扱う者達は、何より魔力と魔法を扱う強さが何より。

そこで見てなさい カーリナの右手が振り落とされようとした時

「待てー。」じに魔法日記はあるぞー。」

魔法日記を片手に高らかに声を上げる者 アーテラがいた。

\*

アーテラが掲げる見事な刺繡の装丁の本は、確かにコンラートの魔法日記である。

「サマンサ！ いや、カーリナ！ ドレイク殿と竜を解放しろ！ そうしたら魔法日記を引き渡す！」

「ア、アーテラ！ 勝手に」

「今はドレイク殿と竜を助けるのが先です！ じには大人しく引き渡しましょう！」

有無言わさないアーテラの気迫にロジオンは、言葉を飲み込んでしまった。

確かにこのままではドレイクは助けられない・コンラートは復活するで、じちらに有益になることが一つもない。

「じちらへ投げなさい。それから竜」とドレイクを引き渡しました

う

したり顔で要求するカーリナにアーテラは

「竜とドレイク殿が先だ！」

と返す。

「じちらが立場が上だと分かつてないよつね」

「そう言つが、貴様の『トラップ』が施行されている。そこに投げ

ても跳ね返されるか、トラップが発動されるだけだろう。」

「……では、そこに置きなさい」

どうしても自分が有利に立ちたいカーリナは、そう命令した。この状況で、自分が一番有利だと分かっている。これを覆すわけにはいかない。

「言つただろう。竜とドレイク殿の解放が先だと」カーリナは威風堂々と交渉を続ける、アデラと言われた女を睨み付けた。

ただの人間だ。魔力の持たない。

小麦色の肌に金髪と、珍しい容姿の持ち主に違いないが。ただ、それだけだ。

（なのに、この女の気迫に押されている……）

ただの人間だと、

「つねさいね！ こちらの言つ通りでないのなら、ゴンラートを解放して痛い目に合わせるよ！」

ドレイクを握りしめている竜を指し、アデラに怒鳴るカーリナに「それをやるなら、魔法日記を燃やす所存だ」アデラはそう告げた。

すると 後ろの闇から赤々と燃ゆる炎の光が出現した。フランソの中で燃ゆる炎を手にハインと、サマンサの姿のリシルが立っていた。

\*

「あははは！ 魔法のど素人の人間の考へることね  
カーリナの馬鹿にした笑いが耳をつんざく。」

「何がおかしい？」

そう聞いてきたアデラの表情は余裕で、焦りは全くなかった。  
「知らないようね？ 魔法日記はね、魔力でコーティングされるから、燃えやしないのよ。しかも、そんな小さな炎で燃やそうだなんて 貴女、それでロジオンの従者？ なんにも分かつてないのねえ？」

「当たり前じゃないか。従者になつてから……まだ日がたつてないし……教えてもない」

そうロジオンが反論したが、当の本人は涼しい顔で

「 やつてみないと分からぬじゃないか」  
と、手にしていたコンラーの日記の刺繡の装丁の部分を、ほんの少し千切る。

「 ええ！？」

ギョッとした声を出したロジオンをよそに、アデラは千切つた刺繡の部分をフ拉斯コに入れる。

フ拉斯コの中の炎に触れると、あつといつ間に燃え塵と化した。

「 ……燃えた？ 嘘！？」

エマが叫ぶ。

「 偽物を扱いできたな！」

怒りだしたカーリナに、アデラは微笑みながら首を横に振った。  
「 正真正銘の本物だ。ドレイク殿の部屋から探し出すのに苦労した。本のサークルの一つに紛れていたのだ」

「 ア……デラ……な」

ドレイクも驚いているようだが、圧迫されて息が途切れ、声が出ないようだった。

「 カーリナ！」

フ拉斯コの炎を持つハインがカーリナに向けて口を開く。

「 この国は『職人と商人の国』！ 我々魔法を扱う者達でも目を疑

う品が流れてくるんだ！ これは『フラスコの住人』と呼ばれた珍品を、魔法管轄処の者達が手を加えたもの。 信じがたい品だとてあることを、その目で見るが良い！

「そんなものがあるなんて、魔法管轄処に居た頃に聞いたことなどないよ！」

「そうだろう。魔法管轄の研究室に保管されていたものだからな。

私も、くだらない玩具しか造つてないし、ショッチャウ爆発事故起こすから滅多に近づかないし」

あまり褒められた内容ではないことを、ハインは胸を張つて答えた。

「これも、ろくでもない品物として記憶にあつたのを、使えるかと急いで持つてきたのさ」

「そんなことしたら、ロジオンやドレイクは、折角のロンラートの遺産なのだ！ 覚えることなく抹消させる気か！」

「もう……覚えてるよ。全部

事も無げに告げたロジオンの口調に、カーリナが驚いたのは言つまでもない。

ロンラートは魔法を扱う者としては短い人生だったが、魔力もさながら、その創りだした魔法に、異世界から呼び出す召喚の多さは、長く生きている魔導師よりも遙かに多い。

魔法日記に記した魔法全てを覚えたとは、考えられないことだった。

「ドレイクだつてもう幾つか覚えただろ？ けど……僕が教えれば良いことだし……アテラー！」

「はい！」

「こちらの意見が受け入れないようなら……燃やしてー！」

「はい！」

快活なアテラの返事にカーリナは慌てて

「解放すれば良いんでしょう！ 1、2、3で『トラップ』施行解除するから、その時に日記を投げな！解除すれば、そいつはドレイクが何とかするでしょう！」  
と条件を受け入れた。

37 取引（後書き）

話の区切りが中途半端ですいません…。

「1、2……3！」

カーリナが掛け声と同時に『トラップ』を施行解除し

「それ！」

アデラも同時に魔法日記を投げた。

空高く

「高すぎだ！ ノーノン！」

距離は良かつたがカーリナの身長より、ずっと高い所まで投げたアデラに彼女は叱咤した。

「それで良いんです」

アデラが日記を見上げながら満足そうに言った。

突如、闇の中から現れた蔓に日記は絡め取られてしまう。

絡め取られた魔法日記は、そのままルーカスの手に渡った。

「ナイスコントロール、アデラ」

ルーカスが細い目を更に細くし、笑つて見せる。

だが、胸を押さえているところを見ると肋がやられたらしい。

「ルーカス！ それを寄越すのよ！」

険しい顔で近付いてくるカーリナにルーカスは、痛みで荒くなる息を整えながら言った。

「……こっち（魔法日記）ばかりに気を取られている場合じゃあないだろ？」「

「！」

背筋が一瞬にして凍りつく眼差し。

難解な言語で詠まれる呪文。

来る。大きな魔法が

カーリナは振り返り様、対魔法防御を施行した時。

ドレイクの紅い瞳が薄闇に煌めいたのが見えた。

割れる音が空に響く。

カーリナの施行した魔法は、ドレイクの魔法に負けた事を意味した。

ドン！

と、一度だけ大きな縦揺れが起き、静寂となつた。

それは虫の声一つ聞かない静寂で、何かが起きる前触れだと、そこにいる誰もが感じ取っていた。

感じる圧迫感。

それは物凄い勢いで四方から迫り来る。

カーリナは感じていた。

これは自分に向かつて迫つてくる

「……何……何が……！」

方陣で移動しようとするが足が地にピッタリ吸い付き、動けない。

「古代からの尊き血を受け継ぎながら、魔力を持たぬ人と同様な腐り果てた真似を……容赦せぬ」

ドレイクの冷えた声が冴えざえと辺りに響く。

「聽かせてやるわ。コンラートと同類の闇の喜びの声を

」

ヒィィィイウ オオオオオオオオオオオオオオ

ホホホホホアアアアアアアアアアア

迫る大勢の低い呻き声は、地を張る。

それが物凄い勢いで自分に向かっているのが分かり、カーリナの身は凍え震えた。

それは周囲も同じ反応だつた。

アデラは、サマンサの身体のリシェルをしつかりと抱き締め  
それ以外の者は魔法を扱える為、自然と防御の右手を構えていた。  
ドレイクが施行したのだ 並大抵の魔法防御では、先程の力一  
リナの魔法のように負ける。

「おまけに、あこがれの寄越もないでね」

「やがて「イケ」肩肘張るが冷せ汗が流れる。

「又は犯さない思うが、万が一を考えての構えた

そんなヘマはしない  
け上がった。

そう言いたげにドレイクの口角が片方だけ

ドレイクが試行した召喚魔法の名を上げた刹那

それはやつてめた。

闇の向こうから、身体とも言えない身体を宙に飛ばして。足は溶けた蠅燭のように形はなく、伸びた先は闇のまた向こう。顔は皆、同じ顔いや、顔がない。皆のつぶらで唯一口ひしき

ところにポツカリと穴が開いているだけだった。

同じところと言えば、皆一様に骨で作ったカントラを片手に握りしめて、喝采を送るべき相手を取り囲んだ。

カーリナを

\*

ファアアアアアアアアア

カーリナを取り囲み、一斉に声を上げる。  
それは木々を震わせ、周囲の耳をつんざき、押さえても意味がないほどであった。

取り囲まれたカーリナは特に堪えている。  
ビリビリと身体が 魂が 振動する。  
身体に力が入らない。

魂が

吸いとられる

「『地獄の観賞者』だ」

あんなに沢山呼んじゃつて、と胸を押さえ痛みをこらえる様子で  
アデラ達と合流したルーカスが言った。

『地獄の観賞者』

普段は地獄にて罪人として落ちた者達をカントラで照らし、その者の生前の生き様を見るという。

罪深き者だと喜び喝采を送り魂を吸う。

「初めて見ましたよ……流石ですね、ドレイク様。土台詠唱さえ長いはずなのに短かったし、更に高い召喚魔法に造り上げていて……」「これならカーリナの魂を吸つてリシェルの身体を……」

アデラの台詞にサマンサの手が強く握られた。

辛そうに俯いている彼女の中身は、母に裏切られた子 リシェルなのだ。

しかし、裏切られたとは言え母は母。

どんな母でも子は慕い続ける 極たまに見せる『母』の思いやりに。

それに、母がこのまま『地獄の観賞人達』に魂を吸いとられていくのを見ているのは辛いことだ。

「リシェル」

見せないようアデラは彼女を抱き締めた。

「ただの『入魂』なら、俺たちでも出来るからね」「と、ルーカスは喝采を浴びているカーリナを見ながら告げた。

「 ただ、カーリナはしぶといからなあ……魔力も魔法も。このままうまくいくかなあ……」

### 39 想いの違い

「いやあああああ！」

自分の叫びが観賞者の喜びの喝采に打ち消される。

耳障りな声が身体を突き抜ける度に力が抜けていく。

魂が

命が

吸いとられる。

嫌よ！

コンラートに認めてもらいうのよ  
彼の恋人になるのよ

「いや！」

観賞者を睨み付けようと顔を上げ、恐ろしさに目を見開いた。

観賞者の顔が　よく知る顔に形を変えていく。

「カーリナだ……」

エマがポカーンと口を開けた。

「そりゃあ魂の記憶だもの……本来の彼女の顔が[写]し出されるよ……」

ロジオンの言葉にエマは「やつだわねえ」と頷いた。

これに一番衝撃を受けたのは、本人　カーリナだった。

本当に吸われてる。

魂が抜かれてる。

いやいやいやいや！！

「いややややあああああ！ 絶対に嫌！ こんなのが「コンラート」と同類？ ふざけるんじゃないわよ！ コンラートはこんなじやない！ もつと理性的で理智的で素晴らしい男よ！ 彼になら魂を吸われようが食われようが好きにされても構わない！」 ロジオン

「？」

「あんたのせいよ！ あんたが大人しく身体を明け渡さないからこうなったんだよ！ 師弟関係なら病に倒れた師の代わりに身体の交換位してやるのが当たり前なんだよ！ あんたがしないから「コンラートは化け物って言られて、私がこんな目に遭うんだ！」

「身勝手な言い分ですね」

ドレイクの台詞に賛頷いた。

ロジオン以外は

\*

「あああああああ！」

カーリナの断末魔に近い叫びに、リシェルは耳を塞いだ。アテラは彼女の頭を撫で、強く抱き締める。

小城で彼女から聞いた話を思いだしアテラは胸を痛めた。

カーリナの魂替の犠牲となつた女性も、今や初老の姿となり  
新たな犠牲となつたリシェルの新たな魂の寄代であった。

魔力を扱う者は、魔力を持たない者に比べ生きる長さが違う。  
個人によるが病死や事故死、戦死等々により亡くなつた者達を除  
けば魔力を持たない者達より遙かに長い時を生きる。

しかし、魔力を扱う者達にも、分からぬことがある。

何時、成長が止まるか だ。

精神・魔力共々、最も高く、充実している時期に止まる。  
それが体力的に最高潮の時に止まるのか、最も成熟した身体の時  
に止まるのか 分からないのだ。

幼い時に止まってしまった者もいれば、歳を取つてから止まつた  
者もいる。

ルーカスやエマのよう、身体が成熟した時期に止まつた者もい  
る。

大抵は皆、すんなりとその事実を受け入れるが、稀に受け入れる  
ことの出来ない者が出てきた カーリナのよう。

カーリナは魔法使いとして修行している時期にコンラートと出会  
い、熱烈なアプローチを続けた。

しかし 何年たつても、自分の思いを受け止めて貰えない。

カーリナの本来の身体は四十代で止まり、コンラートは若い女性  
にばかり熱を上げる。

カーリナは友でもあつた魔導師・サマンサを拐かし、撤廃の一つ『魂替』を行つた。

その内容は卑劣で許しがたい。  
騙されたサマンサは自分の命と引替えに『呪い』を施行した。

かつて、自分の肉体であつた身体の『若さ』が魔力を扱わない普通の人間達　いや、若干早く歳を取つていく。  
喜びに浮かれていたカーリナの落胆と忸怩たる思いは言つまでもない。

そこで考えたのが、まだ子供が産めるうちに子を産み、その子と肉体を交換することであった。

産まれてくる子の造形を考え、美男を選び子を産んだ。  
サマンサの容姿自体が美女の定義に入つていたお陰が、すんなりと相手を見つけることが出来たのは良かつた。

サマンサの身体で身籠り、産んだ子は思惑通りの女の子　リシエルであった。

カーリナは夫となつた男性とリシェルを捨て、姿を晦ます。  
ここで彼女が巧妙だつたのは、捜して来るよう手掛けかりを残していつたことだ。

母の温もりさえ覚えていない子が、恋しさで手掛けかりを便りに会いに来る　カーリナには確信があつた。  
元夫は薄命の相を持っていたし、身内もいない。

国内が荒れ始めていた時期に姿を晦ましたから、元夫が亡くなつたら厳しい国の情勢の中、己の食いぶちを減らしてまで他所の子の面倒を見ようなどと人の良い家庭など、ざらに無いだろう。  
豊かで保安のしっかりとした大国・エルズバーグで富廷に仕える

為に家を出た　と言つ話と証になるものを娘に手渡していれば  
元夫の死後、きっと訪ねにやつて来る。

かくて思惑通りに事が動いた

必死に会いに来た娘を抱き締め、劳り、可愛がり、手料理でもてなした。

『会いたくても宮廷で働くようになった自分は忙しくて会いに行けなかつた』

『結婚し子供がいることは誰も知らない。知られたらここには居られなくなるから“知り合いの娘”としておいて欲しい』

そう説き伏せた。

リシェルにとつても、暖かい住居と安定した生活　何より、ようやく会えた母親から離れたくない。

素直に頷いた。

そうして師匠と弟子の関係で、周囲を誤魔化し生活していた。魔法管轄処にいるのは、周囲に興味の無い同業者達　特に怪しむ者もない。

師匠と弟子の関係でも、リシェルは幸せだった。  
会いたかった母は優しい。

魔導師として自分に魔法を教えてくれるだけでなく、普通の母親のように一緒に料理をしたり編み物や刺繡もしたり、自分が思い描いていた母親像そのままだからだ。

ただ、気になるのは普通の母親より老けていること  
遅い結婚だったと聞いていたが、今の母を見てどうしても五十代  
位に見える。

父から母の年齢を聞いていて、そこから計算してもおかしい。

そんな疑問がいつも頭にこびりついていた頃、母から

『呪いにかかり、早く歳を取っていく』

と涙ながらに告げられた。

驚きショックを受けるリシェルに

『研究して呪いを解く方法を見つけた。その為には、一度身体を取り替えないと解けない』

と話した。

『この魔法は私しか知らないの……リシェルにはまだ無理だし……自分が見つけた魔法を他の同業者に知られては名折れだし……リシェル、私の可愛い娘……貴女なら分かってくれるわね?』

母に乞われ、母を慕うリシェルに拒否など出来なかつた。

呪いが解ければ元の身体に戻れるし、母が昔の若く美しい姿に戻れるといつなり。

だから

それなのに

身体は老婦人だが、子供の泣き方そのままに泣くリシェルが痛々しかつた。

39 想いの違い（後書き）

うまく区切れなかつた！

（ここに連れてきてはいけなかつたのではないか？）  
そのように視線でハインに訴えたが、ハインは田の前の呪喚に心  
を奪われたままであつた。

ロジオン様は？

ロジオンの方へ目をやる。

視線を感じたのか、アデラの方を向いた。

鑑賞者の青白い光にあてられてゐるせいか、いつもより顔色が悪  
く見えた。

（ロジオン様）

サマンサの身体のリシェルを抱き締めている様子を見て、アデラ  
が何を言いたいのか悟つたのか、早足で近付いてきた。

「ロジオン様、リシェルは小城へ戻した方が……この光景はこの子  
にはきついと思われます」

ロジオンは首を横に振つた。

「『鑑賞者』が魂を吸い付くしたら、すぐに魂を元へ戻さないと定  
着が難しくなるんだ」

そう言つてロジオンは再びドレイクのいる方角を見つめる。  
「ドレイクは……リシェルがこの場にいるのを確認して……あの呪  
喚を選んだんだと思う」

「コソラートオオオオオオ！」

絶叫するカーリナが、突如、苦しみ紛れに何かを池に向かつて投  
げつけた動作をした。

「 ！？」

『それ』が何なのか 気付いたのはドレイクとロジオン。

ドレイクは身を投げ出し『それ』を受け止めようと腕を伸ばす。ロジオンはアデラとリシェルに対し『アエラの城壁』の土台結界を施行した。

『それ』はドレイクの指先を掠り、池へと落ちていった。

竜の心臓の欠片が……。

\*

血は心の臓を流れ続け、その人の人生と共に流れる。血の浄化を繰り返し、身体全体に送るポンプ役。

それは竜だとて同じ。

それが、コンラートを封じ込めた池へと落ちたことの意味は  
。 結界を一気に解き放つ。

池の中から光が放たれた。

朝日のあの輝きを凝縮したような眩しい光で、皆、目を瞑る。瞬間、硝子が弾け飛んだのと似た音が響く。

それは三人が重ねて張つた結界が一度に壊れた音であった。

「あらりらりら。本物だつたんだ」

エマが暢気な台詞を吐いたが、表情は至って真剣だ。

そろそろと池から離れ、木陰に潜んでいるロジオン達と合流する。

「やつぱいって」

エマに言われなくとも皆、分かっている。

「……この場合、私はどうしたら良いでしょ？」

ハインが顔面蒼白になつてロジオンに尋ねてきた。

ロジオンとルーカスが顔を合わせる。

ルーカスは胸を押さえながら立ち上がつたが、その様子は痛々しく、とても鬪えそうもない。

「みんな、リシェル連れて……僕から離れた方が良いね……。エマに気配」と消せる結界を張つてもらつて……」

下手に自分の側にいたら、今度はエマやルーカスどころか、リシェルやハインまで標的になる。

エマは現段階で十分戦力だが、ルーカスが負傷しているし、ハインは自分の魔法では間に合わないし、敵わないことも身を持つて理解している。

リシェルは、魔法を習い始めたばかりだ。

この三人を保護するのに、エマは一杯一杯になる。

「ロジオンはどうするんだ？」

「自分の身くらいは守れるよ……今まで何度も切り抜けた」

ルーカスの問いにロジオンはそう言いつ切る。

「でもさあ、やばい勘がビリビリ身体にきてんのよー。あんた達も感じてるよねえ？ 今までのよつにいかないかもよ？」

エマが、一緒に結界を張りとロジオンを促したが、首を横に振つた。

「……だつたら、ますます駄目だよ。ドレイクの後衛をしてみる彼に頼るしかないよね……」

頼みの綱はドレイクしかいない

そこにはいる者達は全員そう思つて頷くしかなかつた。

「何を言つてます？ ロジオン様も共に戦いましょう。」

しかし一人、拳を上げ、はつきりとした口調で共戦の意を表した者がいた。

アデラだった。

\*

「後衛だと、立派な参戦ですか？」

「そうだけど……その後衛だつて師匠相手じや……まともに出来るかどうか……」

「そんなにコンクート師が、自分の師匠が怖いんですか？」

「アデラに何が分かる……！」

ロジオンの怒りが籠つた怒鳴り声に、アデラ以外一同に息を止めた。

「第一！ 何でここに来たんだよ、來たらクビにするよと言つたじゃない！……そんなにクビになりたいわけ？ こんな危険に巻き込まれて怖くなつたから、クビになるように此処まで出向いたわけ？」

「ご苦労様だね！」

滅茶苦茶な事を言つて怒鳴つてゐるのは、ロジオン自身も分かつていた。

でも、現状も心情も一向に改善をれない ビツして良いか自分でも分からぬ。

ぐるぐると闇の中を、ただひたすら歩いてゐるだけに思える今こロジオンは

(アデラがこの現状を回避する)  
と言つ自分の予見を、信じてみようとしたことに後悔していた。

自分の当たらない」との多く予感を当てにして、彼女を巻き込んでしまつた。

「でも、ドレイク殿と魔法口記の危機は回避しましたよ？」  
それに、ゴンラート師が復活したら、お互に離ればなれでは危険な  
でしたよね？返つて良かつたではないですか？」

だが、アデラは怯まず飘々とロジオンに物申す。

「……アデラは……危険に飛び込むの平気なんだね」  
「平気じやありません」でも、貴方が闘うと言つなら、共に闘う  
のが私の喜びです」

「……主人に忠誠を誓つた騎士が……よく言つ台詞だよね」

池の中から放たれる光が、更に強みを帯びる。  
周囲の陰影を、彼の陰影を、更に濃くして。

今、彼の心の内を表しているようにアデラには見えた。  
この位の歳頃の精神は、成長している身体と同じだ。  
しつかりしてきたようで不安定で、光と闇の僅かな境界線について  
場面にどちらにも足が着く。

自分もそうだつた。

(「うん……今も大して変わらない）

アサシンになるのを諦めた時、どこかほつとした自分がいた。

それと同時に、今までやつて来た鍛練が無駄になつたことの虚無感に、できそこないと誰かに後ろ指を刺されているのではと言つ  
疑惑。

自分が諦めたことによって、アサシンを受け継ぐことになつた妹・ラーレへの後ろめたさ。

ずっと不安定なまま生きるの?

(変わらなきや……自分を誤魔化して、平氣な振りをしていた自分から)

クビになつても、怪我をしても……命を落としても。

「忠誠を誓つても……僕は何もあげられない

「見返りが欲しいわけではありません!」

激昂にロジオンは目を見開き、アデラを見つめた。

ロジオンを見つめているアデラの表情は険しく、美眉はつり上がりつていた。

だが、瞳から一筋の滴が頬を濡らし、それが余計にロジオンを驚かしていた。

「確かに私は魔法も使えないし、アサシンとして幼い頃から鍛えられたのに、その才が無い……。でも、私はロジオン様の手助けを出来る物を何も持っていないと思いたくない。今まで生きて教わったことを全て否定して、貴方の側にいるのは嫌なのです! お飾りの従者ではなく、私を私の出来る役目をさせてください!」

ロジオンの視線が落ちる。

「貴方を見て、ようやく出た勇気を無駄にさせないで下をこ……これは私自身のためもあるんです」

「……僕だってアデラと同じだ」

そう言つと右手が何かを描いた。アエラの城壁の施行を撤廃した

ようだつた。

「 ロジオン様」

「僕の魔法じやあ……師匠には効かない……でも、今……僕が出来ることを精一杯やう。アデラ、君と……」

一言一言歯み締めるように告げるロジオンの口調は、先程までの荒くれたものは無かつた。

ゆつくりとアデラに差し出されたロジオンの手。

「はい」

アデラは、快活に返事をしロジオンの手を握りしめた。

「お飾りじやない、今までやつて來たことは無駄じやない……一人じやなくて一人なら……出来る氣がする。前にアデラも、そう言つてくれたよね?」

そう述べ、微笑むロジオンの姿にルーカスやエマも安堵したようにな頷いた。

分かつた気がする ロジオンは思つた。

あの予見は、いつまでもだつたんだ と。

周囲が池から放たれる光に包まれる。

あまりの眩しさに目を瞑り、次に目を開けた時、皆が見たものは

池の中央で淡い光を保ちながら浮いている一人の少年 。



#### 40 復活（1）（後書き）

私事が忙しくなっています。次の更新は来週以降になるかと…。

## 41 復活（2）

ロジオンへりこの年齢だと思われる少年は、内側から光を放つているように明るかった。

軽く両手を広げゆつくりと瞼を開く。

ゆりゅうと池の上を浮く姿は、足元から頭まで色素が全く無く、人としての存在感はどこにも見当たらぬ。

そのせいなのか、薄手衣を身に纏い風もないのに身体じと揺らぐ少年は、蛹から孵つたばかりの昆虫のよつて見えた。

「……コンラーート

ルーカスが呟いた。

「コンラーートって若い頃、ああいう顔だつた？」

エマが眉間に皺を寄せた。

確かに美男の類に入っていた記憶はあるが、目の前にいる少年は中性的な美しさで、少女とも取れる。

「コンラーートが少年だった頃の姿に、取り込んだ池の精霊の写実化の姿も写してあるんじゃないかな？」

「ああ、水の属性の精霊は美男美女が多いもんねえ」とエマは頷いて見せた。

その色素を持つていらない姿は、自ら放つ光で闇を溶かし自分の周囲をぼんやりと明るくしている。

その様子も、風もないのに揺れる薄衣に、背中を流れる髪は神秘を纏い、確かに精霊の姿と類似していた。

色素の無い瞳が、一番池の近くにいたカーリナを写す。

「コンラート……」

カーリナに施行していた『閉幕への喝采』は既に弾き飛ばされた。自分の魔力で必死に抵抗して、全ての魂が吸われるることはなかつたが、身体に力が入らない。

だが、カーリナは今嬉しさにただ涙を流す。

何の感情もない無機質な様子の彼だが、カーリナにとつて、こんな長く見つめられたのは初めてだつたからだ

感激で胸の鼓動が上がり、どうにかなりそうだ。

「私が分かる……？」カーリナだよ。ずっとずっと、貴方だけを愛し続けたんだよ……。貴方が死んでからも、死んでから変わり果てた姿になつても……ずっとずっと」

カーリナの幼い腕が、よろよろとコンラートに向かつて差しのべられた。

「見て、私の身体……魂替えしたの。あと数年したら、貴方好みの女に成長するから そうしたら、今の貴方に丁度釣り合いが取れるよね……」

コンラートの手がゆっくりと、拙くカーリナの差しのべられた手に向かつた。

一途過ぎるが故なのか  
情熱が過ぎるが故なのか

魔法を扱う者のモラルも、扱わない者のモラルも無視した自己中心な考えは、本人の性根の問題も抱え周囲の親い者達を巻き込んだ。

全ては、コンラートに愛を受け入れてもらつた為 その瞬間

がようやく来る。  
願いが叶う

カーリナは幸せの絶頂の中にいた。

\*

一人の手が重なり、繋がる。

コンラートが悠然と微笑み、カーリナもつられて微笑んだ 瞬間。

中途半端な悲鳴が起こり、がくり、とカーリナが乗つ取つていたリシェルの身体が倒れた。

「コンラート！」

ドレイクの横からの魔法攻撃に合い、コンラートが吹つ飛ぶ。

「この（リシェル）の身体は他人の物。勿論、形成しているその身体も貴方のではない」

ドレイクは腕を広げ、咳く。手の平から光輝く何かが、コンラートに帶状に向かつた。

「離しますよ、その身体から」

コンラートは逃げ去ろうとするが、ドレイクの掌から伸びる光は、彼を確実に仕留めた。

すり抜こうとしても、またしつこく身体に巻き付いてくる。身体に付着すると、あつという間に広がり隙間無く繋がった。

それは口以外の、コンラートの身体を埋め尽くす。地に転がる姿は、大きな蛹だった。

「……まだ知恵不足だったと言つことか……？」

ドレイクは簡単に捕獲できたことに疑問を抱き、眉間に皺を寄せた。

ロジオンとアーテラは、倒れているリシェルの身体をエマ達の場所まで運んだ。

仰向けにして脈を診ても診なくて済む、事切れているのは一目瞭然だった。

「お母さん……」

リシェルの涙が幾つも頬を伝い、地に落ちる。

「罰をくらつたんだ……。今までの重ねてきた罪の……リシェル……泣くのはいつでも出来る」

ロジオンが泣き続けるリシェルを諭す。

「元の身体が物理的な死を遂げる前に……君の魂を庚さないといけない。分かるね……？」

目を擦りながらも、懸命に頸ぐリシェルを仰向けに寝かす。続いて、その横にリシェルの身体を同じように寝かした。

「ルーカス、エマ……そしてハイン。頼むね」

「助いってても、これくらいは出来るさ」と、ルーカス。

「任せときなさいよお

エマにウインクされた。

「微力ながら、やらせて頂きます！」

不安なのが苦笑いをして頸ぐハインにロジオンは

「やり方、分かるよね？」

少々不安になつて尋ねた。

「はい。但し実践はありません、それが不安で……」

ロジオンはポンと彼の肩を叩いた

小刻みに震えていた。

「統一された文章を読むだけだから……大丈夫。リシェルを助けたいと言う思いだけを心に抱いて……ハインなら出来るよ」

ロジオンの真っ直ぐな瞳に見つめられ、ハインは「はい」と力強く返事を返した。

各自の魔法日記が本来の姿に戻り、左手の上に浮く。

「『光聖』属性『救済』の章」

声を揃え、魔法日記に命ずる。

すると、パラパラと指定された貞を独りでに捲り、開いた。

『光聖』は魔法の中で特殊な属性で、権限は魔導術統率協会ではなく、僧侶を中心とした教会にある。

『信仰』性の強い魔法な為、教会に所属する者がより強い魔法を施行できるのだ。

しかし現実問題、戦場など、危険な場所に出向くことが多いのは魔導師や魔法使い。

相手側に『闇』が得意な者がいたり、死人使いがいたら有効なのは『光聖』だ。

僧侶が所属する教会はなかなか迅速に動けないようで、対応に遅れる場合も多い。

この辺りの兼ね合いから、教会から

『詠唱を各自で勝手に変えない』

『貞は必ず冒頭に記すこと』

と、条件の元に魔法日記に添えられている。

『光聖』は神話から始まり『召喚』『救済』『除滅』『鎮魂』『祈り』が大抵の魔法日記に貞として添えられた。

「『救濟』の章『入魂』」

右手をかざす。

「魂の闇路を照らし、萎み逝く命の花を咲かせるための恵みの露を、

星影より乍ら」

地が円形に紋様を描き光を放つ。

閉じるような眩しい光ではなく、柔らかで温かみを帯びた優しい

照らし。

「人智は果て無し、無窮の遠究め行かん。それ故、迷える魂に御手を与える慈しみと憐憫の教えを忘れたり」

そこだけ厳かな空間と成り、完全に周囲と遮断された。

ピシ……

僅かに聞こえる割れる音に気付いた時には、コンラートは封縛を解き、軽やかに宙を飛んでいた。

両手に水の球体を抱いて。

ドレイクは球体に標的をあてた。

一瞬にして水の球体は蒸発し氣体に変わる が、ドレイクは自分の失敗に舌打ちをした。

コンラートの手まで干伸びてしまった。

通常の人なら、熱いと感じるくらいで済むはずだった。

だがコンラートが取り込んでいるのは、水の精霊。人より揮発率が高い。

念頭に置いて威力を押さえて施行したが、思つたより過敏であつたらしい。

コンラートは池の中へ滑り込んで行つた。

「閉じろ！」

ドレイクが刹那、左から右へと腕を振る。

池全体が光を放ち、瞬時に古代文字で形成された封印結界が池を覆う。

だが

パキィイイイン

と、乾いた音が、封された池から響いた。

「……なれの果てでも、高名な魔導師 と言つことですね」

ドレイクが忌々しく呟いた。

崩壊された結界から、飛び魚の「」とく水が幾つも線を成して飛び

上がる。

それが鉄砲のようにドレイクに襲いかかってきた。先端が魚の口に似、パクパクと開けながら、水しぶきを上げて向かってくる。

ドレイクは、竜の身体能力を発揮した跳躍で地を蹴り、木々の幹を飛び蹴り、襲いかかる水攻撃を避ける。

誘導施行もかけているようで、それはドレイクの後を馬々と追いかけてきた。

水力で枝をなぎ倒し、葉や木の破片を巻き込み更なる凶器に仕立てあげる。

ドレイクは方陣の場所を踏む 瞬時に姿が消え別な場所へ出現した。

池の真上に 。

誘導施行された水の凶器は、池の上方陣にいるドレイクに向かつて突き立てる。

だがドレイクに当たる瞬間、彼の姿は消え、凶器と化した水は、勢いのまま己の住処の池に突っ込んだ。

その勢いは津波を起こし、池の外にまで流れ出る。

\*

「池の上にも方陣が……」

アデラが、信じられない物を見たようにロジオンに告げる。

「水の王の力を借りたか……事前に用意していたか……だね」  
しつかりこつち見て、とロジオンに促され、アデラは再び自分の剣の刃の部分に目を向けた。

手入れされた刃からは、僅かな月明かりと繰り出す魔法の起<sup>こ</sup>す光で、アデラとロジオンの顔がうつすらと[写]っていた。

「ドレイクのことだから、水の精を切り離す策は出来るだろ? けど……その後のことを考えると……僕達も策を張つておく

「はい」

「刃に[写]る僕の口の動きを見て……」

\*

ドレイクは動きを止めていなかつた。

魔法攻撃に取り込んでしまつた木々の破片 物理攻撃まで加わつた自分の施行した魔法。

それが自身に戻つてきただことで、僅かに隙が出来た。

「上げろ!」

ドレイクの命<sup>めい</sup>で水中から飛び出でたのは、コンクリートだった。水に関与できるのは水の精霊 特に支配している王。

事前にコンタクトを取り、精神の繋がりを依頼していた。身体憑依・精神支配とは異なつたもので、精神感応と言われている。

正体不明の化け物に変わつてしまつたコンクリートが仲間を取り込んでしまつては、水の王も流石に静観している訳にはいかない。生来、臆病な一面を持つが、ドレイクならと信頼を得て精神に繋がりを持たせた。

“私の前で水の中へ隙を見せたら、押し上げて池から放り出せ”

かくてドレイクの思惑通りにいった。

自分が支配した池から放り出されたコンラートは、地の上で呆然としていた。

何が起きたのか気付いていないのは明らかであるが、それも短い間だと。

ドレイクは刹那コンラートに魔法を繰り出した。

コンラートを取り囲む柵のよつた立体陣。

「????????????（唸り、轟け）身体の奥底まで」

ドレイクが施行した魔法は音波魔法。それも閉じられた狭い範囲内である。

ウイイイイイイイ

身が波打つような強烈な音波にコンラートは懸命に陣から脱出しようと、柵のような立体陣に手を掛けた。

だが、更に状況を悪くしただけであった。

音波を発しているのは、この立体陣の柵からであり、あまりの強烈さにブルブルと身体全体にくる。

かなりの電流を受けているのと似た感覚で、身体が振動し肌が波打つていた。

「うつ、うつ、うつ」

がくんがくん、とコンラートの身体が激しく揺れる。

「水の精はこのくらいの波動なら、風に波打たれる程度のもの。だが、コンラート……元・人間の貴方はどうでしょうか？」  
ドレイクの口元が上がった。

立体陣の中のコンラートがブレだした。

一人いる錯覚。

重なつたり離れたりを繰り返し ずるり、と人の形成した殻から出る何か……。

コンラートだつた。

水の精から離れた。

ドレイクは、左手を素早く握る仕草を取る。  
コンラートを閉じ込めた立体陣は、一瞬に細い柱となり化け物と化した身体を縛り付けた。

「王！」

ドレイクが誰にともなく叫ぶ。  
離れて自由になつた池の精靈だが、コンラートに精神を含む全てを乗つ取られ弱りきつている。

自ら土に溶け、浸水し自分のある場所に戻るのにも絶え絶えで行つていた。

また捕まつてしまつ ドレイクは王に保護して貰つ為に呼び掛けた。

急に土に浸透するスピードが上がり、水の精は土に溶けていった。

「！？」

自分の左の握り拳が、意思に関係なく開く。  
破裂音に、コンラートが柱から解き放たれることを知る。

「ちつー

ドレイクの左手の掌が血で染まつた。ボトリと中指が落ちる。掌に深く亀裂が入り、血が止めどなく流れしていく。

封印がまだ未完成のうちに解かれたことで、跳ね返りが来たためだ。

忌々しく左手を振り、己の血を払う。

水の精が離れたのは良いが、魂が自由になつた分動きが格段に早い。

そのことは長く生きてきた分、ドレイクは知つていた。

逃がさない自信はあるが生前が高い魔力に、様々な魔法を駆使したコンラートだ。

封じ込めて滅する方向が一番確実だが

(まだ準備が整わん)

封じ込めるだけで手一杯か。

ドレイクは、先程とは格段に早いスピードで迫るコンラートを見て、そう思った。

\*

「????????（借り給つ）『戦女神パラスの鎧』」

『戦女神パラスの鎧』　物・魔の防御だけではなく、かけられた個々の能力も飛躍的に上がる魔法である。

ただ、軍隊など大人数には施行が出来ず、一人の魔法使い・魔導師で一人しか出来ない。

戦では大抵自分自身に施行する魔法であった。

施行ギリギリであった。

少しでも判断が遅れていたら殺されていたか、取り込まれていたか。

「自由だな！ ロンリーート！」

ぴつたりと追いかけてくる影の顔がつすらしか無いのに、にじりと笑つたのがはつきりと見えた。

### 43 復活（4）

元々、身体能力の高い竜のドレイク。それは人智を越える。魔力を使わなくても、その恵まれた身体を使い普通の人では出来ない急所や難所も易々と通れる。リスクのように蹴り上げ、木々の幹と幹の間を軽々と渡ることも出来る。

しかも今は身体も能力も格段に上げる補助魔法も施行している。

なのに、早さも繰り出す魔法もほぼ同等。

（形代から解放されたと言つことだけで、能力がこれほど上がるのか！）

生前のコンラートは確かに強い魔導師だったが、自分が勝つていた 確かに。死ぬ前に飲んだ薬の副作用もあるのだろうか？

「！？」

ぐんつ コンラートのスピードがまた上がった。成長している 死んで化け物となつても。

顔が近付く。

うつすらと浮き上がる顔は、先程取り込んでいた水の精霊の容姿がまだ残っていた。

『ドレイク……ドレイクだ』

頭に直接届く声は、生前のコンラートのものだ。

『ほしい、ほしいんだ……からだ、ずっとわかつて、ずっとこきて

『 いけて、ずっとつよくて』

『 イゾルテが、イゾルテより 』

イゾルテ？

自分の脳に直接送り込まれる言葉と映像に、ドレイクはあまりの怒りに我を忘れそうになつた。

何も着けていない、生まれたままの姿の。腰まで届く銀の髪は、たゆたゆに揺れ。顔は喜びに紅潮し、瞳は快樂に揺らぐ。

「おのれ！ イゾルテ様に淫欲を抱いていたか！」自分の主が、妄想でも恥辱を受けていたのかと叫び怒りがドレイクを襲う。

聖光を放たないまま右手に握りしめ、『コンクートを殴つた。逆方向に吹つ飛んだが、空中で旋回し弾びドレイクに迫る『コンクートに

「イゾルテ様の為にもこの身体は渡さん！ あの方をお守つするの私は私の役目なのだ！」

そう怒鳴り付けた。

\*  
風の早さで向かつてくるコンクートを、迎え撃つドレイク 標的は彼に移つたかのようになつて見られた。

「師匠！」

その時、池を挟んだ向こう岸で呼ぶ懐かしい声にコンクートは、まぐると首を伸ばし振り返つた。

フード付きの短いマントに、月下に輝く青銀の髪。ブルーグレイの瞳。

整った顔立ちは、まだ少年の面影を残して……。

『口、口、ロジオオオオオン!』

納まる形代が無い、コンラートの影のよに黒い魂は、ギュルンと伸びた。

『ほしい、ほしい、そのからだ』

池など一越えだ。

「ロジオン!」

ドレイクも飛び越えながら、攻撃魔法の詠唱を口にした。したり顔でコンラートを待ち受けたロジオンの顔がぶれる。

『?』

次の瞬間にはアーテラに変わっていた。

アーテラの田の前で、地から円形方陣の紋様が浮かびコンラートを捕らえる。

アーテラがその場を離れると 後ろにロジオンが立ち、詠唱を口ずさんでいた。

金色に輝く円柱形魔法陣 だが、すぐに空にガラスが割れ、崩れるような音が響く。

刹那、また円柱形魔法陣がコンラートを捕らえる。

何度もそれが繰り返される中、アーテラは駆け足でドレイクの出血している左手の止血をする為に近付いた。

眉を潜めながら、中指の無い左手に端切れを巻く。

簡単に巻いてくれ。どうせまた生えてくる

「生え ー?」

ぎょっとしたアーテラだが、彼が人を型どつた竜だったことを思いだし納得した。

竜は爬虫類なんだ、きっと、と。

「コンラートの魔法日記は！？ 今、誰が持っている！？」  
普段の丁寧で懇懃な口調ではないドレイクに、アデラは焦りの色を感じた。

「ルーカスが。しかし、今は『入魂』の施行中で」  
そうか と、ドレイクは額に指を当て少し考えた後、自分の上着の内ポケットから掌サイズの手帳を取り出した。  
「やはりまだ届いていない……だから教会は…」

「何かを教会に依頼したのですか？」

「コンラートを滅する為の呪文だ。 今は無い異世界のね。出し渉つて！ これから只人は信用がならないんだ！」

激しい口調は、魔力を持たない人全てを憎んでいるような印象を受けて、アデラは黙り込んだ。

仲間を死に追いやり続けたのは、力の持たない人 ドレイクが、日頃どれだけ我慢して接しているのか

憎まれても、只の人のアデラには何も言えなかつた。

「 ロジオンは円柱形封印魔法陣を、どれだけ施行している？」  
突然尋ねられたアデラは、はっとしながらも  
「異世界から封印陣を召喚出来るまで時間を稼ぎたいと 結構な数だと思われます」  
と答えた。

「ロジオンの今魔力で『円柱形封印魔法陣』の『時間差施行』と『召喚封印陣』を同時にやれば十五分そこそこ……」  
「時間差施行をしていることを『存じでしたか』  
ああ、と気の無い返事をしドレイクは立ち上がる  
「教会へ跳ぶ。出し渉りをしている幹部を締め上げて、対コンラー

トの呪文を取り上げる

そう言った。

そうしてアーテラに向き直すと

「万が一の為、貴女に魔法を施行しておへ」と右手を動かす。

「私は戦います! 守られるのは結構です」

「やう言おうとした。

が、ドレイクの台詞は違うものだった。

「ロジオンの助けになるよ!」

「ドレイク殿……」

ドレイクはアーテラのブーツを指差す。

「隠してあるマイン「ローシュ」を。それ」と魔法をかける……

## 44 在する者達

『召喚封印魔法陣』

異世界の者から封印魔法陣なる物を召喚する。

以前からコンタクトを取つてゐる者なら召喚は容易いが、今回はコンラートが接していない異世界の者を探し、交渉をしないとならない。

間に合うか？

詠唱と共に精神を離脱させ、遠く彼方へと飛ばす。

勿論、闇雲ではない。

魔法使いとか魔導師とか魔力とか 馴染み深い『魔』の世界への介入。

ナゼ、『魔』ナンダイ？

また声が聞こえる。今度は先程と少し声音が違つた。

何故、我々ニ『魔』ガ付イタ？

遠イ昔、魔法使イト力魔導師ナンテ名称ナド無カツタ

後から付いたんだ。

ソウ、後カラダヨ

じゃあ……

『魔』ヨリ召喚シヤスイ世界ノヲ探シナヨ

精靈界？

違ウネ

神界？

ゲラゲラと幾人もの笑い声が重なる。

神界ト言ウ異世界ガ、在ルト思ウンダ？

違うのか？

今デ言ウ神界ハ、後デ命名サレタ世界

……無いのか。

知ラナインダネ

全クダ

仕方ナイサ、時ガ経チ過ギテイル

只人ニ、都合ノ良イヨウニ世界ガ創リ変エラレタ

コノ、世界ハ

「……！？」

集中が途切れ、精神が戻る。

それでも、頭の中で自分に語りかけてくる幾人かの声に、ロジオ  
ンは釘付けになってしまった。

知リタクナイカ?

コノ世界ノコト  
異世界ノコト

イヤ、一番知リタイノハ

「……お前達は誰だ?」

\*

時間差施行で幾重にも施行していた、最後の円柱形封陣が破れた

。

ドレイクはまだ戻つてこない。

ルーカス達の入魂も今だ続く。

ロジオンが、異世界への呼び掛けを途中で止めた。

何か不都合でも起きたのか? ロジオンはこめかみを押さえたまま、狼狽えていた。

すぐ近くに今、最も警戒しなくてはならない化け物が  
一トがいるのに 。

『ロジオン 』

ロジオンが我に返つた視線の先には、既にコンラートが覆い被さるうと、闇より暗い闇の触手を広げていた。

「ロジオン様！」

コンラートの肩から腰にかけ、斜めに直線の空間が出来た。間髪入れず、反対の肩から逆の腰にかけても。

アデラだった。

自らを主張するようにマインゴーシュは、金色の光を放つ。ドレイクがアデラのマインゴーシュに『光聖』の念を入れた為だ。一回の攻撃に弾みが付いた身体は、三回目の攻撃をかける。一つのマインゴーシュを宙で合わせて、両手で柄を掴むと頭上から真つ二つに切り付けた。

「ア……デラ？……『戦女神パラスの鎧』？」

「ロジオン様！」「無事ですか？ 何ともございませんか？」

アデラはロジオンの肩を掴み、わざわざと前後に揺らす。ぽんやりとした様子で自分を見つめる中に、アデラは不安を感じたためだ。

視線は合つてゐるのに、心からずで彼方に在るよつと見えた。

「ロジオ……！」

「アデラ……！」

急に正気に戻つたよつとアデラに怒鳴るロジオンに、彼女はホッとする間も無かつた。

再生を果たしたコンラートが、あつと/or間にアデラを池に引きずり入れたからだった。

「くそつ……」

ロジオンも池の中へ飛び込んだ。

\*

夜の池の中は、闇の色を引き込み暗いはずなのに  
薄明かるい。

ああ、そうか。

月明かりと

アデラに施行されている『戦女神パラスの鎧』だ。  
身体全体がボンヤリと光る姿をすぐに見付けることが出来て、施行してくれたドレイクに感謝した。

ロジオンは、逃れようと暴れているアデラに追い付くと、必死に手足を動かす。

アデラが手に持つていたマインゴーシュで、自分を掴む影を確実に切り裂いた。

先程の剣の扱い方と言い、見事だ。

水の抵抗力も頭に置いて剣を扱っている。

技術を見ると、アサシンとしてのオは十二分に兼ね備えている。  
コンラートから離れ、こちらに向かって浮上してきたアデラの腕を掴み、自分に引き寄せた。

顔が近付き、視線が重なる。

( えっ? )

突然、自分の身体が硬直し、ロジオンは焦った。  
身体が吊つた? いや、そんなんじゃない。

意識が、深い海の底に引きずり込まれる感覚に背筋が凍つた。

( 精神支配! )

何故だ? アデラ?

（まさか！ アデラは魔力を持っていない、出来るはずが無い！）  
でも目が合つたのは、見つめたのは彼女しか  
アデラの瞳を見て、ロジオンはまさか、と自分を疑つた。

アデラの瞳の中に映る自分の姿 。

（違う！）

そう感じた。自分なのに自分じやない。

アデラの瞳の中の自分が笑つた。

「 !?」

駄目ダナ、丸ツキリ汎工ナイネ  
力ノ使イ方ヲ教エテヤロウ

ナニ、少シノ間、身体ヲ借リルダケダ

誰かに頭を掴まれた氣がした 刹那、ロジオンの意識はそこで  
途絶えた。

「ウワツッ！」

身に付けているローブに足を取られ倒れる教皇に、僧侶達は慌てて駆け寄り彼を起こす。

「魔承師補佐！ なんと言つ無礼なことを…」

僧侶の一人がドレイクに向け、怒りを露にした。勝手に躊躇してそれを人のせいにするとは、余程こぢらに非があると思わせたいらしく。

「周囲がめくらだと苦労しますね、教皇」

「ぬ……」

教皇は老体を周囲の僧侶達に起らしめて、ヨタヨタと歩き出した。

「……付いてきなさい」

ドレイクにそう声を掛けた。

「教皇、我々も……」

「お前達はここにいなさい！」

付いてこようとする僧侶達に放つた教皇の言い方は、思いもよらず険のある言い方で僧侶達は一瞬にして固まる。

「魔導術統率協会から依頼が来ていたことを、何故すぐに話さなかつたのだ！ 何を置いても先に連絡をするより常に申しているではないか！」

「し、しかし……感謝祭間近で教皇様共々忙しく……」

「魔導術統率協会の依頼は緊急を要することが多い。いつも、そう申しているはず！」

もう良い 教皇は、何度も言い伝えた台詞につんざつした様子でドレイクとその場を去った。

（――中央教区も、感謝祭の準備で夜遅くまで追われていた。）

教皇のいるクレサレッジ教会は、魔導術統率協会と同等の古い歴史と伝統を持つ。

その歴史故に矜持が高く、教会に保管してある、あらゆる文庫を出し惜しみする傾向があった。

魔導術統率協会も知らない、未知の世界の書物も置いてある為に、急な危機の時には自分で考え・創るより余程早い。

教皇は祭壇の裏側に付くと、自分の首にかけていた四角い金板を外す。

祭壇の裏には、それがぴたりと収まる凹みがあり、教皇はそこに金板をはめ込んだ。

すると、枠組みが出現し引き出しのようになり、独りでに開いた。

そこには、数珠のよつた物が深紅のビロードの上に大儀そつに置かれていた。

数珠とよく似ているが、数珠にはない人差し指と薬指と親指にも通すところがあり、手首の部分には留め金がある。数珠玉の大きさも普通の半分もない。

これが教皇しか持てない、『知識の宝庫』と書つた名の教本であった。

教皇は左手にそれを嵌めると一言一言、言葉を述べる。

これは呪文ではなく合言葉のよつたものだ。

すると大きな図鑑ほどの、透明の鏡のよつたものが数珠の上に出た。

「悪しき魔を払う言葉で宜しいのですかな？」

「『払う』だけでは駄目です」

「では、滅する方で……」

教皇はそう言つと、その鏡に指を当て文字を書き出す。

押すような動作をすると、鏡に色々な形の紋様が写し出された。それは異世界のあらゆる文字だとドレイクは知っていた。

魔力を持たない者達の、亡世界だと言つことも……。

「ドレイク殿」

暫くして教皇がドレイクに声を掛けた。

焦燥の色が濃い。

「どうしました？」

「はつきり、滅すると記録している文書があまり見当たらないようですね」

「退散だとまたやつてくる。魂を消滅出来る呪文はないのですか？」

「退散や祓い、除靈、淨靈に關する言葉は多く出てくるが……善でも惡でも命は尊いと言つ教えがあるので、在るべき場所へ帰るようにしますが、歸れなくなるような魂の抹消までする呪文は、そもそも少ないのでしょう……」

首を横に振りながら教皇は、ドレイクの期待にそえる呪文を探した。

「……淨靈か封印でも構いません」

仕方ない そんな風にドレイクは、そつと溜め息をついた。

時間がない。もうロジオンが数多く施行した円柱形封印魔法陣は終わる。

異世界から封印陣を召喚できる『召喚封印魔方陣』が成功していれば良いが。

あれは大分時間をかけないと難しいし、何より精神を消耗させる。コンラートの知らない、力のある異世界の者を探すのがそもそも大変だ。

「……これならどうです？ ジャーハンと言つ國の呪文です。はつきり消滅と記されます」

「それで良い。もう時間が無い」

「他に浄化と封印の呪文も、幾つかお渡ししましょ」

教皇が透き通る鏡に向かい人差し指をくるくると回すと、縮小し、数珠の上に収まつた。

ドレイクは自分の魔法日記を元の大きさに戻し、机の上に置く。教皇は数珠を嵌めた左手をひっくり返し、魔法日記の表紙にあてた。

「直接なので、申し訳ないが中身は後で修正を……」

魔法日記に直接記憶させる方法の一つだ。

この場合、たまに白紙の頁ではなく、別の、先に記した頁に紛れてしまう場合がある。それを教皇は言つていた。

「いつものことですから」

吸い込む度に光を放つ魔法日記と、情報を送る時に規則的に光る数珠を見ながらドレイクは言つた。

数珠と日記から放出される光が急に消え、辺りは静かな薄闇に戻つた。

「私は急がなくてはなりませんので、失礼します」

「強敵なようですね。お気を付けて」

ドレイクの無くなつた中指を見て教皇は懸念した。

ドレイクは仮の姿になつた日記を胸元にしまつと、足早に一番近い移動方陣に向かう。

「ドレイク殿！」

教皇の、弾かれたような大きな呼び声に後ろを振り替える。

「感謝祭が終わつたら、魔承師様に近いうちにお時間を頂けないか御伝言を！ ご相談があるのです！」

「確かに。伝えておきましょ」

何か困ったことが周囲に起きているのだろうと予想がついた。

（だが今は……）

ロジオンの身が案じられ、一刻も早く戻ることがドレイクの最優先事項であった。

#### 45 亡霊世界の呪文（後書き）

私用で、次回の投稿は週末か来週になります。

46 豹変（前書き）

私用が一旦落ち着いたので投稿します。

リシェルの『入魂』が終了し、安堵している場合ではなかつた。

激しい水音に池を見てみれば、ドレイクどころか、ロジオンもアデラも コンラートもいない。

「やだ！ もしかして全員、池に引きずり込まれた音？」  
三人青ざめて顔を合わせる。

「 ハ、ハマ！ かつ……！ つ

雑木林から飛び出したエマを止めようとしたルーカスだが、肋の痛みで踞つてしまつた。

「ルーカスとハインは、リシェル連れて避難してえ！ 怪我してんだからあ！」

エマは走りながらルーカス達に言い、どんどん池に近付いていった。

池に引きずり込まれたなら、一刻も早く助けなければならぬ。  
ドレイクとロジオンなら、水中で何かしらの魔法を施行するだろうが

（アデラちゃん……！）

アデラは魔力が無い。只人だ。

一番コンラートにつけこまれ安いだろう。

「エマ殿！ 一人じゃ危ない！」

すぐ後ろからハインの声がして、エマは驚いて振り返つた。

「私しかいなでしょ！ 動けるのー！」

「私だつて動けますよ！」

「詠唱してゐる間にやられちゃつてー！」

「魔法以外の ハマ殿！」

池の中から飛沫をあげて飛び出してきた影が、エマに突つ込んで

きた。

「危ない！」

ハインがエマを押し倒し回避する。

「 ね？ 魔法以外でも役に立てるでしょ？」

「……もう少し気を付けて避けてよね」

嬉しそうに話すハインに、エマは擦りむいた鼻を押された。

闇の中に蠢く闇にハインとエマは田を凝らす。

コンラートだ。

二人身構えた。

だが、コンラートが子供並みの大きさで眉を潜める。  
先程の少年の姿よりぐんと小さく、弱々しくなっているのだ。

何があつたのか？

入魂に集中していたエマ達には把握が出来ない。

「 ひつー？」

自分の後ろから来る、凍てつくような波動にエマは思わず声を出した。

声を出さなくとも、ハインも同じだった。

恐る恐るコンラートを見ると、その、のっぺりとした顔には昔の面影も見当たらなく、ようやく田鼻立ちが分かる程度なのに怯えている。人目で分かった。

チャポン……

再び起きた水音に振り向く。

身体に、たなびく波紋は先程の凍てつくるものと同じ。

だけど

何故その波状が、ロジオンから出てるのか……？

\*

浮力の魔法施行で、ロジオンは水面に浮いていた。片腕にアデラを抱き、地面に着地する。同時、ロジオンはアデラを手放した。

がくり、とアデラの膝が折れ、地に突つ伏す形で咳き込む。

「ぐ……ッ！ ゲホッ！ ゴボー……」

「アテラちゃん！」

水を飲んで吐き出しているアデラの背中を、エマは懸命に擦った。びしょ濡れで、後ろに結わき止めていた髪が肩に落ち、びつたり肌や首にまとわり付いている。

「防具服着てるんでしょ？ なら上着とシャツ脱いで。風邪引いちやう！」

エマは早口で捲し立てるに、自分のマントをアデラに掛けた。エマのマントは袖を通せる型の物なので、上着の役割として充分果たせる。

水を吐きながらもアデラは

「ロジオン様……はつ？！ じ無事か？ 水の中で様子がおかしくなられて……」

と懸命に尋ねた。

「アテラちゃんを抱き抱えて、水から上がってきたわよお……ただ、さう言つてエマはアデラの肩を抱いて、対物魔の結界を張つた。

「中身がロジオンとは限らないかもねえ……」

\*

池に戻ってきたドレイクはその光景に愕然とし、また、恐れていったことが起きたことに血の気が引いた。

コンラートはもう逃げ出せないほどに弱々しく、更に透明感を増し、地べたに這いつぶばつっていた。

ロジオンは

今の状況を楽しんでいるのか、自信ある笑みを始終絶やせずにいた。

師であるコンラートを滅する」とこと、何の躊躇いも無によつて。

新たな気配に気付き、ロジオンはドレイクの方に振り向いた。彼はドレイクに涼やかな笑顔を向ける。

「やあ……ドレイク。久しぶりだね。息災で何よりだ」

声音はロジオンだが、口調が違う。

のんびりとし、平坦とした彼の口調ではなく、落ち着いた大人の男性のものだ。

その口調にドレイクは覚えがあつた。

「消滅の呪文を手に入ってきたようだが……骨折り損になつてしまつたね　もつと早く私が出でくれば良かつたのだが……」

コンラートの方を見ながら話しかけるロジオンに、ドレイクは言

つた。

「マルティン様……？」

\*

マルティン

魔法を扱う者達が知らないことは無い人物。

魔法の創立者であり、魔導術統率協会の創設者。

尊敬があまりにも深く、皆、子にその名を名付けるのを憚るほどに。

その名は魔力の持たない者達 アーテラさえも知っている。

まさか と、エマもハインもアーテラも啞然と、ロジオンとドレイクのやり取りを聞いていた。

「私の魂を受け継いだ者が、上手に攻撃魔法を使えないようだから、指南のつもりで出てきたのだが……余計なお世話だつただろうか？」

「 いえ」

ロジオンは微笑みを深くする。

「表情が固いね、ドレイク。私が、今このこの身体を乗っ取るのではないか と、疑つてはいまいか？」

「……マルティン様ならしないでしよう

「 なら、久しぶりの再会だ。隨喜の顔を見せて欲しいな。突然の事で驚くのは仕方ないが」

ふつ、とドレイクの顔が緩む。

普段、無表情に近い顔の彼が、このように柔らかく笑うのは珍しい。

本当にマルティンなのか？

柔らかで清々しい笑みを浮かべるロジオンは、ずっと大人びて見え、いつも、のんびりした口調ではないが。

この、身もよだつ恐ろしさは何なのか？

『地獄の鑑賞者』達が大勢やつて来た時よりも恐ろしく感じる。マルティンとは、このような人物だったのか？

いや、そもそも

（どうして、ロジオン様に？ ロジオン様はどうされたのだ？ ロジオン様がマルティンの振りをしている？）

アデラの頭は混乱の渦の中、すがるようにロジオンを見つめる。それに気付いたのか、アデラの方を向いて彼は微笑んだ。

「心配しなくて良い。君の主人は中にいる 眠つてもうっているがね」

と、自分の胸に手を当てアデラに言った。

アデラは返す言葉も浮かばず、ただ頷くだけだった。

話しかけられただけで手足が震える。

畏れ多いとか、畏敬の念で震えているのでは無いのだけは分かっている。

ドレイクは何ともないのか？

本当にマルティンなのか？

それは、隣にいるエマやハイインも同じ気持ちであった。

しかし、自分達には遠い過去の存在であるマルティンが、どのような人物だったかなど知らない。

マルティンの時代から生きている、ドレイクしか知らないのだ。黙つて見守るしかなかった。

「イゾルテも変わりはないか？」

「はい。元気に過ごしております」

「それが気掛かりだつた。ずっと君が付いていてくれていたのだろう？」

「私を保護し、育ててくださつたマルティン様の大事な妹君ですか  
ら……」

「ありがとう、ドレイク」

ロジオンの手がドレイクの、高さのある肩に触れようとする。

が、ドレイクにかわされた。

瞬時、アテラ達に防壁結界が施行される。

「……マルティン様ではありませんね？ よく似た口調をしてらつ  
しゃるが、狂心がただ漏れですよ」

ロジオンは不貞腐れた表情をし、顔を下に向けた。長めの前髪が、  
たらんと下がる。

くく、と含みのある笑いが、俯く顔から漏れた。

「ふ……はははははは！」

笑いと同時に、顔を上げたロジオンは 。

歪んだ笑みを浮かべ、ドレイク達を見つめ返した。

## 47 残忍なエクティレス

「お互<sup>イ</sup>い猿芝居<sup>居</sup>だつたのかよ」

大口を開けて笑うロジオンの声は、酷く下品で耳障りだった。

「私を保護して、育ててくださつたのはイヅルテ様 マルティン様は私に魔法は教えてくださいましたが、その他は一切関<sup>与</sup>しておりませんでした」

「かまかけたんだ。じゃあ、それなりに似た雰囲気だつたつてことだよな?」

さあ、どうでしょ? ドレイクは先程のやりとりに、さほど興味を持たないようだ。

「死んでも尚、魂に溶けずに自己<sup>己</sup>を保つか……往生際の悪い所は変わつてませんね」

ぴたり、とロジオンの笑いが止まった。

好敵手と出会つたように瞳を輝かせ、口角は大きく上を向く。ロジオンの姿は、挑み行く獣そのものだ。

「お前と決着を付けたかったのさ。それが心残りでさ 一いつと魂を繋ぐことが出来なかつた。そうしたら!」

くつく、と肩を震わせつつ話を続ける。

「他にも繋ぐことが出来なくて、溶け込めない奴がいるじゃん! こいつ、すつ<sup>づ</sup>げえ不完全なんな! こんな端切れだらけの魂で、よくまともにいられるよ」

「貴方も生前はそうでした」

「だから、俺が生まれた、だろ?」

「違う、と言いましたよ。『生まれた』のではなく『作られた』と

覚えていないのですか? とドレイクに問われたが、彼は初めて

聞いたように大きく目を見開いた。

「エクティレス」

ドレイクが彼の名を呼ぶ。

「エクティレス」

再び名を呼ぶ。

「ああ……そうだ。思い出した」

彼は咳くと、歪んだ笑顔を見せた。

「狡猾な魔導師に育てられた。俺が『何者』か知っていたから。成長して、周りから言われた名前が『残忍な処刑人』」

\*

「エ、エクティレス……！」

声を上げたハイインに、エマは掌で彼の口を塞いだ。

エマもハイインも、そしてアデラも、その名を知っていた。

歴史上に残る、最も残酷な魔法使い

魔力の持たない人間達を無差別に襲い、諫めようとした魔導師達をも死に至らしめた。

『数ある多くの血族を滅亡に導き、尚、我らの尊き血を濁す汚れた者達は、肅清されて当然』

肅清  
肅清

一つの町を一瞬にして、躊躇つこと無く消滅させた。

魔法使いと言つ地位でありながら、その魔力と魔法は巨大で強力であり。育てた魔導師同様に、狡猾で卑怯であつた。

何人の魔導師や魔法使いが挑みに行つたが、捕まらない あげく殺される。

「負けなかつた、誰にも。 だけど負けたんだ、あんたに。 あと一刺して殺れたのに…… 邪魔をしやがつた。あの女 イゾルテの野郎が」

憎々しげ目をつり上げ喋る顔は歪み、狂相がありありと晒け出される。

その、狂氣の表情とオーラを身に纏い、彼はまた笑う。

「だが、今はいない 出てこれないんだろ？ 絶好の機会じゃないか！ はは！ お前が俺に敵わないことはお前自身知つてること！」

エクティレスが言い終えた瞬間だった。

閃光が辺りを包んだ。

それはエクティレスが、ロジオンの身体を使い試行した、攻撃魔法だつた。

強い閃光が辺りを白く、無に染める。

膨大なエネルギーを一気に放出したせいだ。

過去、一瞬にして町を荒野に変えた『白鎌』だと分かつた時には既に遅い いや、気付けたとしても、防げる防御魔法を施行できるか。

答えは否。

白い閃光に視界も頭の中も遮られた。

\*

次に目を開けた時は、もう、この世界の住人では無いだろう  
アデラもエマもハインもそう思った。

瞼を閉じても、通して裏側まで入ってくる白い光が落ち着き、三人  
人は恐る恐る目を開けた。

「――！」

目の前には視界を黒く染める程の大きな、鱗を持つ動物が三人を  
守るように立ちはだかっていた。

大きな動物だ。顔を見ようとも見上げても、見えない高い樹のて  
っぺんのように。

黒光りする鱗、一つ一つも大きく、鋼鉄のように見える。

様々な文字が羅列された円周が幾重とつらなり、唖然と見ている  
アデラ達の身体を通り抜け、鱗を持つ動物の中へ入つていった。  
その魔法陣らしき円周は、かなり広範囲に渡つているらしく、目  
の良いアデラには遙か遠くから滑るようにやってくるのが見えた。

「――！」

大きな黒い動物の姿が陽炎のように揺れる。  
半透明になつた動物に重なる人の姿。

人の姿の方が色濃くなり、誰なのかはつきりと分かつた。

「ドレイク殿！」

アデラは叫び、近付いたが人の姿になつた彼を見て、ざわつと足で仰け反つた。

全身、何も着けていなかつたからだ。

先程の鱗の付いた黒い大きな動物はドレイクの真の姿で、黒竜であることにアデラは気付き 全裸なのは、本来の姿に戻つた時に服が破け飛んだのだろう。

「いやん、ドレイクつたらあん

エマが緊迫した場に合わない声を出し手で目を塞ぐが、お決まりで指の間から眺める。

アデラが慌ててハインからローブをひつペがした。

「私のブランド品……」

ハインが憮然とした様子で呟いたが、ドレイクの身体を隠すには他に無い。

ドレイクは膝を地に付けたまま立ち上がりつつとも、声を上げようともしない。

顔には疲労の色が濃かつた。

「さつすが！ ドレイクだ。あんたが魔法防御張らなきや、宫廷の近くまで焼け野原だつたな！ だけど

「！」

ヒコッと空を切る音が、アデラの前を通りドレイクに当たる。エクティレスの蹴りがドレイクの左頬に当たり、吹つ飛んだ。「魔力を使い果たしちやつたね。暫くは立つことも出来ないんじやん？」

「……く……」

ドレイクは悔しさに歯軋りをするも、それさえも力が入らないようだつた。

その姿を見てエクティレスは、暗い笑みをドレイクに見せる。

「……でも、俺はまだまだいけるぜ。このシミツ垂れた国を吹き飛ばせんくらーな

「お前が、使つている……その少年の、生まれたく……にだ！ 生まれ変わりの、者の……國にまで……手を……！」  
途切れ途切れながらも、止めさせようと説得するドレイクは、  
クティレスは言い捨てた。

「俺はこいつ。こいつは俺。身体の共有は当然の如し 」

「ふざけるな！」「の悪ガキ」

ロジオンの上半が捻り、身体が吹っ飛んだ。  
誰かに殴られた、それは分かった。  
しかし、誰に殴られたのか？

ザツと、地を踏みつける勇ましい足音。

「貴様は死んだのだ。せつれとロジオン様を戻せ！」

両足を広げ、背筋を伸ばし、ぐつと拳を上げ魔術堂々と立つ少女  
アーテラだつた。

## 48 アテラ、キレる

「アテラちゃん……」

ここで出てくるのか スゴい！ エマの素直な感想だ。自分もハインも、エクティレスの波動に身体が硬直して動けない。だが、アテラに至っては、全くいつも通りに動けているようだつた。

魔力を持つ人じゃないからかしらん？

それにしたつて、あの破壊力の魔法を目の当たりにして、びびつたり泣き出したりしないところも凄いが。

（その、おつかない本人を悪ガキ扱いして殴るところがまたスゴい）

おとこ  
漢だわ。

「……素敵」  
「……え？」

エマの反応にエクティレスに硬直していたハインの身体は、瞬時に解けた。

驚いたのは一人だけではない。ドレイクもそうだが

半捻りで地に倒れたエクティレスが、一番衝撃だった。

ジンジンと左頬が痛む。

口の中が鏽びた鉄の味がする。口を切ったんだと知った。

何だ？

何だ？ この女？

混乱したのは一瞬だけ。

エクティレスは怒りを露にし、すぐに立ち上るとアテラに掴み

かかつたが

「グフッ！」

瞬時に腹に拳を入れられた。

「 てめ……！」

間髪入れずに、前屈みになつて隙だらけの背中に肘鉄が入る。痛い。特に殴られた腹の方が。胃の内容物が口から出そうだ。こんな事をされたことが無いエクティレスは混乱していた。

何でだ？

こいつ魔力を持たない只の人間じゃないか？

何で俺、そんな奴にやられてるんだ？

怒りじやない違つ感情が沸き上がる。

ぐい、と両肩を掴まれ上半身を起こされた。

すぐ目の前に女の顔があり、エクティレスは息を飲んだ。

ガツン、と拳で両側のこめかみ部分をグリグリされ、脳まで抉られそうな痛みに叫ぶ。

「この！ クソ女、止める！ よくも俺にこんなことを…」

「悪がキに罰を下すのが何が悪い！」

「何だと！ ババア！ 僕に罰を下すだと？」 笑わせんな！」

「笑わせとらん！  
私をババアと言うが、お前は幾つで亡くなつた

んだ！」

四十だ！」

ギリギリと、口がみから離か離れた気がした。

お前の方が歳くさとるだろ……！ それで人をハハア呼ばね  
りか！」

「いだだだだだだだだだだだだだだ！」

指で押さえて机の上に手を置く手の形を二種類あります。

それどころか、ますます痛みが強くなつていく。

「何でだ  
？  
魔法が使えない、ただの人間の女に俺が  
？」

罰とし、身体に苦痛を与えていた事実より、魔力の持たない女にこの様なことをされ、全く抵抗できない 恐怖を感じていた。

青ざめて行くエクティレスにアーテラは、つり上がった瞳で彼を睨みながら答えた。

「お前の身体は口シオノ様の身体、口シオノ様はな、ケモ活を続けていたせいで、著しく体力が落ちていてるのだ！」

「魔力が大事なのに、体力なんか関係

「ある！ ドレイク殿を見てみろ！ 起き上がれなくなると言つのは、体力も共に消耗しているのだ！ お前は先程、まだ強い魔法が施行できると豪語したが、こうやつて『ただ』の人間の私に振り回されていると言うことは、ロジオン様自体の身体の体力は、限界に近いということだ！」

「ええ……！」

エクティレスは驚き、改めて身体の調子を確認する。

確かに、足腰に力が入らない気がする。

いきなり経験の無い大きな魔法を施行したせいで、身体が慣れなかつたのだと思っていたが……。

「……へタレ過ぎる」

雷が貫いたような衝撃だった エクティレスには。

どんだけひ弱で怠惰な生活してたんだ、こいつ。

くたりと座り込んでしまったエクティレスの肩を、アデラは優しく叩く。

「ロジオン様を出すのだ。へタレだろうと、今の姿がこれなのだ。諦めろ」

慰めているのだろうが、内容的に情けないことを言つていて、余計に哀愁が漂つている。

諦めるだろうか？ 期待した。

だが、含み笑いが彼の口から漏れてきたことで、まだ諦めていいことが分かつた。

「……！」

襟首を掴まれ、持ち上げられアデラは呻いた。

「馬鹿か。今まで大人しく猫被つて、この機会を待ち望んでいたんだぜ？ 誰が渡すかよ」

せせら笑うロジオンの顔は、悪意に満ちた凶悪な人相であった。

「体力なんぞこれから付ければ良いだけだろ。『コンラート』とか言う、こいつの師のせいであなたが出てこれなかつたんだ」

ちらり、と小さく、弱々しく横たわるコンラートの成の果てを見ながら尚も笑つた。

「 待ってる、やつくなぶり殺してやるよ 」

その前に と、宙に浮いた状態で呻いているアーテラと視線を合わせる。

「 女、大したもんだぜ。この俺に拳を叩きつけるとはな。褒美として、可愛がつて、ズタズタにしてやるよ 」

「 .....な、ふざ.....け！」

「 この（ロジオン）の身体で可愛がつてやる、ってんだ。本望だろ？ お互いに。 まあ、最後にや肉の塊になる運命だけど 」

腕がアーテラの胸に伸びてきた。

「 ！」

弾けた音にアーテラは一瞬目を閉じた。擦られたよつたヒリヒリした痛みが走り、まさか と瞳を開けた。

防具服が弾け飛び、自分の胸が露になつていた。

「 見んな！ 」

直ぐに反応したのはエマで、当たり前のよつにハイインの目を塞ぐ。

この中で一番、煩惱を持つ男と判断された故だ。

その判断に異議の無いハイインは、大人しく目を塞がれた。

「 歴史史上、最悪の魔法使いの情婦になれる栄誉だ あらがたく受け取りな 」

力加減無しで胸を驚撃みされた。

「 いやだ！ 」

そう思つた刹那 。

『上めるー』

木靈する声に、皆、一斉にエクティレス

ロジオンの方を向い

た。

49 亂世なり（漫畫）

「ソノリード編」終わつです。

『じわり、とアーテラの身体が地に着く。絞められた首を擦りながら彼のロジオンの身体を乗つ取つているエクティレスを見た。

この声……。

「ロジオン様……？」

『ちょっと借りるだけ、と言つといて……随分勝手なことしてくれるね？ 許さないよ』

ちつ、とエクティレスが舌打ちをしたが、すぐに禍々しい表情に戻つた。

『引っ込んでるよ、ヘタレ。お前にはもつたいねえんだよ、この身体も、この女も。今度からは俺が有向に使つてやる。この世界の肅清の為にな』

『覗いたよ……君の魂。君がやつていたことは肅清じゃない……ただの殺戮だ。そこには理想も理念も信念も何もなかつた。狂者が面白がつて力を使って、誇示していただけ……』

『それがお前の前世の一人だぜ？』

『でも、今の僕じゃない。君が……悔いしているなら、僕の中に溶けて……今に、共に贖罪を含めて生きるなら……受け止める』

はん！

エクティレスの、馬鹿にした笑いが辺りに響いた。

「神父にでもなつたつもりか？ 何様なんだよ、俺が出てこなきゃ攻撃魔法も録に使えなかつた奴がよ」

『そうだね……お陰で分かつたよ どうすれば良いのか』

内側から押し出される感覚にエクティレスは、驚き、また恐れる。  
「何しやがる！ これは俺の身体だ！」

『ボケてんの？ 頭悪いの？』

『過去の自分自身欺いても、どうしようもないね』

『出てつてね』

溶け合わない魂の声の誹謗が、エクティレスにも届く。

「お前らだつて、未練があつて溶けないくせに！ 出でけだつて、  
出でつたら魂が欠けるんだぜ？」

『溶けない理由が違うよ』

『複雑なんだよなあ……その、魂が継ぎ接ぎだの、欠けるだのつて』

『ロジオンは理解出来たのにね。やっぱ、馬鹿なの？』

「ああ？ 意味分かんねえ！」

『 アデラ！！』

ロジオン様の声だ！

アデラの『女豹』と言つ異名に相応しき駿足が、地を蹴つた。  
あつという間にエクティレスの間合いに入る。

「 ！？」

腕を掴まれた そう感じた時には、身体が宙に浮いていた。  
エクティレスの視界が回転し、身体に痛みが走り田が回る。  
逃さなかつた その時を。

## 剥がれる

繋ぎ田を一気に剥がされた感覚を受け、自分がロジオンの身体から追い出されたことを、明るくなつてきた空から知つた。

『畜生！ 畜生！』

形代が無いと田の光はキツい。

『きつと復活してみせるからなー』

エクティレスは悪態を吐き、あつとこつ間に西の空へと消えていった。

\*  
「ロジオン様！」

はあ、と今まで呼吸をしてこなかつたような大きな息継ぎが聞こえ、ゆつくりと起き上がる姿 のろのろとした動作。

長めの前髪をふるふると振り、髪の間からアーテラを見つめる彼は。

「……ロジオン様？」

ロジオンの中に何人かいるよつだった。

ロジオンじやなかつたら？

恐る恐る近付く。

「アデラ……殴りすぎ。痛いよ……」

平坦な、ゆっくりとした口調、声。

自分を見つめ返すブルーグレーの瞳は落ち着いた海の色。狂氣の光りがない。

「ロジオン様！」

ロジオン様だ、いつもの

アデラは、地で胡座をかいているロジオンを抱き締めた。

驚いたのはロジオンの方である。

何せ、エクティレスに防具服を破かれ、胸がさらけ出されているアデラに抱き締められたのだ。

「ア、アデラ……あの……」

魔法使いでも年頃の男だ。こづ抱き締められ、顔が女性の胸に埋まると言う状態が嬉しくないわけがない。

しかも、露になつている胸に、普段心憎からず思つてゐる相手。ふにゃん、と柔らかさの中に張りがある胸の中。

(頭……沸騰する！ 理性吹つ飛ぶ！)

このご馳走を食して良いってこと？

欲望に爆発寸前なロジオンの耳に、すすり泣く声が聞こえた。すぐ近く 田の前。

「……アデラ？」

鼻をすする音と嗚咽に混じり、何度も同じ言葉が繰り返されていた。

「怖かつた……戻つてこないのかと……良かつた……」

「「めん……」

ロジオンの謝罪の言葉に、アデラの泣きが熱を帯びる。

「怖かつたんですからね……！ ロジオン様なのにロジオン様じやないのが……！ 变な人に乗つ取られないで下さいよー！」

「うん……「めん。悪かつた……」

ああ、彼女は必死だつたのか

僕を取り戻すために

ロジオンは目の前のご馳走より、それが何より嬉しくて、アデラの背中を労るように撫でた。

\*

エクティレスがいなくなつて、身が軽くなつたエマとハインは、魔力を使いきつて動けなくなつたドレイクに、魔力を送る。

魔力のカラーと言うべきか、性質は人それぞれだが、魔導師程になれば人から送られた魔力を自分に適した性質に合わせることが可能だ。

「もう大丈夫です」

しつかりした口調と共に立ち上がつたドレイクを見て、二人は安心した。

ロジオンも、多少ふらつくが動ける。

それより

「腹と背中……あと、こめかみ……痛い……」

そちらの方が至つて問題のよつだ。

「すいません……」

エマから借りたマントをしつかりと羽織り、反省しきりに深々と頭を下げるアデラ。

「いや……アデラの、この鉄拳で起きたようなものだから……」

それで危機を回避できたようなものだから、ロジオンも責めるわけにはいかない。

「良いじゃない？ 良い思いもしたんだしい」

エマが自分の顔の前で、両手をパフパフと左右に動かす。アデラの小麦色の肌が、活火山のように染まった。

まあね と笑つて見せ、ロジオンは静かに様子を見ていたドレイクに近付く。

ドレイクは自分の魔法日記を開き、ある頁をロジオンに見せた。  
「私の今の状態では、強力な魔法は施行できません。……どれを使  
うかは ロジオン、貴方が決めなさい」

それは、ドレイクが教会から手に入れた『消滅』『封印』『浄化』  
の呪文の頁だつた。

もう、動くことが出来ない小さな塊となつた師の元へ出向く。

「師匠……」

膝を付き、語りかける。

仰向けて倒れているコンラートは、極端に細く、小さくなつた両腕を懸命にロジオンに向け動かした。

「ホシイ……ホシ……イ、ロジ……オ……」

もう、生前のコンラートでは無い。

死ぬ前の「」の願望や心残りが凝り固まって生まれた、残留思念の物質化。

それでも、顔の部分につつすらと残る彼の面影に、ロジオンの視界はぼやけた。

「……花火……」

「コンラートに語り掛ける。

「花火……青い、色……池の中でも見る」と……出来ました?「

長い沈黙が続いた。

最初、何を言っているのか分からぬ様子が、記憶が甦つてきたのか、嬉しそうに身体を振るわせ始めた。

それに合わせるように顔の輪郭もはつきりとし……。

「コンラート師匠……?」

生前の、元気だった頃の顔立ちが浮かび上がる。

「は……なびは……青だった……」

「……出来はどうでした……?」

「美しかったよ……。夜に映える、はつきりとした青……卑しい心を浄化させるような……。私の好きな一番好きな……色」

ロジオン  
お前の髪が風に乗つて、たなびく時の色。

「コンラートの瞳に[写る]顔はロジオンの他に、向ひに誰が見えているのか」。

ロジオンが流す涙が、コンラートの瞳から溢れる滴と合わせり、流れた。

残留思念の塊の中に、生前の彼が残つていた。  
それがロジオンには嬉しく、また、悲しかつた。

「ロジオン……お前の手で私を……。」これ以上、醜態を晒したくはない……」

「は……こ

「お前の……手で逝く」ことを誇りに思ひ、「お前も……それを誇りにしなれこ……」

「……」

「親から引き離して……酷なことをした……」

師の懺悔にロジオンは、言葉無く首を横に振つた。

「……酷いことをしたと分かっているが……お前と過い」した日々は誰にも渡したくない……宝だ」

「師……匠……」

最初は自分が見付けた使命感だけだった。

小さな、腕の中につつぽりと収まる赤ん坊が、自分を見るたびに無垢に笑い、眠り、不快な表現を表すために泣き、そして無条件に慕い全身で愛情を向けてきた。

何と新鮮な毎日だつただろう。

子を育てた経験の無い自分が、全く苦労なく育てたわけじゃなく、苦労した部分の方が多い。

なのに、思い出されるのは、成長してきたロジオンとの楽しかつた日々ばかりだ。

「……楽しかつた。ありがと……ロジオン……」

さあ、私が私であるうつむ

「コンラートが小さく、短くなつた腕を広げロジオンを促す。

「お前が下す采配を……全て……受け入れよつ

ロジオンとコンラートが触れている地が輝きだした。

見ているだけで温かく、安らいだ気持ちになつていく、春の日差しそうり柔らかな光。

ロジオンの瞳から絶えず涙が溢れていたが、口ずさむ呪文は震え

がなく、しつかりと詠唱していた。

光が球体となって浮き出し、コングラートを包む。

幾つも幾つも生まれた球体は、コングラートの姿をすっぽり包んだ。

「僕も……楽しかった……。ありがとうございました……」

さよなら、師匠

朝日が木々を、池を暁に染め、田覚めを要求する。  
それに混じり淨化の光は斑点を上っていく。

いつしか溶け込み、移り行く自然の一部になつたかのように見え  
なくなり

憂いの日々は終わりを告げた

今まで後回しにしていた話が続きます。

エルズバーグの感謝祭は地区ごとに一日ずつ、ずれて行われる。国の面積が広すぎて、国をあげて行つと産業が一気に停止してしまう為だ。

何せ、こうした年に数回の祭りには皆、仕事を休んで楽しむみたい。店という店は一斉に閉めてしまう。もちろん食べ物を扱う出店なんかも。

樂士や踊り子だつて休んでしまう。

そうなると、飲んで食べて歌つて踊つて　　楽しむことが出来なくなるのだ。

それで地区ごとにずれて行い、他の地区が祭りで休みの地区に出向き稼ぐわけだ。

中には年中無休で働き、稼ぐ商人もいるが……。

(王族も似たようなもんだね……)  
ロジオンはそつと溜め息を付いた。

\*

宫廷を背に上がる花火を背景に、メインバルコニーに集合する王族。

中央にはメインのロジオンの父である陛下。

両脇・左には第一王妃が立ち、すらりと第一王妃の嫡子達が並ぶ。

第一王子のディリオン殿下夫妻とその子達。

第一王子は他国へ婿養子に行つてしまつたので飛ばして第二王子・

アリオン夫妻とその子達。

#### 第四王子・エアロンが並ぶ。

第一王妃が産んだ王女達は成人し、皆、他国や他の区域の有力者達に嫁いでいった。

右には第二王妃が立ち、すぐ横には第五王子のロジオンに第六王子のユリオン。

第六王女のリーリヤ、第七王女のアラベラ、第八王女のイレインが並ぶ。

男子は名前に統一感を持たせたと言つが、返つてややこしい。ややこしいが名前に連帯感を感じるのか、仲が良い。

しかも 今年はきちんとロジオンが『王子』として参加している。

同世代の民衆の女の子達に絶賛に人気のある、第六王子のユリオンと似た顔が並んでいる。

どよめきから歓声に、甲高い女性達の声 ロジオンは手を振りながら『王室スマイル』と言つ上品な笑顔で、宫廷に集まってきた民衆に応えた。

バルコニーでのお披露目時間が終わり、王族達は陛下である父と二人の王妃、それと後継者であるディリオン殿下夫妻は晩餐会に出席するが、後の兄弟達は自由である。

年に数回ある国をあげての行事には勿論、王族全員の参加義務がある催しがあるが、下に生まれた者ほど拘束が少ない。

その点、ロジオンは五番目なので、まだ気楽なわけだ。

バルコニーから室内に入った途端にロジオンは、へナへナと踞つた。

じんわりと汗を搔き、しかめつ面である。

「ロジオン様！」

控えていたアデラが肩を貸し、ロジオンはゆっくり立ち上がったが、背中を丸めたままだ。

「兄上、大丈夫ですか？」

すぐ隣にいたユリオンも寄り添い、肩を貸すが、華奢なので

潰れた。

慌てて、ユリオンの従者が彼を起こす。

「もう、兄様つたら力無いんですから」

百合の名を持つリーリアが、代わりにロジオンに肩を貸す。身体を動かすのが好きな彼女は、普段から運動を欠かさない。ユリオンよりずっと安定している。

「フフフ……僕は豎琴以上の重い物を、持ったことが無いのを」念入りに手入れされた銀の髪を搔き分け、ユリオンは言った。返す言葉が見つからないので皆、スルーする。

「ロジオン」

「陛下……」

家臣達が大勢揃っている中では、例え親子でもわきまえなればならない。

王室には面倒なしきたりや作法があることは、食客として師と渡り歩いていた頃から知っているロジオンだが、それが自分の身に起きると面倒くさい。

「負った傷が痛むようで……退出したいと思います」

ロジオンの台詞に、父である国王陛下はウンウンと頷く。

「師との戦いとの傷だと聞いておる。……よくぞ打ち勝つた！ 魔導術統率協会の皆々からその様子を聞いて、父は……父は……！」

腕を後ろに組んだままの体勢で立っていた父陛下は、くつ、と顔を上げた。

ふるふると震えていたところをみると、感涙していく。こ。

「ロジオンはまだ結婚が決まつていなかつて、深夜から始まる舞踏会には参加しなくてはならないが……痛そだしなあ」

代わりにテイリオンがロジオンと話す。

「全治一週間で、一番腹部にきているから、まともな食事が取れないでいるのです」

アテラが答える。

ディリオンと補佐役のアリオンが顔を見合わせた。

「殿下、一ヶ月後には新年祭が控えますから、それには必ず出席すると誓つことで、今回は見送つても良いのでは？」

「……まあ、感謝祭は民衆のための祭りみたいなものだしな……」

まだ感激に涙を流している父陛下は一人の王妃に任せて、てきぱきと指示を与えるテイリオン殿下とアリオンを見て、取り合えず次世代のエルズバーグ國は安心だとロジオンは思った。

その一方。

「兄上！ 今夜の舞踏会で兄上の武勇伝を詩にして歌いますよ！」

「いや、止めてそれ……」

瞳を輝かせて迫るユリオンを見て、自分と似ているのが少しつの だと思うと、物悲しい気持ちになつた。

「申し訳ありません……。私がしたことなのに、亡きお方の所業にして……」

「良いんじゃない？ よく 師匠は『女性に不利になる罪は被れ』と言つていたし…… 本望でしょ？」

宮廷内の自室の寝台に横たわるロジオンは、自分に何度も頭を下げるアデラに、慰めるように言つた。

腹と背に打撲。全治一週間は本當で、その原因はエクティレスであるが、身体はロジオンのものだ。

エクティレスは追い出せたが、アデラが付けた怪我はそのまま残つた。

大変だったのは、それから数時間後で、痛みがますます強くなり普通に立つていられなくなつてしまつたのだ。

加えて、食べられないわ頭痛はするわで。

こんな状態にした張本人がアデラだと知られれば、どんな処罰が下されるか……。

ロジオンは曲がりなりにも、王位継承権を持つ王子なのだから。

「結果的に……アデラの活躍が一役買つたんだし……気にしないで」「代わりに心を少くしてお世話をさせてやれー」

「じゃあ……」

「夜伽は無しです」

さりととかわされ、湿布の用意をしますと、近くで甲斐甲斐しく支度をするアデラの姿を、ロジオンはじつと見つめた。

「こんな状態じゃあ夜伽も何もないから、冗談だったんだけど。（まあ、可能だったとしても……）

色々と問題が発生してゐるしね。

ロジオンは考へに耽る。

自分自身の氣付かなかつた問題が、明るみに出たこともさうだが。

アテラだ。

アテラは魔力を持たない。先祖に魔力を持つ者がいて、先祖がえりでもしたのかと魔力で探つてみても、欠片も見えなかつた。ただ、アテラといふと、今まで経験の無い奇妙な感覚に襲われる時がある。

微々たるもので、はつきりと意識したことはなかつたけど。ドレイクの部屋から持ち出したコンラートの魔法日記<sup>1</sup>だつて、事前にドレイクが目眩ましをかけ、尚且、取り出したら『トラップ』が発動するよう施行してあつたはず。  
(だから、ドレイクも驚いていたんだ)

それに 魔法「コーティングされた日記の装丁を千切るなんて

(しかも師匠の日記を破ることが出来るなんて……)

長年使うものだからコーティングしていくても、たまに手入れを行うが、その時だつて大層魔力を要する。

(やることが豪傑だから……小さい所業が隠れてそのまま忘れてつちやうんだよね……周囲が)

エクティレスの、悪意に満ちたオーラを受けても動けていたし。

(魔力がなかつたから平氣だつたとか言つ問題じやない)

魔力の無い普通の人間だつたら尚更立ちすくむだらうし。

(魔法が通じない とぼやいたのを聞いたし……)

でも、ドレイクの意識支配や僕の身体憑依は施行できた。

『戦女神パラスの鎧』も施行できていた。

(……なんなんだろ？……?)

湿布と替えの包帯を手にし、振り返ったアテラと視線が合ひ。ずっと見られていたのかと、アテラはびきまきしながら

「な、何でしようか？」

と尋ねた。

「ん……。アテラって立ち姿……綺麗だなって」

「……」

師匠と言つ見本が常にいたとしても、息をするように女性の口説き文句が出てくるのってどうなのよ？

嬉しい反面、そんな考えが浮かんでアテラは素直に喜べずにいた。「お褒めいただきて恐縮ですが、ロジオン様はまだ十五なのですか

ら、大人の口真似をしないで年相応になされませ」

自分でも可愛くない返答だと思つアテラだが、いつも場合、誉めてくれた自分の主にどう言葉を返せば、気のきいた会話になるのか分からぬ。

だが、ロジオンは勘に障ること無く逆に問いかけてきた。

「年相応つて……どう言つ言葉？」

「しょ、少年らしく言葉ですよ」

じつと見つめられて、しぶりもどりになりだしたアテラを見て、ロジオンは目を細めて笑う。

いつ言つ時の主は、妙に大人びて苦手だ。

従者とじつよつやく認めてもじつた時も、いつやつておつかれく

れた。

(私が子供だから……?)

歳の差が逆転している会話に気付き、へこみながら湿布の交換を始める。

「脱いでくださいな」とアデラ。

「脱がしてくださいな」とロジオン。

むーっ、とするアデラに

「痛いんだよね……脱ぐ時なんか特に……」

はあ、とロジオンは溜め息をつく。

「アデラが……必死だったのは分かるけど……見事に急所を当てるから……痛くて痛くて」

目を潤ませて、か弱い様子を見せる主にアデラは、罪悪感たっぷりに服のボタンに手をかけた。

そろそろと、ゆっくり服を脱がす。

彼女の顔は至極真剣だ。

動かしたり、何かに触れたりするだけで激痛が走ると言つのだから。

シャツを脱がし、ほつとしながら汗を拭うアデラを見て、ロジオンの顔はますます緩む。

(面白い人だ、ほんと)

何でも一生懸命で  
何でも全力投球で

大人の中でも育つてきたロジオン。

その大人達は大抵、何でもそつなくこなすか、やりたくないことは徹底してやらないと言つ、極端な者達が多かつた。

(「ハムツの生きている輝光　とハムツのかな）

包帯も真剣に外しているアテラを茶化す気もなく、その様子を一  
瞥と見つめていた。

湿布も取り替えて、服も脱ぎ着しやすいゆつたりとした物に着替  
えさせてもらつたロジオンは、満足そうに寝台に落ち着く。  
アテラは氣疲れでぐつたりしていた。

ロジオンが「おいで」とアテラに手招きをする。

「えつ？」

アテラが急沸騰した。

考えてみたらここは寝室。

しかも、今は一人つきり。

感謝祭で使用人などは出払つていし、呼ばなきや来ない。

「いや、これって……！」

(あ、朝チユン設定じやないのーー！)

アテラは真つ赤になつた顔をブンブンと振りながら

「口、口口口口ロジオン様！　け、結構ですかー！　そのー！　お  
怪我を治すことに専念して頂いて　」  
と後ずさる。

「え……？　良いの？」

「良いんです、結構です！」

「……でも、髪の毛……解れてるよ」

そのまままでいるの？

と、困惑氣味のロジオンを見て、アテラは改めて自分の姿を鏡で確認する。

結わいてある髪が、一束解れてしまつていて。

「あ……」

包帯を巻く時に、引っ掛けた感じがこれだつたのだと納得した。

「櫛……もつ……といで。結わいてあげる」

「くつ……？」

ぼかんとしているアテラにロジオンは、目を細め、あの大人びた笑顔を見せた。

髪留めが外される。

捻つて留めていた髪が音もなく肩に落ちた。ロジオンは後ろから、髪に付いている整髪料をけし梳りながら綿糸のようないアデラの髪を解かしていく。

「あの、ロジオン様」

「何？」

アデラは寝台の端に座つて大人しく髪をすがれていが、忙しく指を動かしていた。

「自分で出来ますから……」

「やりせてよ」

普通なら、従の自分が主であるロジオンにするべき」とではないか。

でも、と渋るアデラにロジオンは

「久しぶりなんだ……」つづりの。だから……」

と、懇願するように話す。

「う、ねだるようにに言わるとアデラは何も言えなくなつてしま

う。

「コンラート様にも、こうやつて？」

ヘアクリームを手に擦り付け、アデラの髪を編み込んでいく様は手慣れていた。

「うん……。師匠のはもつと……時間がかかつたな」

懐かしそうに喋るロジオンの顔を、手鏡越しに覗く。

コンラートを浄化した後、暫く空を見上げたまま動かなかつた主は、置いてきぼりをされた子供のような顔をしていた。

今は何の憂いもない、穏やかな顔で、落ち着いた瞳で自分の髪を

編んでいる。

（良かつた……）

アテラは、鏡に映る優しげな少年に向けて微笑んだ。

両脇の髪を耳の上から編み込んでいき、後ろは高く上げて結び、四つほどに分け三つ編みにしていく。

両脇の編み込みと四つに分けた三つ編みを、高く結んだ根本にくるくると巻いていった。

時々、ピンを使い押さえ、最後に髪留めでしつかつと押さえた。「……お上手ですね」

浮いたり編み忘れの部分もなく、専門の美容師にやつてもうつたような出来映えだ。

自分で風呂場を造つたりと、ロジオンの手先の器用を感じて本物に感心してしまつ。

「どう？」

「はい、素敵です。ありがとうございました」

アテラの素直な感想に、ロジオンは満足そうに微笑んだ。

「でも……勿体無いなあ……そんなに綺麗な髪をしているのに……下ろしどけば良いのに」

「中途半端な長さで邪魔なんです。仕事中は特に」

「仕事が……休みの時は下ろしているんだ?」

「はい」

ふーん、と呟く間にアテラはワインガーボールと水差しを持ってきて、整髪クリームの付いたロジオンの手を洗う。

「自分で出来るよ」

「お礼です」

照れ臭そうにしながらも、まんざらじゃないロジオンは結局、なすがままにされた。

すぐ側にアーテラの顔がある。

意思の強そうな眉

髪の色より色味の濃い睫毛。

通った鼻筋に、形良い小鼻。

ふつくらした唇は艶々として血色が良い。

正統派美人の類のアーテラだ。

どうやら自分は、いついつタイプが好みだと分かつてきた。

「……？」

誰かの顔とぶれる。

一時目を閉じて、ああ、そうか と目を開けた。

「ロジオン様？」

じつと一点を見つめて動かない主にアーテラは首を傾ける。ゆつくつと顔を扉に向け、ロジオンは口を開いた。

「……何、盗み聞きしてんの……？」

入ってきたなよ、とロジオンが促し入ってきたのは、にやけ顔のエマとハインだつた。

「いやあ、良い雰囲気なので、お邪魔かなと思いまして」

「だあつてねえ？『やらせてよ』『久しづりなんだ』ってロジオンは言つてるしい。アーテラちゃんは『お上手なんですね』なんて言つてるの聞いたら……」

ねえ？ と見合せ相づちを打つ二人を見て、誤解された意味を知りアーテラは顔を赤くし、ロジオンは呆れた。

「自分達が良い雰囲気だから……周りもそうだと思わないで欲しいよ。頭の中……それで一杯なんじやないの？」

「やあん！ ロジオンつたらー！ おませなんだからあー！」

勢い良く背中を叩かれたロジオンは

「か……完治が延びた……」

と、痛々に震えながら寝台に躍った。

\*

「そんでねえ、ハインが～言つてくれたの！　『女体化が終わるまでに貴女に相応しい男になります』って！　もおおう、カッコいいでしょ？！」

キャラキャラと黄色い声を出しながら、ロジオンの打撲した腹をバンバン叩くHマに。

その横で

「いやあ……！　本当にやう思つたんで、思いを打ち明けただけですよ～」

と、しまつの無い顔を見せるハイン。

「もう……昨日から何度も聞いてるよ」

うんざりしながら冷めた視線を送るロジオンに、苦笑いのアーテラ。ゴンラートの件が済み、包み隠さず自分気持ちを伝えようとしたエマより先に、ハインの方が実行に移したのだ。

バンバン　Hマはロジオンの打撲した腹を叩く。

「『エマさんは、そのままで充分ですが、エマさんがきちんと女性になりたいと言つなら、全力で応援します。でも、女性化が完成したら今よつもつとモテますよね……それは嫌ですね』　だって

！　もおおおお～！　可愛い～！」

「だって、そうじやないですか。今だって大変お美しいんですよ？　完全になつたら不安ですよ。　私的にはこのままで…」

…

「いやあん、ハインつたらあ！　目移りなんかしないわよお～！　や・く・そ・く～！」

Hマとハイン一人で、指切りげんまんをする。

「エマさん……」

「エマと呼んで……ハイン……」

小指を絡めたまま二人見つめ合う視線が熱い。

絡んだ小指に、ロジオンの鋭い手刀が入った。

「治療に来たのか、いやつに来たのか……どちらの…」

「 どっちも」

二人揃つた返事にロジオンはむすりとした。

今回で、幸せな結果になつたのはこの二人だけだ ロジオンは  
そう思った。

「だつてえ、誰も聞いてくれないし。」ドレイクとルーカスなんか、リシェル連れてさつさと帰っちゃつたらしい

「用件が済むとさつさと帰るところは……昔からじやない。ルーカスは肋にビビ入つて……早く魔導術統率協会に戻つて治癒師の手当てが必要だし」

ドレイクは予定より早く事が解決したので、魔導術統率協会の方の感謝祭準備の参加の為に今日の朝、帰つてしまつた。

その際に、孤児となつたリシェルを連れていつたのだ。

『魔力を持ち、魔法も教わつていますからね。魔導術統率協会の所属している者に預けます』

サマンサかカーリナ どちらの力を受け継いでいるか、観察し様子を見るのことだろ？

『治癒の力は、サマンサから受け継いだものだつたのでしょうか？』

ハインが誰ともなく尋ねた。

同じ宫廷で働いていた同僚が悪女と名高いカーリナで、サマンサと言う治癒系魔導師の身体を乗つとり、子まで産んでいた 今だ、にわかに信じられない様子だ。

魔力は、身体ではなく魂に宿ると言われている。

しかも 治癒系は『聖』と同様に特殊な魔法に入り、魂に宿る能力によつて使えない者もいるのだ。

大抵は皆、使える治癒は微力で、専門の治癒系の者に任せらる。

残念ながら『治癒』の魔力を持つ者はそういうない。

使える者、その潜在能力を持つ者は稀少である為、どこの国でも雇いたがるのだ。ドレイクがリシェルを連れていつたのには、そのような背景がある。

リシェルに治癒能力が備わっていれば、魔導術統率協会でも貴重な戦力となる。

「……僕はカーリナのことはよく知らないんだ……師匠の口からも、彼女の名が出た記憶がないし」

「エマは知らないの？」 そう振られ、口を開く。

「コンラートを追っかけ回していた時代の時は知ってるわよ。治癒は持っていたけど、私くらいなもんよ」

「微力ながらもエマも治癒が使える。」

それで暫く滞在してロジオンの治癒にあたれど、ドレイクに命じられたのだ。

ちなみにハインは、エマにくつづいてきただけである。

「サマンサとして働いていた時は、素晴らしい治癒能力でした。やはりサマンサの魔力だったのでしょうか？」 そうだとしたら、魔力は魂に宿ると言つ理論が成り立たなくなります

「……それは、あくまでも魔法の構造を理論的に説明した時の説明……。魔力だって……どう発動して魔法が施行されるか……はっきり説明出来ないんだから」

「そうよね～。この理論つて、確かに魔力の持たない者達に説明を求められて、創立者・マルティンが話したものなはず～」

「他の人物の身体に自分の魂を入れて……それで何かしら変化が生まれても……おかしくない、と結論付けても良いんじゃないかな……？」 非道な行為だから禁行した……と言うのも間違つてないし……へたをすれば、身体と魂に、おかしな変化が起きるから……との意味もあるのかも」

「ケースバイケースってねえ」

「今日はここまでえ エマの治癒が終了した。」

「……これじゃあ時間掛かるね……やっぱ」

「しょうがないでしょ。感謝祭が済むまで私で我慢しなさいよお

エマがぶーたれた。

富廷の魔法管轄処に在籍している魔法使いや魔導師達も、非常事態が起きない限り感謝祭を楽しんでいる最中だ。

王子権限で命じることは出来るだろつが、生死に関わる怪我じゃないし。

それにオープニングのバルコニーでのお披露目間に合ひみつ、殴られた顔の腫れは治癒してくれたのだ 我が儘は言えない。

「ドレイクに……感謝祭が終わったら魔導術統率協会に来るよう言われてるからな……」

「魔導術統率協会の感謝祭は三日後だから、それ以降でしょ？ ゆっくつで良いわよお。魔承師様も謁見ばかりで疲れてると思つし～」

『私の、貴方に対する見解が間違つてゐるかも知れません』ドレイクは僕にそう言つた。

『……何の？』

問ひにドレイクは、人差し指を僕の胸に当てる。

『今回で目覚めた……それは、分かりますね？ 聞いているはず、欠片達に』

『……』

聞いたと言ひより聞こえた、の方が正しい 僕はそう思つた。

『しかし、肝心の方が目覚めない……いつも、いつの代の時も目覚める事は無かつた……』

『誰が……？』

『目覚めが必要なのです。この世界の為に、あの御方の為にも  
だから、ずっと追い掛けで来た』

『……そうして、道を誤つてきた、目覚める事が無かつた前世の僕  
を殺めてきた……』

ドレイクは、僕の視線から逃れるように瞳を閉じた。

『目覚めている欠片は……ドレイク、君を恨んではいないようだよ  
……あのエクティレスは別として』

あの御方の為だと 欠片達は知つて居る。

世界の為と言つより、その人の為に生きていることを。  
ドレイクも、繰り返す行為に苦しむ悔悛者だと言つことを。

前世の僕もその御方を愛していた。

今の自分では、助けることが出来ないと語つたからドレイクの手  
に下つたのだ。

ドレイクは再び瞳を開き、その龍の受け継ぐ紅い眼を僕に向けた。  
驚いたのは、彼が僕に今まで見せたことが無い、愛情の眼差しで  
僕を見つめたことだ。

くしゃり 僕の髪を擦るよつに？き雜ざる。

『ロジオン、貴方が一番似ている……。そして、一番分からない』

だから、来なさい。

アデラも連れて。

あの娘も、私には分からない。

あの御方に見て貰うのが、一番早いでしょう 魔承師様に。

思い出す。昨日の彼との会話。

「あ、でも、感謝祭後からはロジオン様は、大変かも知れませんね」

「？ ……何が？」

ハインの台詞に思いに耽つていたロジオンは、ピンと来ないよう

だった。

「何がつて ……。緘口令ですよ、コンラート様の死の！ エルズバ  
ークは本日で緘口令は解除ですよ？」

「あ……」

「魔導術統率協会も、感謝祭でコンラートの死を発表して追悼する  
わよおつて、ドレイクが」

ロジオンの顔色がどんどん冴えなくなつていった。

「……それつて、もしかしたら『水』の称号争奪戦が始まつてこ  
とですか……？」

エマに尋ねるアーテラも、冷や汗を搔いている。

「称号が得られるのは魔導師だけよお」

「でも、ロジオン様はコンラート師の一番弟子ですから、お弟  
子さんを倒すことが一種のアピールであり、実力を周囲に認められ

る」とに繋がるわけです

「ロジオンは魔法使いだから、殴り込みに来るのは基本、魔法使いだけだよ……」

「最近は、ルールを守らない輩もあくなっていますからね」

Hマとアテラの痛い視線にハイソは、過去にロジオンに戦いを挑んだ事を思いだした。

「……すこませんでした」

と亀の「」とく首を縮めた。

魔法を扱う者達にとつては魔導術統率協会の通達の方に重荷を置くから、挑みに来るのは魔導術統率協会の感謝祭後ではないかと結論付け、エマとハインは帰つていつた。

これから感謝祭を楽しむのだそうだ。

「魔導術統率協会の方でも楽しむくせに……」

「ブチブチ不満を言いながら寝台に横たわつてゐるロジオンに、アデラはますます申し訳なさで胸が一杯になつてしまつ。

本当なら今頃は晩餐会に出る必要がない兄弟達と、ここぞとばかりに城下街にお忍びに出て、羽を伸ばしているはずなのだ。

「ロジオン様、何かお召し上がりになりますか？ 柔らかいものなら食べられましょっ？」

アデラの言葉に、ああ、そうだね、と答えると、ロジオンは「アデラも良しよ。感謝祭を楽しんでおいで」と、逆に気を使われた台詞が返つてきた。

アデラは慌てて首を横に振る。

「お側にいますよ。ロジオン様を一人には出来ません。……それに、こうなつたのには大体が私の責任です」

「でも……せつかくの休みでしょっ？」

「富庭で働く者達は、故郷の休みに合わせて休暇を取るか、順番に休みを取るから」

だから、先程も従者達は皆、揃つて休んでいたでしょ？ と、ロジオンに告げる。

「皆……休んでるのに損だね」

「それは王公も同じじゃないですか」

それに、いつに時に働くと賃金が良いんですよ と指で

円を作るアデラを見てロジオンは安心したように微笑んだ。

「じゃあ……アデラの休みはいつ?」

「ロジオン様次第なんですが、感謝祭と魔導術統率協会の謁見が済んでから頂戴したいと思つています」

ああ、僕次第なんだつけ。ロジオンは人差し指を額に当て、考へる。

「時期的には丁度良いね……。でも……結構先だよ?」

「大丈夫です。元氣なのが取り柄ですから」

ガツツポーズを取るアデラにロジオンは

「可愛いよね、アデラは……」

と、また沸騰させる台詞を吐いた。

ブルーグレーの済んだ眼差しで、じつと見つめられると落ち着かなくなる。

微笑みを保つたままの彼のこの表情は、アデラには心臓の鼓動を早くする強心剤みたいなものだ。

「口、ロジオン様、何か食べましょう? エアロン様が晩餐会の為にお考えになつたメニューが数多くありましたよ? 頂いてきますから」

「……それより、外の出店の食べ物が良いなあ……上品な味に飽きてきちゃつて……」

「しかし、あまり離れるわけには……」

「城のすぐ外まで並んでいたよ……? 一時もしないで戻つてこれるんじゃない?」

串焼きとか揚げパンが食べたいな 腹の痛みで食欲が無かつた

主が言う「う我が儘にアデラは、戻つてきた食欲に安堵し

「なるべく早く戻つてきますね」

と軽い足取りで部屋を出ていった。

折角の庶民を中心のお祭りだ。雰囲気だけでも味わって楽しんで欲しい。

そう考えて言つた我が儘だった。

（怪我がなれば、舞踏会まで一緒に楽しみたかったけれど……）  
怪我をしていたから舞踏会に参加しなくて良くなつたからトントンだが。

魔導術統率協会の謁見が済むまで分からないうが、恐らくゆっくりは出来なくなるだろうとロジオンは思つていた。

諦めなければならないこと、捨てなければならないこと、受け入れなければならないこと 物理的にも心理的にも多く出てきた。

アーテラも離さなければならぬかもな

彼女の能力は未知数だが、普通の人間だ。  
魔法に関わる問題に巻き込んではいけない。  
自分の父と母も  
兄弟達も

根本的に違つんだ。

魔力を持つ者と  
只人とでは

（早速、厄介事もあるしさ……）

閉じていた瞳を開け、ロジオンは続き部屋の仕切られたカーテンを見つめる。

「……出できたら?」

「ひく、と忍び笑いをしながらカーテンを開けて入ってきた男。見かけ、二十歳そこそこだ。

魔法を扱う者の象徴のマントの裏地が螢光色で派手だ。気取り屋らしき足取りで、ロジオンに向かって歩いてくる。

「流石、コソラート師の愛弟子・ロジオン王子。いつから俺がここにいると?」

しゃべり方も妙に気取っている。

「従者を退かせる前から……」

アデラに外出して貰つた理由がこれでもあった。

「怪我人相手に勝つて……嬉しい?」

「怪我人相手だつて勝ちは勝ち」

「僕に勝つても……魔導師に昇格して『水』の王と戦つて認めてもらわないと……称号は得られないよ?」

「そこまで望んではいませんよ。貴方に勝つて、宫廷の魔法管轄処の筆頭になれば良いんです」

名声も上がりまし 男は腰から短い杖を抜き、先をロジオンに向かた。

補助魔具だ。

「魔力増幅ね……それがあると詠唱も短くて済むし……魔力もそう使わないね」

説明をするロジオンの口調は、至極冷静で淡々としている。狙われていると言う焦りも微塵も見られない。

それが反つて男を逆上させた。

「じちやじちや言つてないで、やられちやいなさいー」

指揮者のごとく杖を頭上に上げ、振り落とす瞬間 ボキッと音がして、杖が真つ二つに折れた。

「えつ？」

驚いた男は、何とかくつ付けようとするが、戻りようがない。  
「紛い物掴まされたね……コーティングがしつかりされていない」  
「だつて、これは宫廷に出入りしている商人から」  
「名だけで信用してはいけないよ……自分の目で視ないと……」  
「くそつ！ 怪我したボンクラに負けるわけが」  
「男は、腰に付けていたもう一本の杖を手にした。

「暫くは静かに暮らしたいから……犠牲になつてもうつよ」

ロジオンが言い終わるか終わらないか そんなタイミングだった。

ブルーグレーの瞳が煌めく。

窓が開く音に豪風と、その後、崩れる音に悲鳴と、水しぶきにどよめき。

上手く遊水池に落ちたみたいだ。

怪我はしているが魔法を使うには、何の支障が無いことに何故気付かないのか？

「大丈夫か……？ エルズバーグの魔法管轄处、……」  
「一人ぼやぐ。」

部屋に付属のバルコニーの柵が壊れてしまった。

「……修繕費は君持ちだからね……って、名前聞いてなかつた……」

まあ、後日ハインに聞いて請求しましょう と、ロジオンはくいつと手首を捻る。

魔法で開けた窓が閉まり、風で乱れたカーテンが一人でに整う。何も起きなかつたかのように静寂だけが残つた。

## 5.4 修繕費の支払いは（後書き）

今週は家庭内の用事が日程押しで、今度の更新は週末か来週になります。

「着いたよ」

方陣移動で着いた先

魔導術統率協会。

円錐の五つの建物が一定の距離で五角形の角を作つて並び、それより高い円柱の建物が中央にそびえている。

合計で六つの建造物は、歴史を感じる懐古さがありながら、どこか斬新な印象もある。

アデラは、何処かでこの建造物と似た物を見たような気がして、眉を寄せた。

「クレサレッド教会と似てるでしょ？」

ロジオンの台詞にアデラは、あつ、と気付き、宫廷に飾られている教会を模写した絵画を思い出した。

教会は光を受けとめるような淡いクリーム色の建造物だが、こちらは反対の闇を吸収したかに見える色なのだ。

色のせいなのか、こちらの方がより古く感じる。

「ロジオン様、この荷物は……」

「持つてくよ……ありがとう」

付き添いで一緒に来たハインが、両手に抱えた箱をロジオンに渡す。

「では、私は辺りを散策しますよ

「一緒に来ないのでですか？」

そう言うアデラにハインはいやいやと、首を横に振った。

「私は出入りを許可されていませんから。この周辺は珍しい薬草な

どが自生していると言うし、研究がてらブラブラしています」

確かに周辺は、人の手が入っていない原生林が繁り、辛うじて獣道があるだけのようだ。

「確かに、見慣れない草花がありそう……」

人の気配もあり、手入れもされている大きな建物なのに、周囲は人が行き来できるように整備もされていないし、集落や町もない。

「大きな街の中心となつて発展しているクレサレッド教会とは模様が違うのですね」

アデラの疑問はもつともだとロジオンもハインも笑う。

「魔法で移動するから……道は必要ないんだ」

「基本、魔力を持たない只人はやつて来ないので。用事がある時は方陣移動で街や集落に出てしまうんです」

成る程 アデラは頷いた。

認められ、この魔導術統率協会に出入りする許可の条件の一つに

『方陣移動が出来る者』が入っているな、と理解した。

では、と、やたらにこやかに見送るハインを不思議に思いながら、アデラはロジオンの後ろを付いていった。

\*

持ちます、と主が手に持つ荷物を受けとる。

「ハイン殿、変わりましたね。魔導術統率協会の出入りに随分執着していたようなのに……」

喜び勇んで入つてくるかと思いきや 自分からあつさり引き下がつたのが、アデラ的に首を傾げる態度だつたのだ。

「大方……外でエマと待ち合わせしてるんじゃない……？」

エマは魔導の感謝祭に合わせて帰つてしまつた。

それから会つてないとしたら、久しぶりの逢瀬だ。

「付き合い始めたばかりだから……まだ、燃え上がり中だろ？」「後は若い二人に任せましょう ほのぼのと、見合いの仲介人のよつなことを語つとロジオンは先に進む。

円錐型の建物の間を進み、ひたすら中央の建築物へ。空を仰いでみると、各建物から建物へ続く渡り廊下が何階かごとに造られている。

徐に主が止まつたので、アデラは視線を戻し先を見た。全身黒でまとめた出で立ちの ドレイクだった。

「着きましたか。魔承師様がお待ちです」「相変わらず慇懃な口調に、感情の出ない顔だ。

「ちょっと待つて……これ……」

と、先に行こうとするドレイクをロジオンはひき止め、アデラから箱を受けとると彼に渡す。

「陛下からです」

受け取つた箱をドレイクは、まじまじと見つめる。

「生物……？」

「感謝祭の時に、他国から献呈されたものなんだけど……飼い方が分からぬうようだよ……ドレイクなら分かるんじゃないかなってお譲りするそうです」

「……」

ドレイクは被せられたビロード生地を外す すると空氣孔が幾つか空いている木製の箱が姿を現した。

空氣孔から中を確認し、ドレイクは呟いた。

「……オオヨロイトカゲですね」

「流石、ドレイク」

「感謝祭からもう十日も経つてゐのですが、今までどうやって飼育を？ 乾燥帯から温帯で、サバナ気候から砂漠気候でないと住めな

い生物ですよ？」

「富廷にある温室に放し飼いして……様子を見ていたらいいんだけ  
ど……花を摘みに来たメイド達が、目撃の度に悲鳴は起きるわ……  
卒倒するわで」

「富廷には不向きだと判断されて、厄介払いされに来たわけですね  
「ドレイクが富廷に来て面倒見てくれるなら……と、陛下の御伝言  
です」

暫くじっと空氣孔からトカゲを見ていたドレイクだったが  
「良いでしょ。他にも保護している在来種がいますから、一緒に  
面倒を見ます」  
と、あっさりと承諾した。

「ドレイクなら……そう言つてくれると思ったよ」  
平坦な口調ながらも、どこか弾んだ口ぶりの主を見て

確信犯

とアーテラは思つた。

\*

建物内にも方陣があり、こちらは何処にあるのか、はっきり床  
に明記されていた。

一応階段があるが、あまり使われていないうらしい。

魔方陣の円上に三人乗る。

すると直ぐに魔方陣が光り、光が消えた後は別な場所にいた。  
ドレイクとロジオンに続き、アーテラも恐る恐る魔方陣から出る。  
そこは広い謁見場だった。

エルズバーグの謁見兼大広間の倍はあるだろうか。

床や壁は大理石とは違う無機質な材質で出来ており、灰色に近い色味を出していた。

その色のせいか、昼間なのに全体的に薄暗く感じられる。

(最上階なのか)

天井には青系のステンドグラスが美しい模様を作り、日光を受けて謁見場を照らす。

夜に来るとさぞかし美しいのだろう

クレサレッド教会が昼の象徴のような造りで、協会が夜の象徴の造りにして『対』にしているのだと、宫廷の絵画を見ている時に、信心深い仕官から聞いたことをアデラは思い出した。

「ここでお待ちなさい」

ドレイクが近くに控えていた男にイグアナ入りの箱を渡し、一言二言指示を出したようだ。

男が返事をし、自分達に会釈をすると箱を持つて引っ込んでしまつた。

「……今の人、混じつてるね……竜の血が……」

ぼそりとロジオンが呟いた。

ドレイク同様、全く人と変わりがなかつたのに、どうして分かるのかアデラには不思議だった。

(そこが只人との違いなんだうけど……)

ドレイクは高砂に上ると、太いロープを引っ張る。すると高砂の後ろを被つっていたカーテンが上がり、ステンドグラスの大きな窓が出現した。

ドレイクは連なる窓を一つ一つ開ける。

外の風が入り、濁つた空気を追いやり、謁見の間が一気に明るくなつた。

「？」

窓の向こうがバルコニーになつており、そこに人がいたようだ。立ち上がりドレイクと何か話し込んでいた。

長い髪が光を受けて輝く。

輝く色は青みのある銀髪にアデラには見えた。

「あの御方が、魔承師様でしょうか？」

「……見えるの？」

ロジオンが振り替えつて、後ろに控えているアデラを見る。主の表情は固い　と言つより無い。

口調ものんびりだが、更に単調に聞こえた。

「ロジオン様……緊張されます？」

アデラの問いに素直に頷き答えた。

「魔承師の気が……凄い……建物に入つてからずっと……嫌な感じやなくて、静かで安らかな波動なんだけど……」

ドレイクが魔承師の手を取り、バルコニーから誘導する。長い銀髪が、濃紺のマントと共に揺れている。

ロジオンとアデラは、その姿に見惚れた。

目が離せないまま、ロジオンは話し続けた。

「僕が赤ん坊の時に会つた以来で……顔、覚えていない……はずなのに……」

左手に持つ三田用がシンボルの長い杖が、魔承師の靴の音と重なり、響く。

透ける程に真白な肌。

そこに映えるのは咲き誇りの蓮の花弁に似た色の唇。瞳は満月の光が、多く溶けたような輝く青。

「ロジオン……ですね？」

透き通る聲音が出る口は、揃つた白く小さな歯が見え、小さく微

笑む。

身体を隠す服が、反つて彼女の整つたラインを強調させているよう<sup>う</sup>に思えるが、いやらしさより清らかさが全面に出るのは何故な<sup>か</sup>。

小さく頷くロジオンに、嬉しそうに魔承師は言つ。  
「魔承師・イゾルテです」

と。

ああ、知らないはずなのに知つていて。  
この美しい人を。

やつぱり、この記憶は

僕が生まれる前の魂の記憶。

一番大切な人との為だと  
なのに

ああ、結局……不幸にした。

## 55 魔承師（1）（後書き）

オオヨロイトカゲ <http://www.sauria.info/pb/lizards/detail.php?id=333>  
1781336 すげえです。

「大きくなりましたね……お顔をよく見せて?」

「はい……」

ロジオンがイゾルテの元へ歩き始めたと同時に、イゾルテも段差の低い階段を足早に下りてきた。

「 「 あつ! 」 」

足の甲まであるドレスの裾を踏みつけたイゾルテは、バランスを崩してしまった。

階段から落ちる ドレイクが後ろから手を伸ばすが僅かに届かず、前から支えようと両腕を広げたロジオンに向かって倒れてしまった。

「 あやあ! 」  
「 うつ! ぶつ! 」

うまく受け止めたかと思ったが、背のリーチ分か、案外、勢い良く落ちてきたせいか しかも、身体の鍛練を怠っていたのが災いしてか、そのまま一人床へ倒れてしまった。

しかも、ロジオンの顔にイゾルテの胸が押し付けられた形で

アテラとドレイクが、各自の自分の主人の元へ走る。

「お怪我は?」

ドレイクが後ろからイゾルテの両腕を掴み、よつこらと起こした。

「私は大丈夫。 ロジオンは?」

アテラに起こそされ、服を整えながら、顔を赤く染めて氣をかけてくるイゾルテに

「僕も……平氣です」

男の意地をかけて平氣な顔をし答えた。

尻が痛いが顔面は良い思いをした  
相殺だ。

「久しぶりにやらかしましたね。何の為の杖なのだか」

ドレイクは、転んだ際に宙に飛んでいった杖をイゾルテに渡す。

「「めんなさい。つい……」

しおらかな口調だが、表情を見るにあまり反省していないようだ。だが、杖をつかないと転ぶ危険があると言つのは……。

「失礼なことをお尋ねしますが、魔承師様はおみ足が悪いのですか

？」

思いきつて尋ねたのはアテラだった。

「いいえ」

イゾルテとドレイクは揃つて首を横に振る。

「この御方は、見かけよりほんやりなのです。よく転んだり滑つたりと目が離せないので、せめて自衛はするように杖を持たせているわけです」

飾りの杖を持ち、うふふふ、とにかくやかに笑つイゾルテと、無表情ながらもどこか呆れた雰囲気を出すドレイク。

「ああ、結構な回数なんだな」とロジオンとアテラは示し合わせたように頷いた。

「ドレスの裾が長いのよ……。こんなのがすつと歩きやすいのに。そう思わない?」

ドレスを掴み、アテラの同意を得ようとするイゾルテだが、ドレ

イクが反語する。

「アンダーパンツの姿で謁見して、謁見者の鼻血で何回床を汚しているんです?」

アンダーパンツ 戰用の女性の補助防具で防寒も備えて且つ丈夫で動きやすい作りな為、普段着として履いている女性も多い。だが、鎧を着ける前に履くものなので、スパツのようピッタリとした、肌に密着する型がほとんどだ。大抵は重ね着をするが……。

「だつて……鬱陶しいんですもの。それに、それが原因で鼻血が出てなんて思えないわ だつて、ドレイクは見たつて一度だつて鼻血を出したことが無いでしょ?」

「私の感覚と人間の感覚が違うからですと、何回も話をしましたよ」だだつ子のようなイゾルテの言い分に、懇々と親のように説き伏せていくドレイク。

僕達、何のために来たんだっけ?

ロジオンは首を傾けた。

「あの

「

アデラが恐る恐る一人の会話の間に入る。

「イゾルテ様がお履きになつていてる靴は、丈の長いお靴なのでしょうか?」

「ええ

と、イゾルテは裾を片方上げて見せた。

膝丈であるブーツだ。

「いつもこの長さを履いていたり、膝丈か膝下までの長さでも問題ないと想いますが……」

あつ

イゾルテとドレイク。

今になつてそれに気が付いたらしく、一人でしばらく裾を眺めていた。

それから、嬉しそうに両手で裾を上げ、イゾルテはアデラに礼を言つた。

「気がつかなかつたわ、ありがとう……ええと

「アデラ、と申します」

そう恭しく頭を下げる。

「貴女がアデラですね。やはり、同性の意見は参考になります」

「恐縮です」

「……やはり、近くに女性を置いた方が良いでしょうかね」

ドレイクが、顎に手を当て考えに耽る。

「お世話をすることはいのつか?」

「以前はいたのですが、今は私がやっています」

「「え?」」「

今度はロジオンとアデラが、顔を見合わせた。

「着替えとか風呂とか……全部?」

想像すると羨ましい が、ドレイクは「いいえ」と首を横に振る。

「そういうことは自分でやつて頂いております。子供ではないのですから」

「でも、時々は手伝つて貰つてますよ」

「長湯し過ぎで、よく湯船に沈んでいるので」「ふふふふ」と、イゾルテはまた笑う。

最初の印象と違つ魔術師は、いつも笑顔を絶やさないほんや

りさんで。

補佐のドレイクは、仕事の補佐より、日常の補佐の方に重点が置かれているらしいと、二人は知った。

\*

謁見と言つても、堅苦しい事は一切無かつた。

謁見前にいたバルコニーで、景色を眺めながら茶と菓子を頂き、雑談に応じた。

従者だから、と後ろに控えていたアデラも、イゾルテに押しきられ怖々と椅子に座り雑談に加わる。

ドレイクは脇に控えて、茶や菓子のお代わりを煎れでは注ぐ。

(これで背広を着ていたら、執事だわ)

アデラは左手を後ろに当て、直立不動に立っているドレイクが、様になつていいのと思わず吹き出ししそうになる。

竜なのに、その辺の中途半端な礼儀を身に付けた人より出来ている。

人の生活を見て覚えたのだろう。

(そう言うのが好きなのだろうか)

だが、彼の竜族としての只人との確執を思いだし、それは違うと考へ直した。

憎いから、見ていたんだ。

人の醜い部分や傲つた部分、弱点・短所・長所 全てをその紅い瞳で余すことなく見つめ 報復をする ために。

何故、彼は人に報復をしないのだろう?

今の彼なら充分に可能だらう、なのに ドレイクの視線の先を見るといつもイゾルテがいる。

彼女が

彼女がいるから。

(抑制剤なのか……)

トクン……と、少しだけ鼓動が乱れたような気がしたが、微妙な乱れですぐに治まつたせいかアデラはすぐに忘れてしまった。

「ドレイク  
イゾルテが彼を呼ぶ。

二人近付き、ドレイクの耳元で何か告げた。

彼は承知したのか頷き、持っていたポットを卓上に置いた。そうしてアデラに向かい合つ。

「アデラ殿、少々頼まれて欲しいことがあるのですが

「何でしょうか?」

「先ほど助言頂いた、ドレスの裾の件で、早速一枚お直しをしたいとイゾルテ様が申しましてね。ここには針子がないので、申し訳ないがご助力願えませんか?」

「え?……まあ、裾上げくらいは出来ますが……」

主であるロジオンに眼差しを向ける。

自分は従者だ。主人に付き添つてゐる時は、常に主を一番に考えなければならない。

勝手な行動は許されない。

「良いよ……行ってきて」

ロジオンは特に反対する理由もないで、すぐに頷いた。

「では、参りましょうか」  
「はい、とアデラは立ち上がり、イゾルテとロジオンに一礼をし、  
ドレイクの後を付いていった。

\*

来た時と同じように方陣で移動する。  
着いた場所は一階ではなく、別なフロアだった。  
「ここから連絡通路を通り、別の棟へ行きます」  
向こうから話しかけてくることもなく、アデラも話題も無いので  
黙つて後ろからついていく。

聞こえるのは二人の靴音だけだった。

人気の無い静けさに、ふとアデラは疑問がわいた。  
「直属の魔導師や魔法使い達は普段、何処に？」  
「別の棟です。これから入る棟にはイゾルテ様と私しか利用していませんから」

連絡通路から別棟へ入る。

真ん中に螺旋階段があり、その周辺にスペースがある。

「上へ」

促され、螺旋階段とはまた別の、壁に沿つてつけられた階段を上  
る。

上りきると開かれたスペースで、一番奥にある觀音扉の部屋を案  
内された。

「どうぞ、お入りなさい」

先に入つたドレイクに促され、失礼します、と入る。

中は重厚な木材中心に作られた家具が揃い、長く使われているも  
のしか出ない艶と渋味がある。

だが、どれも質素で余計な装飾がない。  
しかも必要最低限の家具だ。

田についたのは、本棚にびっしりと並べられた書物の数々。  
哲学的な書物の内容で、アテラには眠たくなる物ばかりだ。  
(イゾルテ様は、このような難しい本を読まれるのか)

感心してうんうんと頷いていると

「好きですか？」

と、ドレイクが声をかけてきた。

「本は読みますが、私はもっぱら仮想の小説ばかりです。イゾルテ

様は、このような難しい本もお読みになるのですね」

「この本は私のです」

「え？」

と、言つことは。

「イゾルテ様のお部屋は、この上。ここは私の部屋です」

## 57 マルティンの魔法（1）

「イゾルテ様のドレスの裾を直すのではないのですか？」

「申し訳ありません。イゾルテ様がロジオンと一人きりで話したいことがあると申されたので、このような虚言を使いました」

はあ、とアデラは気の抜けた言葉を返した。

別に回りくどいことしなくても、言つてくれれば席を外すのに。

「今まで楽しく話していたのに、いきなり席を外してくれなんて言え巴、お気を悪くなさるかと」

それに、とドレイクは言いながらアデラを更にバルコニーへ誘導する。

「急に深刻な……ロジオンに関わる話に切り替わるのに、タイミングが欲しかった」と言つのもあります

アデラの足が止まつた。

明らかに、その場から外されたことに傷付いている。

「……成程、貴女がアサシンに向いていない理由の一つですね」

何がおかしいのかドレイクは、口の片側だけ上げた。

「ロジオン様からお聞きしたのですか？」

この、意地の悪い笑い方をするドレイクを睨みながらアデラは尋ねた。

「エルズバーグ国王陛下からです。長を務める家系だそうで、今は妹君が継いでいる

「妹の方がオがあっただけのことです」

「アサシンとしてはそうでしょうな」

「……私にはオが無い、言われなくとも分かっています！だから、だからこそアサシンとして磨いた技術だけは役に立てたい。ロジオ

ン様にお仕えしてあの方の役に立ちたいのです！」

「その決意は本物ですか？」

「本物です」

「ロジオンが何者か知つても？」

「コンラート師の件で、ロジオン様が得体の知れない何かを抱えていたと知りました。 それでもお仕えする気持ちは変わりません」「貴女はロジオンと/orることで、諦めなければいけないことが出できます。 その決意が決まらないうちに聞かせるには酷だと判断したから、あの場所から貴女を外しました」

「……諦める？」

「そうです、とドレイクはバルコニーの縁に座る。

「貴女の能力は計り知れない、だが、只人です。止まることなく老いが進み、短い寿命を終える……」

「あ……」

「ロジオンは恐らく、私くらいで絶頂期を迎えることで成長が止まる。それから、只人から見たら長い時を生きていきます。貴女は、一生を彼に忠誠を誓い、従者として生きていくつもりではないでしょう？ あと何年かしたら結婚をし、子を産み、自分達の血を残していく作業がある」

「……」

「ロジオンについていくには、結婚と出産を諦めるだけではあります」

言葉もなくドレイクを見つめるアデラに話を続ける。

「今までの日常の中で捨てなくてはならないことも、あえて捨わなくてはならないことも出てくるでしょう。 波乱にとんだ毎日を死ぬまで送らなければならなくなるかも知れません」

貴女には何の得もない。

それでも貴女はロジオンの側にいますか？

\*

彼女と一人きりになつても、居心地が悪いとは思わない。自然に、溶け込むように自分は受け入れている。

分かつてゐる。

魂の記憶が僕の生に干渉しているからだ。

何度もこつ言つ場面があつたことも教えてくれた。

彼女が僕に向かい微笑む。

僕と同じ銀の髪は、柔らかで淋しさを含む秋の風が揺らす。海に似た色が生まれ、その様子を僕は眺めて胸を焦がす。このチリチリと痛む胸は、誰が なんだろう？

君は僕、僕は君

だからと言つて、僕の目に与ひる彼女を僕は、思つほど恋していな  
いようなんだ。

\*

じつとイゾルテはロジオンを見ていた。

『見ている』んではなくて『視ている』んだと、ロジオンには分かつた。

こんなにあからさまなのは、判断しづらい何かがあるのだろう。

「……成程。ドレイクでも見えない理由が分かります

イゾルテはそう咳き田を伏せた。

「僕の中の人のことですか……？」

「自分の魂の呼び掛けは経験していると、ドレイクから聞いています」

「混乱したでしょ？　　イゾルテは同情するように眉尻を下げた。

「はい……でも大丈夫。自己主張してきたのは、師匠相手の最後の時でしたし……後は似た場面に遭遇すると頭に過去の映像が出てくるくらいです」

「何とかしてあげたいのだけれど、私では無理で……」「めんなさい」「中に入る人達が言つてました……最初の人が無理矢理、輪廻に加わろうとしたからだと……」

「……そこから、ドレイクも私も見解を間違つっていました。輪廻と言つ輪の中で、溶け込めなかつた記憶が、人格まで支配するようになつたのだと……」

「これは……？」

ロジオンが何の躊躇いも無く尋ねてくるのが、イゾルテには心苦しいようで瞳を伏せた。

「……僕もある程度は予想もして……それなりに覚悟しています」「何故……」このような魔法を……」

独り言を呟くイゾルテの美眉は歪んでいた。  
躊躇つていたが、意を決したようにロジオンに顔を向け、口を開いた。

「ロジオン、貴方は……初代の魔承師であり、私の兄でもあるマルティンの……創つた魔法で間違いないでしょ？」

長い沈黙があつた。

視線を落とし、膝につけた自分の握り拳をロジオンは見つめる。

僕は創られた……？

何か足元から崩れた気がし、止めどもない、やるせない感情が口ジオンを襲つた。

ぐるぐると目が回つている気がする。

足が震え、力が入らない。

落ち着かないと。そう思つても、どう心を静めてきたのかさえ思い出せない。

自分の考えていたことと違う。

見当違いがショックでこうなってるんじやない。

だけど　どこかで期待していた部分

「魔法を創りあげた……原初の魔承師・マルティンが関わっているのだと感じていた！……マルティンの魂の輪廻の先が……自分じゃないかと思っていた！」

言葉として吐き出される。

その見当外れの期待の内容よりもっと、もつと衝撃な内容だから。

。

僕は人ではないの？

育つ人形なの？

僕は何の為に創られたの？

がたりと椅子から膝から落ちた。

円卓の上に置かれた皿も茶も何もかも床に落ち、音を立て割れた  
……。

「ロジオン！」

泣きながら震えているロジオンの姿は異常で、イゾルテは自分の告げた事がどれだけ言葉が足りなかつたか知り、呆然と目の前の少年を見つめる。

ロジオンは 誰かに揺さぶられているように左右前後に揺れ、子供に遊ばれている操り人形のように見えた。

\*

「！？ イゾルテ様？ ロジオン！」

ドレイクが顔色を変え、中央の塔がある方向を見据えた。

「ロジオン様に、何かあつたのですか？」

「『あつた』んじゃなくて『してる』んです！」

貴女はここにいなさい ドレイクはそうアデラに告げたが、彼女はがつしりとドレイクの腕を掴んで離さなかつた。

「私も行きます！」

仕方ないとでも言わんばかりの表情でドレイクは頷くと、ロジオンとイゾルテのいるバルコニーへと跳んだ。

\*

跳んだ先が謁見場で、一人が真つ先に見たものは、見上げる程高い窓のステンドグラスがすべて粉々に飛び散り、破片が床に散らばつていたことだった。

二人言葉を出す余裕もなく、バルコニーに駆け寄つて愕然とした。椅子と円卓、食器は全て粉碎され、石造りのバルコニーの柵までもが形を無くしていた。

床は亀裂が走り、塊と化したバルコニーの一部が大量に飛び跳ねしている。

「ドレイク！」

イゾルテは、この界隈だけに被害を抑えるために結界魔法を施行していたが、至る場所でバチバチと火花が飛び交い、ドレイクは危険な状態だと悟つた。

「いかん！ 今の状態のイゾルテ様にはロジオンは止められん！」

「私が……私が悪いのです！ ああ、もつと言葉を選んでいれば……！」

ドレイクの怒りがロジオンに向かう 危険を感じたイゾルテは阻止を含めてそう言つたが、彼の黒竜としての使命が感情を支配した。

「ロジオン……！ 貴様！」

「いけない！ ドレイク殿、よく見てくれ！」

彼の左手から目映い光が生まれたのをアデラが制した。

ロジオンは背中を丸めて踞つていた。

銀の髪を乱し、顔を床に突つ伏し震えていた。

微かに耳に届く喘ぎは、泣きじやくつている声と似ている。

「イゾルテ様……これは？」

「真実の一つをお話したのです……彼にはまだ早すぎました……受け止められなかつた」

アデラの視線から逃げるよつにイゾルテは目を伏せた。同時、涙が溢れ頬を伝つ。

「まだ話は途中でよつ？ それでこつなるとは未熟すぎる 何にせよ止めないと」

じきなさい、とドレイクはアデラを押し退けようとしたが、アデ

うはますます立ちはだかる。

「アテラビ

「しばし時間を下さい」

強い口調と眼差しにドレイクは一瞬怯んだ。

アテラは踵を返すとロジオンに向かう。

「ロジオン様！ アテラです！ どうされたのです！」

途中破片が、アテラの肩や足に当たつたが気にしている場合ではない。

あんな姿の主は初めてみた。余程にショッキングな内容だったのだろう。

コンラート師の時も泣いていたが、必死に悲しみを堪えていた。彼は立ち向かえる力を持っている。未熟とかそんなんじゃない。

彼自身の、これから生きる為の根本から崩す何か

震え泣く主に近付く。

彼はまだ少年だ。まだ十五じゃないか。

本来なら一国の王子として、人の好い父王や母妃の元で兄弟に囲まれて、なに不自由無く暮らしているはずなのだ。

それなのに、人より高い魔力があるというだけで親から離れ、辛い現状を見て育ち、魔法使いと言う道を選ばされた。

本人は何も恨んでも悲しんでもいないと話したのに。

ここまで主を混乱させ、嘆かせる真実の一つ。あと幾つの真実が彼をこいつさせるのか。

ああ

瞼をぎゅっと閉じた。

もう、いい。捨てよう

私は離れられない、このままでは。

主が、彼が、笑ってくれれば、それで……。

「ロジオン様！」

何度もかの呼び掛けで、ロジオンはよつやく顔を上げた。同時、破かれる寸前だった結界の亀裂音がなくなり、ドレイクは自分の主人であるイゾルテを抱き寄せた。

ロジオンは　涙で頬と掛かる前髪は濡れ、澄んでいたブルーグレーの瞳は充血していた。

「ア……アテラ？」

視点が定まらない瞳は、ぼんやりとした表情を強調させる。

彼女が誰かだったか思い出したように「アテラ」と名を繰り返した。

ロジオンの瞳に、すがり付くような鈍い光が生まれた。

震える手が怯えるようにアテラに向けられた。

「アテラは……僕が何者でも……いてくれるよね？……僕が……人じゃなくても……側にいてくれるよね？……？」

床にへばりつくように座り込むロジオンの手を握ると、アテラは彼を抱き締めた。

「当たり前です！　アテラはロジオン様の従者です。何処へでもお供致します！」

「……絶対だよ……？　嘘つかないでよ……？」

「嘘は申しません」

私は、何があつても貴方様の味方です

だから  
安心して

私の好きな人……。

## 59 イル・マギア（一）

感情のままに魔力を使い、精も根も尽き果てたらしくロジオンは、アデラに抱き締められたまま眠ってしまった。

揺さぶつて起こしてみて、うつすらと瞼を開けるが

「眠い……」

と言つて、また眠つてしまふ。

魔力を持ち自分で全く制御出来ない赤ん坊や、癪癩を起こした子供がよくこうなると、ドレイクがアデラに話す。

「魔力が高いだけに迷惑な結果になりましたが」

溜め息を付き、野外で待つハインに知らせに行つた。今宵はこちらに泊まるど、富廷に言伝てを頼みに行つたのだ。

与えられた部屋の寝台で、安らかな寝息をたて眠るロジオンを見て、アデラもようやく安堵した。

手を差しのべてきた時の主は、明らかにおかしかつた。

顔は死人かと思つほど白く、目は窪み見開き 狂つたのかと一瞬血の気が引いた。

だけど、ここで怖じ気付く訳にはいかない。この手を、彼を、抱き締めなければ。コンラート師がいない今、精神共に身体を預ける相手は自分しかいない。求める相手が自分しかいないのだ 主は。

扉を叩く音にアデラは振り向く。

ドレイクが食事を運んできてくれた。

「ロジオンは起きませんか？」

側に設置されたテーブルに食事を置きながら、アデラに尋ねる。

「はい。でも、安らかな顔でほつとしています

「もうですか」

ドレイクは手短に言つと、お腹が空いたらどうぞと蓋せきの皿をさした。

「ありがとうございます」

アデラは礼を言つて再び視線をロジオンに戻す。

では、と部屋を出ようと扉のノブに手を掛けたが、思い直したようで扉のすぐ横の壁に背を付けた。

「……？」

不思議に思い、アデラは顔を上げドレイクに視線を向ける。

彼は腕を組み、アデラを見て言つた。

「決意は……本物ですか？」

決意とは、ロジオンに言つたことだろ？

「今、離れることはロジオン様には良くない……考えてみてください、最も信頼していた師が亡くなり、十数年ぶりに再開した家族にも慣れていない。心身を預ける場所が無い。ロジオン様には信頼でき、何かあつた時に共に前へ進める相手が必要です」

「ロジオンが家族と一線を置く理由はコンラートの件だけではないと知つたでしょう？ 離ればなれで暮らしてきただけが理由では無いことを……」

「はい」

「それはアデラ、貴女にも当てはまる。家族や貴女は只人だ。歳を取り、私達より早く死ぬ。取り残される悲しみをロジオンに味わせることになる ロジオンは潜在的に悲しみを回避しているんですね」

「私は、死ぬその時までロジオン様の側にいるつもりではあります」

「……？」

アデラは真つ直ぐな瞳でドレイクを見つめ、微笑む。

「これからロジオン様にも、色々な出会いがあるでしょう？ あつ

と、魔法使いに魔導師が多いでしょうか？ 同じ年代の、自分と同じ方達と共感をして、長い時を有意義に過ごせる友と呼べる方達が出来て…… そうしたら、私はもうロジオン様の側にいる必要はありません

「それまで、ですか……」  
「それまで、です」

真つ直ぐにこちらを見つめる常緑色の瞳は、躊躇いの一切も感じられない。

ドレイクは思い出し瞼を閉じる。

もう記憶も朧気な遠い昔に、このよつな瞳を持つ仲間達を誇らしく眺め、自分も一員となる日を夢見た。

只人は嫌いだ。嫌悪している。

だが彼女のような、同族を思い出す強い決意をもつ瞳を持つ只人は嫌いではない。

魔力を持つ尊き人や自分のような他種族に持つ、特別な力など無いのに、己の限界を越えてまで相手に尽くすのは尊敬に値する。

「貴女の意思の強さは、私の種族のとよく似てる

「『黒竜』の……？」

すぐ戻ります ドレイクはアーデラにそう告げ部屋を出て、今度は手に何かを持つて入ってきた。

「貴女に、これを……お譲りしましょ」

卓上に置かれたのは二対のマインゴーシュとヘッドドレスだった。マインゴーシュは柄と刃が繋ぎ目が無く、見たことがない光沢を放っている。

ヘッドドレスは装い用のではなく、冑の簡易型だと分かった。

磨かれた材質も、これまた見たことがない。

「……これは何で出来ていいのでしょうか？」

「私の爪と骨、それとカーリナに利用されて命を落とした同族の骨です」

そう言えば終わった後に、落ちた自分の指と幼竜の亡骸を拾つて戻つていた。

取れたドレイクの指は、本来の姿の　鋭い爪を持つ固い竜の指に戻つていた。

『このまま放置して、只人に見つかれば騒ぎになりますから』

そう言いながら自分の爪と一緒に、大事そうに腕に抱いていた黒竜の幼体。

幼竜は原型を止めていない姿になつて息絶えていた。

今でも時々、竜の特殊な能力を利用する輩がいると　ロジオンは言つた。

彼は竜の血をひきながら、不遇な境遇にいる者達の探索と保護もしているのだとも聞いた。

彼はどんな気持ちで変わり果てた同胞を抱き上げたのか　彼の瞳に憐憫の光りが微かにあり、皆声をかけずそつとしておくしか無かつた。

その遺骨で作られた……。

遠い過去に、竜の身体の一部を使った防具や武器が出回つていたと話には聞いていた。

それらしき古い防具に武器も残つてゐるが、事実はまことしやかである。

「手に持つてみてください」

促され、恐縮しながらマイン「コーチュ」を手に取る。握る感触も重さも自分にあつらえたようにぴったりだ。

振つてみても違和感が全く出ない。使い手の次の手を感じているように馴染む。

「ヘッドドレスの方は調節が出来るようになります」

着けてみると自然、頭の形に独りでに密着する。しかも軽い。

「軽くても強度は最高を誇るでしょう」

竜の骨ですから と、ドレイクは付け加えた。

「これを頂けるのはありがたいが……宜しいのですか？ ドレイク 殿の同族の形見では……」

「言つたでしよう？ 貴女の意思は黒竜の意思に似ていると 主人に対する意思の強さ・思い……それはロジオンを支える時の助けとなることを望むでしょう」

ありがたくお受け取りします アデラはドレイクから貰つた剣を両手に持ち、ゆるりとお辞儀をした。それは彼に敬意を払つた意味の厳かな礼の意味でもあつた。

アデラのその礼は、ドレイクに僅かながらに、只人に対する溜飲が下げるものであつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5103n/>

---

The prince is a wizard

2011年10月14日21時13分発行